

5 経蔵・鐘楼

これまでの調査・研究

経蔵・鐘楼については、先学諸氏の研究では全く触れられていない。第1期調査においても、関連する遺構は確認されていない。

調査の経過

平成26年度調査で、本来の金堂が確認されたことにより、それまで金堂とされ基壇が復元された建物は講堂である可能性が高くなった。そう考えた場合、昭和57年度第18次調査区で検出されていた南北棟の掘立柱建物(SB08)が、金堂と講堂の中間で西面回廊の北延長上に位置することから、経蔵ないし鐘楼の建物跡であると考えられた。SB08は第1期調査の所見では、平安時代と考えられるが性格不明とされていた。そこでSB08を経蔵ないし鐘楼と想定し、平成27年度にその対称位置に当たる東側にもう1棟の建物跡がないかを確認するため、39-5トレチを設定して調査を実施した。さらに平成28年度には、SB08の再調査を目的として40-4トレチを設定して調査を行った。第1期の調査報告書には、SB08は平面図のみの掲載であったため、当時は平面での確認にとどめ半截等、柱穴埋土の掘り下げは行われていないと見られた。しかし、調査を行ってみると半截や四分割に掘られていたため、その状態を再調査した。今回は、第1期調査当時の状態を検出して柱穴の断面観察を行うにとどめ、それ以上の掘削は行っていない。

なお、平成25年度に実施した37-3トレチは当初、東面回廊の検出を目的とした調査であったが、経蔵・鐘楼の位置に当たることが分かったため、ここで報告する。

調査の概要（第128～131図、PL18～21）

(1) 西地区(第128～130図、PL18～20)

位置 NO～12.5、W3～13

S B 0 8 3×2間の南北棟の側柱建物である。東側柱の北から2個めに当たる柱穴はなく、また南側中央の柱穴はやや外側に掘られている。計9個の

柱穴を再確認した。柱穴は概ね円形で、それぞれの規模(長径×深さ)は、北東角から反時計回りにP1:127×26cm、P2:127×30cm、P3:138×35cm、P4:111×39cm、P5:125×31cm、P6:108×27cm、P7:114×25cm、P8:108×30cm、P9:102×26cmを測る。底面レベルは、128.0～128.3mである。P7以外は柱痕が確認できた。P1～P3の柱痕は、径40cmを測る。柱間は7尺等間である。1期のみの存続で、建て替えは認められない。東側柱の北から2個めに当たる柱穴は確認できなかったが、9個の柱穴掘り方がほぼ同規模であることから考えると、当初から存在しなかった可能性が高い。方位軸は、N-0°14' -Wである。

掘り込み地業 SB08と重なる位置で、基壇建物北半部の掘り込み地業を平面的に確認した。確認面は基盤層の黄褐色土(VII層)で、これを掘り込み、暗褐色土で版築を施している。北辺と西辺については、直線状にほぼ明瞭に確認することができた。東辺については北東角から3m程は明瞭であったが、それ以南はあまり判然としない。南半部については、第1期調査時に掘り下げられていたため確認できなかった。東西長は約9m(30尺)を測る。南北長は現状で7m程であるが、本来の規模は不明である。確認できた掘り込みの深さは5cm程度で、底面レベルは128.4m程である。版築土はAs-C軽石を含む黒褐色土・暗褐色土であり、版築土中には拳大の礫が含まれている。方位軸はSB08とほぼ同じである。**礎石** 磐石、根石等は検出されなかった。根石が抜けた痕跡かは明らかではないが、複数の石が抜かれた凹みがN10.5-W7.5、N8-W8付近の2か所に見られた。

出土遺物 再調査のため出土遺物はない。柱穴埋土に瓦が含まれているのが確認されたが、取り上げは行わなかった。

重複 SB08に掘り込まれた1×1間の掘立柱建物(SB15)が検出された。径60～70cm程の柱穴で小形の建物である。国分寺建立以前の集落に伴うものと考えられる。

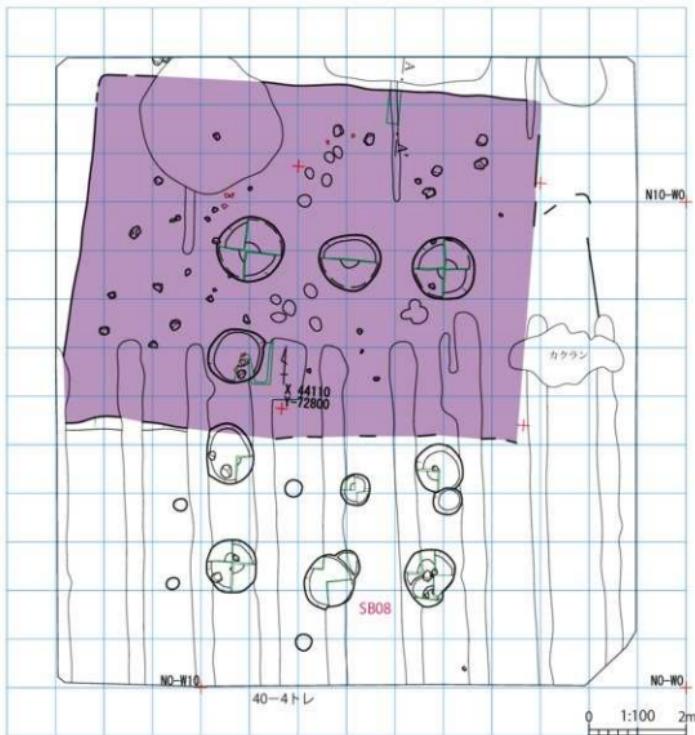
所見 SB08 が版塗層を掘り込んで構築していることから、基壇建物→掘立柱建物の建て替えが行われたことは明らかである。掘り込み地業の東西規模から考えれば、建物の規模を縮小して建て替えたと考えられる。

(2) 東地区(第 131 図、PL21)

SB08 の対称となる位置の 37-3, 39-5 トレンチでは耕作が深くまで及んでいたため、表土直下で基盤層の黄褐色土(V 層)となり、建物の痕跡は全く確認できなかった。確認面のレベルは 128.1 ~ 128.2 m 程度である。西地区で確認した掘り込み地業

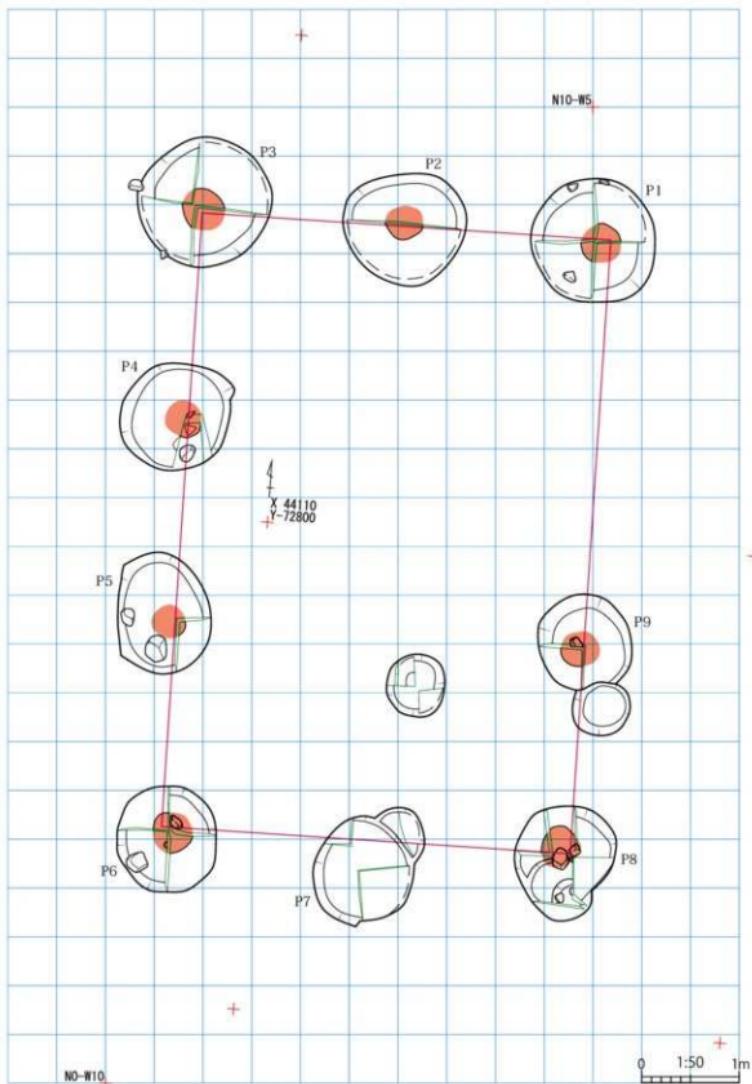
の底面レベルが 128.4 m であることから、仮に礎石建ちであったならば、遺構が存在したとしても後世に削られて壊されてしまった可能性が高い。また、SB08 の底面レベルが 128.0 ~ 128.3 m であることから、同規模の掘立柱建物があれば検出されるレベルであるため、東側には SB08 のような掘立柱建物は無かったと考えられる。

なお、39-5 トレンチ北東隅には粘質の黒褐色土(V 層)の堆積が認められた。国分寺創建以前にあった、寺域南東部から伸びる低地状地形の痕跡を示すものであろう。

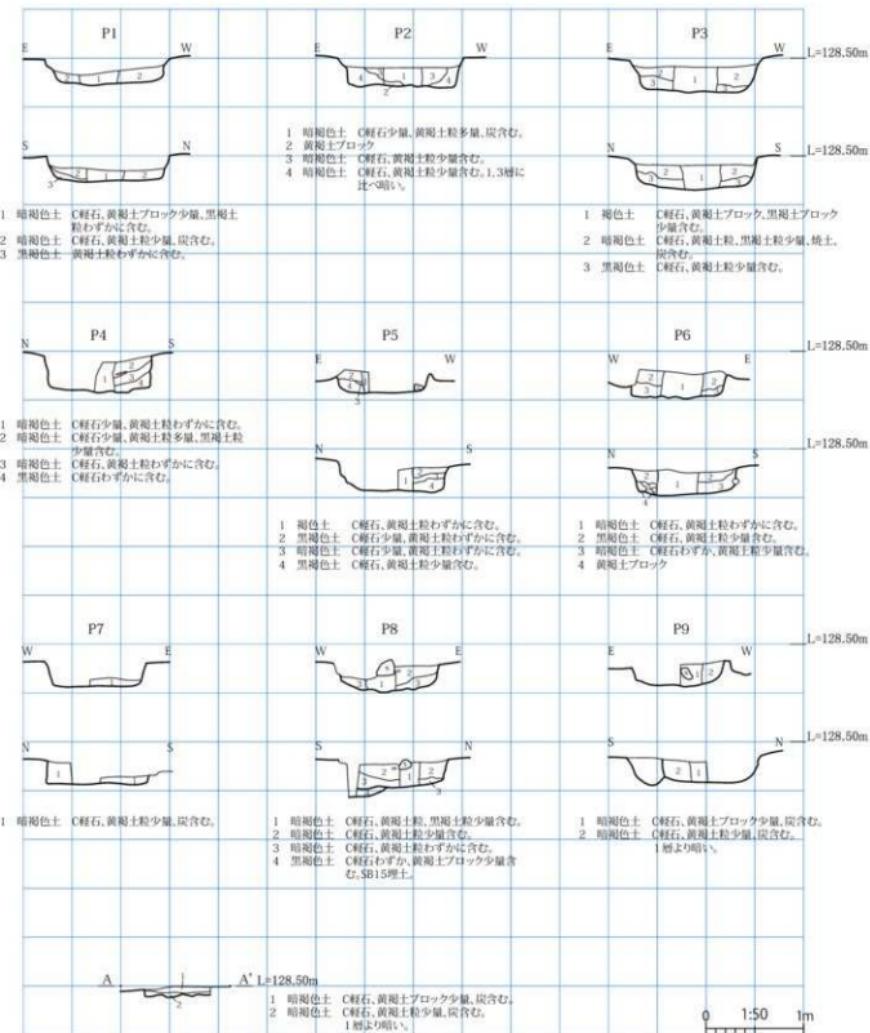


第 128 図 経蔵・鐘楼西地区平面図

V 調査した遺構と遺物

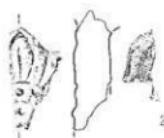
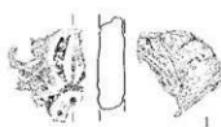
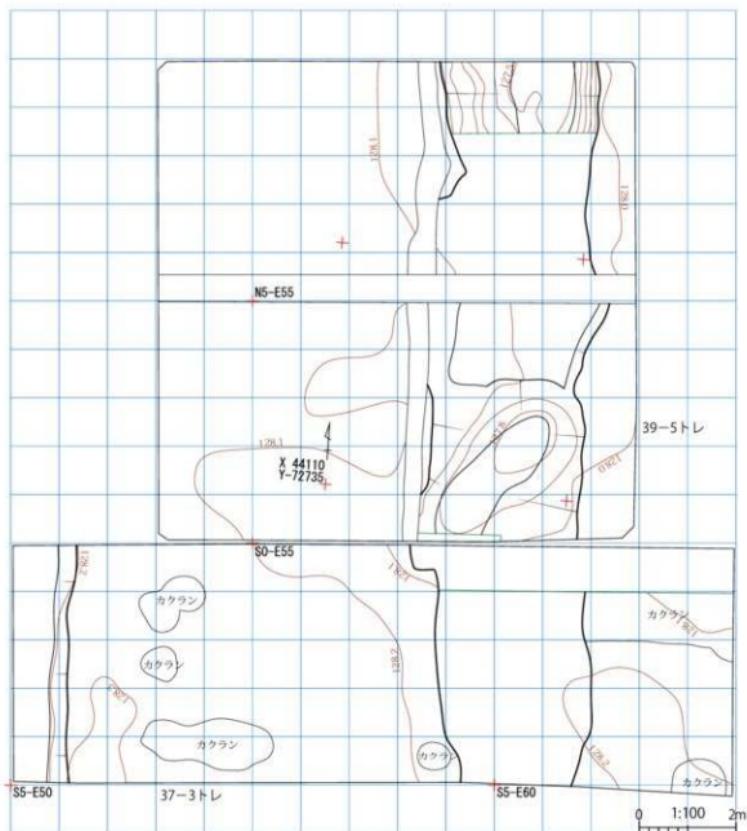


第129図 S B O 8 平面図



第130図 S B O 8、掘り込み地業断面図

V 調査した遺構と遺物



0 1:3 10cm

第131図 経蔵・鐘楼東地区平面図及び表土出土遺物

6 僧坊

これまでの調査・研究

大正期の研究以来、長い間、旧金堂基壇の北側に講堂が存在するとされてきた。僧坊については、「実録帳」に無実として、「萱葺僧房壹宇 長拾伍丈 幡貳丈 高束尺」の記載がある。その規模から推定したと思われるが、太田静六氏と尾崎喜左雄氏は南北棟2棟を東西に並立させた配置を推定している(第14、15図)。

第1期調査では昭和56年度12トレンチ、昭和58年度12トレンチ拡張区として旧金堂北側の調査が行われている。その結果、「N78.6・E28とN75・E28の2ヶ所で南北に並ぶように、径90cm前後の円形の掘り込みがあり、その縁辺には玉石が散在しているのが検出されたが、これらは根石と掘形とみられる。その周辺のN65～79・E20～32の範囲の7ヶ所に、これに伴うものとみられる掘形と玉石が固まってあるのが検出された」として、これらを講堂の礎石据付穴として報告された。そして、中心がE25.8となって旧金堂の中心とほぼ一致するとして、桁行中央部390(13)～420(14)～390(13)cm(尺)、梁間330cm(11尺)等間であると推定された。方位軸はグリッドラインであるN-4°-Wに近い。また、N58～61-E16～40の位置で一本柱列(SA01)が検出された。東端は確定したが、西端はもう1間伸びる可能性が指摘されている。柱穴の重複関係から(新)・(古)の2時期が確認され、西端の柱穴埋土から9世紀前期の土器がまとまって出土したことから、新期を9世紀前期と推定されている。

調査の経過

平成26年度に本来の金堂が確認されたことにより、これまで金堂とされ基壇が復元された建物は講堂であると考えられた。そうであるとすれば、講堂の北側には僧坊が存在する可能性が考えられたが、第1期調査ではその位置に講堂の礎石据付穴が検出され、またSA01の一本柱列が検出されていた。

そのため、平成27年度に39-1トレンチを設定して、旧講堂とSA01の再確認を行うとともに、僧坊の痕跡の有無を確認するためSA01の南側を含めて調査を行った。また、39-1トレンチに僧坊が存在するとすれば東方まで伸びると考え、39-2トレンチを設定して調査を行った。SA01はそれぞれの柱穴が半截されていたため、その状態を再調査して断面観察を行うにとどめ、それ以上の掘削は行っていない。また、第1期調査で西側にもう1間伸びる可能性が指摘されていたため水路際まで拡張したところ、さらに1個の柱穴を検出した。この平成27年度の調査において、SA01が国分寺存続期の一本柱列であることが再確認されたが、僧坊の痕跡は何も見つけることができなかった。そこで平成28年度には、東西棟1棟と南北棟2棟の両者の可能性を考え、40-2、3トレンチを設定して僧坊の痕跡の検出を目指して調査を実施した。

調査の概要(第132～137図、PL21～25)

(1) 旧講堂(第132図、PL21、24、25)

礎石据付穴とされた土坑群の再確認を行った。P1～P3の3個が半截しない四分割で掘られていたため埋土の観察ができるが、埋土には国分寺以降と考えられる新しい土が入っており、国分寺存続期の所産ではないことが判明した。これにより、礎石据付穴である可能性は全くなくなったため、講堂がこの位置に存在したとする根拠は無くなつたといつてよい。

(2) SA01(第133図、PL22～24)

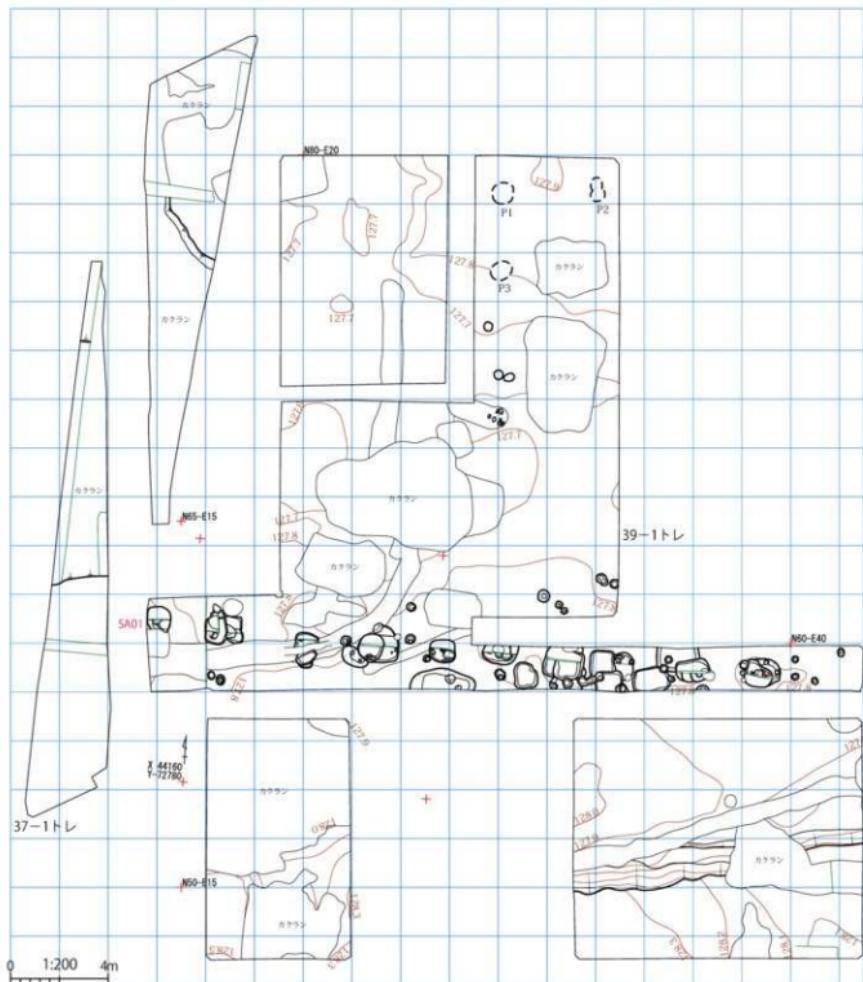
SA01は、講堂基壇北縁から24m(80尺)程、北の位置になる。柱穴は計10個、9間の一本柱列であり、全長は24.7mである。柱穴は古期が方形状ないし不整円形、新期が円形ないし不整円形を呈し、径100～120cm程、底面レベルは127.15～127.7mを測る。東端の柱穴が講堂の東側柱列の位置にほぼ一致し、西端の柱穴は西側柱列の1m程西の位置になる。柱穴埋土はAs-C輕石を含む黒褐色土であり、前述の講堂礎石据付穴の埋土とは明らかに異なっている。第1期調査の所見のとおり2時

V 調査した遺構と遺物

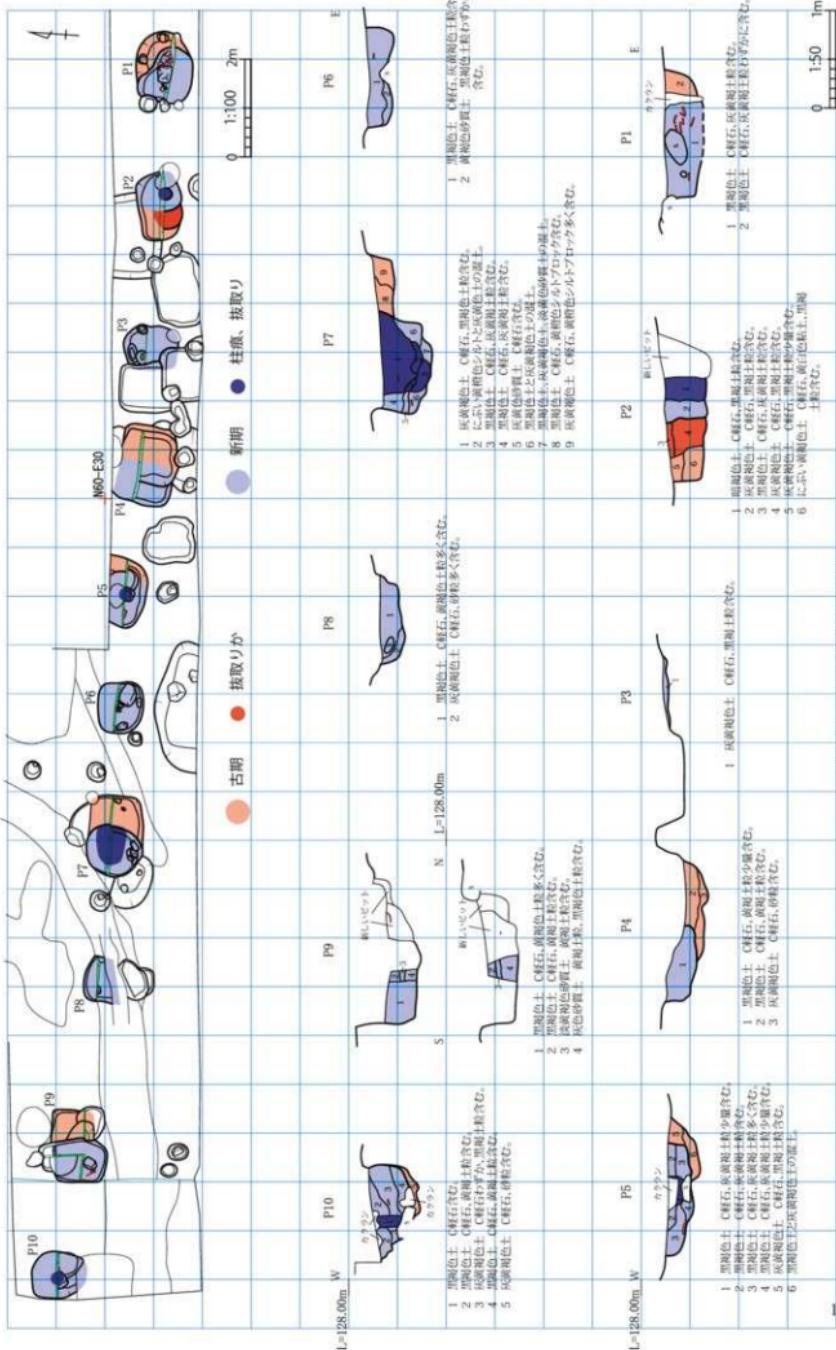
期確認でき、新期の柱間は西から概ね 8 – 12.5 – 8.5 – 10 – 8 – 9 – 10.5 – 8 (尺)となり、バラツキがある。方位軸は W – 0° 30' – N である。

(3) 僧坊(132, 134 図、PL.21, 25)

37-1 トレンチ、39-1, 2 トレンチ、40-2, 3 トレンチと継続して調査を行ったが、礎石や根石、掘り込み地業、柱穴など、建物に関する痕跡は全く確

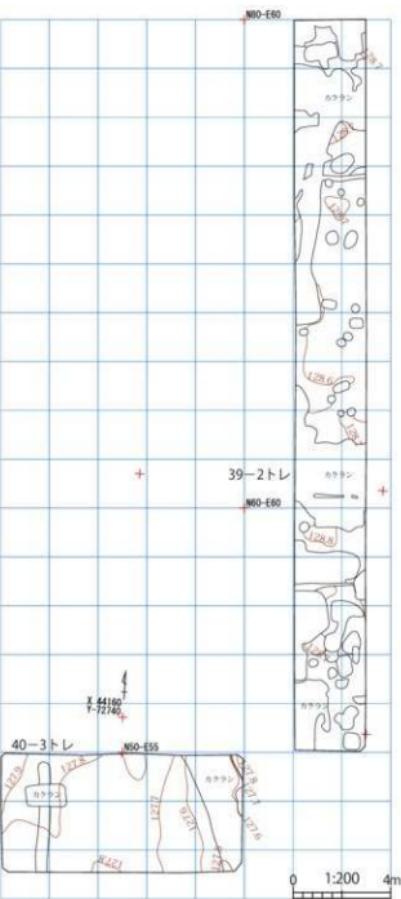
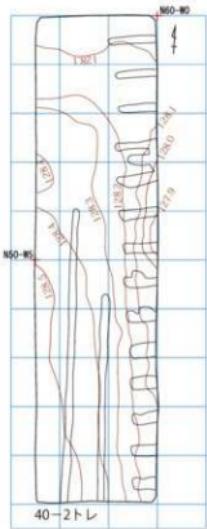


第 132 図 旧講堂・僧坊地区平面図

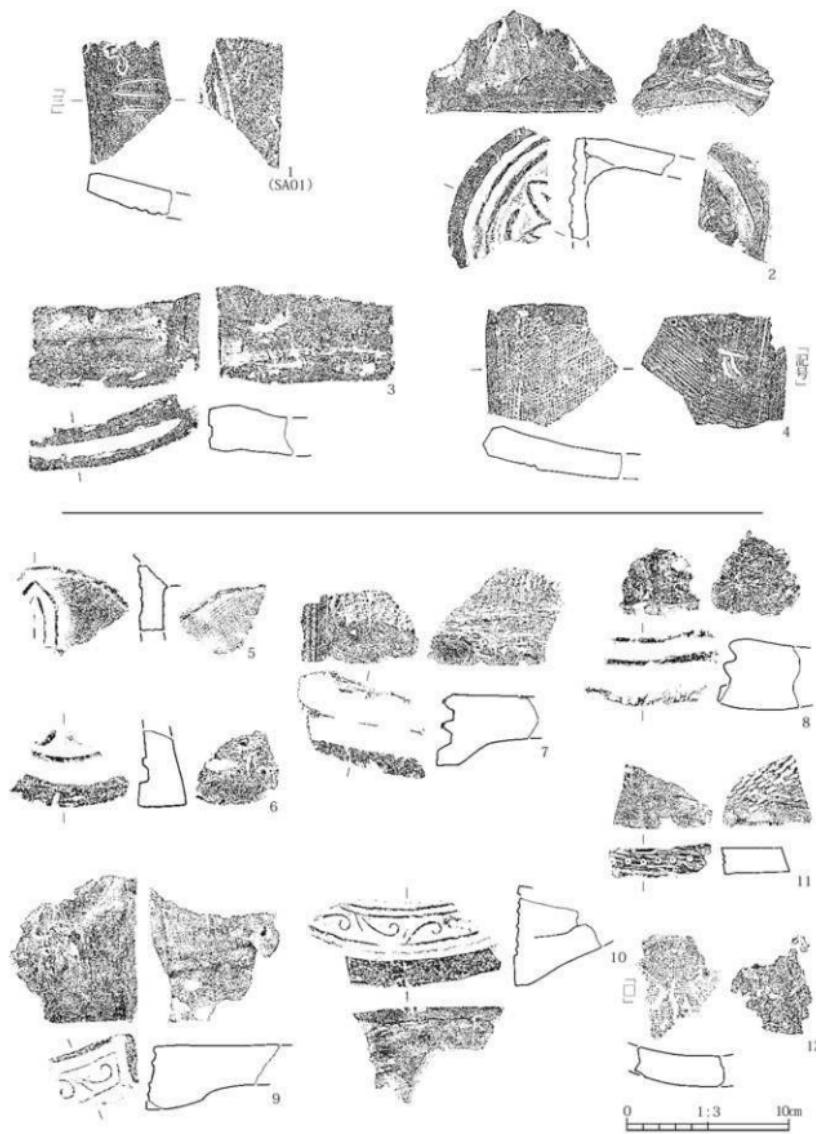


V 調査した遺構と遺物

認できなかった。それぞれのトレンチが、表土直下で基盤層の黄褐色土(VII層)となる。39-1トレンチの確認面レベルは南西隅が128.5 mと最も高く、北へ向かって地山が下がっている。おそらく中世以降の土採りや流水によって削られたことによるものであろう。40-2トレンチも南西部が128.5 mの高さがあったが、何も検出されなかった。40-3トレンチは深耕のためか127 m台まで下がっている。39-2トレンチは以前、民家が建っていた場所で攢乱が著しい。確認面レベルは128.7 mと高かったが、やはり何の痕跡も見出せなかった。

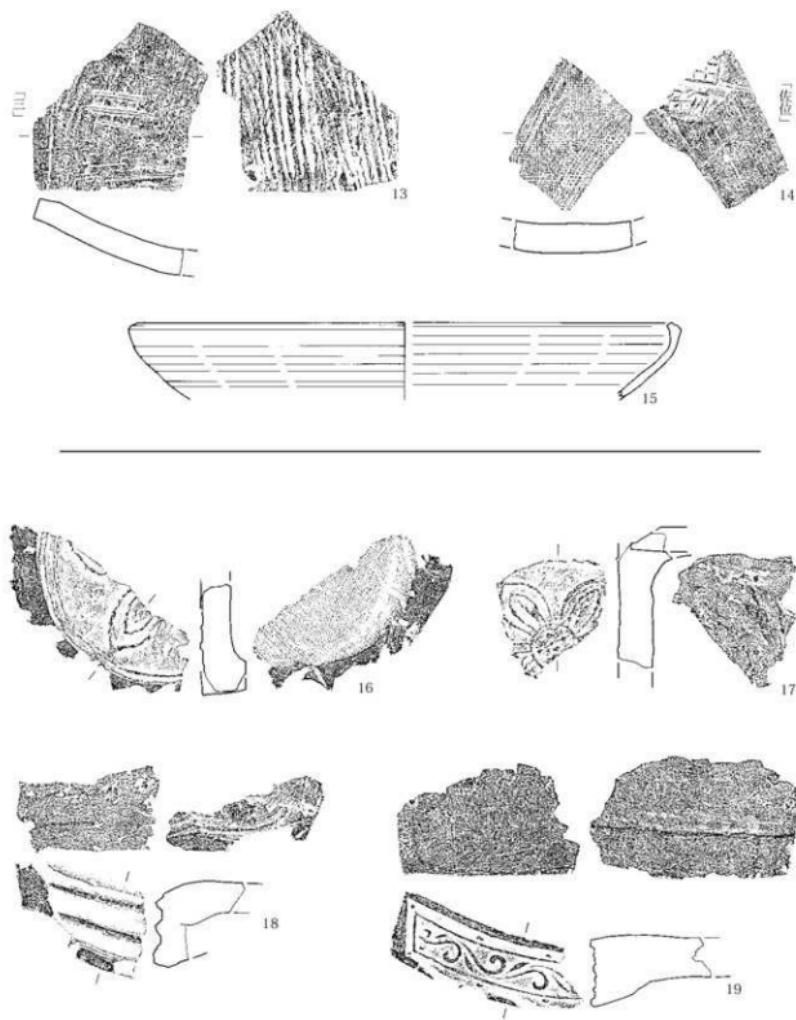


第134図 僧坊地区平面図



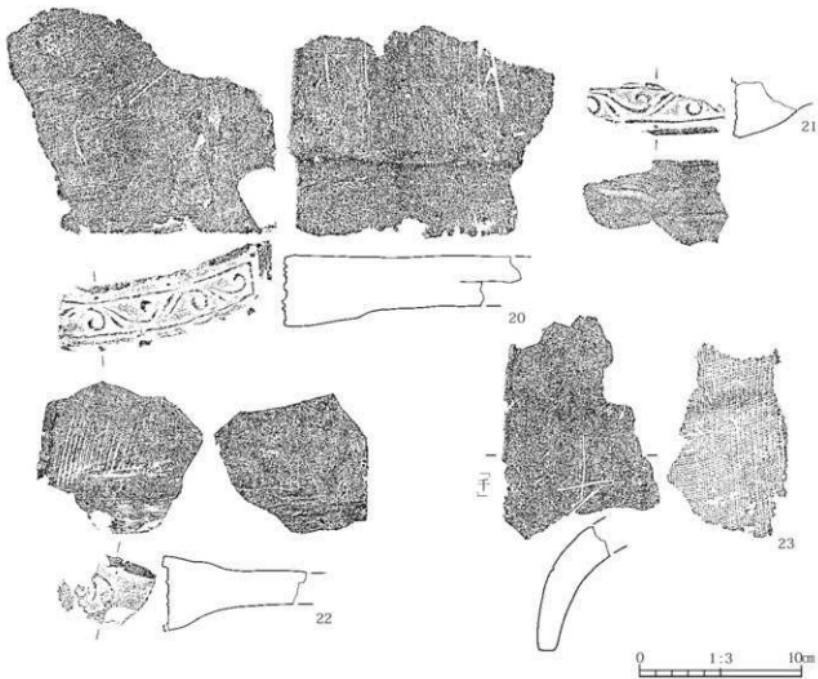
第135图 僧坊地区出土遗物(1)(2~4 39-1表土、5~12 37-1表土)

V 調査した遺構と遺物



第136図 僧坊地区表土出土遺物(2) (13~15 37-1、16~19 39-2, 40-3)

0 1:3 10cm



第137図 僧坊地区表土出土遺物(3) (39-2, 40-3)

7 南大門

これまでの調査・研究

南大門については、第1期調査の昭和58年度23次、昭和59年度23次西拡張区として、東部及び西部の調査が行われている。中央部分については、後世に大規模な堀が掘削されているため、調査対象外とされた。この調査によって、東側柱に当たる3個の礎石が検出され、梁行2間、柱間10.5尺(315cm)の構造であったことが確認されている。「実録帳」には、「南大門壹宇 長伍丈捌尺 幢壹丈伍尺 高壹丈參尺」とあって梁行15尺と書かれているが、これとは異なるものであった。また、乱石積基壇の基壇縁と考えられる石列が2条検出されており、建

て替えの可能性が指摘されている。23次西拡張区は堀によって壊されており、南大門に関連する遺構は確認されなかったが、堀の埋土中S101-E13.5の位置で、動かされた礎石1個が検出されている。

調査の経過

平成24年度、調査当初の目的である③今後の整備に向けて、より詳細な調査が必要な箇所として36-1トレンチを設定し、第1期調査区の再調査を実施した。表土及び遺構保護用の砂を除去して、第1期調査時の確認面を検出し、遺構の状況を再確認した。しかし、平成22年に南から南大門に向かうコンクリート舗装の見学者用通路が整備されており、その舗装を避けて調査を実施したため、東側基壇縁にあたる2条の石列の南部が舗装下に入り込み、全

体の調査が不可能であった。そこで翌年度、これにかかるコンクリート舗装を撤去、調査区を拡張して調査を継続した。また、西部の状況を確認するため復元築垣の際まで拡張して調査を行った。

今回の調査では、第1期調査時の状態を検出するにとどめ、基壇石列間の掘り残しを若干掘り下げた以外は、それ以上の掘削は行っていない。

調査の概要（第138～147図、PL.25～27）

（1）南大門（第138～145図、PL.25～27）

礎石 第1期調査で確認されていた東側柱列の3個（1～3）と、新たに斜面に落ち込んだ2個（4, 5）を検出した。4, 5はその位置から、それぞれ1, 2の西側にもともとはあったものと判断される。根石とともに落ち込んでいることから、原位置にあったものが斜面に沿ってずり落ちたことが分かる。東側柱列の礎石から現状で、4.5 m程離れた位置にある。石材はすべて榛名山系の粗粒輝石安山岩である。東側柱列の礎石の柱間は第1期調査では10.5尺と報告されているが、礎石のどの位置に柱を置くかで若干動く幅があり、柱間10尺の可能性も考えておきたい。礎石の上端レベルは127.7 m程、方位軸はN-0° 30'-Wである。

礎石2の中心から1.5 m（5尺）西側と1.35 m（4.5尺）北側に、人頭大の扁平な玉石が据えられている。西側の玉石は礎石の心々ライン上にあり、長軸を東西にして据えられていることから、地覆石の可能性が考えられる。一方、北側の玉石は長軸を南北にして据えられるが、心々ライン上からはやや東に位置することから、築垣との取付きに関わる構造物の可能性が考えられる。

基壇縁石 内側石列と外側石列の2条を再確認した。内側石列は全長3.4 mで、北端は築垣の傾斜に合わせて積まれている。礎石3の中心から東へ90 cm程の位置にあり、南は同じく中心から2.2 mのところまで伸びている。方位軸はN-2° 48'-Wである。外側石列の全長は2.1 mで、南端、北端とともに内側より短いが、当初から短いのではなく石が抜き取られたことによるものと考えられる。瓦も多く混

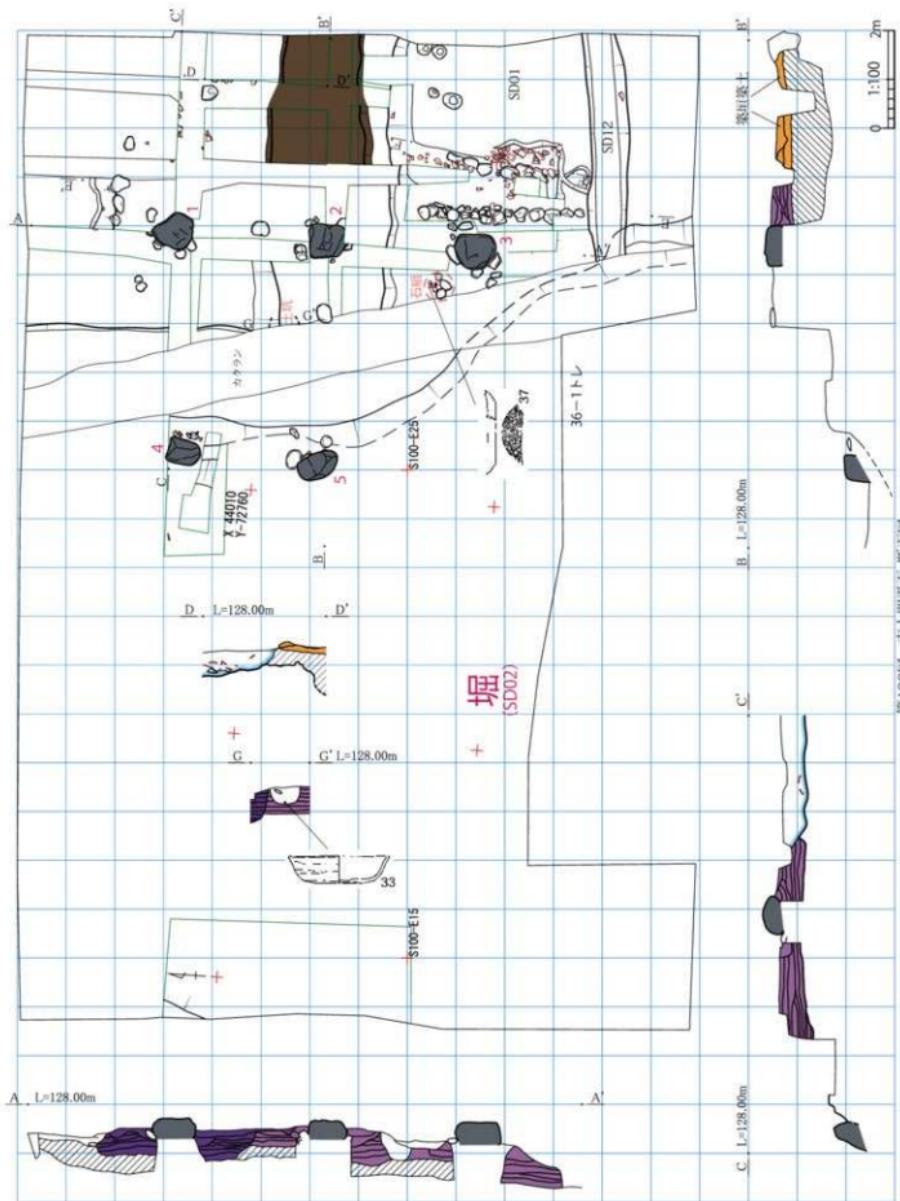
入している。方位軸はN-4° 52'-Eで、礎石3の中心からの距離は1.8 m程を測る。石の下端レベルは内側が126.6 m、外側が126.5 mであり、礎石の上端レベルが127.7 mであることから、当初は1 m程の高さに積まれていたと考えられる。

これら2列の関係であるが、内側石列は礎石3との距離が近いことから礎石列に伴うものでないことが判断され、第1期調査の所見のとおり、内側石列→外側石列の造り替えととらえておきたい。後述するが、伽藍中軸線はN-2°-Wであり内側石列の方位軸と近いことから、内側石列が創建当初の基壇の縁石であると考えられる。

また、礎石1の北側に3個の石が東西方向に並んでおり、北側縁石と考えられる。基壇の出は、4.5ないし5尺である。基壇の北縁はこの玉石1段のみであり、玉石の下端レベルは127.4 m程である。この高さが、南大門をぐぐった旧地表面レベルと考えられよう。

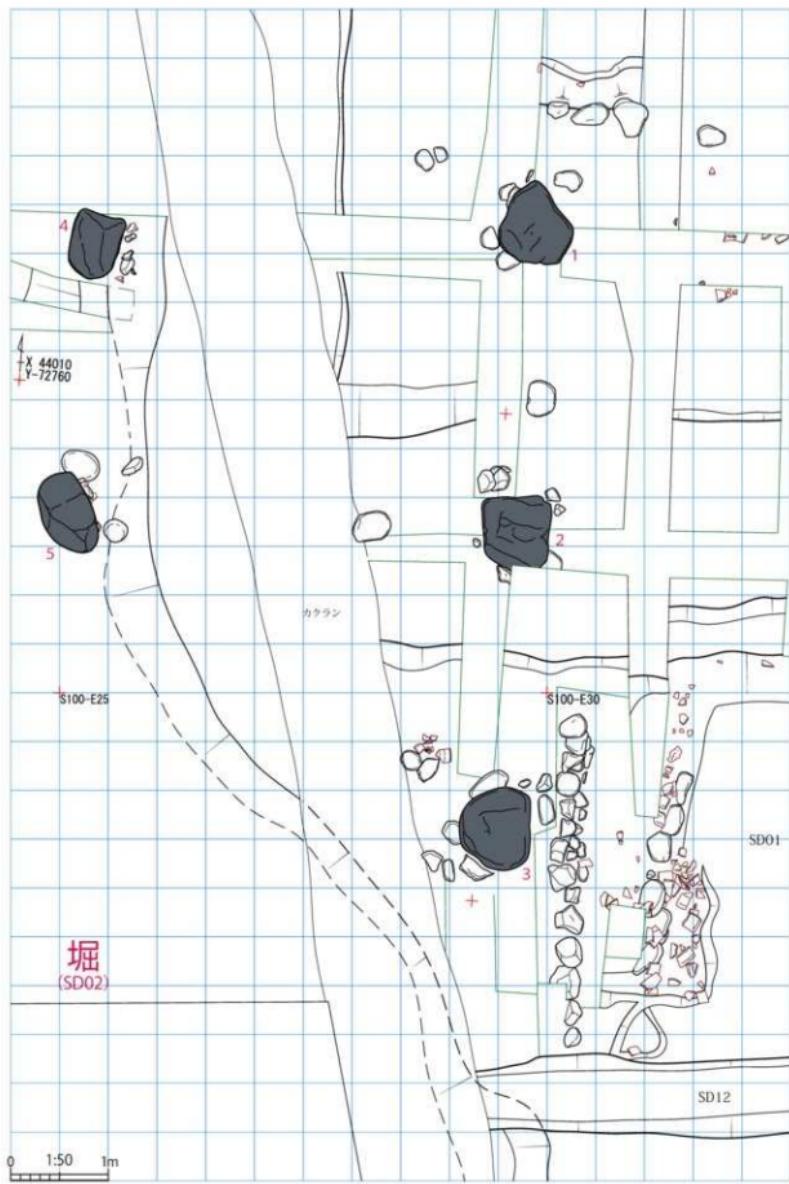
掘り込み地業 盛土による整地を施した後に、掘り込み地業、版築を行っている様子を確認した。もともとの地盤に起伏があるよう断面Bを見る限り、版築層下に80cmもの厚さの整地土が確認できる。基盤層は粘質の黒褐色土（V層）であり、中門西部から回廊南西部にかかる低地状地形の延長に当たると見られる。整地土、版築土ともにAs-C軽石を含む暗褐色土、黒褐色土を用いているため、両者の判別は難しかったが、薄い層状になるか否か、及び締まりの強弱で判断した。概ね第1期調査時の所見と同様の状況を再確認したが、異なる点として北側で掘り直しをしている様子が確認できたことがあげられる（断面A濃紫）。これは、建て替えに伴う掘り直しと考えるのが妥当であろう。

出土遺物 第1期調査の再調査であるため、出土遺物は少ない。石列に関連するものは、内側石列と外側石列の間に若干の掘り残しが認められたため、掘り下げた際に出土した遺物を石列間、外側石列に混じるものを石列内、外側石列の外側から出土したものを石列外として取り上げた。石列間とした遺物に

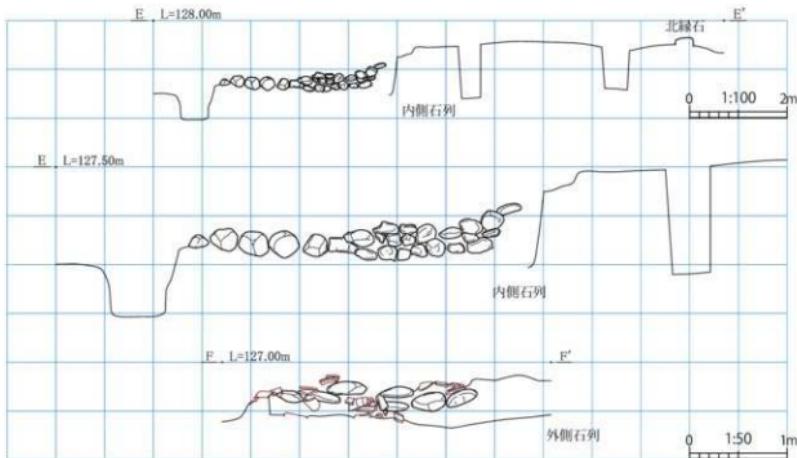


第138回 南大門平面・断面図

V 調査した遺構と遺物



第139図 南大门平面図



第140図 南大門石列断面・立面図

については、南大門建て替え時の築土中と判断できるため重要視していたが、10世紀前半期の須恵器塊片(9)の混入が見られたことから、その時期以降の攪乱が入り込んでいたようである。第144図38以降の遺物については、36-1トレンチから出土したものであるが堀埋土からの出土であるため、南大門に葺かれていた可能性はやや疑問視される。

重複 基壇北東部の東側で、東西方向の溝状の落ち込みを断面で確認した(第138図断面C, D)。西端部の立ち上がりがちょうど南大門の基壇縁付近となり、一部、版塗層を掘り込んでいる。また、築垣北端を掘り込んでいるように見えることから、40-12トレンチで検出されたSD27と同一の溝で、そこから伸びている可能性が高い。また、礎石列の西側、攪乱によって形成された壁面で版塗層を掘り込む土坑状の落ち込みが確認され(同図断面G)、この埋土中から10世紀前半期の土師器環(33)が出土した。さらに、礎石3の北西1m程の位置に石組が検出され、創建期の根石の可能性を考えたが、10世紀後半期の須恵器塊片(37)が混入することから、やはりその頃の攪乱とみられる。

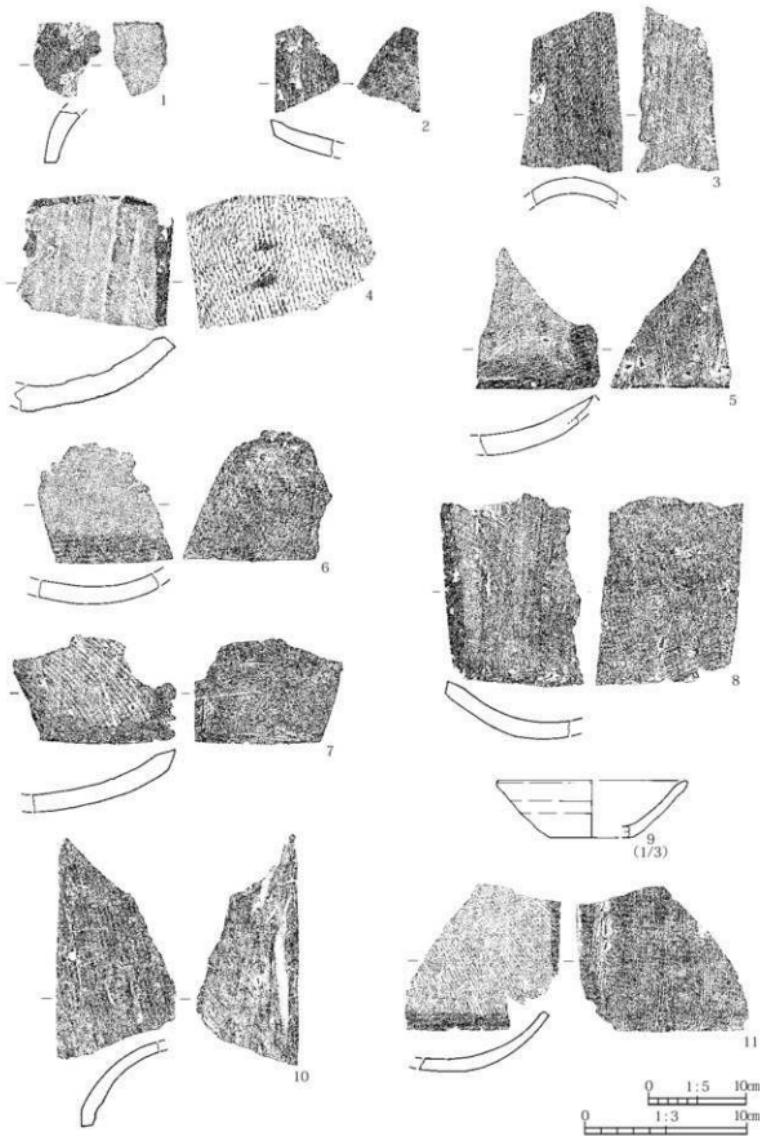
所見 整地土層及び基壇縁石の直下が粘質の黒褐色土(V層)であり、これが創建時の地表面と考えられる。この上に盛土をし、さらに掘り込み地業・版塗を施し、基壇縁の玉石を積み上げ、基壇を整えたようである。この造成により、南大門前面との比高が1m程生じるようになったと考えられる。

南大門の再建時期については明確にとらえることはできなかった。再建南大門の倒壊時期については、基壇築土を掘り込む土坑状の落ち込みに10世紀代の土器が伴うことから、10世紀代の可能性が高いと考えられる。

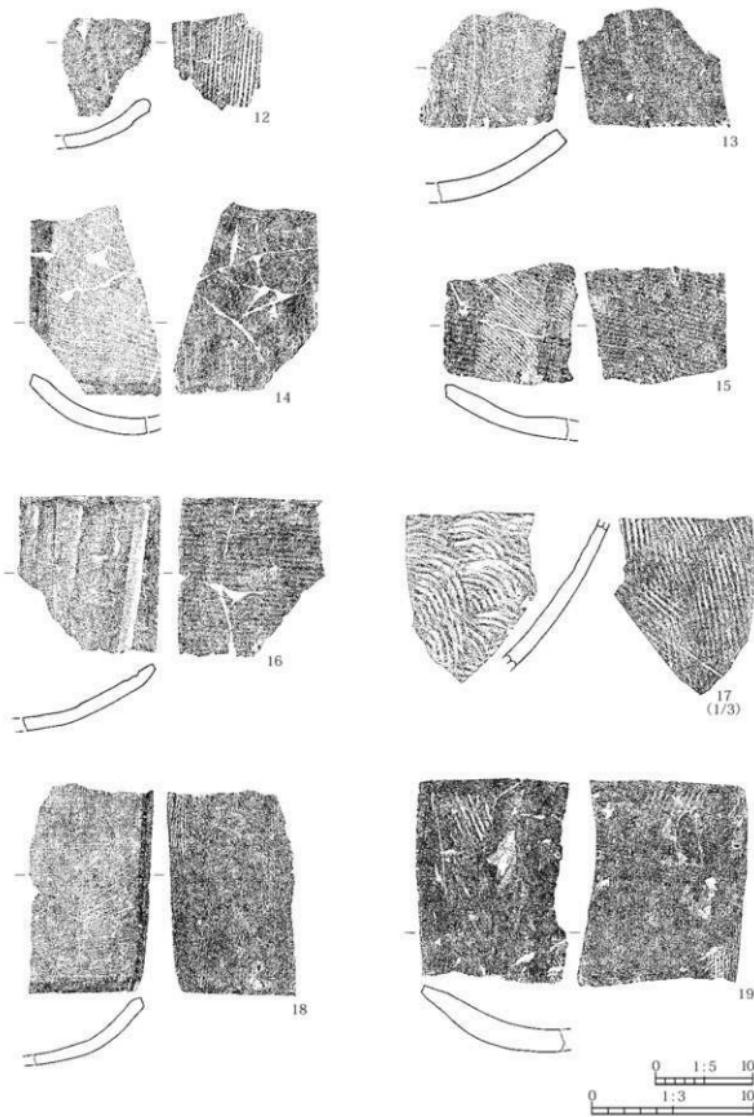
(2) 南大門前面(第146, 147図, PL.27)

40-10トレンチにより、南大門前面の旧地形を確認するための調査を行った。表土直下は、瓦を多く含む暗褐色土となり、さらにその下20~30cmで粘質の黒褐色土(V層)となった。暗褐色土の上面レベルは126.8m程、V層の上面レベルは126.5~6m程である。南大門脇のSD01底面とのレベル差はほとんど見られないことから、南大門前面には溝は存在せず、一様に低い面が広がっていたと考えられる。

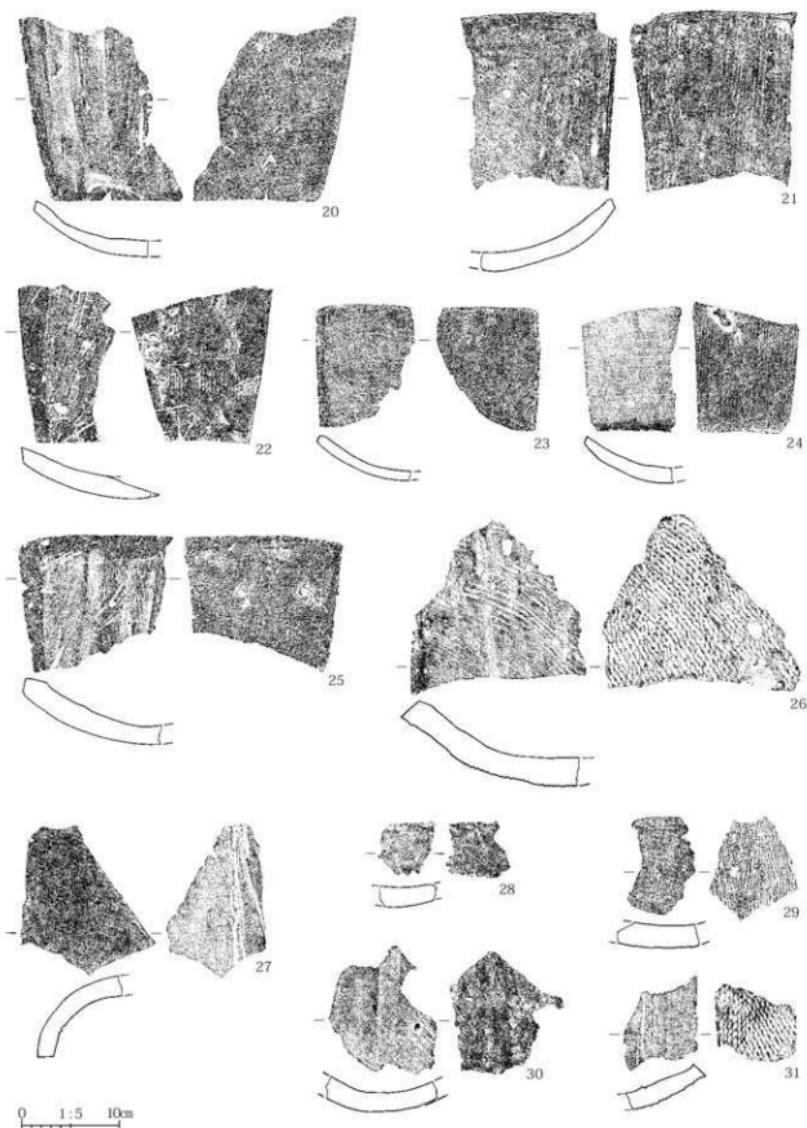
V 調査した遺構と遺物



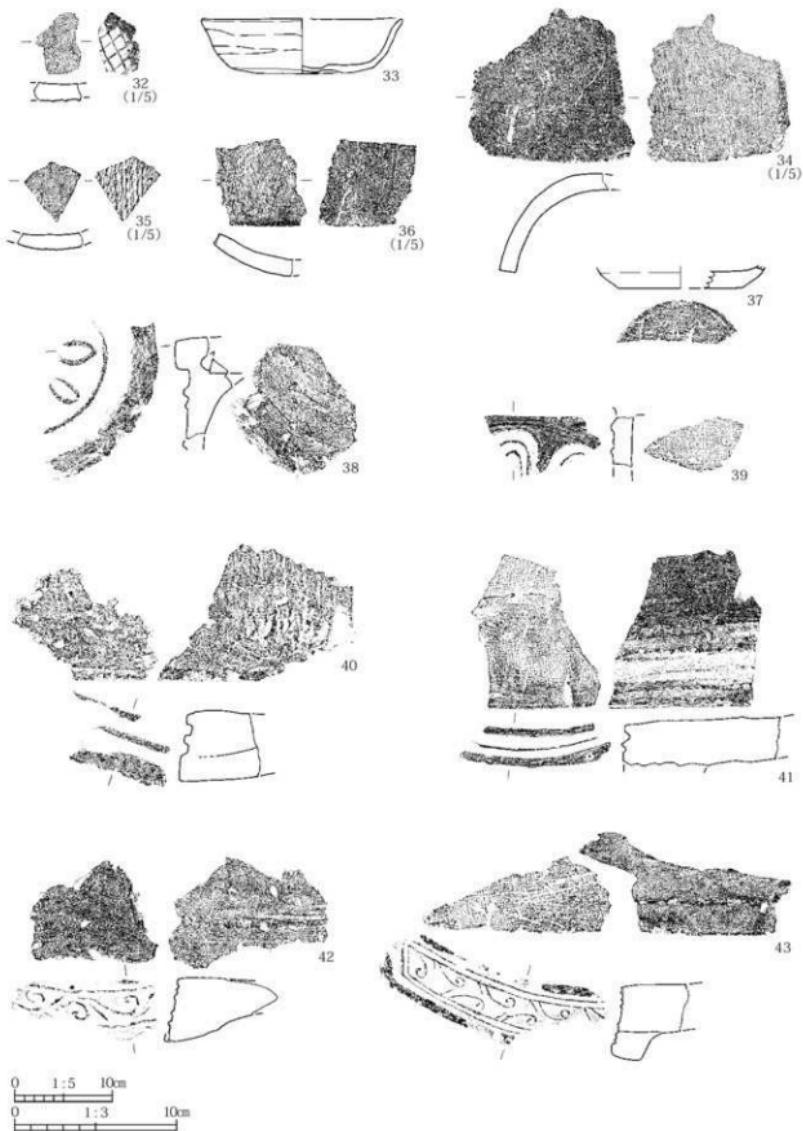
第141図 南大門出土遺物(1)



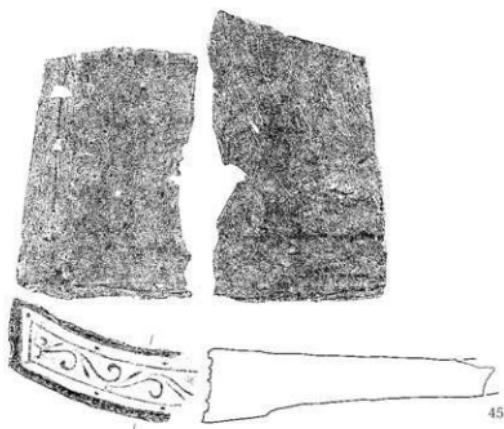
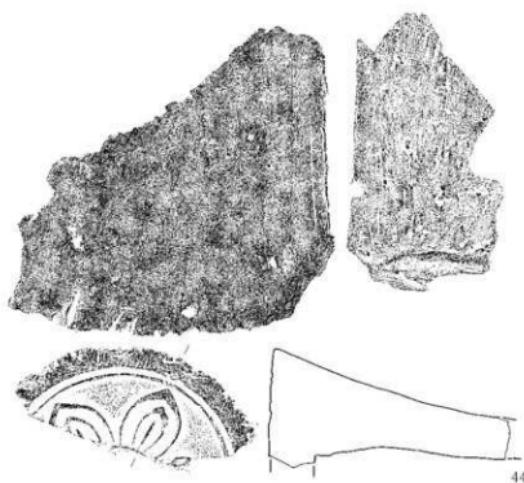
第142図 南大門出土遺物(2)



第143図 南大門出土遺物(3)

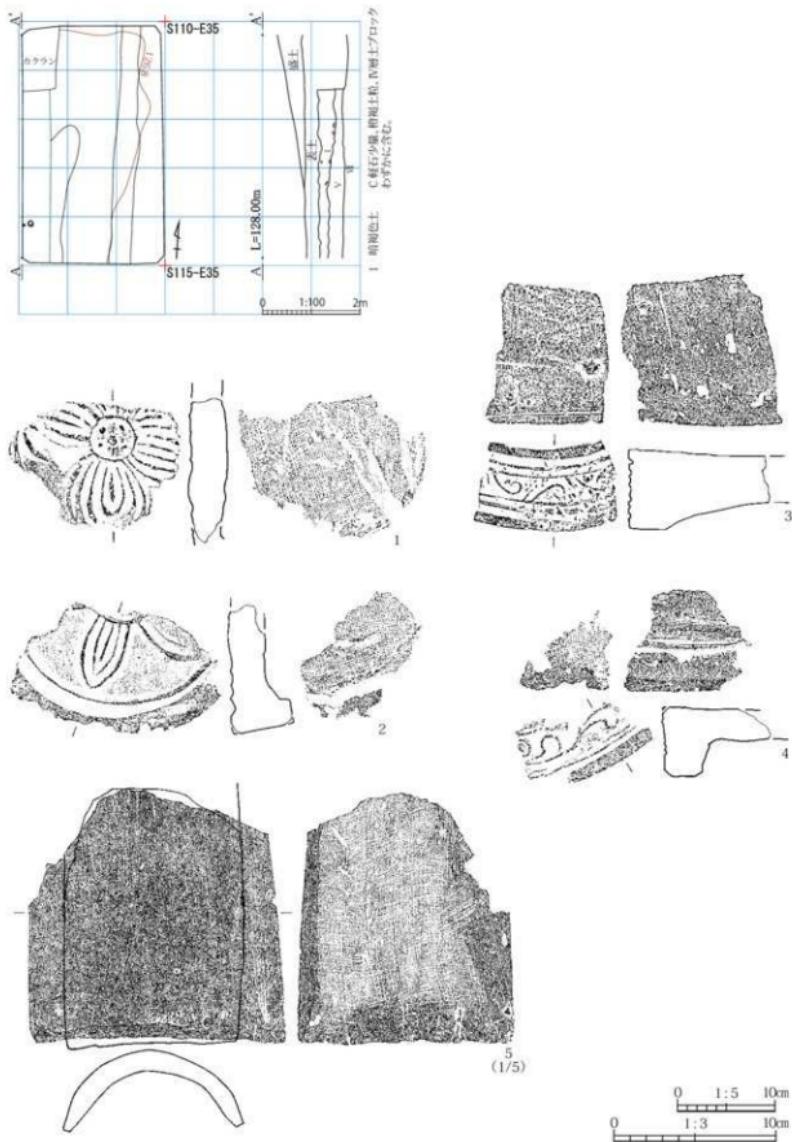


第144図 南大門出土遺物(4)

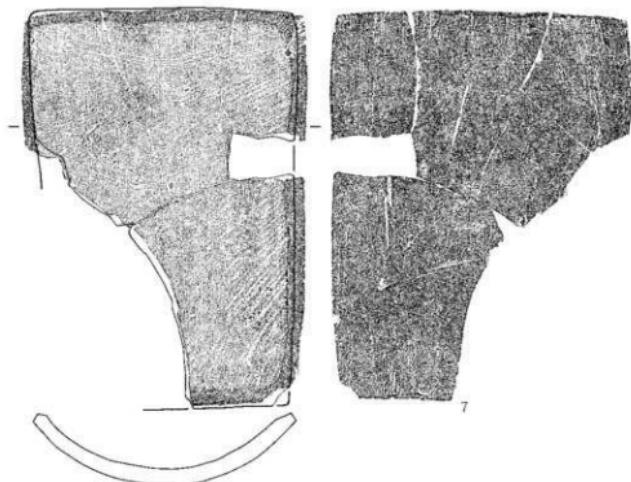
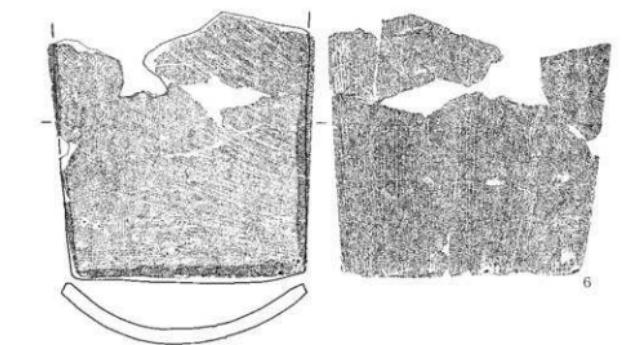


0 1:3 10cm

第145図 南大門出土遺物(5)



第146図 南大門前面平面・断面図及び出土遺物(1)



0 1:5 10cm

第147図 南大門前面出土遺物(2)

8 東大門

これまでの調査・研究

東大門については、第1期調査の昭和56年度5トレンチ東大門拡張区として道路西側、昭和61年度第32次調査区として、道路東側の調査が実施されている。その結果、N17-E132の位置で、落とし込まれた礎石(1)が検出されている。また、平成3年度に旧群馬町教育委員会により東接する道路部分の調査が実施され、原位置の礎石(2)が検出されている。さらに、礎石1の抜取り穴と考えられる土坑も検出された。

調査の経過

平成24年度、東大門の位置と規模を確認するため36-6トレンチを設定し、調査を実施した。合わせて東辺築垣の位置を確認すべく、前橋市道の道路使用許可を受け、隣接する現道部分を含めて調査を行った。また、前述した旧群馬町教育委員会によって検出された礎石(2)を再確認するため、同様に高崎市道の使用許可を受け、調査を実施した。平成28年度には、36-6トレンチの南側に40-6トレンチを設定し、瓦組遺構がさらに南へ続くかを確認するための調査を実施した。

調査の概要（第148～164図、PL.28）

(1) 東大門

礎石等 第1期調査で確認されていた礎石(1)、旧群馬町教育委員会によって検出された原位置の礎石(2)を再確認したにとどまる。2の上端レベルは128.6mである。礎石の下には根石が敷かれ、その下は基盤層の黄褐色土(VII層)となる。1は原位置から動いているものだが、2の西側に位置するもので柱間は8～10尺の間と考えられる。1の抜取り穴と考えられる土坑が調査されており、礎石2との位置関係から方位軸は調査グリッドラインよりも西に向かって南に振れることが確認できる。このことから東大門は、現道と方位軸を合わせるように建てられていた可能性が高い。このことは、東辺築垣の位置の推定にも大きく関わる問題である。さらに礎

石等の存在を確認すべく南側を中心に調査を行ったが、中世以降の大溝(SD20)やゴミ穴の搅乱(コンボ)で穴を掘り、瓦を大量に投棄した穴。SD20の東側)により、新たな礎石等は確認できなかった。

掘り込み地業 東大門と考えられる掘り込み地業は、全く確認できなかった。当初、第1期調査で検出された礎石から南へ伸びると想定したが、調査区面の土層観察でも版築層は全く確認できなかった。礎石2の根石直下で基盤層の黄褐色土となることから、掘り込み地業は深くは行わず、黄褐色土の面を出して根石を据えたと考えられる。

(2) 東辺築垣

東辺築垣の痕跡も全く確認できなかった。現道下にのみ、若干の黒褐色土が認められたが、築垣と認定するまでには至らなかった。

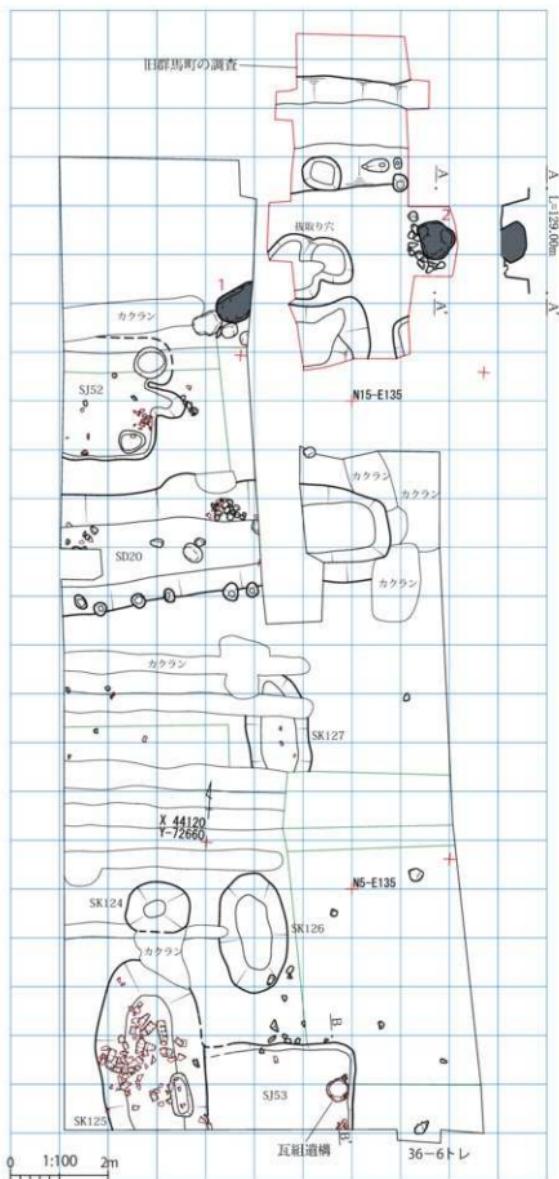
(3) 瓦組遺構

36-6トレンチ南端N1-E135の位置で、完形の平瓦4枚(第151図1～153図4)を円形に組んだ瓦組遺構を検出した。平瓦はすべて桶巻作りの創建期初期のもので、そのうちの1枚には「大前□牛麻呂廿八」の墨書きがある。第153図5は表土中の破片2点と接合した瓦で、段部の破片が2と3の合わせ目に添うように立てかけられていた。6は掘り方埋土から出土した土師器壺だが、もとはSJ53にあったものが混入したものであろう。時期は、SJ53を掘り込んで構築しているが、掘り方埋土の土層観察からAs-B降下以前、国分寺存続期の所産と考えられる。掘り方底面は平坦ではなく、緩やかに傾斜している。内部の充填土からは、特に遺物は出土しなかった。この遺構の性格については、柱の根巻等の可能性が考えられるが、この周辺から同様の遺構が検出されなかつたため明らかでない。

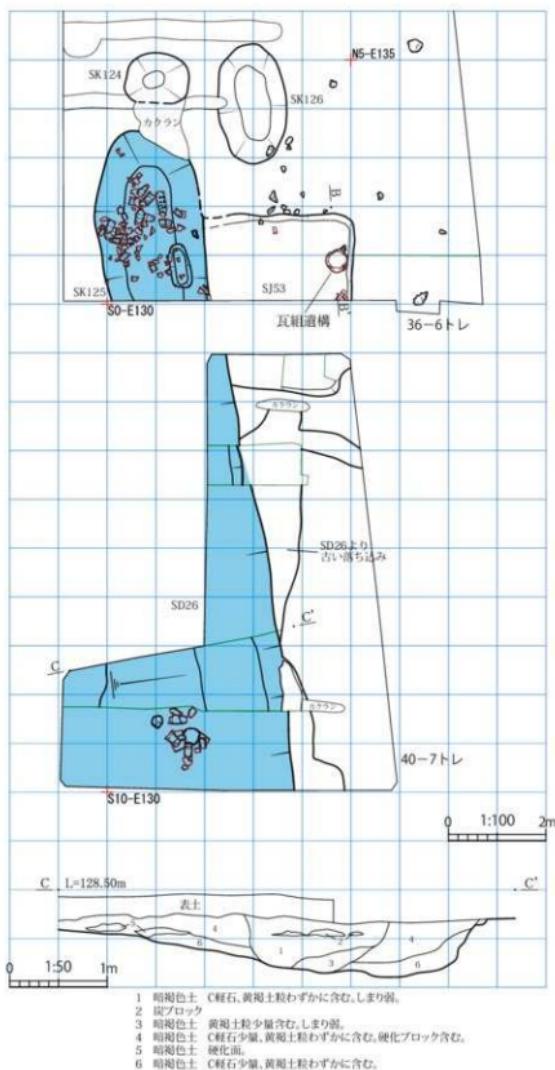
(4) S D 26

40-6トレンチ西端で、南北方向の溝(SD26)を検出した。36-6トレンチ南端で検出したSK125に統くと考えられ、これが北端と考えられる。36-6トレンチでの幅は2.2mだが、40-6トレンチ南端部では西側に広がる形状を呈し、幅は4.7m

V 調査した遺構と遺物



第148図 東大門平面・断面図

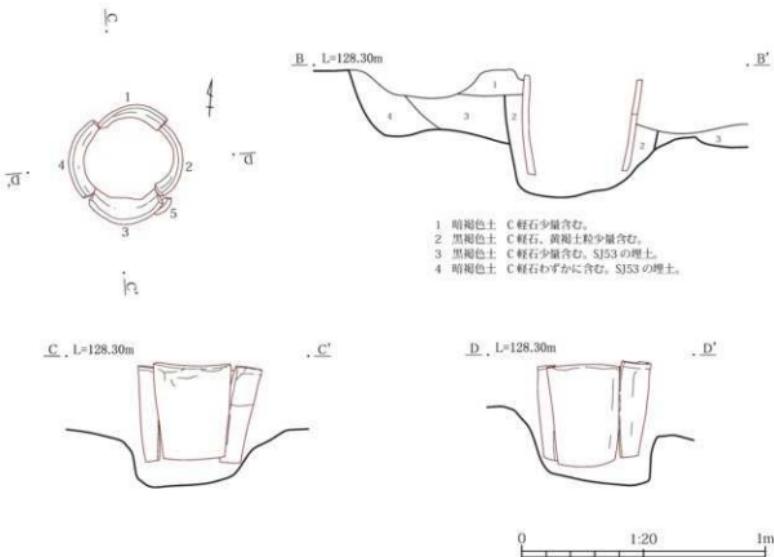


第149図 東大門南地区平面・断面図

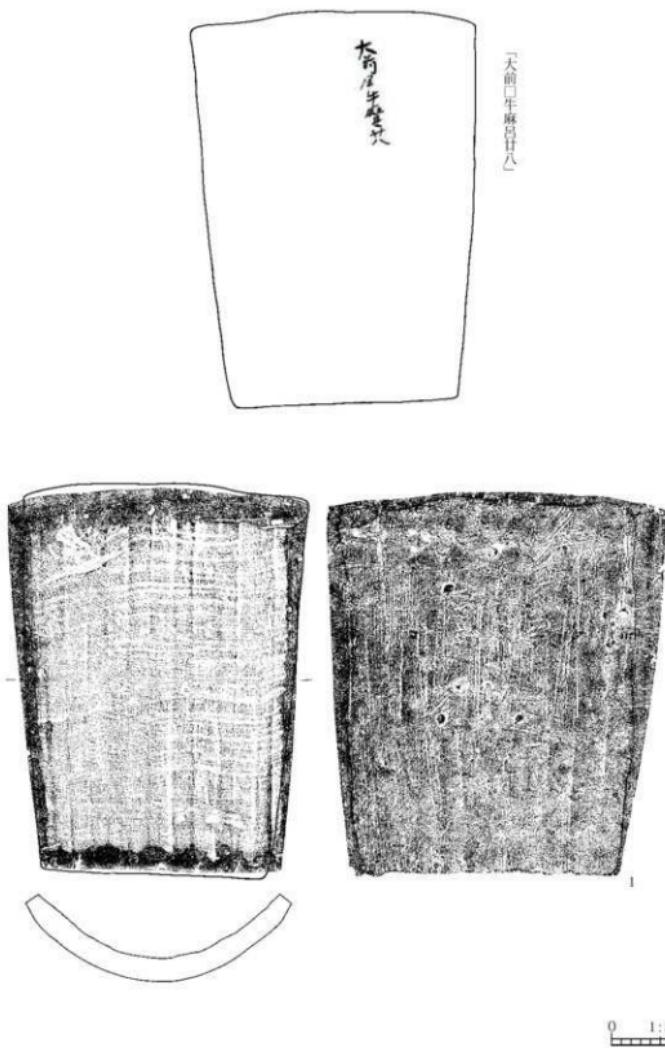
以上になる。南端部分では東壁は比較的垂直に掘り込むが、西壁はかなり緩やかに立ち上がり、さらに調査区の西側に伸びている。埋没土の状況から、国分寺存続期の所産と考えられる。方位軸はN-13°-Wである。S7ライン付近で断面調査を行ったが、埋土中からは多くの瓦とともに10世紀代の土器が出土しており、この頃に埋まつたと考えられる。

(5) その他の遺構

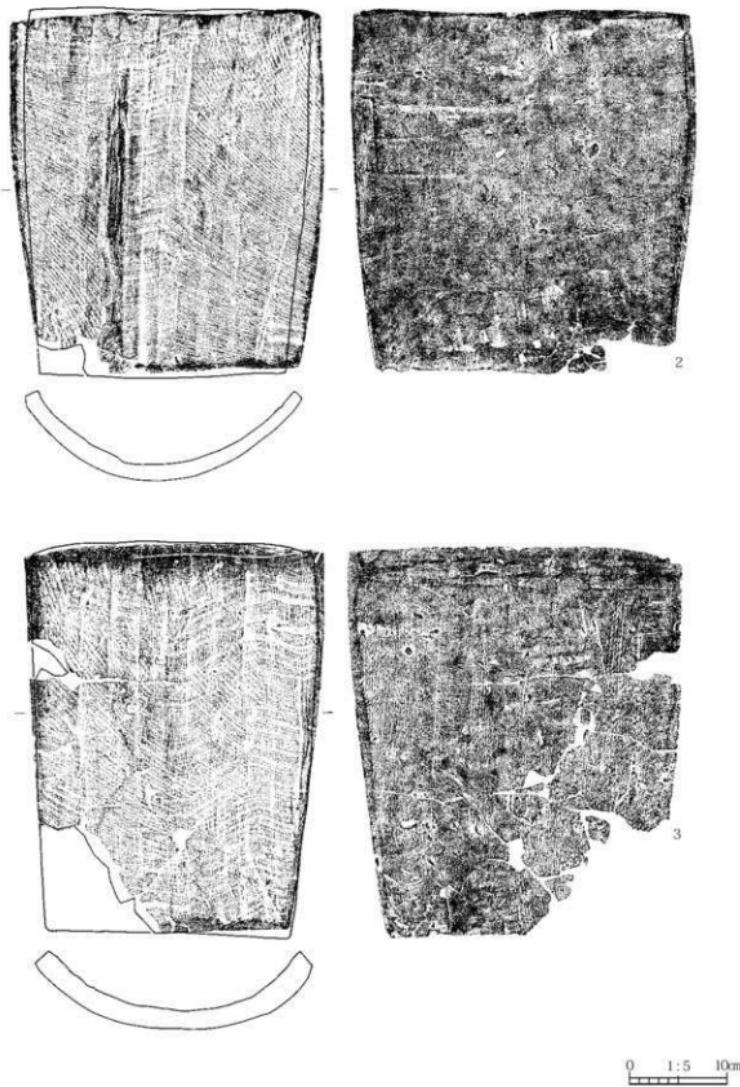
竪穴建物2棟(SJ52, 53)、土坑3基(SK124, SK126, SK127)が検出された。SJ52, 53は国分寺創建以前の所産である。SK126, 127は埋土中に瓦が混入することから国分寺存続期の所産と考えられるが、ともに楕円形状を呈し、方位軸をSD26と描えて掘られていることは、東辺築垣の走向との関連性が考えられるであろう。



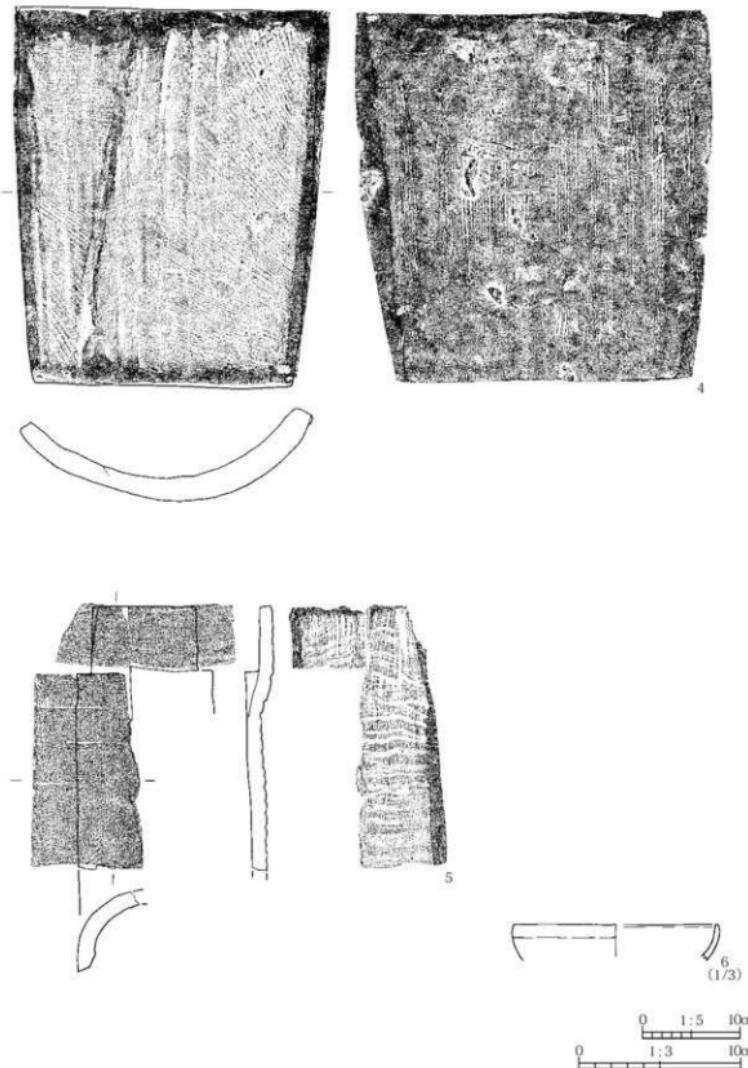
第150図 瓦組遺構平面・断面・立面図



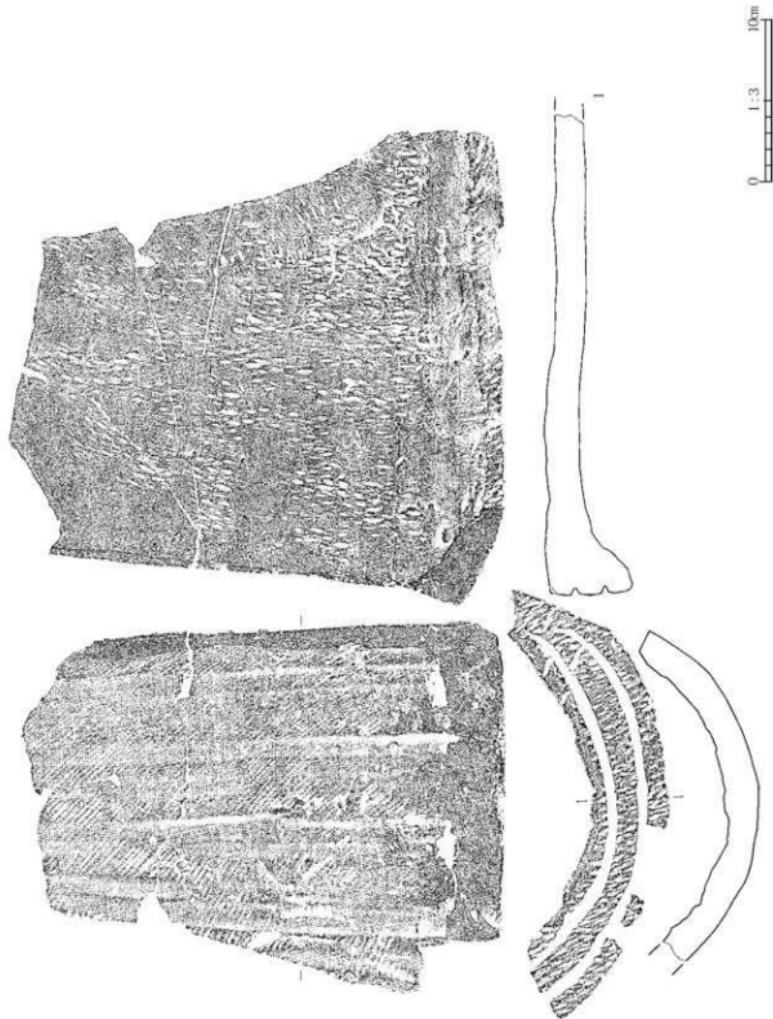
第 151 図 瓦組造構の瓦(1)



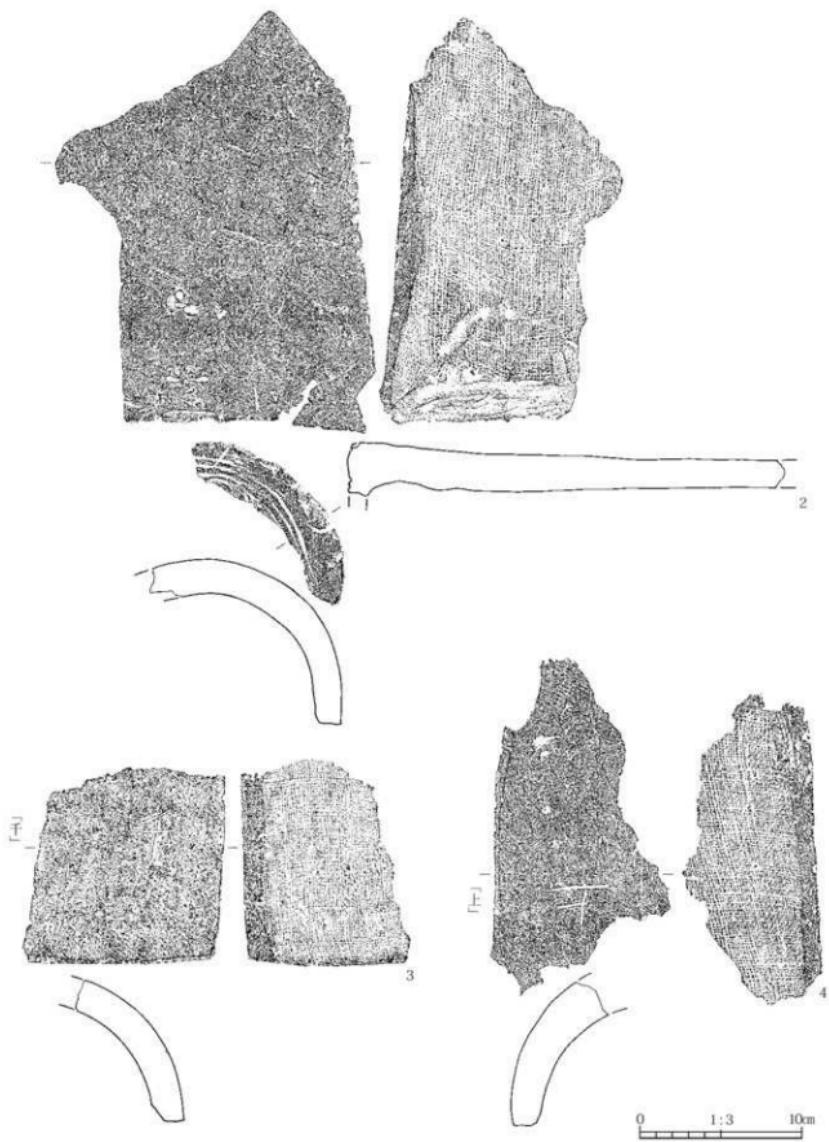
第 152 図 瓦組造構の瓦(2)



第153図 瓦組造構の瓦(3)と掘り方出土遺物

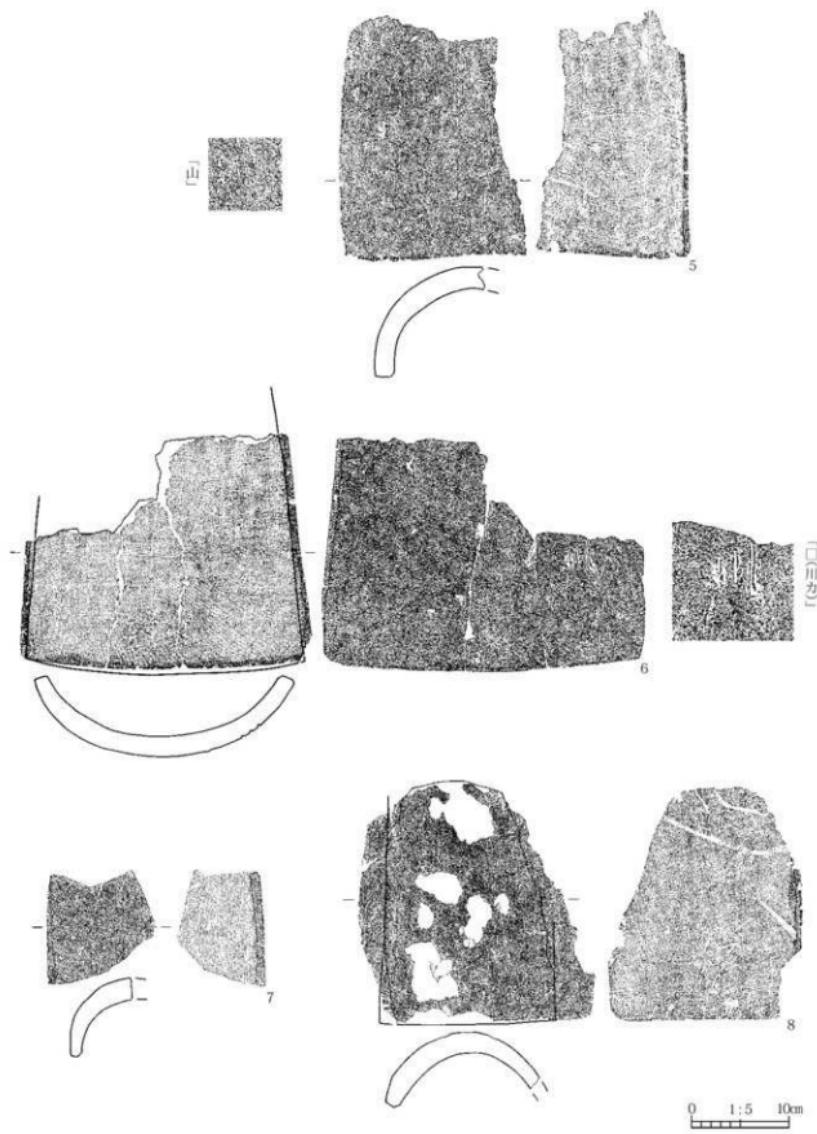


第154図 SD 2 6出土遺物(1)

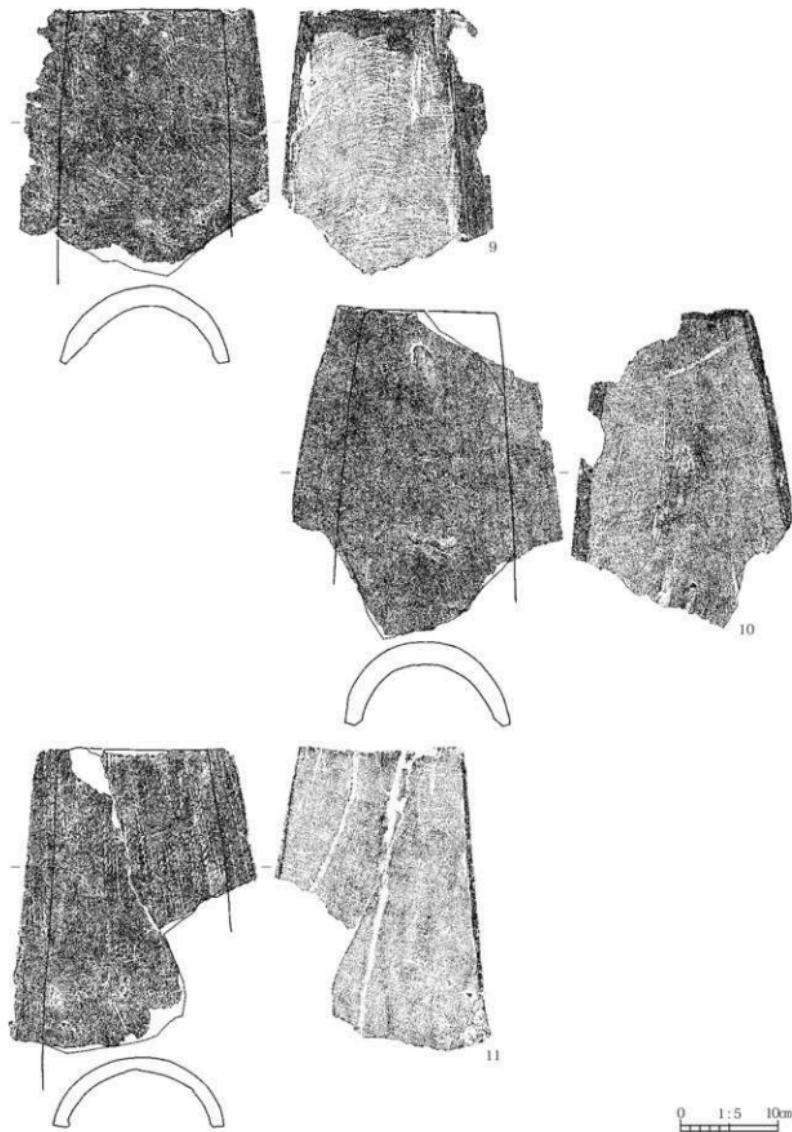


第155図 SD 26出土遺物(2)

V 調査した遺構と遺物

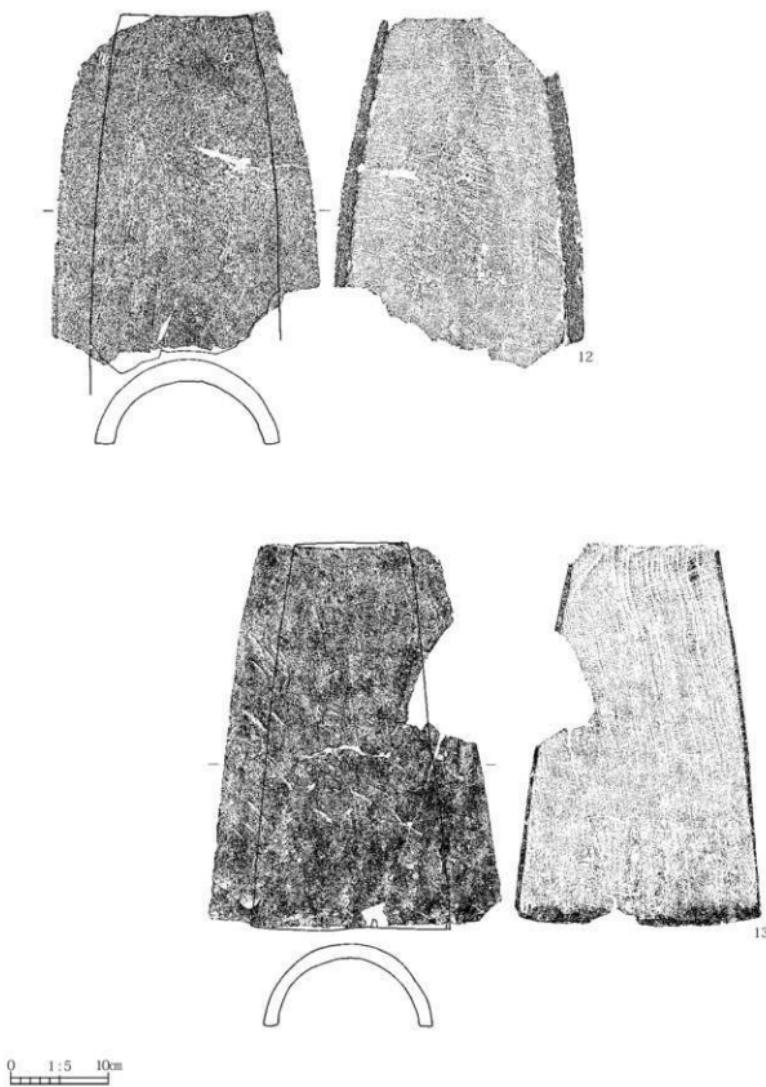


第156図 SD 2 6出土遺物(3)

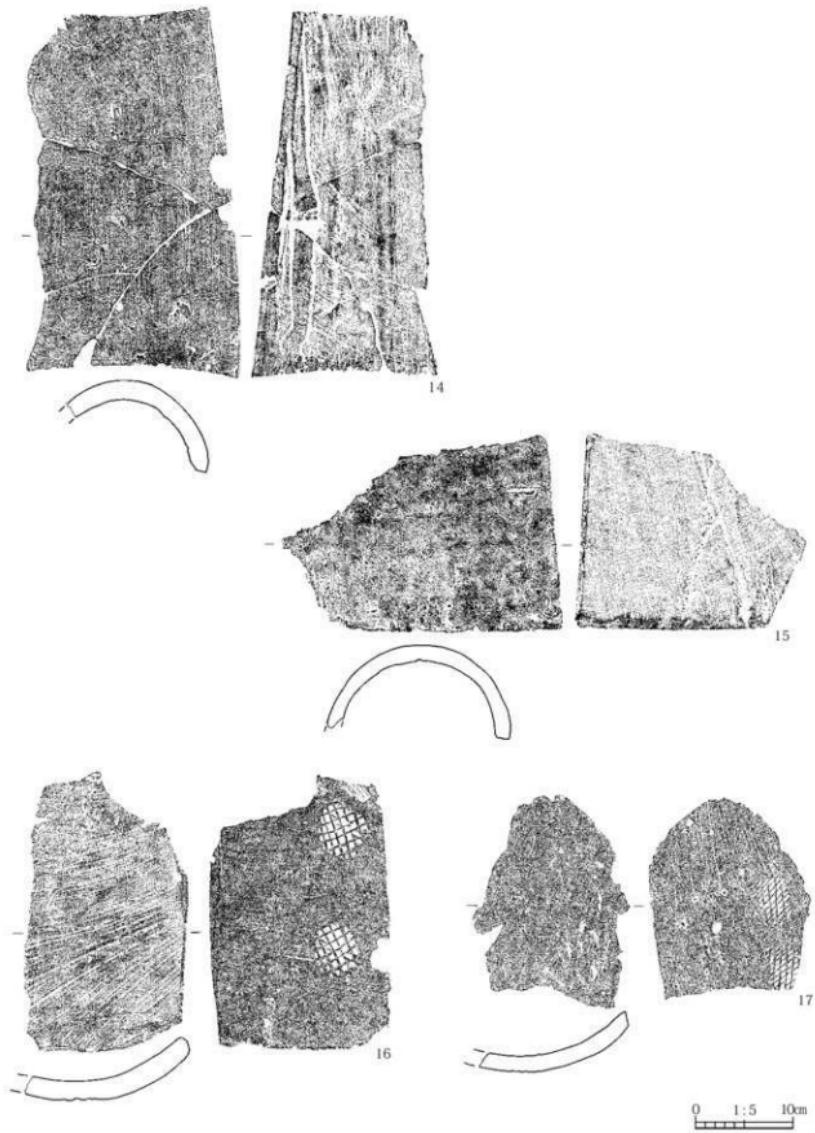


第157図 SD 26出土遺物(4)

0 1:5 10cm

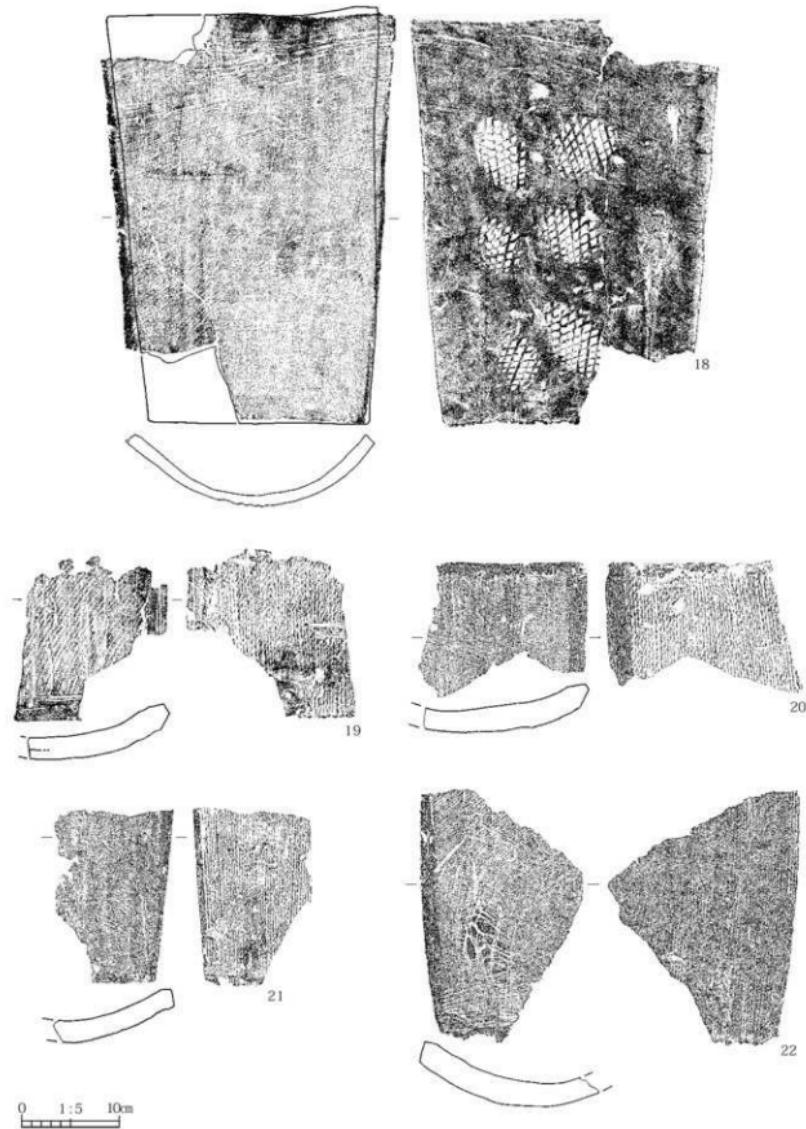


第158図 SD 2 6出土遺物(5)

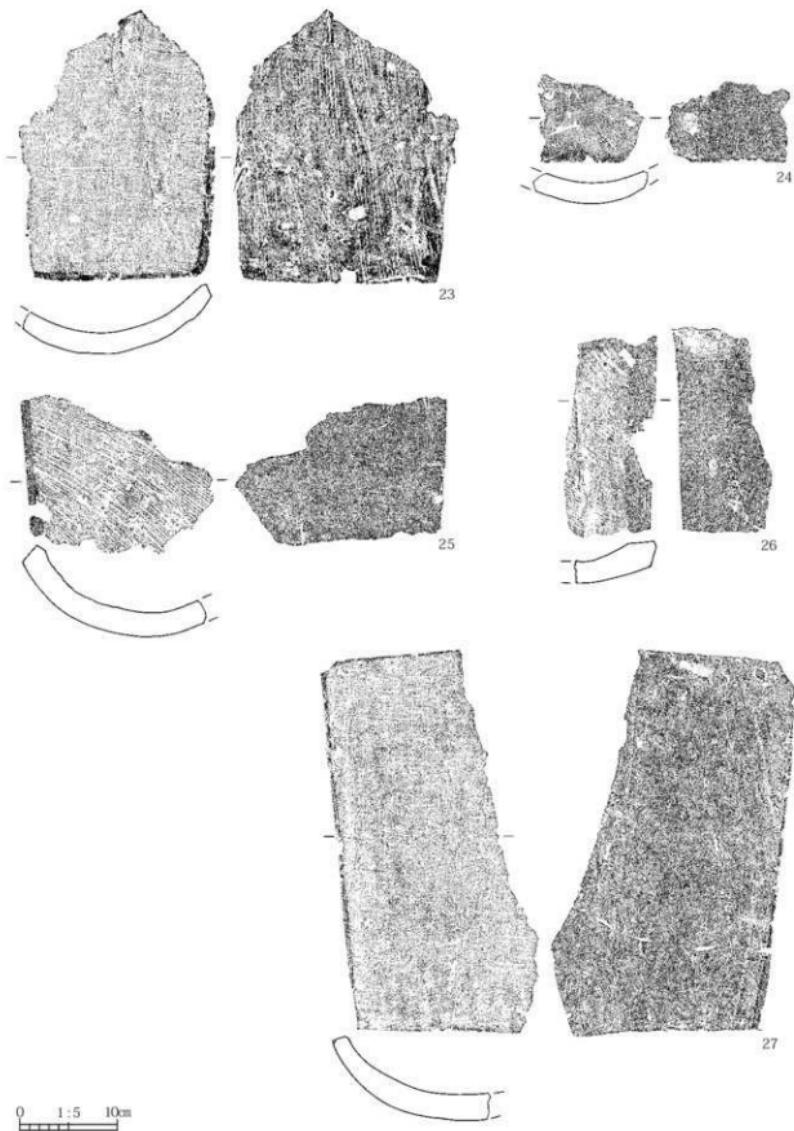


第159図 SD 2 6出土遺物(6)

0 1:5 10cm

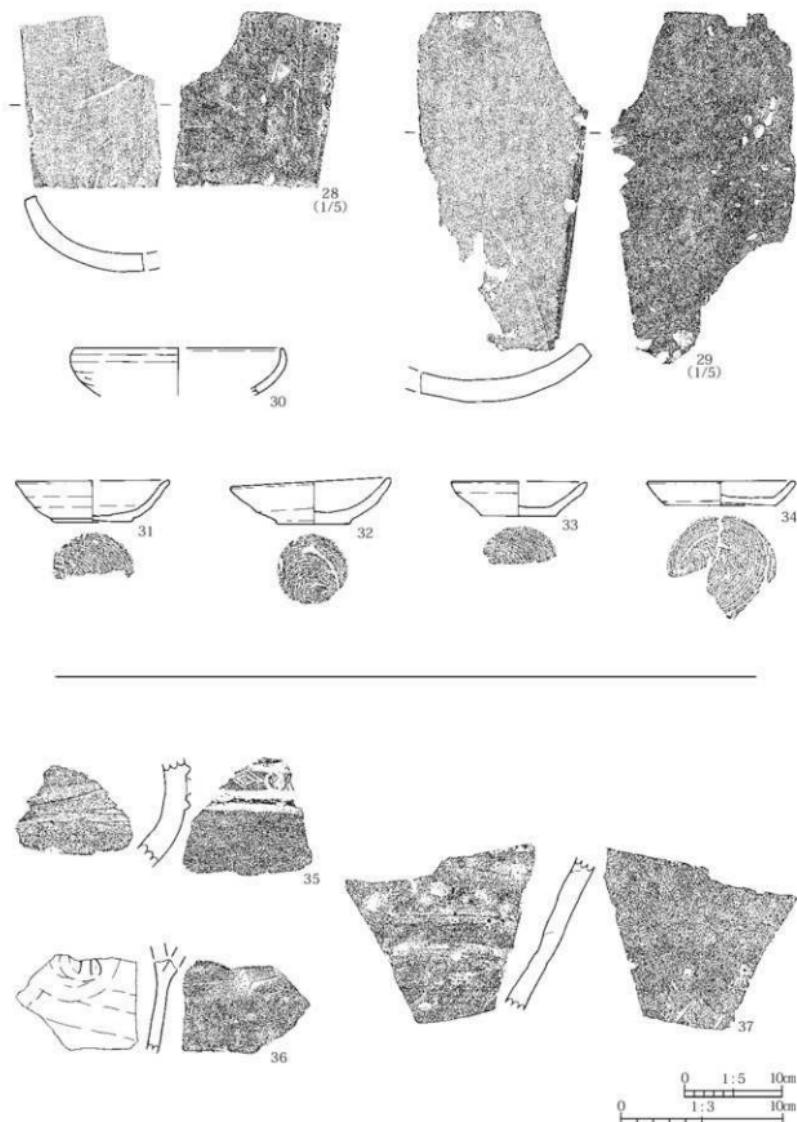


第160図 SD 2 6出土遺物(7)

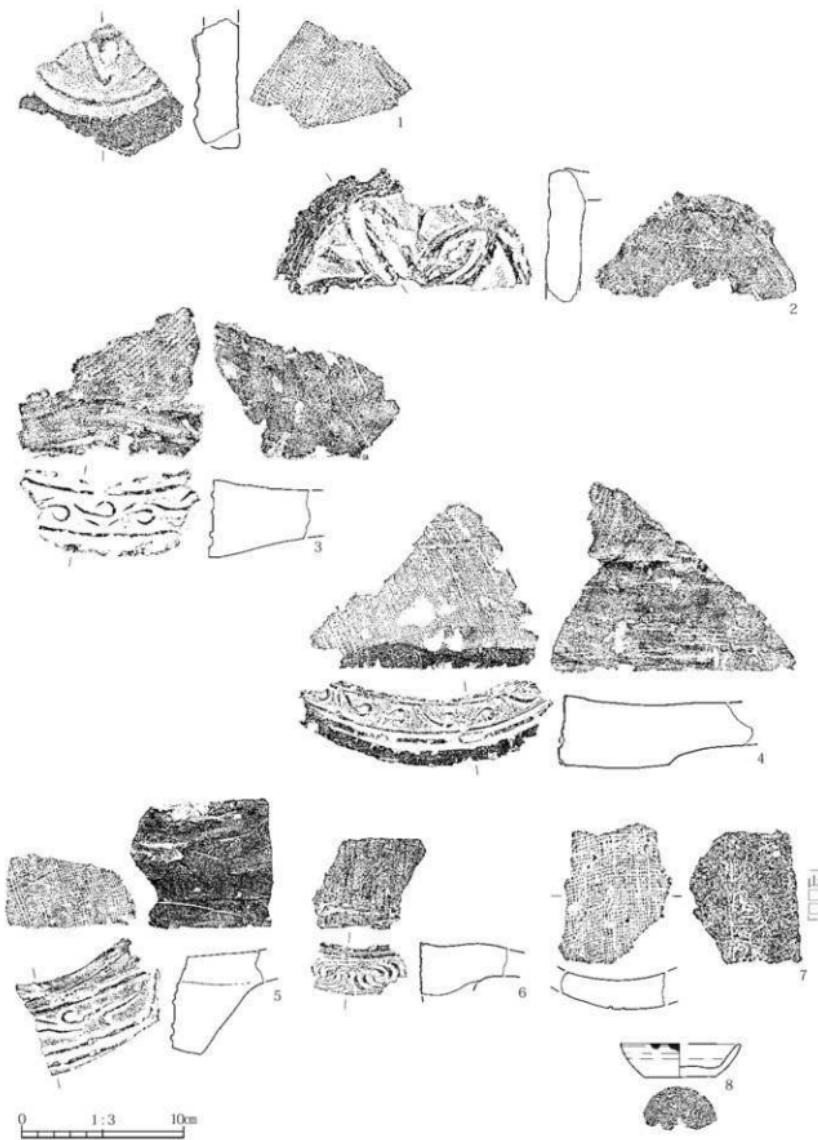


第161図 SD 2 6出土遺物(8)

V 調査した遺構と遺物



第 162 図 SD 26 出土遺物(9)(上)と SD 20 出土遺物(下)



第163図 東大門地区表土出土遺物



第164図 S.J.52出土遺物

9 西大門

これまでの調査・研究

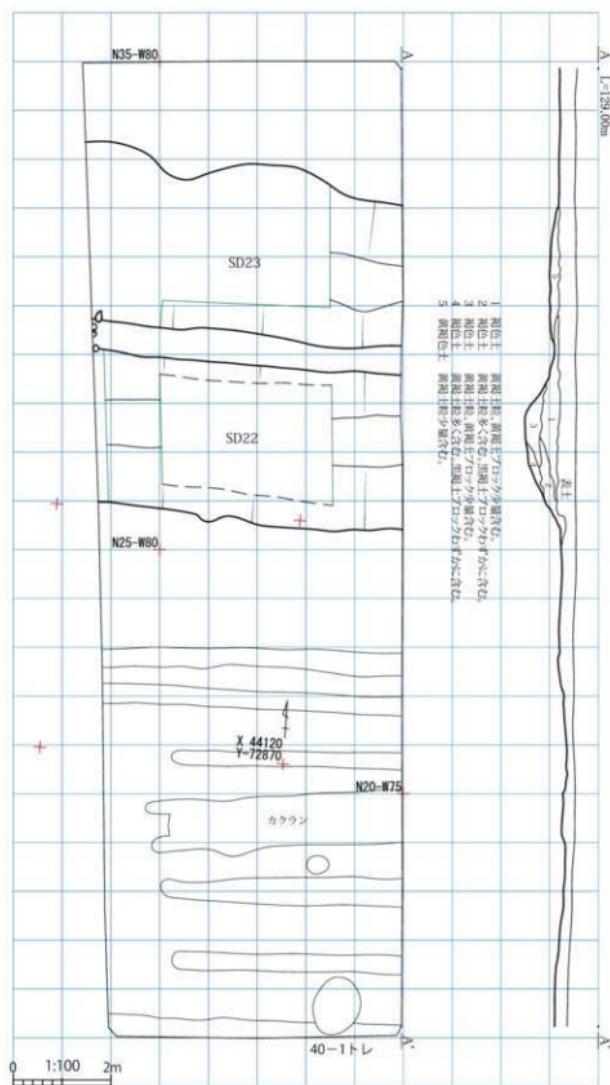
西大門については、先学諸氏の研究では全く触れていない。また、第1期調査においても調査はなされていない。

調査の経過

これまで未調査であったため位置と構造を確認すべく、平成28年度に東大門と対称となる位置に40-1トレーナーを設定して調査を実施した。

調査の概要（第165図、PL28）

礎石、根石、さらには掘り込み地業、掘立の柱穴等、建物の痕跡は全く確認できなかった。同様に、西辺築垣の痕跡も全く確認できなかった。表土直下で基盤層である黄褐色土（VII層）となる。確認面のレベルは、128.3m程度である。東西方向の中世以降の溝（SD22, 23）を検出した。



第165図 西大門地区平面・断面図

10 築垣

これまでの調査・研究

築垣については、「実録帳」に「築垣壹廻 四面貳町 長參佰貳丈壹尺」との記載があり、築垣が寺域を囲っていたこと、規模は東西・南北でそれぞれ約2町であること、1030年の時点で全体が崩れて無実になっていたことを、同史料からうかがい知ることができる。

発掘調査は、昭和49年に南辺東側で2本のトレントン調査が行われ、地境の段差が築垣に一致することが確認された。第1期調査では、昭和55年度に1トレンチで南辺東側、2,9トレンチで南辺西側の調査が行われたのを皮切りに、昭和58年度第23次調査区で南辺東側及び南大門との取付きを、昭和59年度第24次調査区、昭和60年度第27次調査区、昭和61年度第31次調査区において南辺西側の調査が行われ、築垣基部が確認されている。北辺については、昭和55年度6,8トレンチによって調査が行われた。8トレンチのN 135～136の位置で後世の玉石列が検出され、寺域境界の名残と推定された。西辺及び東辺については、道路際までの調査が実施されているが、築垣は確認されていない。昭和57年度には第16次調査区で南東隅の調査が実施された。その結果、地山が階段状に削られた状況が確認され、これが築垣基部の造作とみられることや谷地形との関係から、南東隅をS99-E135を中心とする位置に推定された。そして東辺築垣をS99-E135を起点にして、調査グリッドラインの方位軸に合わせて北へ伸びるとされた。このように現在までのところ、築垣の痕跡が確実に確認されているのは南辺のみということになる。

調査の経過

平成24年度、③今後の整備に向けて、より詳細な調査が必要な箇所として築垣の調査を実施した。南辺築垣東側は24m分が復元されているが、さらに東方の位置を確認するため36-3トレンチを、また東辺築垣の位置を確認するため36-2ト

レンチを設定し、調査を実施した。特に36-2トレントンは、第1期調査において東辺築垣が推定されたE135ラインで築垣が確認できるかを目的として調査を実施した。

平成28年度は当初、南東角を確認するための40-9トレンチの調査のみを計画していた。しかし、40-8トレンチ北部の調査を行ったところ、地表下1m程、126m台でAs-B混土層(II層)が検出され、国分寺当時から寺域南東部は浅い谷地形であったことが推定された。そこで、この谷地形に対してどのように築垣等を構築したのか確認する必要性が生じ、40-8トレンチを築垣想定位置にかかるよう南に延長するとともに、平坦部から谷地形への転換点に40-12トレンチを新たに設定して調査を実施した。しかし、予想に反して40-12トレンチで築垣が検出されなかつたため、昭和49年に築垣が検出されていた西側のAトレンチを拡張区として再調査を行った。また北辺の状況を確認するため、西部に40-11トレンチを設定して調査を行った。

調査の概要(第166～179図 PL.29～34)

(1) 40-12トレンチ及び南東角の調査状況

40-12トレンチにおいて、表土及びAs-B混土層(II層)の除去を行ったところ、S96～99・E80～84の位置で、グリッドラインに沿って東西方向に伸びる幅3m程の帯状の高まりが検出された。E84以東は、後世の擾乱によって削平されている。II層はこの高まりの北側に厚く堆積するとともに、調査区南端でのみ検出された。当初、この高まりが築垣である可能性を考えたが、土の締まりが弱く疑問視されたため、西壁際にサブトレントンを設定して断面調査を行った。その結果、版築層は認められず、溝状の落ち込み(SD27)の埋土であることが確認され、さらにその下層からは柱穴が確認された。サブトレントンでは地山面(VI層、柱穴南側はIV層が残る)まで掘り下げを行い、南部ではSD01及び12、さらに最南端でも溝状の落ち込みを確認した。SD27のE80～82の部分は、新期の埋土のみを除去した状態である。帯状高まりの南側は広く複

色土が堆積するが、これは As-B 降下以前に埋まつた土層である。

40-12 トレンチ拡張区は、昭和 49 年 A トレンチで調査されていた面を検出した。A トレンチの調査では、SD27 は地山面まで掘り下げてはおらず、新期の理土を除去したのみの状況であった。土層の堆積状況を確認するため、西壁際にサブトレンチを設定して地山面まで掘り下げを行った。その結果、築垣部では明瞭な版築層が確認されるとともに、南部は 40-12 トレンチと同様な状況が確認された。

南東角に当たる 40-9 トレンチでも、同様に表土及び As-B 混土層(Ⅱ層)の除去を行ったが、Ⅱ層は SD27 のある北西部にのみ厚く堆積している状況であった。表土下、Ⅱ層の上層に黒褐色土があり、これを除去すべきであったが、SD27 南側の高まりはこの黒褐色土上面の状態である。E138 ラインのベルトを挟んだ東側の確認面は、北にやや V 層が残る以外はほぼⅦ層である。

(2) 南辺築垣(S F 0 1)

昭和 49 年 A トレンチの再調査である 40-12 トレンチ拡張区でのみ、築垣下部が検出された。北側は溝(SD27)によって壊されているため、本来の幅は不明であるが、現状で南縁から 2 m 程の版築層が残存している。断割りをした西壁際の築垣の下位には溝ないし土坑状の掘り込みがあり、これの下部は粗く埋め戻し、中位から上層は版築を行っている。版築は黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土を互層に積み上げており、よく締まっている。セクションベルトを挟んで東側の 40-12 トレンチでは版築層は認められないことから、築垣はベルト内までしか残存していないと考えられる。

36-3、40-8 トレンチでは、築垣本体は確認されなかったものの、想定位置が高まりとして残っており、築垣が存在した可能性を示唆する。

また 40-9 トレンチでは、西部で 40-8 北トレンチから続く、地表下 3 m にも及ぶ深い谷地形が確認されたが、この谷を埋めて整地した版築状の上層断面が確認された。ちょうど築垣想定位置に当たるこ

とから、築垣を造成するための理土と考えるのが妥当と思われる。そして土層断面を見る限り、築垣が壊れた後、土壠状に粗く盛土した時期があったようだが、最終的には SD27 が掘られている。あるいは、SD27 を掘った土を崩れた築垣下部の上に盛り上げて、土壠と SD27 が併存した可能性も考えられよう。

なお、S98-E134 から南東側は昭和 57 年度第 16 次調査区の再調査であるが、報告されていた「地山が階段状に削られた」状況は、谷地を埋めた盛土の掘り残しが分かった。

(3) S D 2 7

40-12 および拡張区、40-8、南東角に当たる 40-9 トレンチで検出された。平成 24 年度に調査を行った 36-3 トレンチでも、SK119 とした落ち込みがこれに該当すると考えられる。築垣北側に沿って東西に伸びる大溝であり、東端は E140 の位置である。

40-12 トレンチの西側については、南大門の節で述べたとおり基壇北東部の東側に溝状の落ち込みが確認でき、これが SD27 と考えられる。そうなると SD27 は南大門脇から南東隅まで、およそ 110 m 近くにわたって続いている可能性が高く、築垣崩壊後の区画溝としての役割を担っていたと考えられる。幅は、40-8 トレンチで 4 m 程である。

SD27 は掘り直しが行われており、最も新しい時期の理土上位に As-B の堆積が認められる。さらに 36-3 トレンチでは、10 世紀後半期の SJ51 が SD27 墓土を掘り込んで構築していることから、SD27 は 10 世紀後半までには完全に埋没していたことが分かる。また 40-12 トレンチ拡張区では、古期の理土に築垣版築層が断層のようにずり落ちている状況が確認された。

(4) S A 0 4

40-12 トレンチ築垣想定位置、SD27 の埋土下で掘立柱脚の柱穴列(SA04)を検出した。計 6 個が検出され、40-12 トレンチ拡張区で検出した P1 は築垣版築層下で確認されたことから、この掘立柱脚が築垣の前身施設であることは明らかである。方位

軸はE-3°50'-Nで、調査グリッドラインとほぼ一致する。創建南大門(E-2°48'-N)とは、東に対し1°北に振れており、南大門と掘立柱壙は一直線状にはなっていない。柱穴列は1期のみであり、それぞれ柱痕ないし抜取り痕がある。掘り方は丸柱の正方形を呈し、P3で東西長115cm、柱痕径32cmを測る。P2～P6の柱間は、2.3～2.35～2.15～2.3mであり、ややバラツキはあるが概ね7.5尺を基準としているようである。P2の断割りを行ったところ、埋土は黒褐色土や黄褐色土を互層に埋めており、丁寧に充填している。

東側延長については、40-8トレンチでサブトレンチによる調査を行ったが確認されなかった。該当位置にはSD27が掘られており、埋土を除去した確認レベルは126.0mである。SA04の柱穴底面レベルは126.2～126.3m程であり、当初から存在しなかったのか、あるいは壊されて無くなってしまったのかは判断できない。また36-3トレンチでも、確実なものは確認できていない。

出土遺物 SA04P4の柱抜取り痕から、8世紀第3四半期の甕の破片が出土している。

(5) 東辺築垣

36-2トレンチでは、耕作による擾乱が著しく、築垣の痕跡は確認できなかった。第1期調査で推定されたE135ラインも、同様の擾乱により痕跡は確認できなかった。

(6) SD28

40-9トレンチ東端部で、現道に沿うように南北方向の溝(SD28)の西部を検出した。SD27とは連続せず1m程の間隔をもつが、位置など検出状況からSD27と同様の性格と考えられる。このことから、東辺築垣はSD28に接する東側にあったと考えられ、現道の位置に東辺築垣が存在した可能性を補強するものである。

(7) SD01・SD12

SD01は南辺築垣の外側に沿う溝状の落ち込みで、北縁はほぼS101の位置に当たる。南縁がSD12によって壊されているため幅は不明である

が、概ね3m前後と見られる。ただし、これまでSD01は南大門脇から続く溝と見られていたが、南大門の節で述べたとおり南大門基壇の南東側は溝状にならないことから、築垣造成に伴う単なる段差である可能性も拭いきれない。

SD12は下半は箱状を呈し、上半は広く聞く形状の溝である。下底幅は50～70cm程である。10世紀後半期のSJ49を切っており、また埋土下部にAs-Bの二次堆積が認められることから、12世紀代頃に掘られたものと判断される。

(8) 北辺築垣

寺域北辺を確認するため、北辺西部に40-11トレンチを設定して調査を行ったが、地表下10cmにも満たない深さで基盤の黄褐色土(VII層)となり、築垣等の痕跡は全く確認できなかった。確認面のレベルは129.1m程である。

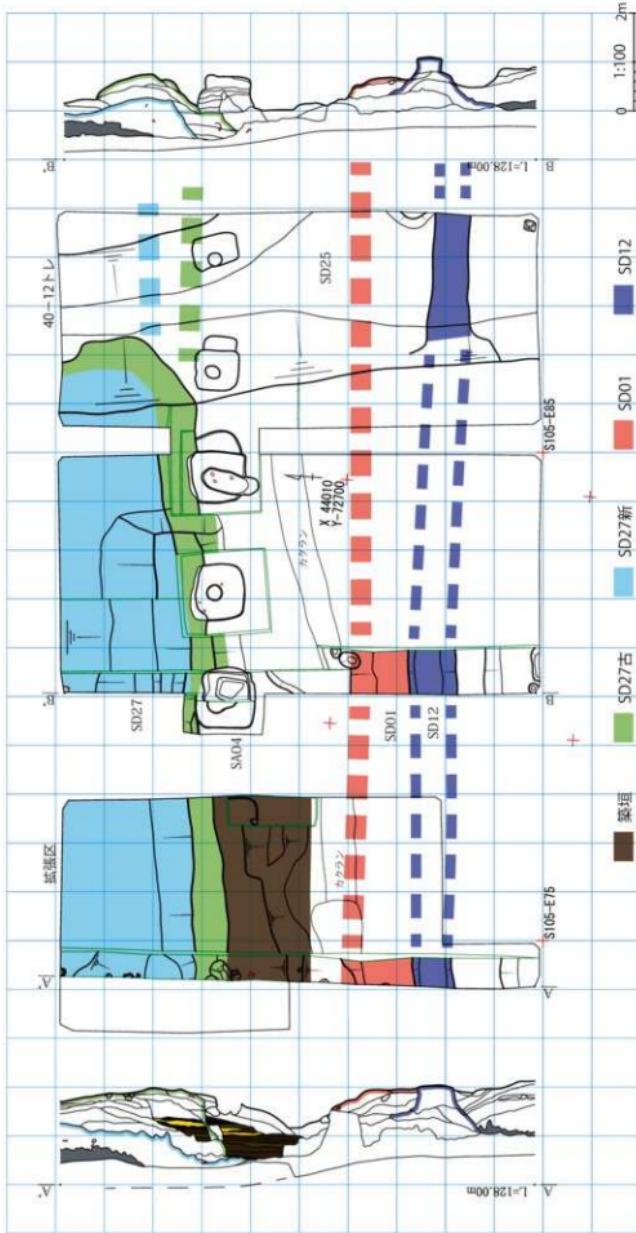
(9) その他の遺構

36-3トレンチ南部で、南北幅5.2mを測る大規模な土坑(SK118)が検出された。北縁がグリッドラインに沿って、ほぼ直線状に掘り込まれている。10世紀後半期のSJ49に切られることから、この頃には完全に埋没していたことが分かる。トレンチ調査のため東西規模は不明だが、西方の40-12トレンチや抵張区の西壁際で調査したサブトレンチ南端に、北縁が直線状に掘り込まれたSK118に似た形態の落ち込みが確認できる。仮に、これらがつながっているとすれば、築垣を造成するための土採り穴の可能性も考えられる。

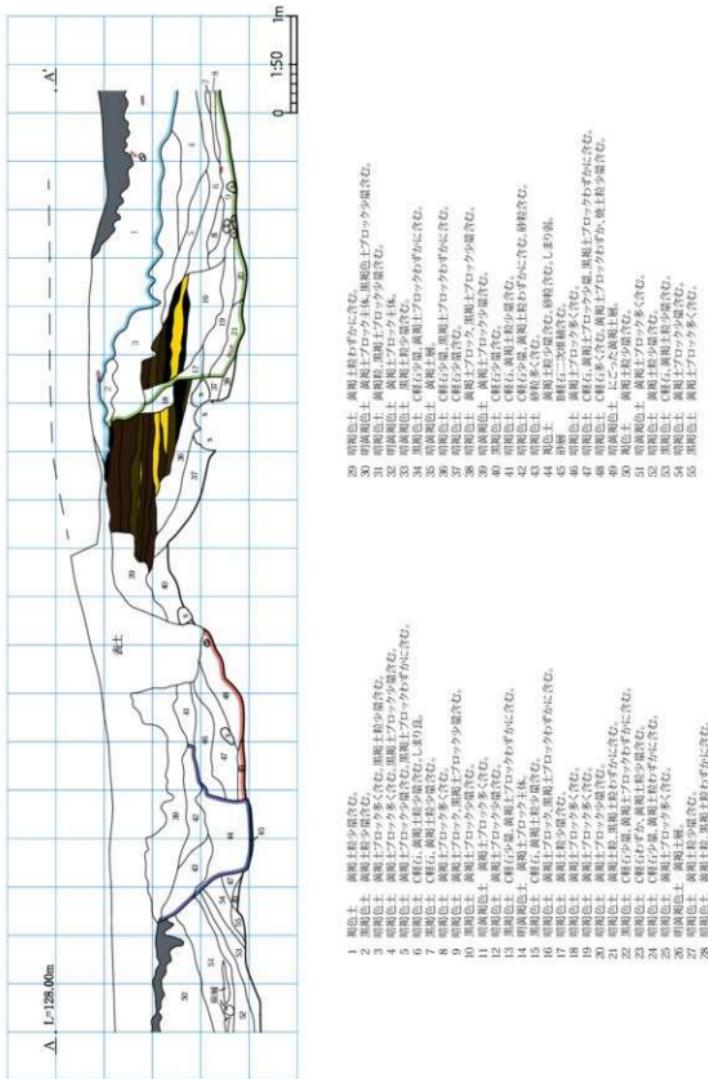
これ以外には、36-3トレンチにおいて10世紀代以降の竪穴建物や土坑、東辺付近の36-2トレンチでも廃棄坑のような土坑が検出されている。

(10) 所見

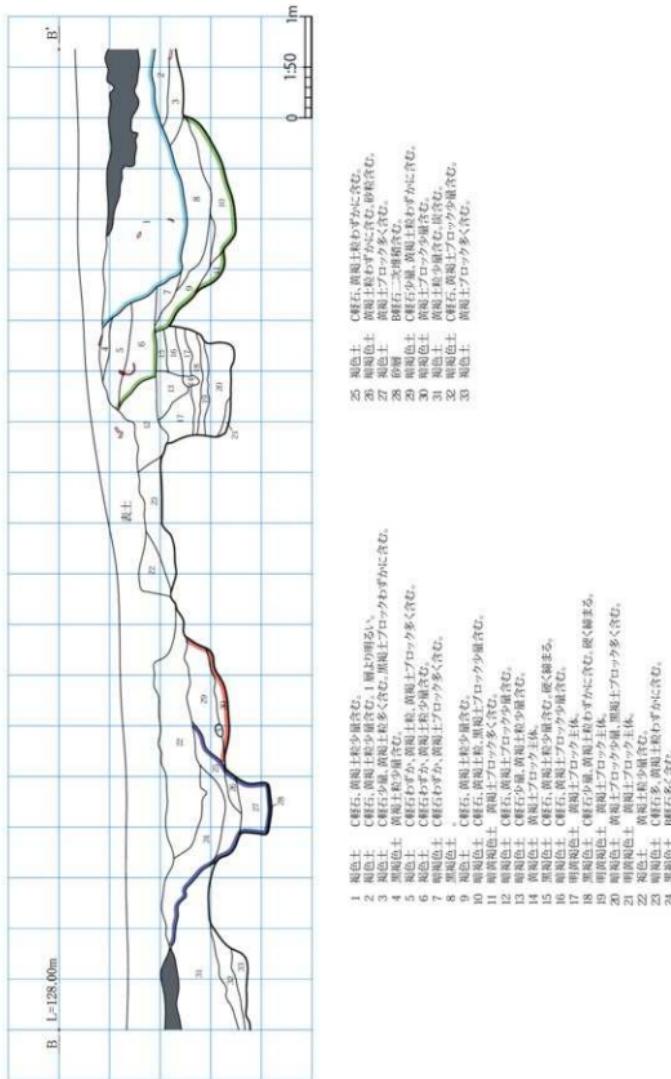
南辺東側は、掘立柱壙→築垣→土壁+大溝(SD27)と変遷したことが想定される。また、SD27を切る竪穴建物の存在から、10世紀代には寺域を画す構造物はすべて無くなっていたと考えられる。東辺築垣については、SD28の存在から現道の位置にあつた可能性が高い。



第166圖 南邊棗垣平面・斷面圖(1)

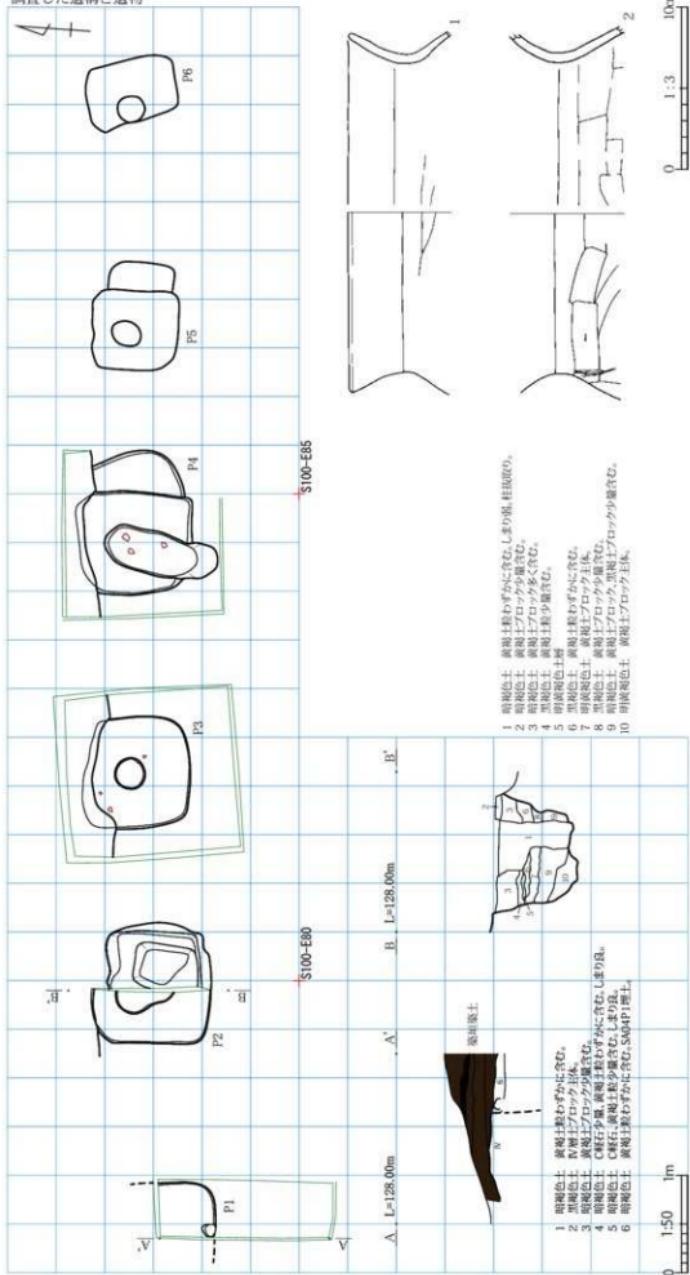


第167図 南邊堀田断面図(1)

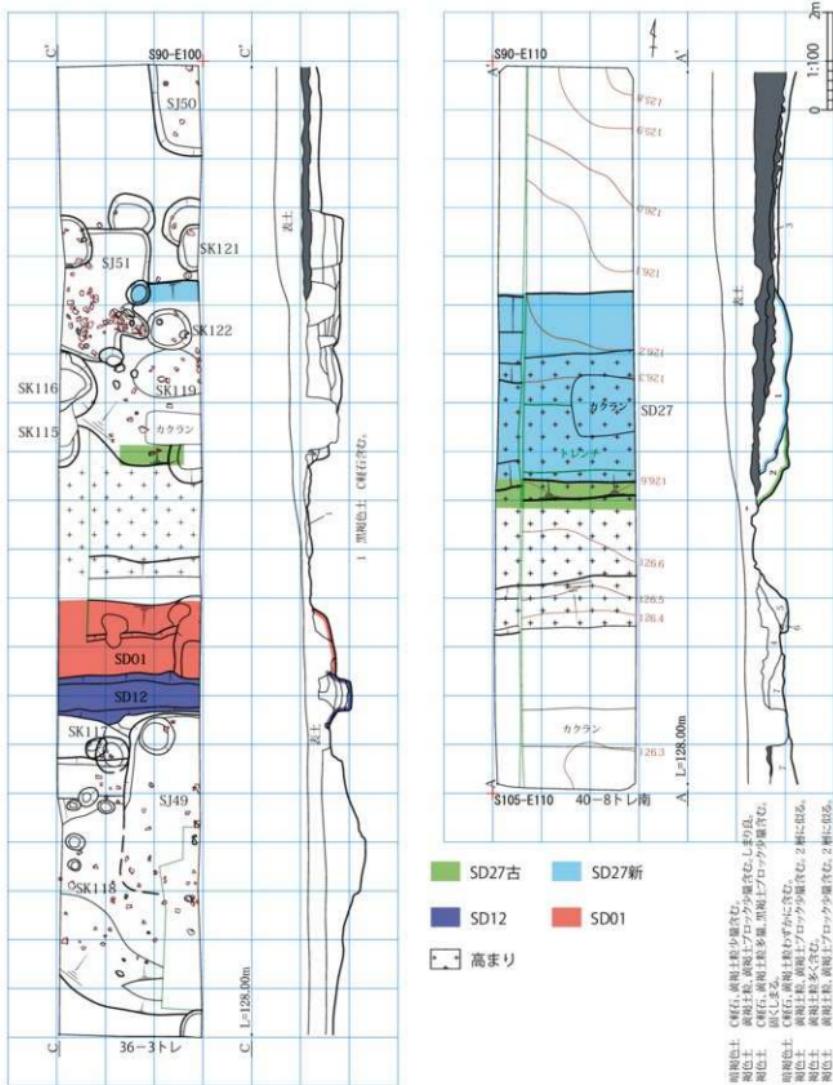


第168図 南梁塚断面図(2)

V 調査した遺構と遺物

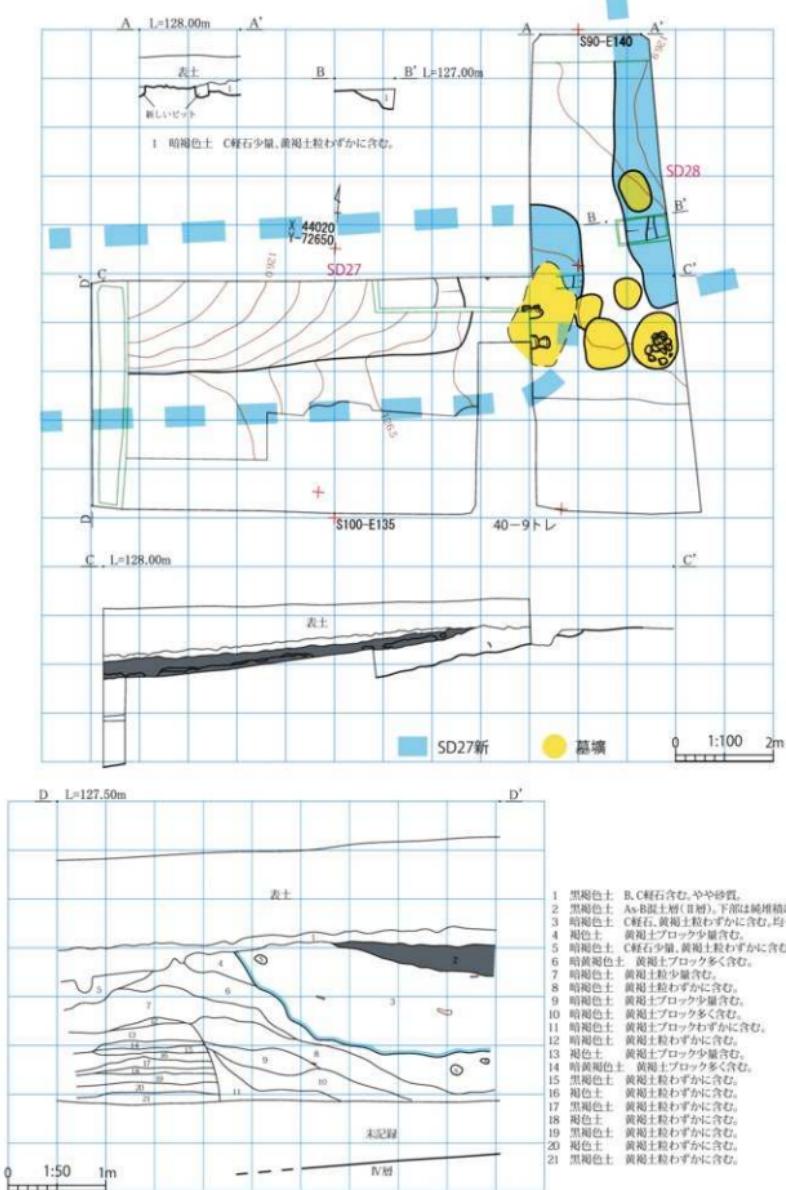


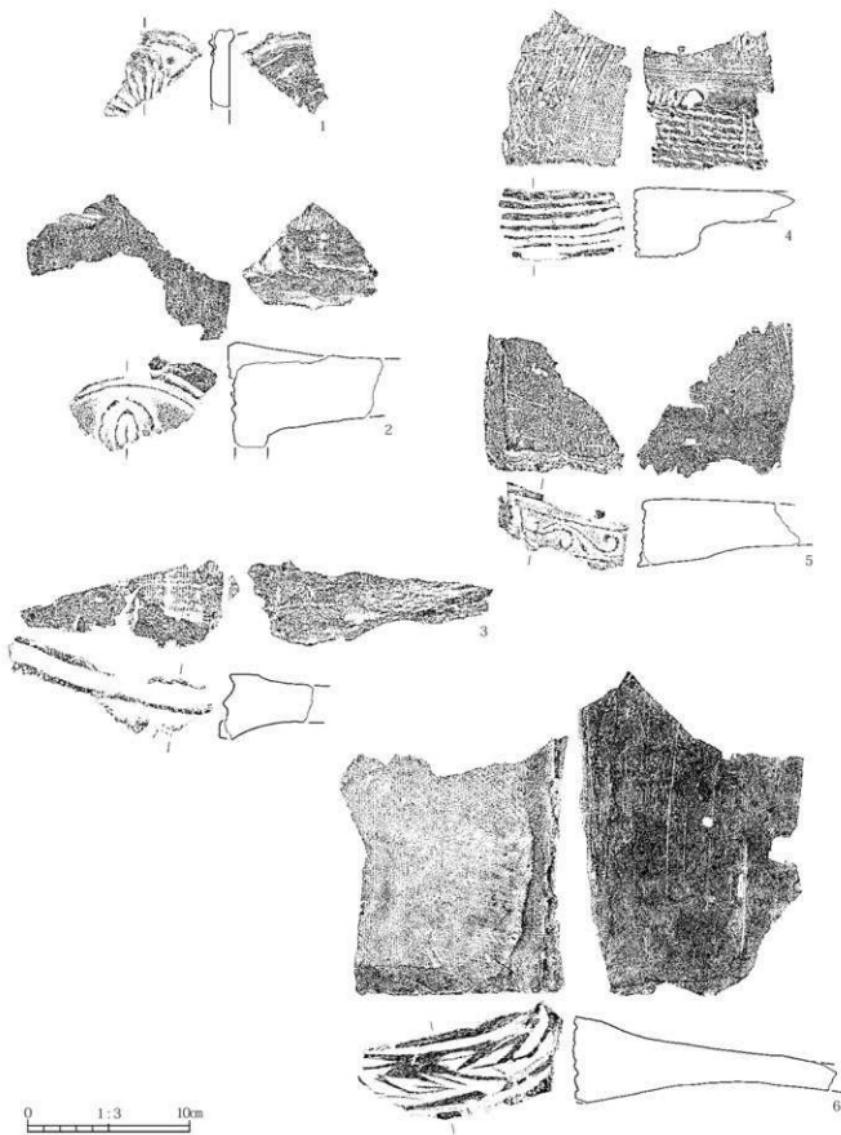
第169図 S.A.O 4 平面・断面図及び出土遺物



第170図 南辺築垣平面・断面図(2)

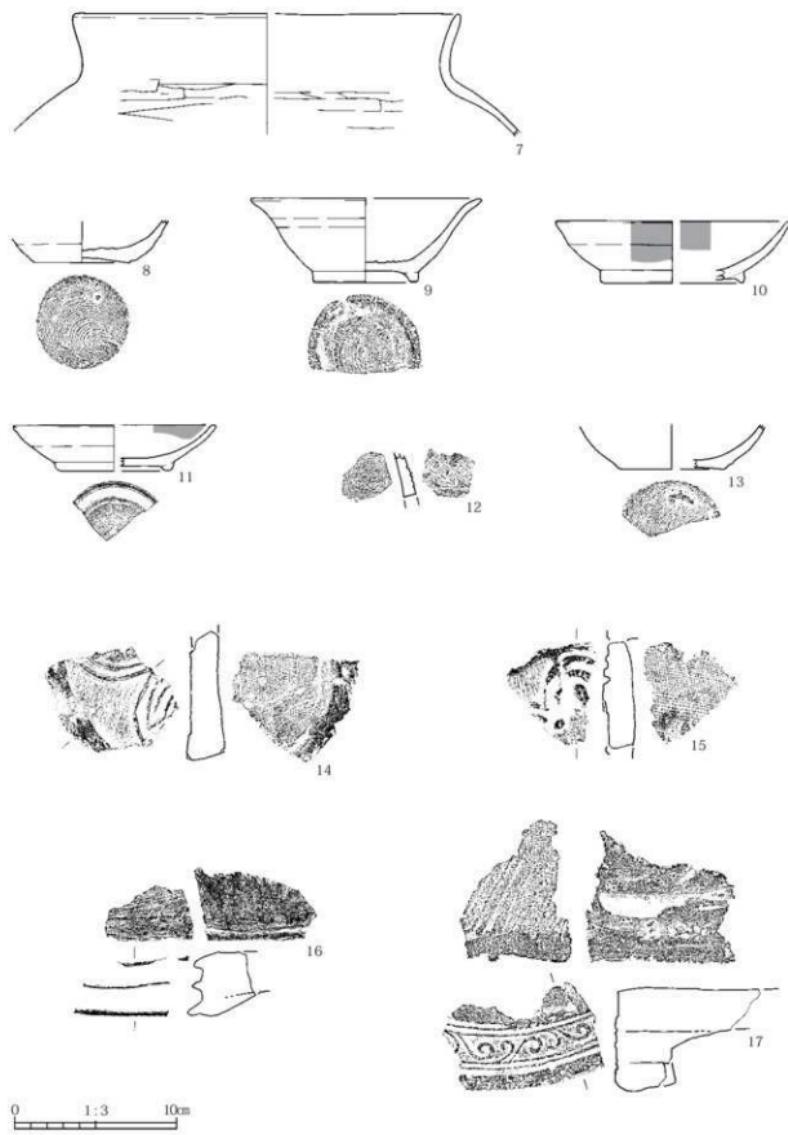
V 調査した遺構と遺物



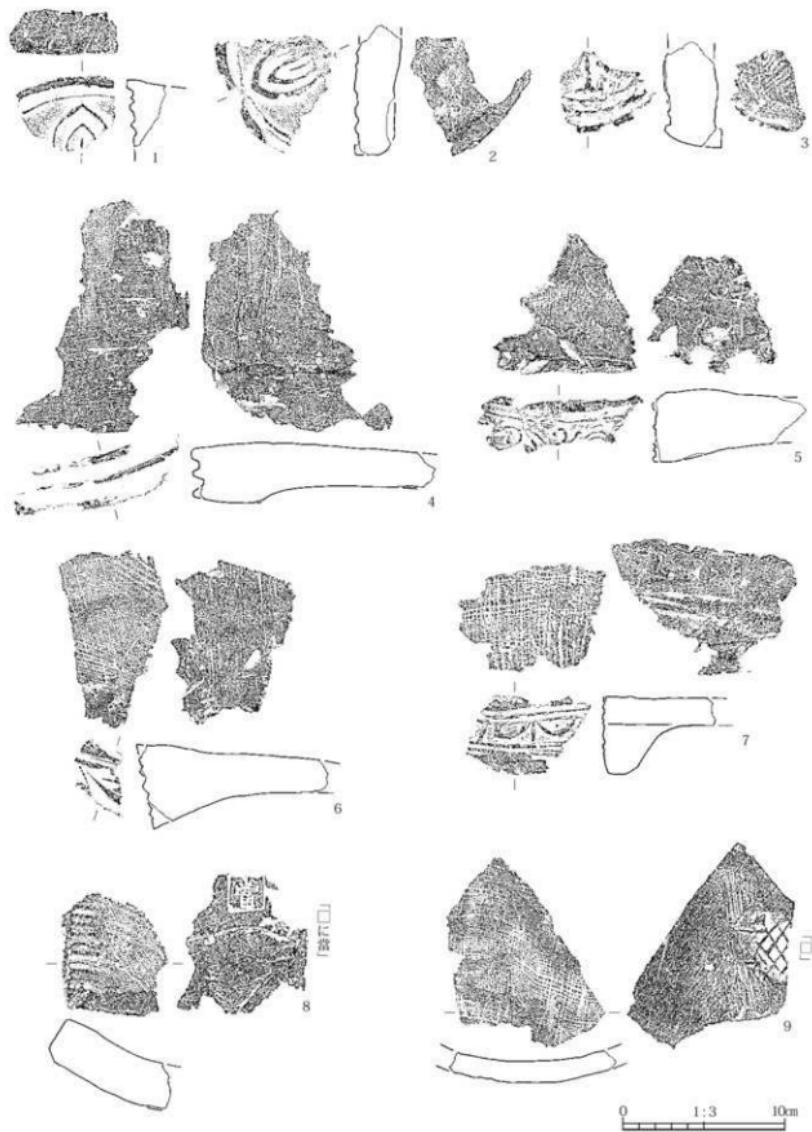


第172図 SD 27出土遺物(1)

V 調査した遺構と遺物

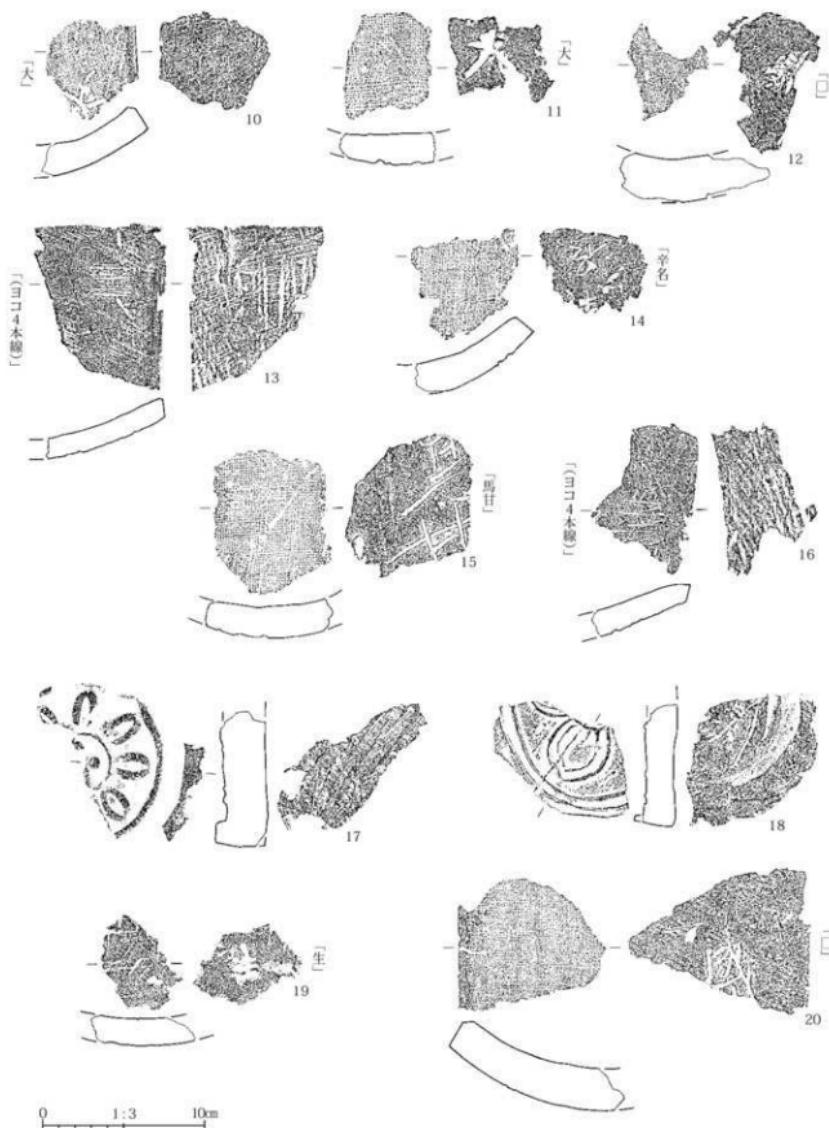


第173図 SD 27(2) · 28 · 01 · 12出土遺物

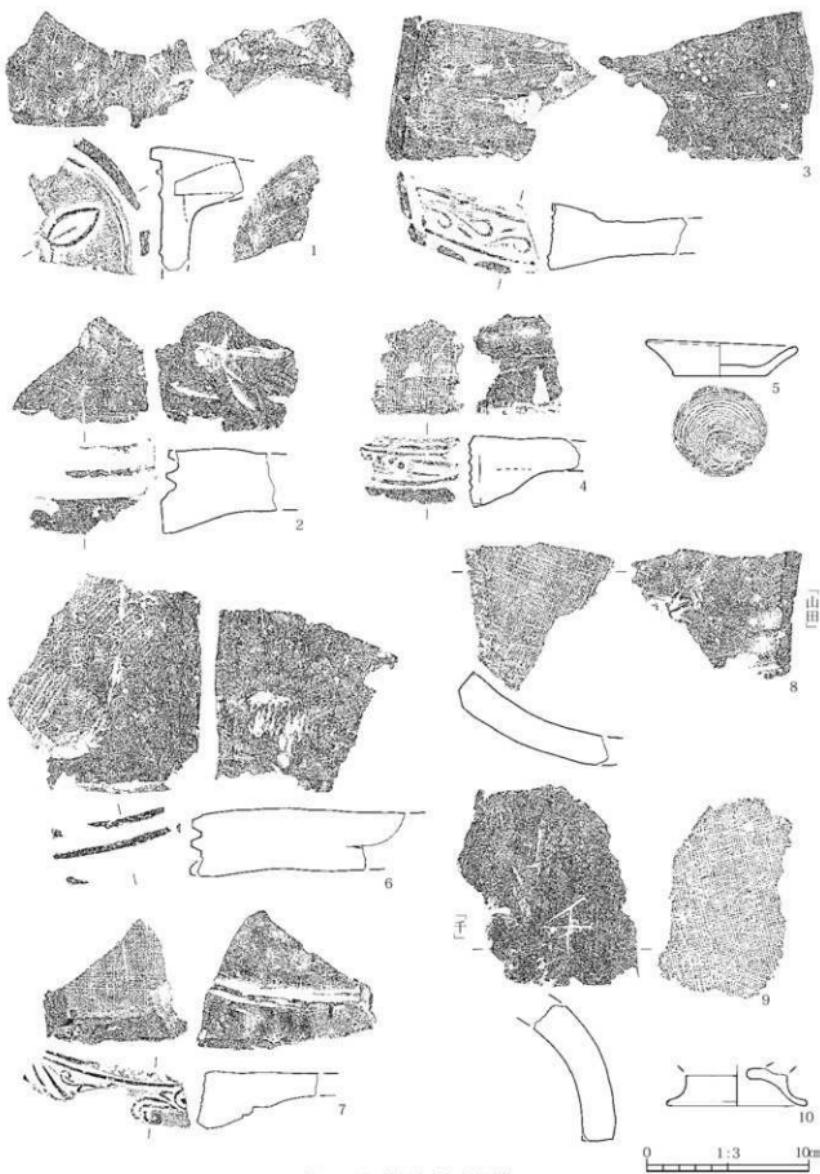


第174図 南辺築垣地区表土出土遺物(1) (40-12トレンチ)

V 調査した遺構と遺物

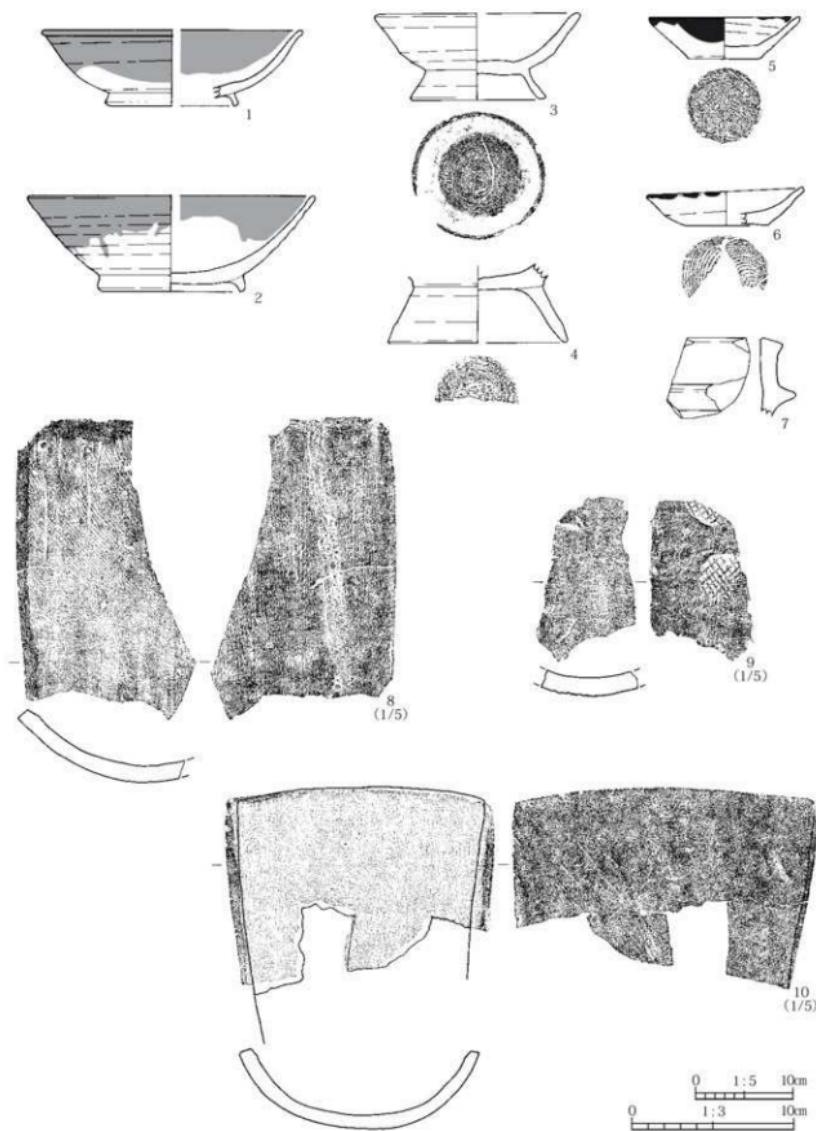


第175図 南辺塚地区表土出土遺物(2) (10~16 40-12, 17~20 40-8 南)

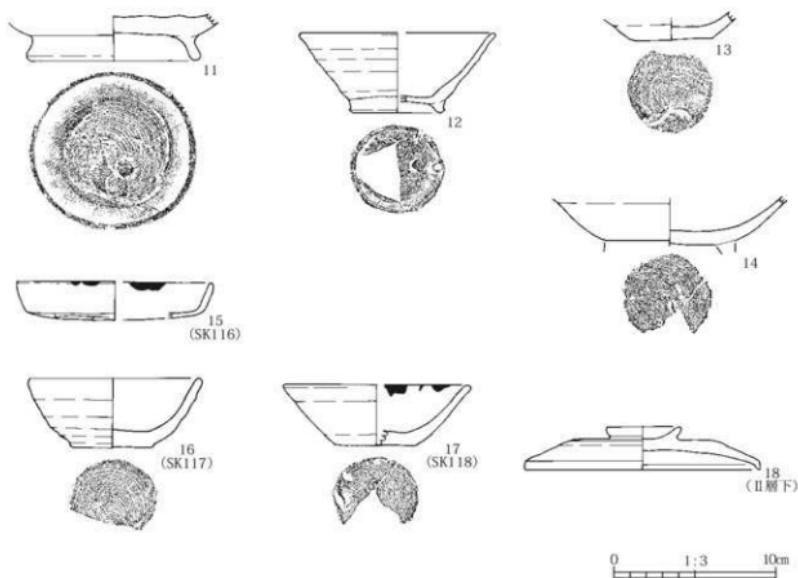


第176図 築垣南東角出土遺物

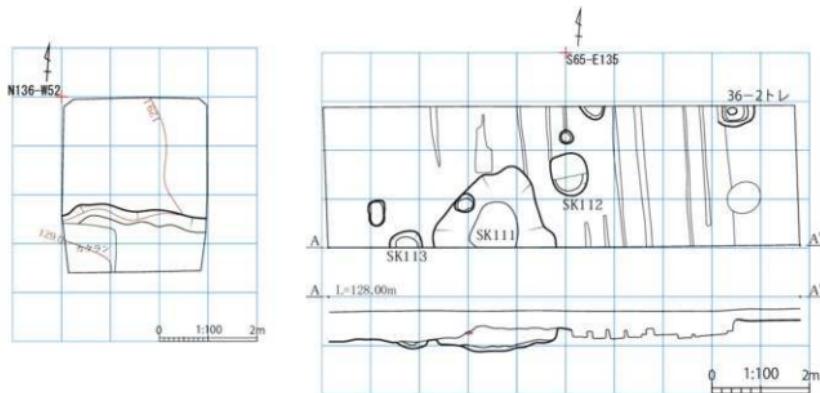
V 調査した遺構と遺物



第177図 36-3 トレンチ竪穴建物出土遺物(1~4 SJ49、5~7 SJ50、8~10 SJ51)



第178図 36-3 トレンチ堅穴建物・土坑ほか出土遺物(11~14 SJ51)



第179図 寺城北辺・東辺部 平面・断面図

11 寺域南東部

調査の経過

寺域南東部については、第1期調査時に未買収地であったため、調査がなされていなかった。そのため、平成24年度に東西方向のトレンチを設定して建物の有無を確認することとした。しかし、中央部に36-5トレンチとして部分的な掘り下げを行ったところ、地表下1m程の深さでAs-B混土層(II層)となり、建物の存在がほぼ見込めないことや期間的な制約もあり、それ以上の調査は行わなかつた。

平成28年度に再度、南東部の状況を確認するため40-8、13トレンチを設定して十字状に調査を行った計画であったが、やはりII層の堆積レベルが深く浅い谷地形となることが想定され、建物の存在する可能性が低いと判断されたことから、40-8トレンチS56以南の調査は取りやめとした。東西方向の40-13トレンチについても谷地形へと落ち込む状況を確認したところで調査を中断した。調査終盤、II層下の状況を確認するため、40-8トレンチ西壁際に2か所のサブトレンチを設定して掘り下げを行ったところ、地山に達するまでに2mもの深さがあることが確認された。40-13トレンチを中断せずに掘り抜き、東西方向に地山面を検出していれば谷地形の状況がよくとらえられたと考えるが、調査終盤であったためそれ以上の掘削を行うことはできなかつた。

調査の概要（第180～182図、PL.34）

(1)南北トレンチ(40-8北トレンチ)

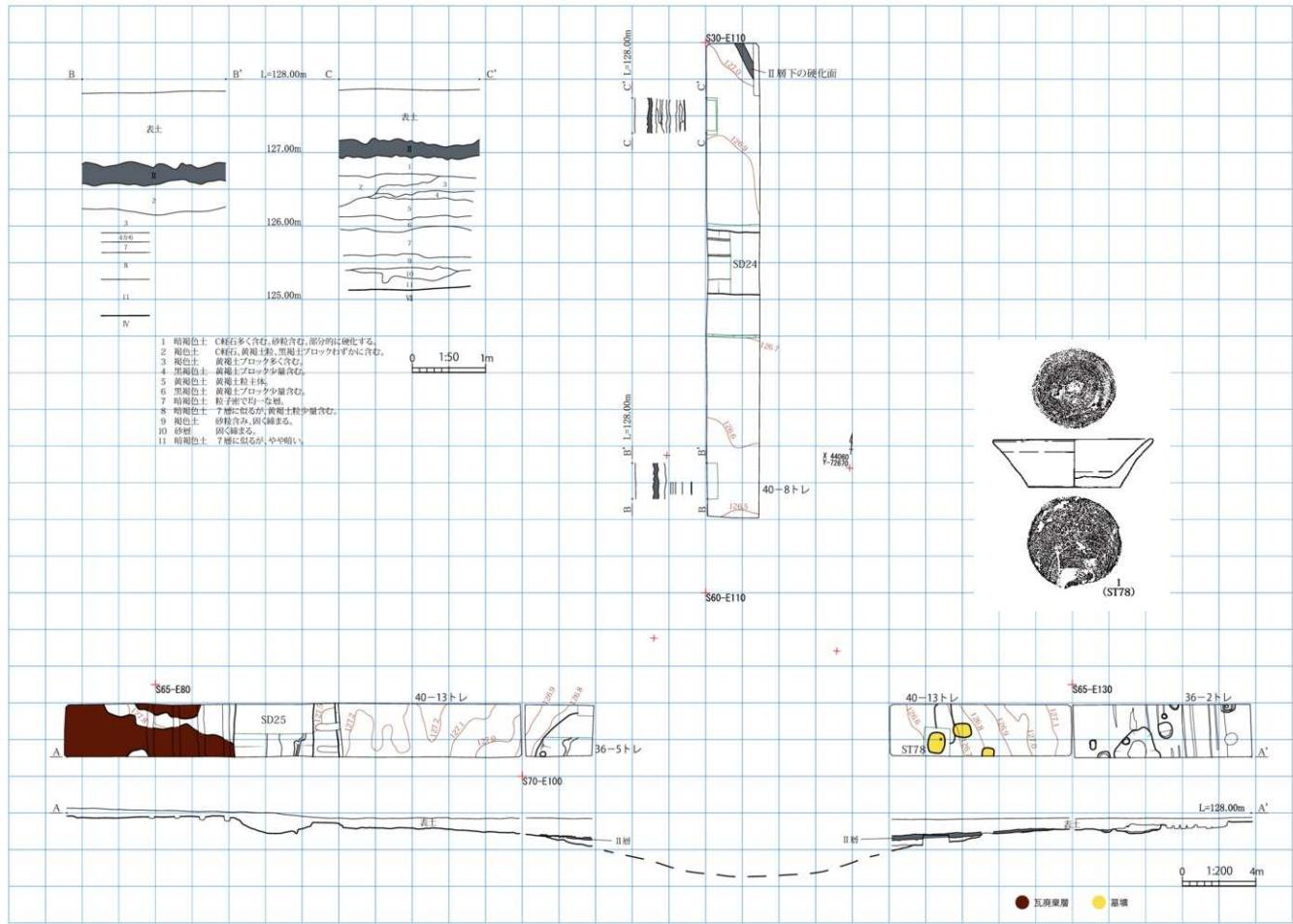
E110～113の東西幅3mで、S30～56まで南北長26mのトレンチ調査を行つた。トレンチ北端部では地表下70cm程でII層となり、これを除去した高さは127.0m程である。南端部では地表下1m程でII層となり、これを除去した高さは126.5m程である。II層下の確認面では特に遺構は検出されなかつたが、北東側で硬化面を検出した。幅50cm程、走向は北西～南東で、谷地形に沿つていると考えられる。国分寺当時の通路の可能性がある。ま

た、中央部でII層を掘り込む東西方向の溝(SD24)を検出した。

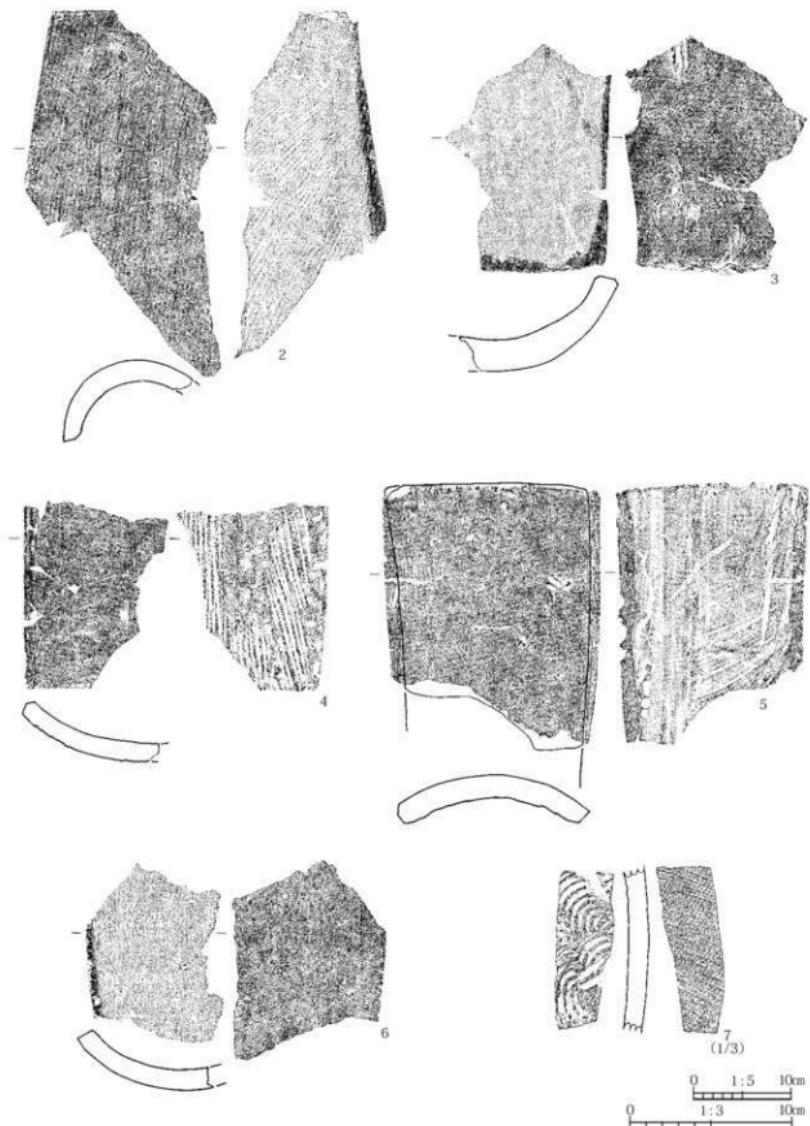
II層下の状況は、S30でII層下1.8mで基盤層の黄褐色土(VII層)、S50で同じく1.8mでAs-C混黒褐色土(IV層)となることが確認された。S30でのVII層上面レベルは125.1m程、S50でのIV層上面レベルは124.8m程を測り、現地表下3m程の深さとなる。II層下は、10cm～50cm程の単位で人為的に埋められているようあり、下層からも瓦が出土する。このことから、創建以前には3m程の深さのある谷地であったのを、国分寺造営に際して2m近く埋めて緩やかな谷地形に造成したと考えられる。

(2)東西トレンチ(36-2, 5, 40-13トレンチ)

36-4トレンチの東延長上でE75～104、16mの間隔をあけてE120～140のトレンチ調査を行つた。延べ49mの長さとなる。西部では地山のIV層を掘り込む、36-4トレンチから続く瓦廐層が続いていた。東端部は地表下20cm程で基盤層の黄褐色土(VII層)となる。東端部でのVII層上面レベルは、127.5m程である。II層はE101～129の範囲で確認され、幅30m程の谷地であったようである。国分寺に関する遺構は検出されなかつたが、東部でII層を掘り込む墓壙が検出された。そのうちの1つ、ST78から15世紀前半期の完形の皿が出土した(第180図1)。この墓壙の検出により、II層の形成年代がAs-B低下(12世紀初頭)以降、15世紀前半以前であることが確認された。また、西部中央付近で中世以降と考えられる南北方向の溝(SD25)を検出した。

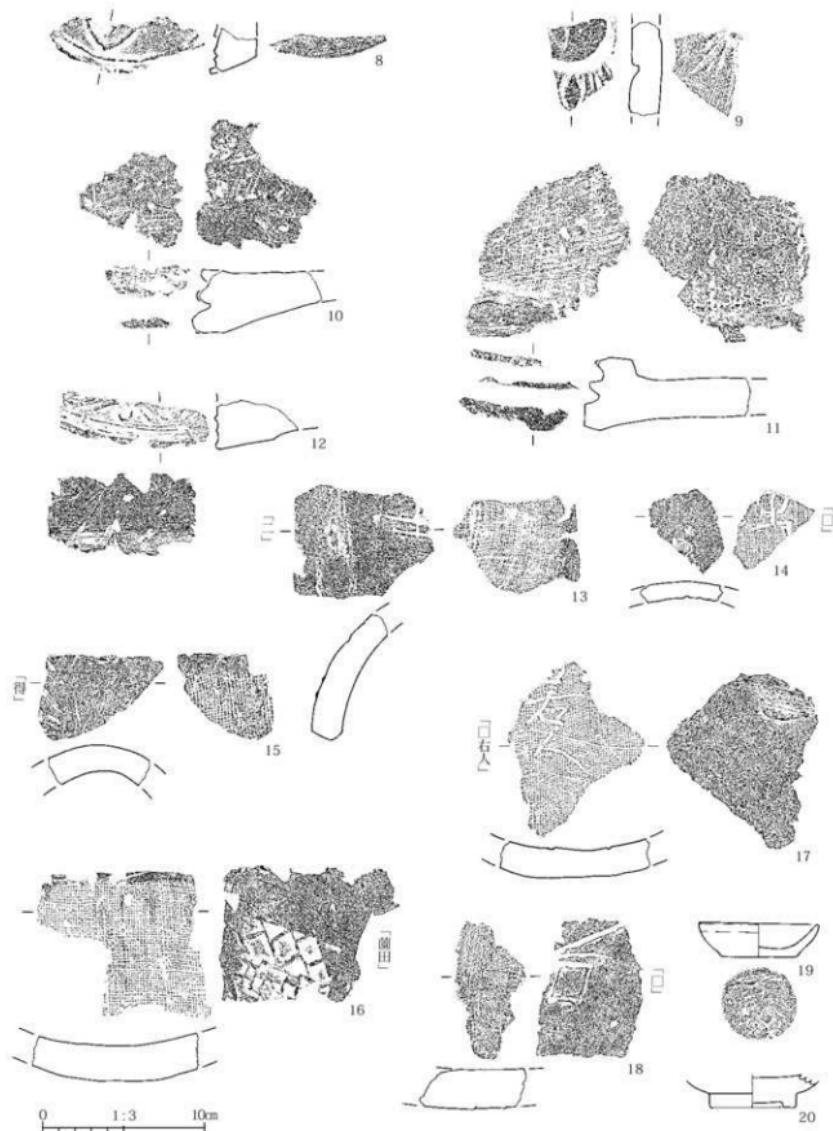


第180図 寺域南東部平面・断面図及び出土遺物



第181図 寺域南東部出土遺物(2) (SK111)

V 調査した遺構と遺物



第182図 寺域南東部出土遺物(3)(表土)

12 寺域北東部

これまでの調査・研究

寺域北東部は、東大門と推定築垣北東角間の北半、グリッドでいうとN75あたりを境として、北は中世以降の土探しや流水によって一段低い状況になっている。N75以南は比較的平坦で、現標高も129.0 mに近い高さを保っている。

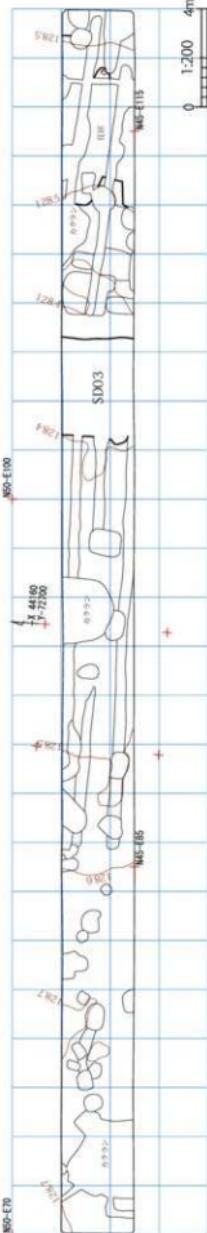
第1期調査では、北半の低い地区の北東角に昭和62年度第33次として、南半の高い平坦部にN60ラインに沿って13トレンチ、講堂と東大門を結ぶラインに5トレンチの2本のトレンチを設定して調査を行っているが、それぞれ建物の痕跡は確認されていない。

調査の経過

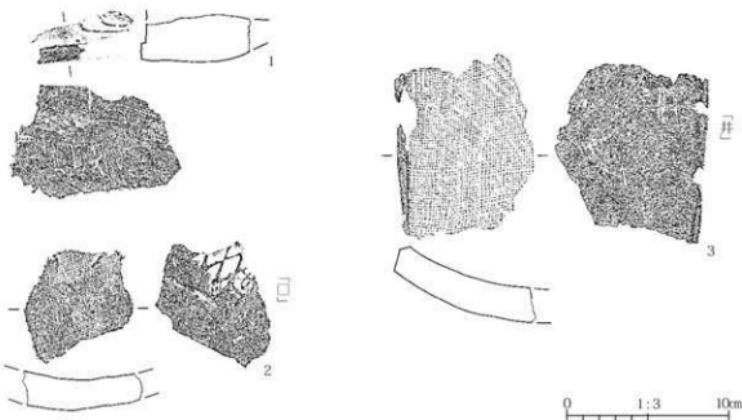
平成26年度調査で本来の金堂が発見されたことにより、それまでの金堂は講堂である可能性が高くなかった。そこで、講堂の北東側に当たる地区に、掘立柱建物で構成されるような管理・運営施設が存在する可能性を想定し、第1期調査で建物の痕跡は確認されていなかったが再確認のため、5トレンチと13トレンチのほぼ中間に40-6トレンチを設定して調査を行った。北半部の低い地区については遺構が検出される可能性は低いと判断し、対象外とした。

調査の概要（第183、184図 PL.35）

調査を行ったところ、地表下20cm程度基盤層の黄褐色土（VII層）となったが、国分寺に関する建物の痕跡は見出せなかった。確認面のレベルは128.5～128.7m程度である。それほど削平は受けおらず、確認面レベルが高いことから掘立柱建物があれば間違いなく検出できる高さと考えられるが、柱穴は確認できなかった。40-6トレンチを含め、第1期調査における2本のトレンチでも全く建物の痕跡が確認できないことから、講堂と東大門を結ぶラインからN75あたりまでの地区には、当初から建物は存在しなかったと判断せざるを得ない。



第183図 寺域北東部平面図



第184図 寺域北東部出土遺物

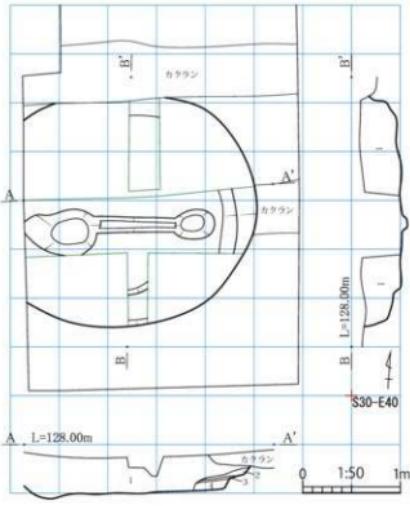
13 その他の遺構

(1) 梵鍾铸造土坑(第185、186図、PL.35)

38-6 トレンチ南端、S27 ~ 29.3-E36.5 ~ 39 の位置で梵鍾铸造土坑を検出した。確認面は基盤層の黄褐色土(VII層)で、127.9 m程の高さである。全掘は行わず、東西・南北の十字状のトレンチにより調査を行った。

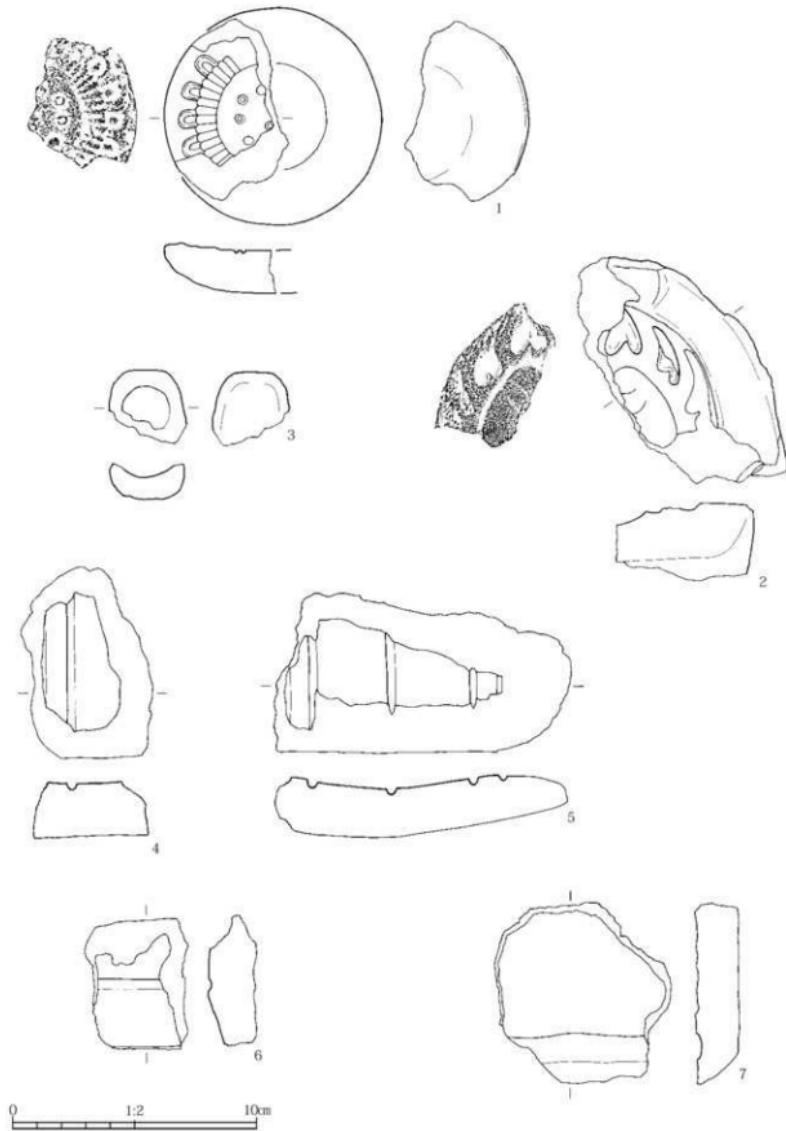
直径 2.5 m 程の円形を呈し、確認した深さは 40 cm 程を測る。床面はほぼ平坦で、中央からやや南に寄った位置に掛木を据えたと考えられる東西方向の溝が 1 条検出された。溝は幅 16 ~ 17 cm 程で、両端にはビットが据られている。ビットを含めた長さは 2 m 程である。埋土中からは少量の瓦片とともに多量の鋳型片が出土している。また、大量の粘土塊や炭化物が含まれていた。鋳型片には撞座(第186図1)や龍頭(同図2)の部位も出土した。なお、1, 2 の拓本は、鋳型を 3 D 計測して作成した雄型レプリカを探査したものである。

出土炭化材による放射性炭素年代測定を実施したところ、13世紀末~14世紀初めのデータが得られ、その頃の操業によるものと考えられる(VI章参照)。



- 1 黄褐色土 黄褐色土粒・ブロック、灰白色粘土塊多く含む。
- 2 にふい黄褐 砂質の鉛削土土体。
- 3 黒褐色土 黄褐色土粒少量含む。
- 4 明度褐色土 鉛削土土体。

第185図 梵鍾铸造土坑平面・断面図



第186図 梵鐘铸造土坑出土遺物

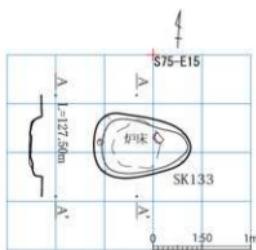
V 調査した遺構と遺物

(2) 小鍛冶遺構(第 187 図、PL.35)

38-1 トレンチ、中門南西角の位置で小鍛冶遺構を検出した。東西方向に長軸をもつ卵形の楕円形状を呈し、長径 99cm・短径 66cm・深さ 11cm を測る。埋土中からは鍛造剝片や塊形滓等が多量に出土した。瓦廢棄層を掘り込んで構築していることから、それ以降の所産であり中世頃かと考えられる。

(3) 中世以降の溝(第 188、189 図、PL.35, 36)

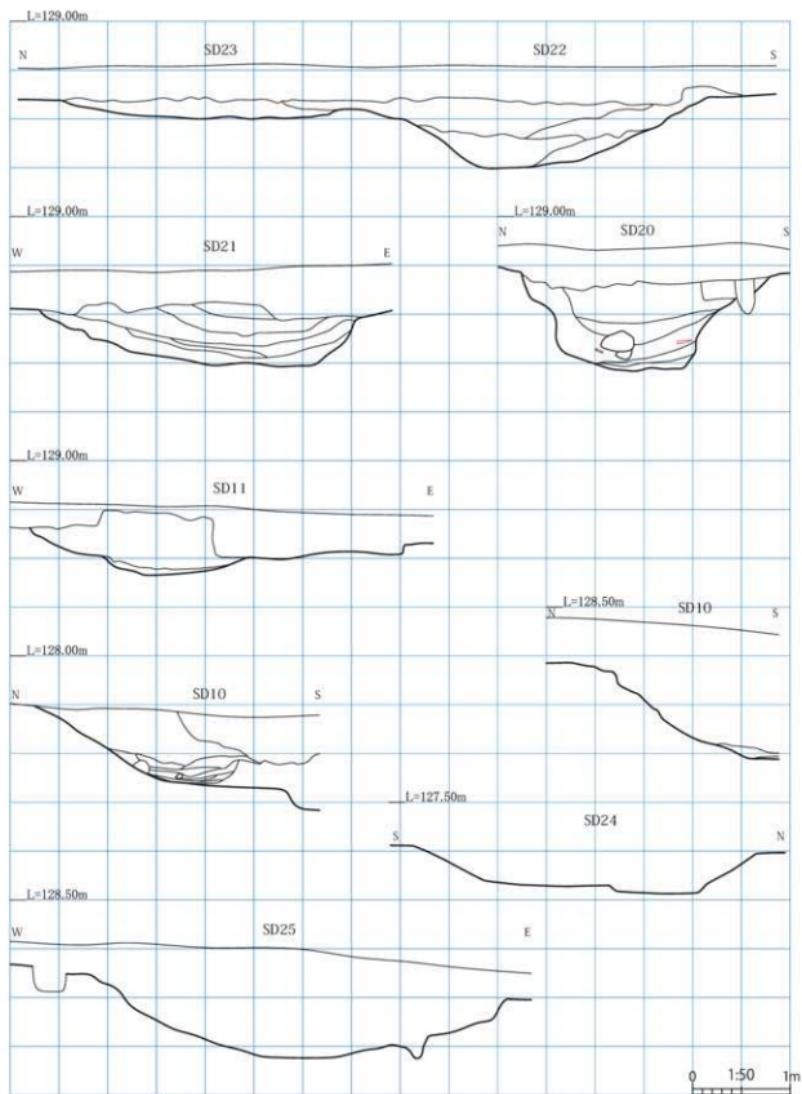
史跡地のほぼ全域にわたり、中世以降の溝が検出された。走向は概ね東西ないし南北に掘られ、大きく振れるものはない。規模は第 189 図に掲載したとおりである。配置の状況から区画のための溝のように見えるが、詳細は明らかでない。



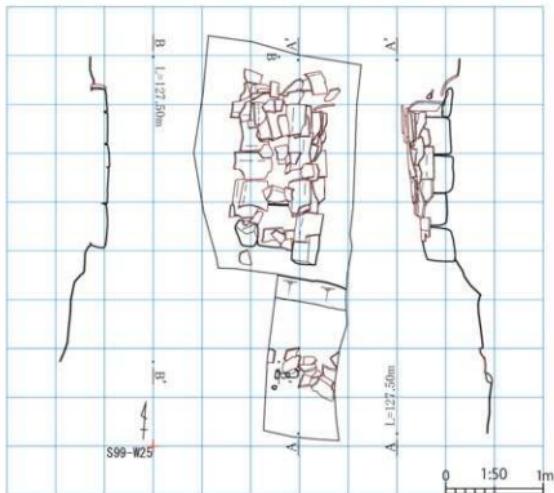
第 187 図 小鍛冶遺構平面・断面図



第 188 図 中世以降の溝全体図



第189図 中世以降の溝断面図



第190図 南辺築垣下の暗渠平面・断面図

(4) 南辺築垣下の暗渠(第190図)

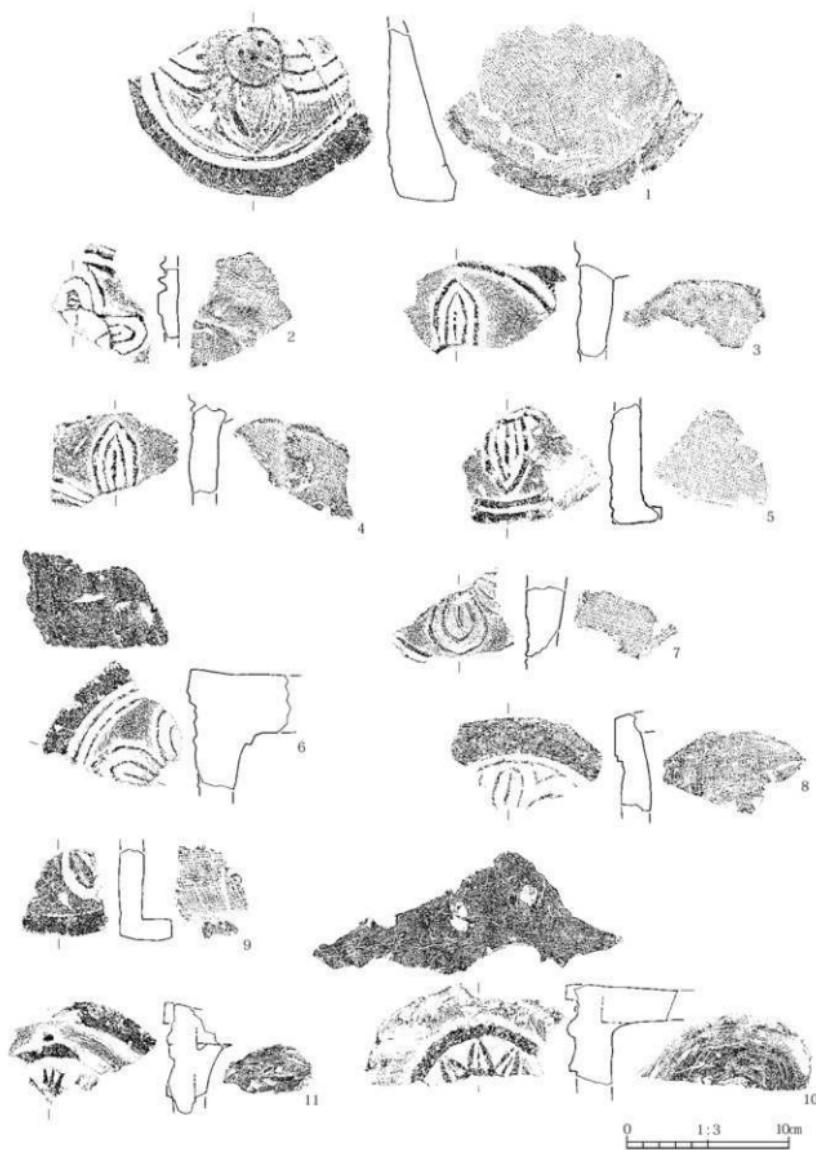
第1期調査時の原図等を再検討する作業のなかで、南辺築垣下の暗渠の実測図を確認したので掲載する。この暗渠は、平成2年度に復元工事が行われた南辺築垣西側の事前調査で検出されたもので、現地では復元されているが未報告であった。

位置は中心がS96-W23.5である。角閃石安山岩の切石を底面に敷くとともに側面に立てて並べ、側石の上に凸面を上にした平瓦を積み上げて高くし、瓦で蓋をした状況を呈す。敷石5個、東側石4個が確認されている。西側は現状保存として、上面のみの調査を行ったようで側石の記録はない。南端の敷石は42×42cm、厚さ15cmを測る。積み上げた瓦は、東側は長辺を南北方向にして4枚並べ、最大8枚積み上げている。西側は南端が南北に長辺をとるが、それより北は長辺を東西方向にして並べている。現状で南北長1.7m程度である。東側の南端側石は、敷石南端より12cm南にせり出している。上面の南端から20cmの位置に瓦1枚分の厚さの段差を作り出し、平瓦をはめ込んでいる。これらの状況から、南端は

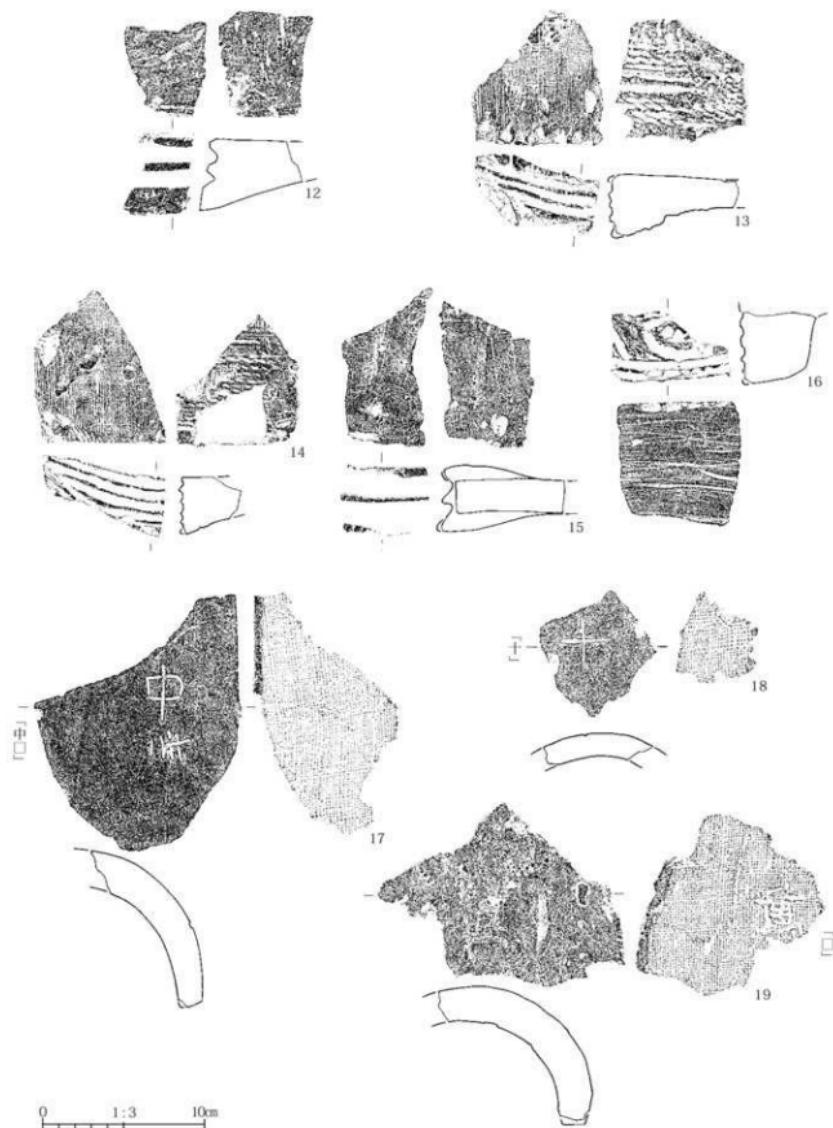
造営当初のままと判断してよいと思われる。西側石南端は玉石に差し替えられている。北端については、端部が確認できず瓦が散乱していること、全長が短いことから、壊されているものと判断される。内寸は幅、高さともに40cm程度と見られる。敷石上面レベルは127.05m程、方位輪はN $0^{\circ} 27'E$ である。内部の充填土からは流水の痕跡は確認できず、人为的に埋められたようである。

(5) 近現代廃棄坑(第28図、第191～193図)

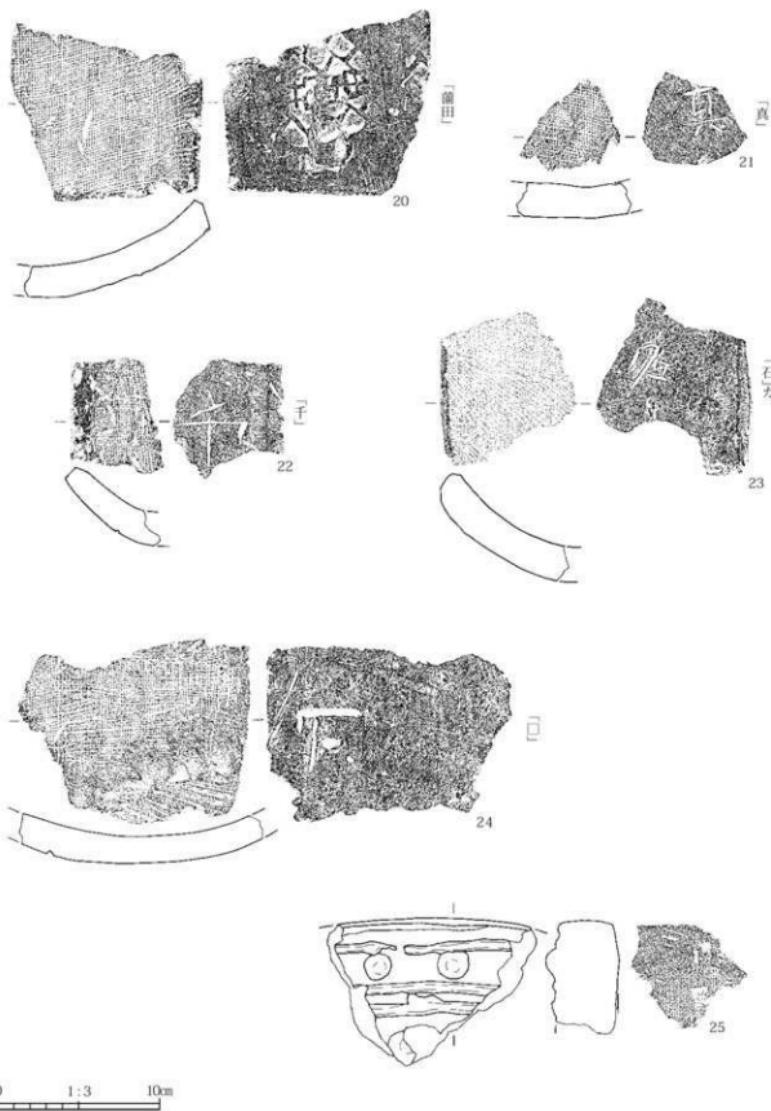
38-7トレンチ北端部で、瓦を大量に廃棄した穴が確認された。瓦とともに近現代の陶磁器が混じることから、昭和年間に廃棄されたものと考えられる。金堂北西角と推定される位置のすぐ外側に当たり、金堂に葺かれていた瓦がまとめて廃棄された可能性も考えられるが、逆に疑問視される面もあるため、参考程度に掲載した。



第191図 近現代廐棄坑出土遺物(1)



第192図 近現代廐棄坑出土遺物(2)



第193図 近現代廐棄坑出土遺物(3)

V 調査した遺構と遺物

14 遺物観察表

金堂地区(第30図、PL.37)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	須恵器 壺	38-6 S55E37	口縁部小 破片 版築土中	口径(14.1)	織砂粒	還元焰／灰	ロクロ整形(回転方向不明)。	8世紀
2	軒丸瓦 J002	38-7 北部擾乱	花卉小破 片		砂粒、白色粒子	還元焰。断面一部 酸化焰気味／表面灰 (7.5Y5/1)断面中心 部灰(10Y5/1)その 周り薄くにぶい赤褐色 (5YR5/4)	瓦当裏面粗いナデ。	
3	軒平瓦 Q001	39-4 S35E25	左半部 2/5 表土	瓦当幅 4.1	砂粒、白色粒子	還元焰。内部は酸化 焰／表面青灰(5B5/1) 内面橙青(5R6/6) 外面橙(5R6/6)	顎は三角形。門面ヨコナデ。広端、側端面取 のケズリ。凸面タテナデ。顎部はヨコナデ、 広端ヨコケズリ。	
4	軒平瓦 NR306	38-7 S20E12	中央部小 破片 表土	瓦当幅 4.3 顎面長 1.2	砂粒、小礫(Φ 10mm)、赤 粒子。色の異なる 粘土が細かい 層状をなす部分 がある	還元焰。内部は 酸化焰／表面灰白 (7.5Y8/1)断面に赤 い斑(5YR7/4)	狭い顎面をもつ曲線顎。顎の接合は見えない。 凹面タテナデ後ヨコナデ。凸面タテケズリ・ ナデ、顎ヨコナデ。	
5	平瓦	38-6 S25E37	側端部小 破片 表土	厚さ 1.3	砂粒、白色粒子 やや多	還元焰／灰(5Y5/1)	門面系切痕、布目、側端面取のタテケズリ、 凸面ヨコナデ。	凸面に押印 「勢」印顎。文 字はかなり摩 滅して不明瞭
6	軒丸瓦 新泊種 (A系)	39-4 SD10 埋土	左半部 1/4		砂粒、織砂粒や や多	還元焰／灰白 (2.5Y8/1)	縦置型か。瓦当裏面下半に突帯があるので一 本作りか。長面裏面・丸瓦凹面回転方向ナデ。 凸面ヨコナデ。	4件だが蓮子 など不明
7	軒丸瓦 C001	39-4 SD10 埋土	中房～花 弁 1/4		砂粒、小礫(Φ 8mm以下)	還元焰。内部やや 酸化焰気味／表面灰 (10Y5/1)断面灰褐色 (7.5YR5/1)	縦置型。瓦当裏面無絞り布目。	
8	平瓦	39-4 SD10 埋土	広端左隅 小破片	厚さ 2.5	砂粒、白色粒子 やや多(Φ 7mm以下)やや 多	還元焰／灰(5Y5/1)	門面系切痕、布目、広端面取状のヨコケズリ。	凸面に押印。 ○内の文字は 摩滅。
9	須恵器 壺	39-4 小ピット	口～底 1/3	口径(12.6) 底径 6.0 高さ 4.0	織砂粒	還元焰／暗灰	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り無調整。	10世紀前半

中門・布掘り版築土(第33、34図、PL.37, 38)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	平瓦	38-1 S75E15 中門版築 土中	狹端左隅 1/6	厚さ 1.9	砂粒。白色粒子 目立つ。白色小 礫(Φ 5mm 以 下)	酸化焰気味／表面に ぶい斑(5YR6/4)断面 灰黒(2.5Y5/1)	門面タテ・ナメナデ、側端面取状のタテケ ズリ、凸面ヨコナデ後一部タテナデ。その後 格子叩き。	特徴的な格子 叩き目
2	平瓦	38-1 S75E15 中門版築 土中	右側 1/3	全長 37.7 厚さ 1.3	砂粒、白色粒子 多、やや粗、 白色小礫(Φ 10mm 以下)	還元焰／灰(N6/0)	桶巻作り。凹面模倣側板痕(幅 2.0cm)、布目 をタテナデで粗く消す。凸面タテ模叩き後ヨ コナデ。	厚さが全体に 薄く、古んで おり、調整も 粗いので雰囲 造りに見える
3	平瓦	38-1 S75E15 中門版築 土中	狹端右隅 1/6	厚さ 1.5	砂粒、白色粒子、 白色小礫(Φ 4 mm 以下)。部 分的に色の異なる 粘土が層状に入 る	還元焰／灰(10Y6/1)	一枚作り。凹面布目、ごく粗いナメナデ。 狹端はヨコ、側端はタテの幅の広いナデ。凸 面タテ・ナメナデ。	
4	平瓦	38-1 S75E15 中門版築 土中	広端右隅 1/6	厚さ 1.2～2.3	砂粒、白色粒子、 白色小礫(Φ 6 mm 以下)多。 粗い胎土	還元焰／灰(7.5Y6/1)	桶巻作り。凹面粘土板合わせ目あり。布目を タテナデで消す。広端、側端面取状のケズリ。 凸面ヨコナデ後粗いタテナデ。	
5	平瓦	38-1 S70E15 中門版築 土中	狹端左隅 1/6	厚さ 1.9	砂粒、径の大き な白色粒子(Φ 6mm 以下)。色 の異なる粘土が 纏かい編状に成 る部分がある	還元焰、硬質／灰 (N5/0)	一枚作り。凹面系切痕、布目。狹端は幅広く ヨコナデ、側端面取状のタテケズリ。凸面タ テ模叩き後ヨコナデ。	
6	平瓦	36-4 S66E25 中門版築 土中	側端部小 破片	厚さ 1.2	砂粒含むが比較 的緻密。黑色粒 子目立つ	還元焰／灰白 (5Y8/1)	門面布目、側端タテケズリ。側端面タテケズ リ。凸面密なナメナデ叩き。	
7	須恵器 壺	38-1 S70-E15 中門版築 土中	端部小破 片	口径(11.7)	織砂粒	やや酸化焰気味／灰 褐色	ロクロ整形(右回転か)。天井部外面回転ヘラ ケズリ。	7世紀後半
8	須恵器 壺か	36-4 S66E25 中門版築 土中	胴部破片		粗砂粒、白色粒 子	還元焰／灰	外面平行叩き。内面同心円状當て具痕。	8世紀
9	平瓦	38-1 S65E10 布掘り西 版築土中	狹端左隅 1/3	厚さ 2.1	砂粒。断面に微 少な穴が目立つ	還元焰／灰(10Y6/1)	桶巻作り。凹面模倣側板痕(幅 1.8～2.5cm)、 布の縫合せ痕、各切痕、布目。凸面密な 模叩き。方向を説いて全面たたく。	

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
10	平瓦	36-4 括1南 布振り東 版塗上中	端部小破 片	厚さ 2.5	砂粒、黒色の小 礫(φ 8mm 以 下)や多	還元焰/灰白 (5Y8/1)	桶作りか。門面布目、一部ごく粗い胎ナ デ、側板娘らしい段差あり(幅25mm)。縁端面 取のヨコケズリ、凸面ヨコナテ後タテ開き。	
11	平瓦	36-4 S65E30 布振り東 版塗上中	側端部破 片	厚さ 2.2	砂粒や多	やや酸化焰気味/浅 黄(2.5Y7/3)凸面の み灰(10Y5/1)	一枚作り、門面糸切痕、布目。側端面タテナ デ。凸面タテナデ。	
12	瓦塔の 相輪か	38-1 S65E10 布振り西 版塗上中	小破片		砂粒	還元焰/灰白 (7.5Y7/1)	外面タテヘラケズリ、つぼ状の部分は貼り付 け後ヨコナデ。内面布目。	
13	土師器 环	38-1 S70E10 布振り西 版塗上中	口~体部 破片	口径(12.6)	砂粒	良好 / にぶい相	内面~口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ち ヘラケズリ。	8世紀前半
14	土師器 环	38-1 S70E10 布振り西 版塗上中	口~体部 破片	口径(12.8)	砂粒	良好 / 粗	内面~口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ち ヘラケズリ。	8世紀中葉

中門及び周辺2層(第34 ~ 36図、PL.38 ~ 40)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 B102a	36-4 括1北 S65E25	右下部 1/4		砂粒。赤色粒子 目立つ	酸化気味/表面黒 色処理か、浅黄 (2.5Y7/3)~灰 (7.5Y4/1)	複型製。周縁上面・瓦当側面円周方向ケズリ、 表面無継り布目、下半はケズリで突帯はない。	周縁と、花文 周辺の隙縫と の間に手描きで 沈線を入れる。
2	軒丸瓦 B101	38-1 S70E10	左下部 1/2	中房径 3.9	砂粒	還元焰 / 灰(5Y6/1)	複型製。瓦当側面粗い円周方向ナデ。突帯上 面円周方向ケズリ。裏面無継り布目。	
3	軒平瓦 P0	38-1 S65E10	中央部小 破片		砂粒。白色粒子 目立つ。白色的 粘土が層状に入 る	還元焰。内部は酸 化焰気味 / 表面灰 (5Y4/1)断面にぶい 相(5Y6/4)中心部黄 灰(2.5Y4/1)	凹面剥離。凸面張剥離。丸瓦部タテ・ヨコナデ。 横(5Y8/2)	
4	軒平瓦 P001	38-1 S65E10	左半部 3/5	瓦当幅 4.5	砂粒	還元焰 / 灰白 (5Y8/2)	一枚作りか。途中に核をもつ複数個。門面糸 切痕、布目をナナメナナデ消す。瓦当端ヨコ ナデ、側端面取のタテケズリ、凸面ナナメ・ タテケズリ後頬と平瓦部の境をヨコナデ。後 い跡引き。	
5	平瓦	36-4 括1北 S65E25	側端部小 破片	厚さ 1.9	粗砂粒多。やや 粗い胎土	還元焰、内部酸 化焰気味 / 表面灰 (10Y5/1) 断面中心部にぶい相 (5Y8/4)	一枚作りか。門面布目、側端面取のタテケズリ、 側端面中心部にぶい相(5Y8/4)	凸面にヘラ書き「□□□」
6	平瓦か	36-4 括1北 S61E30	中央部小 破片	厚さ 1.9	砂粒	酸化焰 / 表面黒色 差異、黒斑(7.5Y3/1) 断面赤い灰 (2.5Y5/6)	凹面布目。凸面ナデ。	凸面にヘラ書き「△△△」
7	平瓦	36-4 括1北 S61E30	側端部小 破片	厚さ 1.8	粗砂粒多。粗い 胎土。	還元焰 / 灰(5Y6/1)	凹面布目、側端面取のタテケズリ。側端面タテケ ズリ。	凸面にヘラ書き「□」
8	平瓦	36-4 括1北 S65E30	端部中央 小破片	厚さ 2.1	砂粒。白色小礫 (φ 8mm 以下)	還元焰 / 表面黒色 差異、暗灰(3N/0) 断面灰白(5Y7/2)	一枚作りか。凹面布目。凸面糸切痕をタテナ デ消す。	凸面にヘラ書き「□」
9	平瓦か	36-4 括1北 S65E30	中央部小 破片	厚さ 1.9	粗砂粒多。やや 粗い胎土。白色 粒子目立つ	還元焰 / 暗青灰 (5BG4/1)~暗灰黄 (2.5Y5/2)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書き「□」
10	平瓦	38-1 S65E10	側端部小 破片	厚さ 2.2	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焰 / 暗灰(N3/0)	凹面布目。凸面ヨコナデ。	凸面にヘラ書き「△」、「△」の上にわざかな殘れがある
11	土師器 环	38-1 S70E10	口~体部 破片	口径(12.8)	砂粒や多	良好 / にぶい相	内面~口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ち ヘラケズリ。内面指押さえ。外面に黒斑。	8世紀前半
12	須恵器 蓋	36-4 括1北 S61E55 E25	縫合~ 体部1/5	縫合径 3.5	縫合砂粒・黑色粒 子	還元焰 / 灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面回転ヘラ ケズリ。内面中心寄り手持ちのナデ。	8世紀前半
13	須恵器 高台付塊	38-1 S70E10	口~底 1/3	口径(13.2) 底径(7.4)	砂粒・黑色粒子 ・角閃石安山岩	還元焰 / 灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後高台 貼付(高台削離)。	8世紀中葉
14	角閃石安 山岩切石	36-4 括1北 S65E25		現存長 1.91 現存幅 1.91 厚さ 13.8				
15	角閃石安 山岩切石	38-1 S65E10		現存長 1.56 現存幅 17.8				

V 調査した遺構と遺物

中門及び周辺表土(第37~40図、PL.40~42)

No.	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	角閃石安 山岩切石	38-1 S70E15 禮見中	現存長11.6 現存幅12.3 厚さ14.4					
2	軒丸瓦 B101 粘 102	36-4 粘1 南 S70E26	左上部 1/4		砂粒	還元焰/灰(10Y5/1)	複数型。瓦当裏面無紋り布目。丸瓦との境は 輪郭面の挟みナデ。	文様の出が薄く、細分困難
3	軒丸瓦 B201a	36-4 施理土	右上部小 破片		砂粒やや多、白 色・黒色粒子目 立つ	還元焰/灰(10Y5/1)	横置型。丸瓦部凸面タテナデ・ケズリ。瓦当 裏面下部ヨコケズリ。丸瓦部凹面～瓦当裏 面ナデ。	
4	軒丸瓦 B205	36-4 施理土	中房～花 弁小破片		砂粒。色の異なる 粘土が細かい 繊状になる	還元焰/灰オリーブ (5Y6/2)	複数型。瓦当裏面無紋り布目。	文様は2度押し
5	軒丸瓦 B206B	38-1	上部1/3		砂粒多。粗い胎 土	還元焰/灰白 (5Y7/1)	印籠付け。丸瓦先端は無加工か。溝は浅く、 裏面に接合用粘土をナデ付ける。丸瓦部凸面 タテナデ、凹面布目、布の縫いつけ痕あり。 瓦当裏面ナデ。	
6	軒丸瓦 C003A	36-4 粘1 南 S70E25	右部1/2		砂粒。色の異なる 粘土が細かい 繊状になる	還元焰/灰白 (5Y7/1)	複数型。やや雰囲な造り。瓦当側面と突堤上面 内周方向ケズリ。裏面無紋り布目。	
7	軒平瓦 NH301	38-1 S65E10 水路	右端部 1/4	瓦当幅3.5	白色粒子(φ1 ~2mm)多。や や粗い胎土	還元焰。破質。凸 面の表面解離/灰 (10Y5/1)	曲線型。凹面布目。瓦当・側端近くはナデ 凸面側面はヨコケズリ、その他のヨコナデ後 タテ鋼印き。	瓦当幅が NH301にして は狭い
8	軒平瓦 NH501	36-4 粘1 北 S61E25	左端部小 破片	瓦当幅3.9	砂粒、黒色粒子	還元焰/灰(5Y6/1)	一枚作り。三角型。凹面側端の角が丸い。側 端面ハケ目状のナデ。凹面布目。凸面瓦当近 くはヨコ、その他はタテ鋼印き。	山王寺町C類
9	軒平瓦 NH501	36-4 粘1 南 S70E25	左端部小 破片	瓦当幅3.3 側面長3.3	砂粒	還元焰/灰(5Y6/1)	一枚作り。段階。凹面布目。凸面は顎面・平 瓦部ともヨコ鋼印き。側端面ハケ目状のナデ。	山王寺町C類
10	軒平瓦 P103	36-4 粘1 南 S75E30	左半部小 破片	瓦当幅3.3 側面長2.0	砂粒、白色粒子 (φ 5mm以下) 多。粗い胎土 薄い層状になる	還元焰/灰(10Y4/1)	段階。凹面布目。瓦当近くヨコケズリ。凸面 は顎面・平瓦部ともヨコナデ。	凸面に朱付着
11	軒平瓦 R003	36-4 粘1 南 S70E25	右端部小 破片	瓦当幅2.9 側面長3.0 ~ 3.5	砂粒や多、色 の異なる粘土が 細かい繊状にな る	還元焰/灰黄 (2.5Y7/2)	一枚作り。段階。門面糸切痕と布目。瓦当近 くヨコケズリ。凸面ヨコナデ。側端面ケズリ。	
12	軒平瓦 V001	36-4 粘1 南 S70E26	中央部小 破片	瓦当幅5.4	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焰/灰(5Y6/1)	一枚作り。三角型。凹面布目。凸面タテナデ 後一部ヨコナデ。殊文は4箇。その他の間に よがる、下の2本の界線と界縁との間はヘラ 書きで直している	
13	軒平瓦 Z001	38-1 S75E10	右端部小 破片		やや径の大きい 白色粒子(φ1 ~5mm)多。片 岩も少數含む	還元焰/灰(N4/0)	一枚作りか。顎部剥離。段階か。凹面粗い布 目。凸面ヨコナデ。	接合痕が観察 できる
14	軒平瓦 Z009	36-4 粘1 北 S61E25	右端部小 破片	瓦当幅4.6 側面長2.8	砂粒や多、色 の異なる粘土が 細かい繊状にな る	還元焰/灰(7.5Y6/1)	一枚作り。段階。頭は貼り付け。凹面布目。 凸面格子印き後粗いタテナデ。顎面ヨコナデ。 側端面ヨコケズリ・ナデ。	新規種
15	平瓦	38-1 S75E15	抉端右側 小破片	厚さ1.8	粗砂粒・小礫(φ 8mm以下)、白 色粘土が薄い層 をなして編合す る	還元焰/灰(10Y6/1)	門面布目。抉端ヨコナデ。側端面取のタテケ ズリ。凸面タテ・ナメナデ、側端面取のタテケ ズリ。	凸面に押印「○」。○の外 径は2.0cm
16	平瓦	36-4 粘1 北 S61E25	抉端左側 小破片	厚さ1.6	砂粒多	還元焰/表面灰白 (7.5Y8/2) 断面灰(7.5Y5/1)	一枚作りか。門面布目。側端面取のタテケ ズリ。凸面ナメナデ。	凸面に押印「□」 に當る。
17	丸瓦	38-1 S75E10	広端右側 小破片	厚さ1.6 ~ 2.2	砂粒。白色粒子 やや目立つ	還元焰。内部や酸化 鉄気味・表面灰黃 灰(10Y4/1) 断面にヨコ・横 (7.5Y5/3)	凹面粗い布目。凸面不定方向ナデ。	凸面に押印「二 重に方」。金 屬製の環らし い
18	平瓦	36-4 粘1 北 S61E25	端部小破 片	厚さ1.8	砂粒	還元焰。内部酸化 鉄気味・表面暗灰 黄(2.5Y5/2) 断面にヨコ・横 (5Y8/4) 中心部灰(10Y6/1)	一枚作り。門面布目。一部粗いヨコナデ。凸 面タテナデ後格子印き。	凸面に押印「 田」。別 に格子印きが ある
19	平瓦	36-4 粘1 南 S70E26	中央部小 破片	厚さ1.4	粗砂粒多	還元焰/灰(5Y6/1)	門面布目を粗くナデ消す。凸面ナデ後格子印 き。	凸面に印き「 亜」A類
20	平瓦か	36-4 粘1 南 S70E25	中央部小 破片	厚さ2.1	粗砂粒多。白色 粒子目立つ。色の異 なる粘土が細かい 繊状になる	還元焰。内部酸化 鉄気味・表面灰黃 (2.5Y7/2) 断面にヨコ・横 (5Y8/6/4)	門面布目。凸面ナメナデ。	凸面にヘラ書 き「山」
21	平瓦	36-4 粘1 南 S70E30	中央部小 破片	厚さ2.1	砂粒多。やや粗 い胎土	還元焰/灰白 (5Y7/1)	門面布目。凸面ヨコナデ。	凸面にヘラ書 き「□」

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
22	平瓦か S75E26	36-4 抵1南 S75E26	中央部小 破片	厚さ 2.2	砂粒	還元焰/灰白 (5Y7/2)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書 き「中か」
23	平瓦	36-4 抵1南 S70E30	側端部小 破片	厚さ 1.0	砂粒。白色・赤 色粒子目立つ	酸化焰気味 / 表面に ふい黄橙(10YR6/3)	凹面布目。凸面ヨコナデ。	凸面にヘラ書 き「山鷹成か」
24	丸瓦か S61E30	36-4 抵1北 S61E30	中央部小 破片	厚さ 1.7	砂粒	還元焰/灰(5Y4/1)	凹面布目。凸面タテナデ。	凹面にヘラ書 き「□」
25	平瓦	36-4 抵1南 S70E30	中央部小 破片	厚さ 1.7	砂粒多	酸化焰気味、や や軟質 / 浅黄橙 (10YR8/3)	凹面摩減、凸面タテナデ。	凸面にヘラ書 き「尾□」
26	平瓦	36-1 S65E15 水路	中央部小 破片	厚さ 2.0	砂粒。全体に 砂っぽい胎土	還元焰/灰白 (5Y7/2)	一枚作り。凹面糸切痕、布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書 き「子」
27	丸瓦か S70E26	36-4 抵1南 S70E26	中央部小 破片	厚さ 2.4	粗砂粒多。白色 粒子目立つ	還元焰。内部はやや 酸化焰気味 / 表面灰 黒(10Y4/1)断面灰褐 (7.5YR5/2)	凹面布目。凸面タテナデ。	凹面にヘラ書 き「子」
28	平瓦	36-4 抵1南 S75E26	側端部小 破片	厚さ 1.9	砂粒。赤色粒子 目立つ	酸化焰気味 / 表面灰 黄褐(10Y4/2) ~ 黒(10YR2/1) 断面にふい赤褐 (5YR5/4)	一枚作り。凹面糸切痕、布目。凸面糸切痕を ナデ消す。	凸面にヘラ書 き「辛料□」 2字目は示編 に斗
29	平瓦	36-4 抵1北 S61E25	側端部小 破片	厚さ 1.8	粗砂粒多。やや 粗い胎土。色の 異なる粘土が細 い繊状になる	還元焰。内部酸 化焰気味 / 表面灰 (5Y5/1) 断面にふい褐 (7.5YR5/3)	一枚作り。凹面布目。側端面取のタテケズリ。 凸面タテナデ。	凸面にヘラ書 き「馬か」
30	平瓦	36-4 抵1南 S70E26	側端部小 破片	厚さ 1.4	粗砂粒多。やや 粗い胎土。白色 粒子(Φ 5mm 以下)目立つ	還元焰 / 灰(5Y6/1)	一枚作り。凹面布目、側端面取のタテケズリ。 凸面タテナデ。	門面に指書き 「□(文字では ない可能性 も)」
31	丸瓦	36-4 抵1南 S70E26	側端部破 片	厚さ 1.7	粗砂粒多。やや 粗い胎土	還元焰 / 灰(5Y6/1)	凹面布目。凸面タテナデ。側端面凹凸両方と も面取のタテケズリ。	凸面にヘラ書 き「□」
32	丸瓦	36-4 抵1南 磚石2周 回	4/5	長さ 39.8 厚さ 1.6 ~ 2.6	砂粒や多。部 分的に色の異 なる粘土が薄い層 状に入る	還元焰 / 灰(5Y5/1)	無段。凹面布目、側端面取のタテケズリ。凸 面タテナデ。	門面にヘラ書 き「十」。凸面 の抜き面から 16cm 付近で色 が異なる。目 き足を示すと 思われる
33	道具瓦 隅木益 か	36-4 抵1南 S70E26	小破片		砂粒。緻密	還元焰。内部一部 酸化焰気味。硬質 / 表面と断面中心部 灰(N5/0)断面灰褐 (7.5YR6/2)	粘土板を折り曲げて成形。内外面とも丁寧な ナデ。	

南東回廊版築土中(第 45, 46 図、PL.42, 43)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 B207b	36-4 S66E35	真当部 壳形	真当径 16.2 中房径 2.6	砂粒と多くの白 色粒子(Φ 5mm 以下)。色の異 なる粘土が細かい 繊状になる	還元焰。内部は酸 化焰気味 / 表面灰 黒(10Y4/2)断面に ふい赤褐(5YR5/3)	接着。瓦当裏面に溝を削らず、丸瓦を直接当 てて接合。先端の加工はないらしい。瓦当側 面丸瓦と不整面割子ナデ。瓦当近くヨコケズ リ。下半部粗いヨコナデ。裏面粗いナデ。下 半部円滑方向ケズリ・ナデ。	
2	軒平瓦 NT	36-4 抵1南 S75E30	中央部小 破片 顎部剝離		粗砂粒	酸化焰気味 / 表面黒 色処理。黒(5Y2/1) 断面にふい褐 (7.5YR6/4)	凹面糸切痕、布目。瓦当近く面取状ヨコケ ズリ。凸面ナメナデ。	顎部剝離
3	丸瓦	36-4 S66E55	広端部小 破片	厚さ 0.9	砂粒	還元焰。表面黒色 鏡 / 表面灰(3N/0) 断面淡黄(5Y8/3)	凹面糸切痕、布目。広端近くナメナデ。広 端ヨコナデ。広端面ヨコナデ。凸面ヨコナデ。	凸面の広端に、 幅 5mm、高さ 3mm の突帯が 巡る
4	丸瓦	36- S66E35	端部小破 片	厚さ 0.8	砂粒	還元焰 / 灰白 (7.5Y8/1)	凹面布目。凸面タテ糊叩き後ヨコナデ。	
5	丸瓦	36-4 抵1南 S75E30	挟端右隅 1/5		砂粒、少數の小 塊(Φ 8mm 以 下)	還元焰 / 灰白 (10YR7/3) ~灰白(5Y8/1)	有段。凹面糸切痕、布目。凸面タテ糊叩き後 ヨコナデ。	
6	平瓦	36-4 S66E55	側端部破 片	厚さ 2.5	砂粒。黑色粒子 目立つ	還元焰 / 灰(5Y6/1)	側端面粗い段差あり。側端面タ テナデ。凸面ヨコナデ。	かなり厚い平 瓦
7	平瓦	36-4 S66E55	側端部小 破片	厚さ 2.0	砂粒。黑色粒子 目立つ	還元焰。断面の一 部酸化焰気味 / 表面と断面中心部 灰(5Y8/1) 断面の一部にふい黃 褐(10YR7/3)	凹面布目。側端面ケズリ。凸面ナメ糊叩き。	
8	平瓦	36-4 S66E45	中央部小 破片	厚さ 1.4	細砂粒	還元焰 / 灰(10Y6/1)	凹面布目を粗いヨコナデで消す。凸面タテナ デ後斜格子叩き。	

V 調査した遺構と遺物

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
9	平瓦	36-4 括2南 S70E50	端部小破 片	厚さ 2.0	砂粒。白色・黒 色粒子目立つ。	還元焰で化成質、断面 の一部酸化焰気味 / 表面灰(10Y5/1) 断面中心部灰白 (7.5Y7/3)	桶巻作りか。門面系切痕と布目をタテナデで 粗く消す。側板痕らしい段差あり。端縁面取 のヨコケズリ。凸面ヨコナデ。	
10	平瓦か	36-4 版面中	挿端部右 側破片	厚さ 1.8	砂粒	やや酸化焰気味 / 表面にふく黄潤 (10Y5/3) 断面中心部灰白 (7.5Y7/1)	門面粗いタテナデ後一部ナナメナナデ、側端タ ケズリ。凸面ヨコナデ後タテナデ。	湾曲率が高い ので歪んだ丸 瓦の可能性も
11	須恵器 蓋	36-4 括1南 S70E30	小破片	口径(10.1) ガエリ径 (8.8)	細砂粒	還元焰 / 灰白	ロクロ整形(回転方向不明)。天井部外面手持 ちヘラケズリ。摘み貼付し剥離。	
12	土師器 杯	36-4 S66E30	小破片	口径(10.9)	砂粒	良好 / 糙	内面・口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ち ヘラケズリ。	外面部磨
13	土師器 杯	36-4	小破片	口径(13.0)	砂粒	良好 / 糙	内面・口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ち ヘラケズリ。	
14	須恵器 壺	36-4 S66E45	小破片		砂粒・黒色粒子	還元焰 / 灰	ロクロ整形(右回転)。	
15	須恵器 壺	36-4 S66E55	小破片		細砂粒	還元焰 / 灰	外面部手押きの後頸部をヨコナデ。内面ヨコ ナデ。	8世紀

南東回廊2層(第46図、PL43)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
16	平瓦	36-4 S66E45 2層	広端部 1/2	広幅約 30.5 厚さ 1.0~1.7	粗砂粒多、小球 (φ 12mm以下) をぐる少量	酸化焰気味 / 表面灰 白(5Y8/1) ~ オリ ブ黒(5Y3/1)	一枚作り。門面布目(刺し子)が太系が 10mm前後の等間隔にタテに並ぶ。凸面密 なタテ縫引き後タテ・ナナメナナデ。	

南東回廊根石・抜取り窓(第47~49図、PL43~45)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 B001a	36-4 根石1	右上部小 破片		砂粒	還元焰 / 灰白 (7.5Y8/1)	接合系の技法。接合部不規則。丸瓦部凸面タ テナデ、且近はヨコナデ。門面布目、且 当部との境付近と長當裏面はナデ。	接合部・北側面 で丸瓦先端は 観察できまい。
2	軒丸瓦 不明	36-4 根石1	丸瓦部左 側破片 瓦当部剥 離		粗砂粒多、小球 (φ 7mm以下) も少量	還元焰 / 灰(5Y5/1)	縦型。先端に粘土を足して瓦当部を作り出 す(削離)。丸瓦部門面~長當裏面布目。凸面 タテナデ。	凸面上に書か れていたと ころの下にそ ぞれを消すよう に墨書きで書く
3	平瓦	36-4 根石1	広端左隅 1/4	厚さ 1.6~2.4	粗砂粒	やや酸化焰気味 / 黄 潤(2.5Y5/3)表面黑 色退理	一枚作り。門面布目、側端面取のタテケズリ。 凸面タテナデ、側端・広端面取のケズリ。	凸面上に書か れていたと ころの山
4	丸瓦	36-4 根石1	広端左隅 破片	厚さ 2.1	粗砂粒	やや酸化焰気味 / 表 面黒色退理。~ぶい 黄(2.5Y6/3)~暗灰 (N3/0)	門面布目。凸面タテナデ。	
5	平瓦	36-4 根石1	広端左隅 1/4	厚さ 1.7	砂粒。小球(φ 6mm以下)も少 量	還元焰。内部は酸 化焰 / 表面暗灰黄 (2.5Y5/2)断面赤 (5YR6/6)	一枚作り。門面布目。凸面タテナデ。内面と 周縁部は面取のケズリ。	
6	平瓦	36-4 根石1	広端右隅 1/4	厚さ 2.3	砂粒やや多	やや酸化焰気味 / 灰 黄(2.5Y7/2)	一枚作り。門面系切痕、布目。凸面タテナデ、 側端面取状のタテケズリ2回。	凸面上に押印□ に當る
7	丸瓦	36-4 括2北 根石2	側端部破 片	厚さ 2.4	砂粒、小球(φ 5mm以下)や少 量。粗い胎土	酸化焰気味 / 表面に ふく黄潤(10Y5/3) 断面赤泥赤 (2.5YR5/6)	門面布目。側端タテケズリ。凸面タテナデ。	
8	丸瓦	36-4 括2北 根石3	狭端左隅 破片	玉縁長 7.7	砂粒含むが比較的 の纖細	酸化焰気味 / 灰白 (5Y8/2)	有段。門面布目、側端タテケズリ。凸面ヨコ ナデ。	2枚の粘土板 を接合して成 形
9	平瓦	36-4 括2北 根石3	狭端左隅 破片	厚さ 1.9	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焰 / 灰白 (5Y7/1)	一枚作り。門面系切痕、布目、側端面取状の タテケズリ。凸面タテナデ後ヨコナデ。	
10	丸瓦	36-4 括2南 根石4	広端右隅 破片	厚さ 1.9	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焰 / 暗灰(N3/0)	門面系切痕、布目。凸面タテ縫引き、表面摩滅。	
11	平瓦	36-4 括2南 根石5	中央部 1/4	厚さ 2.1	砂粒、小球(φ 8mm以下)、や や粗い胎土	還元焰 / 灰(7.5Y4/1)	一枚作り。門面布目。凸面タテナデ。	
12	丸瓦	36-4 括2南 根石5	広端右隅 破片	厚さ 2.2	砂粒、径のやや 大きい白色粒子 (φ 6mm以下) 多。粗い胎土	還元焰 / 灰(N5/0)	門面布目。凸面タテ縫引き後タテナデ。	
13	丸瓦	36-4 括2南 根石5	玉縁部右 側破片	厚さ 1.8 玉縁長 8.8	砂粒。黑色粒子 目立つ	還元焰 / 灰(N6/0)	有段。門面布目、側端タテケズリ、狭端ヨコ ケズリ。凸面ヨコ一部タテナデ。	
14	軒平瓦 NH301	37-2 板取り 1	中央部 1/4	瓦当幅 4.1 塑面長 3.3	砂粒、白色・黒 色粒子	桶巻作り。途中に枝毛をもつ曲線型。門面系切 痕、布目、粗いタテ・ナナメナデ、瓦当近く ヨコケズリ。側板痕の段差あり。凸面タテナデ、 瓦当近くヨコナデ。	凸面に朱秉着	

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
15	平瓦	37-2 抜取り 1	挿端右隅 1/5	厚さ 2.3	砂粒・白色・赤 色粒子。小窪(φ 5 ~ 10mm)。 色の異なる粘土 が細かい構状に なる	酸化焰気味 / にぶい 黄褐(10YR7/3)	一枚作り。門面系切痕、布目、挿端面取のヨ コケズリ。凸面平行叩き。	凸面へラ書 き「南」
16	丸瓦	38-8 抜取り 2	側端部小 破片	厚さ 0.9 ~ 1.4	砂粒	還元焰 / 灰白 (7.5Y7/1)	門面布目。凸面ナメナデ。	

36-4 穴穴建物(第 50 圈、PL.45, 46)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	土師器 环	SJ54	口縁~底 部 3/4	口径(11.0) 高さ 3.3	砂粒やや多	良好 / にぶい橙	内面~口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ち ヘラケズリ。	7世紀前半
2	土師器 环身	SJ54	口縁~体 部破片	口径(13.1)	砂粒・白色粒子	還元焰 / 灰	ロクロ整形(回転方向不明)。底部外面手持ち ヘラケズリ。	7世紀前半
3	土師器 环	SJ54	口縁~底 部 4/5	口径 12.0 高さ 4.3	砂粒	良好 / 橙	内面~口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ち ヘラケズリ。	7世紀後半
4	土師器 長颈瓶	SJ54	ほぼ完形	口径 9.2 高さ 19.3	細砂粒	還元焰 / 灰	ロクロ整形(右回転)。頭部に波状文。胴部上 半2条の横線の間に波状文。	7世紀前半
5	土師器 長颈瓶	SJ48	胸部下半 1/4	最大径(17.1)	砂粒・黒色粒子	還元焰 / 灰白	ロクロ整形(右回転)。頭部に波状文。	7世紀後半
6	土師器 环	SJ48	口縁~体 部破片	口径(13.1)	細砂粒	良好 / 橙	内面~口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ち ヘラケズリ。	8世紀前半
7	土師器 蓋	SJ47	体~端部 破片	口径(9.6) エリリ径 (7.7)	砂粒・白色粒子 やや多	還元焰 / 灰白	ロクロ整形(右回転)。天井部外面回転ヘラケ ズリ。	7世紀後半
8	土師器 裏	SJ47 カマド	ほぼ完形	口径 22.0 底径 5.1 高さ 34.4	砂粒・白色粒子	良好 / 橙	口縁部ヨコナデ。肩部斜位、腹部複位ヘラケ ズリ。内面口縁部ヨコナデ、腹部横位ヘラナ デ。	8世紀前半
9	土師器 裏	SJ47 カマド	ほぼ完形 底部欠損	口径 22.5	砂粒・白色粒子	良好 / 橙	口縁部ヨコナデ。肩部斜位、腹部複位ヘラケ ズリ。内面口縁部ヨコナデ、腹部横位ヘラナ デ。	8世紀前半

回廊東南部表土(第 51 ~ 56 圈、PL.46 ~ 49)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 A003	36-4 S66E65	花弁小破 片		砂粒やや多	やや酸化焰気味 / 表 面暗青灰(5B4/1) 断面にぶい橙 (5YR7/3) ~ にぶい 黄(2.5Y6/3)	縦置型。瓦当裏面無絞り布目。	
2	軒丸瓦 A102	36-4 抵 2 南 S70E55	下部小破 片		砂粒、ややほ の大きめの白 色粒子(φ 7mm以下) 多、粗い胎土 色の異なる粘土 が細かい構状に なる	酸化焰気味 / 表面灰 (7.5Y5/2)断面にぶい 橙(7.5YR6/4)	縦置型。瓦当側面円周方向ナデ。裏面無絞り 布目。突帯上面円周方向ケズリ。	
3	軒丸瓦 A304	36-4 抵 2 南 S69E55	下部 1/3		砂粒、赤色粒子 (φ 5mm以下)	還元焰、良好で硬質、 瓦当表面には自然輪 と窓壁片が付着 / 灰 (10Y5/1)	丸瓦接合部が残っていないので技法不詳。裏 面に布目判るので一本作りの可能性も。瓦當 側面円周方向ケズリ、裏面無絞り布目折り目 あり、外周円周方向ケズリ。	第1期調査の 出土品は接合 部
4	軒丸瓦 B101	36-4 抵 2 南 S70E46	左下部 1/4		砂粒多、細かい 白色粒子が目立つ	還元焰 / 表面明黄灰 (10YR4/2) 断面灰(10Y5/1)	縦置型。瓦当側面と突帯上面円周方向ケズリ・ ナデ。裏面無絞り布目。	
5	軒丸瓦 B103	36-4 花弁小破 片			砂粒。色の異なる 粘土が細かい構 状になる	酸化焰気味 / 表面灰 (15Y7/1)断面にぶい 橙(7.5YR7/4)	縦置型。瓦当裏面無絞り布目、折り目あり。 裏面無絞り布目。	
6	軒丸瓦 B103	36-4 S66E60	下部小破 片		粗砂粒	還元焰 / 灰(10Y5/1)	縦置型。周縁上面粗い円周方向ケズリ、瓦当 側面・突帯上面円周方向ケズリ。裏面無絞り 布目。	
7	軒丸瓦 B104	36-4 抵 2 南 S70E60	右部小破 片		種のやや大き めの白色粒子(φ 5mm以上)多、粗い 胎土	還元焰 / 灰(10Y5/1)	印籠付け。瓦当裏面に溝を掘り、先端の凸面 部を削って尖らせた丸瓦を差し込む。丸瓦部 凸面タケズリ、瓦当側面はヨコナデ。裏面 はケズリナデ。	
8	軒丸瓦 B105	36-4 抵 2 南 S70E46	中央部破 片		粗砂粒	還元焰 / 灰(5Y8/2) 裏面灰(5Y4/1)	縦置型。瓦当裏面無絞り布目。	
9	軒丸瓦 B201a	36-4 S66E60	右部小破 片		砂粒。黒色粒子、 細かい白色粒子 目立つ	還元焰 / 灰(5Y6/1)	横置型。丸瓦部凸面タテナデ・ケズリ。丸瓦 凹面~瓦当裏面無絞り布目。境はナデ。	
10	軒丸瓦 B203	36-4 抵 2 南 S66E60	上部小破 片		砂粒	還元焰 / 灰(N4/0)	縦置型。丸瓦部凸面タテナデ・ケズリ。丸瓦 凹面~瓦当裏面無絞り布目。境はナデ。	
11	軒丸瓦 B206A	36-4 S66E55	下部小破 片		種の大きな白色 粒子(φ 10mm 以下)多、粗い 胎土	還元焰 / 灰(N6/0)	印籠付け。瓦当側面ヨコケズリ。裏面ヨコ ケズリ・ナデ。	印籠の部分が 内側の構造と 同じ太さにな っているため、 B206A の 可能性が高い

V 調査した遺構と遺物

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
12	軒丸瓦 B207a	36-4 版屋中	瓦当部 4/5 表面剥離	瓦当径(16.2)	砂粒。色の異なる粘土が細かい編状になる	酸化焰氣味 / 表面灰 黄(2.5Y6/2)断面に ぶい相(7.5YR7/4)	縦置型。周縁上面・瓦当側面・突帯上面とも 円錐方向ケズリ・ナデ。裏面無綾り布目。折 り目あり。	瓦当裏中央の 膨らみが頗著
13	軒丸瓦 B207b	36-4 S66E70	右端部小 破片		砂粒。白色粒子多。 やや粗い胎土上。 薄い層状をなす	還元焰 / 灰(7.5Y4/1)	接着か。瓦当裏面やや粗いナデ。	瓦当裏面に丸 瓦接合の痕跡
14	軒丸瓦 C002	36-4 S66E55	花弁小破 片		繊砂粒。黒色粒子 目立つ	還元焰 / 灰(10Y5/1)	縦置型。瓦当裏面非常に細かい無綾り布目。 丸瓦とののはけナデ。	
15	軒丸瓦 E103	36-4 S66E70	左端部小 破片		砂粒。白色・黒 色粒子目立つ	還元焰 / 灰白 (5Y7/2)	仰臥付け。瓦当裏面に溝を握り、丸瓦を差し 込む。先端の加工は不明。丸瓦部タテケズリ、 先端はヨコケズリ。瓦当裏面ナデ。	
16	軒丸瓦 新范種	36-4 S66E55	中央～下 部1/2		砂粒。黒色粒子 目立つ。細かい 層状をなす	還元焰 / 灰(2Y6/1)	縦置型か。瓦当裏面無綾り布目。一部ヨコナ デ。外縫内周方向ケズリ。	
17	軒平瓦 NT3	36-4 括2南 S75 E46.50	左半部 1/3	瓦当幅5.3 額面長7.7	砂粒	酸化焰氣味 / 表面 淡黄(5Y8/3)～灰 白(5Y7/1)断面浅黄 (2.5Y7/3)～ぶい相 (5YR6/4)	一枚作り。途中に棱をもつ曲線型。凹面系切 痕と布目。瓦当近くヨコケズリ。凸面瓦当近 くヨコケズリ。額面タテナデ。平瓦部ヨコナ デ。	凸面に朱付者。 2枚の粘土板を 合わせて作られ、非 常に厚い。
18	軒平瓦 P001	36-4 S66E45	右端部小 破片	瓦当幅4.1 額面長3.3	砂粒	還元焰 / 嫌灰黄 (2.5Y5/2)～オーリー 黒(10Y3/1)	一枚作り。途中に棱をもつ曲線型。凹面タテ ナデナメナデ。側端面取1回。無綾面ケズリ。 凸面タテナデ後一部ヨコナデ。	范キズが生じ ている
19	軒平瓦 P002B	36-4 S66E55	左端部小 破片		砂粒。黒色粒子 目立つ	還元焰 / 青灰 (10BG5/1)	凹面タテナデ。側端面ナデ。凸面難なタ ・ヨコナデ。	
20	丸瓦	36-4 括2南 S70E60	中央部小 破片	厚さ1.6	粗砂粒多	酸化焰、内部は還 元焰氣味 / 表面黒色 理か、相(7.5YR6/6) ～黒(5Y2/1)断面灰 白(5Y7/2)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面に印押「 に子か」印は 本製か
21	平瓦か	36-4 S66E30	端部小破 片	厚さ1.7	粗砂粒多。径の やや大きい白色 粒子(φ4mm以下) が目立つ	酸化焰、内部は酸 化焰氣味 / 表面灰 白(5Y6/1)断面にぶい 相(5YR6/4)	一枚作りか。凹面粗い布目。凸面タテナデ。	凸面に印押「 に判不能の 文字」
22	平瓦	36-4 S66E55 SK128	端部右隅 1/5	厚さ2.1	砂粒や多く含む。 白色粒子目立つ	還元焰 / 灰(N4/0)	一枚作り。凹面布目、側端面取のタテケズリ 2回。凸面ナメナデ後叩き。	凸面に印押「萬 田」
23	平瓦	36-4 S66E60	広端右隅 付近破片	厚さ2.2	砂粒多。やや粗 い胎土。色の異なる 粘土が細かい編状に なる	還元焰。内部は酸 化焰氣味 / 表面灰 白(5Y5/1)断面にぶい 相(5YR6/4)	一枚作り。凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書 き「馬廿」
24	平瓦か	36-4 S66E60	中央部小 破片	厚さ2.0	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焰。内部酸 化焰氣味 / 表面灰 (10Y4/1)断面にぶい 相(5YR5/3)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書 き「□□□」 赤鉛
25	平瓦	36-4 括2南 S75E50	側端部小 破片	厚さ1.8	砂粒や多く 含む。	酸化焰氣味 / ぶい 相(10YR6/3)	一枚作りか。凹面系切痕と布目、側端面取の タテケズリ2回。凸面ナデ。	凸面にヘラ書 き「万旦」
26	平瓦	36-4 括2北 S61E50	側端部小 破片	厚さ1.8	砂粒多。やや粗 い胎土	還元焰。内部部分的 に酸化焰氣味 / 表面 灰(5Y5/1)断面の一部 (7.5YR5/3)	一枚作り。凹面布目、側端面取のタテケズリ 2回。凸面タテ・ヨコナデ。	凸面にヘラ書 き「乙巳(万 呂)」
27	平瓦	36-4 S66E70	端部小破 片	厚さ1.3	砂粒多。粗い 胎土。小隠(φ 5mm以下)も少量	還元焰 / 青灰(5B5/1)	薄い平瓦。凹面系切痕、布目、幅の狭い段差 あり。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書 き「大口」
28	平瓦	36-4 S66E60	抉端左隅 小破片	厚さ1.9	粗砂粒多。やや 粗い胎土。色の 異なる粘土が細 かい編状になる	還元焰 / 灰(N6/0)	一枚作り。凹面布目。凸面タテナデ。側端面 凹凸面とも面取のタテケズリ2回。	凸面にヘラ書 き「千」
29	平瓦？ 軒平瓦？	36-4 括2南 S70E46	側端部小 破片		繊砂粒	還元焰 / 灰(N5/0)	軒平瓦の剥離した額部か。凹面は剥離面。凸 面タテナデ。	凸面にヘラ書 きで格子文を 書く
30	鬼瓦	36-4 S66E40	中央部小 破片		砂粒、白色粒、 小隠(φ12mm 以下)	還元焰 / 灰(N6/0)	裏面ナデ。	
31	鬼瓦 B類か	36-4 括2南 S70E50			砂粒、黒色粒子	還元焰 / 灰白 (10Y8/1)～灰 (10Y5/1)断面灰 (7.5Y5/1)表層は灰 白(5Y8/2)	裏面縫目が残る。縫叩きか？側面ナデ。	
32	縄輪陶器 皿	36-4 括2北 S61-E55	底部破片	高台径(5.2)	繊砂粒	還元焰 / 胎土は灰	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は貼付。	
33	白磁 皿	36-4 括2南 S75 E46.50	口縁～高 台部片	口径(9.9) 高さ(4.6) 高さ2.3			内外面釉飾、高台部は無釉。見込み蛇ノ目釉 剥落。口縁端部は尖り外反。	

No	種類 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
34	軒丸瓦 A003	37.2 S53E60	花卉小破片		砂粒。色の異なる粘土が細かい、繊状になる。	還元焰。内層は酸化焰気味。表面灰(5Y6/1)断面にぶい赤褐(5YR5/4)中心部灰(10Y5/1)	複数型。瓦当裏面無絞り布目、折り目あり。	
35	軒丸瓦 A102	37.2 S53E60	下部小破片		砂粒。白色粒子(Φ 5mm以下)多、粗い胎土上。	還元焰/灰(10Y5/1)	複数型。周縁上面・瓦当側面・突帯上面とも円周方向ケズリ・ナデ。裏面無絞り布目、丸瓦部との境は円周方向ナデ。	
36	軒丸瓦 A103	37.2 S53E60	中房～花弁小破片		砂粒、白色粒子多、やや粗い胎土上。	還元焰/灰(7.5Y6/1)	複数型。瓦当裏面無絞り布目。	
37	軒丸瓦 B203	37.2 S53E60	下部小破片		砂粒	還元焰/灰(5Y6/1)	複数型。瓦当裏面無絞り布目。突帯との境は円周方向ナデ。	
38	軒丸瓦 B207a	37.2 S53E60	瓦当部は ぼ完形		砂粒、白色粒子(Φ 5mm以下)。色の違う粘土が細かい繊状になる。	やや酸化焰気味/灰黄(2.5Y7/2)	複数型。瓦当側面タテカナメケズリ。裏面無絞り布目、折り目あり。	
39	軒丸瓦 新沿用	37.2 S53E50	下部小破片		砂粒	還元焰/灰(7.5Y6/1)	複数型。瓦当裏面無絞り布目、折り目あり。周縁は円周方向ナデ。	小破片のため、分類番号確定困難
40	軒平瓦 P001	37.2 S53E60	中央部小 破片		砂粒、白色粒子	還元焰/灰(5Y5/1)	途中に不明瞭な棱をもつ曲線製。凹面布目、瓦当近くヨコナデ、凸面ヨコナデ。	凸面に朱付着
41	丸瓦	37.2 S53E50	端部右隅 破片	厚さ 1.5	砂粒、小砾(15mm)	還元焰/灰(4N4/0)	凹面布目。凸面タテナデ、側端面取のタテケズリ。	凸面にヘラ書き「□長」
42	平瓦	37.2 S53E55	中央部小 破片	厚さ 1.9	砂粒、細かい白 色粒子	還元焰。内層や酸化焰気味/表面灰(10Y4/1)断面にぶい赤褐(5YR6/3)の部分あり	一枚作りか。凹面布目をタテナデで消す。凸面タテ・ナメナテ後ナシ。	凸面に明記「佐原」A類
43	平瓦	37.2 S53E55	扶端右隅 小破片	厚さ 1.8	砂粒	酸化焰/表面黒色 理、周灰黄(2.5Y5/2) 断面にぶい粗(5YR6/4)	一枚作り。凹面布目、側端面取の幅の狭いタケズリ。凸面タテナデ後ヨコナデか、側端面取の幅狭いタテケズリ。	凸面にヘラ書き「□」
44	平瓦	37.3 S53E60	中央部小 破片	厚さ 1.8	砂粒	還元焰/表面黒色 理か、灰(10Y5/1) 断面灰白(7.5Y8/2)	一枚作り。凹面布目。凸面タテ・ナメナデ。	凸面にヘラ書き「□(辛根か)」
45	平瓦	37.2 S53E55	端部小破 片	厚さ 1.7	砂粒、白色粒子の多い粗い 胎土上。小砾(Φ 8mm)	還元焰/表面灰 (7.5Y4/1) 断面中心部にぶい粗(2.5YR6/3)	一枚作り。凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書き「吉井」
46	平瓦	37.3 S53E60	広端右隅 小破片	厚さ 1.6	砂粒	酸化焰/表面黒色 理、黒(5YR2/1) 断面にぶい赤褐(2.5YR5/4)	一枚作り。凹面布目。側端・広端面取の幅の狭いケズリ。凸面ヨコ・一部タテ・ナメナデ。	凸面にヘラ書き「八田」 八田の下にわざかな絵画が見える
47	平瓦	37.3 S53E60	端部小破 片	厚さ 2.3	砂粒、白色粒子	還元焰/灰(10Y5/1) 断面の表面近くに ぶい粗(2.5YR6/3)の 薄い筋がある。	一枚作り。凹面布目。凸面ナメナデ。	凸面にヘラ書き「十」
48	平瓦	37.2 S53E55	扶端右隅 小破片	厚さ 1.8	砂粒、赤色粒子。 色の異なる粘土が細かい繊状に なる。	酸化焰気味/表面灰 白(10Y8/1) 断面にぶい粗(7.5YR7/4)	一枚作り。凹面布目、側端・扶端面取のケズリ。凸面角切痕をタテ・ヨコナデで消す。側端面取のタテケズリ・ナデ。	門面にヘラ書き「○の中に十」
49	青磁 碗	37.2 S53-E50	胸～高台 部片	高台径(5.0)			内面墨書き、片切彫による文様。高台内無地。	龍泉窯系

38-5 トレンチ(第 56 図 PL.49)

No	種類 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	土師器 壺	38.5 S50E60	口縁～体部小 破片	口径(12.0)	砂粒	良好/粗	内面～口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ちヘラケズリ。	9世紀前半
2	土師器 壺	38.5 S160	口縁部小 破片	口径(12.8)	砂粒	良好/粗	内面～口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ちヘラケズリ。	7世紀後半～8世紀前半
3	軒丸瓦 B001a	38.5 S47E60	下部小破 片		砂粒、小砾(Φ 5mm以下)	還元焰/灰白(2.5Y8/1)	接合系。瓦当裏面ナデ。側面円周方向ナデ。	
4	軒平瓦 P301	38.5 S47E55	左端付近 小破片		砂粒	還元焰/灰(N5/0)	曲線製。凸面タテナデ。	凸面に朱付着

V 調査した遺構と遺物

回廊北東部(第57図、PL49.50)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 A101	39-6 S20E60 表上	花弁小破片		砂粒、小礫(Φ9mm以下)、粗い胎土	還元焰/灰(5Y6/1)	擬型。瓦当裏面無絞り布目。	
2	軒平瓦 P006	39-6 S20E45 表上	中央部 1/2	瓦当幅4.5 側面長3.2	砂粒、透のやや 大きな白色粒子 (Φ3mm以下)	還元焰/灰(5Y5/1)	段階。類部は貼付。凹面粗い布目。瓦当近く 輪郭、ヨコナデ・ケズリ。凸面タテナデ・ 類部ヨコナデ・ケズリ。	
3	軒平瓦 NH304	39-6 S15E45 表上	中央部 1/3	瓦当幅4.1	砂粒、白色粒子 やや多	還元焰/灰(5Y6/1)	ほぼ無絞。凹面横骨脊板直状の段差、布目。 瓦当近くヨコケズリ。凸面タテ開口き、瓦当 近くヨコケズリ。	
4	軒平瓦 T103	39-6 S20E45 表上	左半部 1/2	瓦当幅3.4 側面長0.9	砂粒。色の異なる 粘土が細かい 繊維状になる	還元焰、内部は酸化 焰氣味、硬質・表面 灰(N5/0)断面灰褐色 (5YR6/2)	一枚作り。曲線弧、段差が大きい。類部は貼 付。瓦当面ヨコナデの後面文。凹面布目。凸 面平行叩き、類部ヨコナデ。	
5	平瓦	39-6 S20E45 表上	中央部小 破片	厚さ1.8	砂粒、白色粒子	酸化焰氣味/ぶい 黄(7.5YR5/3)	凹面タテナデ。凸面ナメナデ。	凸面に叩き「山 田」
6	丸瓦	39-6 SD11 埋上	中央部小 破片	厚さ1.1	砂粒、白色粒子 やや多	酸化焰氣味/凸面に ぶい黄(7.5YR7/3) 門面・断面灰黃 (2.5Y4/1)	凹面系切痕、布目。凸面ヨコナデ。	凸面に押印 「左」E類か。 押印の右下 1/3残存
7	鬼瓦 B類	38-4 S26E60 表上	左下部小 破片		砂粒、白色粒子 やや多	還元焰/表面暗灰 (N3/0) 断面灰(5Y6/1)	裏面タテナデ。	
8	須恵器 甕?	38-4 S61埋上	胸部小破 片		砂粒や多	還元焰/灰白	外面タテ・ヨコナデ。内面同心円状當て具痕。	7~8世紀
9	須恵器 甕?	38-4 S61埋上	胸部小破 片		砂粒・白色粒子	還元焰/灰	外面平行叩き後間隔をあけた力キ目。内面同 心円状當て具痕。	8世紀

回廊南西部(第63、64図、PL50.51)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 B202a	38-2 S65W0 版巻上中	中房~花 弁小破片		砂粒。白色粒子 目立つ。	還元焰/灰白 (5Y8/1)	擬型。瓦当裏面有絞り布目。	
2	須恵器 蓋	38-2 S65W0 版巻上中	小破片	口径(11.5)	繊維粒	還元焰/断面灰褐色・ 表面灰	ロクロ整形(回転方向不明)。	8世紀
3	土師器 环	38-2 S65W0 版巻上中	口縁部小 破片	口径(14.4)	砂粒	良好/粗	内外面ともナデか。	7世紀後半~ 8世紀前半
4	土師器 甕?	38-2 S65W0 版巻上中	口縁部小 破片	口径(17.7)	砂粒多	良好/粗	内外面ともヨコナデ。	8世紀前半
5	須恵器 甕?	38-2 S70W5 版巻上中	小破片	高台径(12.2)	砂粒・黒色粒子	還元焰/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。	8世紀中葉
6	須恵器 甕?	38-2 S65W0 版巻上中	胸部小破 片		砂粒	還元焰/灰白	外面平行叩き。内面同心円状當て具痕をナデ 消す。	7世紀
7	須恵器 甕?	38-2 S65W0 整地土中	底部小破 片		砂粒・白色粒子	還元焰/断面にぶい 赤帯・表面灰	ロクロ整形(左回転か)。外面手持ちヘラケズ リ。	7世紀
8	軒丸瓦 A101	38-2 S65W10 表上		下部3/4	粗砂粒多。白色 粒子(Φ2mm 以下)が目立つ やや粗・胎土	還元焰/灰暗(N3/0)	擬型。瓦当裏面無絞り布目。丸瓦との境は 円周方向ナデ。突端上面円周方向ケズリ。側 面ヨコナデ。	
9	軒丸瓦 A102	39-7 S55W10 表上		下半部 1/5	砂粒。色の異なる 粘土が細かい 繊維状になる	還元焰/灰(10Y4/1)	擬型。瓦当裏面無絞り布目。	
10	軒丸瓦 B203	39-7 S55W10 表上		下半部小 破片	繊維粒	還元焰/灰(5Y5/1)	擬型。瓦当裏面無絞り布目。	
11	軒丸瓦 B206B	38-2 S70W10 表上		左半部 1/2	砂粒、白色粒子	還元焰/灰(N6/0)	印跡付け。瓦当裏面に溝を掘り丸瓦を当てて 接合。接合用粘土剝離。瓦当裏面粗いナデ。 側面ヨコナデ後タテケズリ。	
12	平瓦	39-7 S55W10 表上		厚さ1.7	砂粒、小礫(Φ 7mm以下)や多	還元焰/灰(2.5Y3/1)断面にぶい 赤(5YR6/4)	一枚作り。凹面系切痕、布目。凸面タテナ デ。端縁面取のヨコケズリ。	凸面にヘラ書 き「子□」
13	平瓦	39-7 S60W10 表上		厚さ1.9	砂粒多	還元焰/灰白 (5Y7/2)	一枚作り。凹面布目。凸面ナデ。	凸面に叩き「廣 山」
14	平瓦	39-7 S60W10 表上		厚さ2.0	砂粒、白色粒子 やや多	還元焰/灰(7.5Y5/1)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書 き「公□」
15	丸瓦	39-7 S55W10 表上		厚さ1.8	砂粒、小礫(Φ 7mm以下)	還元焰。内部一部酸化 焰氣味/凸面灰白 (5Y7/1)断面一部に ぶい赤(7.5YR5/3)	粘土紐作りか。凹面布目、粘土接合痕。凸面 タテナデ。	凸面に薄いヘ ラ書き「□」

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
16	青磁 鏡	38-2 S70-W10 II層中	胸~高台 部断片	底径 5.0			蛇ノ目高台。	越州窯系

回廊北西部(第 64, 65 図、PL51)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 A101	38-3 S11E0 表上	左端部小 破片		砂粒。白色粒子 目立つ	還元焰/灰(5Y6/1)	擬塑型。瓦当裏面無絞り布目、丸瓦・直縫と 縫合は円周方向ナデ。突端上面内円周方向ケズ リ。瓦当側面ナデ。	文様の確認が難く高くはつきりしている
2	土師器 壺	38-3 SJ56	口縁~体 部小破片	口径(14.0)	砂粒	良好/にぶい橙	内面一団部外面ヨコナデ。底部外面手持 ヘラケズリ。	8世紀前半
3	須恵器 蓋	38-3 SJ56	体~端部 1/5	口径(19.2) カエリ径 (16.0)	砂粒・織・白色 粒子	還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外面回転ヘラケ ズリ。	7世紀後~8 世紀初頭
4	土師器 壺	38-3 SJ56	口縁部小 破片	口径(16.8)	砂粒やや多	良好/橙		7世紀後半~ 8世紀前半
5	軒丸瓦 B104	39-8 表上	下半部 1/5		粗粒砂やや多	還元焰。内部やや 酸化気味。表面灰白 (5Y7/1)断面にぶい 黄相(10YR7/3)	瓦当裏面ナデ。	
6	軒丸瓦 B203	39-8 SD10	下半部 1/5		砂粒、白色粒子 やや多	還元焰/灰(5N5/0)	擬塑型。瓦当裏面無絞り布目。布目が不連続 になっている。	
7	軒丸瓦 B301	39-8 S39W10 表上	上半部 1/2		砂粒	還元焰/灰(7.5Y6/1)	擬塑型。瓦当裏面ナデ。	
8	軒平瓦 NH302	39-8 SD10	左半部 1/3	瓦当幅 2.8 側面長 3.0	砂粒やや多	還元焰/灰(7.5Y6/1)	段の小さな曲線型。凹面布目をヨコナデで消 す。側面タテナデ。凸面ナメナデ。額部ヨ コナデ。	
9	軒平瓦 P004	39-8 S40W10 表上	中央部小 破片		砂粒、赤色粒子 (約 12mm 以下もある)	還元焰。内部は酸 化焰気味。表面灰黄 (2.5Y5/2)断面にぶ い橙(5YR6/4)	段型。凹面布目、広端面取のヨコケズリ。凹 面側部ヨコナデ。	凸面に朱付着
10	平瓦	39-8 SD10	中央部小 破片	厚さ 2.1	径のやや大き な白色粒子(φ 4mm 以下)多	還元焰。内部酸 化焰気味。表面灰 (10Y4/1)断面にぶい 赤相(5YR5/4)	一枚作り。凹面糸切痕。布目。凸面ナメナ デ。	凹面にヘラ書き「長」

瓦棗葉坑(第 70 ~ 78 図、PL52 ~ 56)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 A101	36-4 SK128	瓦当部完 形		粗砂粒多、粗 い胎土。白色粒子 目立つ	還元焰/灰(5N4/0)	擬塑型。瓦当裏面無絞り布目。折り目あり。 瓦との境円周方向ナデ。側面タテ・ヨコナデ。	
2	軒丸瓦 不明	36-4 S66E60 SK128	下端部小 破片		磁砂粒、赤色粒子 (径の大きなもの (φ 12mm 以下)もある)	還元焰。内部は酸 化焰気味。表面灰黃 (2.5Y5/2)断面浅黄 相(7.5YR7/1)	瓦当裏面・突端面圓周方向ナデ。側面ヨコ ナデ。	出上地點異なる 2片が接合
3	軒平瓦 U101	36-4 SK128	右半部 1/2	瓦当幅 3.7	砂粒含むが比較的 の緻密。糸 織による粘土が細かい 繩状になる	還元焰。よく焼き締 まり硬質。白面に隕 斑・凹面に隕斑 相(10Y6/1)	一枚作り。曲線型。凹面糸切痕。布目。側面 タテケズリ。瓦当近くヨコナデ。凸面タテ 叩き。側面ヨコナデで一部布目。	凸面に朱付着。 重量がある
4	丸瓦	36-4 SK128	挑端左端 小破片		砂粒、赤色粒子 (φ 5mm 以下)、白 色粒子や目立つ	還元焰/灰(N6/0)	有段。斜に粘土貼り付けか。凹面布目。側面・ 斜端面取抜ケズリ。凸面ヨコナデ後側部はタ テ叩き。挑端一部ヨコケズリ。	
5	丸瓦	36-4 SK128	広端右端 小破片	厚さ 2.0	砂粒。色の異なる 粘土が細かい 繩状になる	還元焰/灰(N5/0)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書き「氏」
6	平瓦	36-4 SK128	中央部小 破片	厚さ 2.0	砂粒、白色粒子 (φ 4mm 以下)、 色の異なる粘土 が細かい繩状に なる	還元焰/灰(N4/0)	凹面布目。タテ指ナデ。凸面平行叩き。	凸面にヘラ書き「□(長か)セ (万呂)」
7	平瓦	36-4 SK128	端部小破 片	厚さ 2.1	砂粒・白色粒子 多、粗・胎土 繩・糸状状になる ところもある	還元焰/灰白 (5Y7/1)	一枚作り。凹面粗い布目。端部面取のヨコケ ズリ。凸面ヨコナデ後タテナデ。	凸面にヘラ書き「□」
8	平瓦	36-4 SK128	端部破片	厚さ 2.0	砂粒、白色粒子 多、粗・胎土 繩・糸状状なる ところもある	還元焰/灰白 (10Y7/1)	一枚作り。凹面糸切痕、布目、端部面取のヨ コケズリ・ナデ。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書き「□(長か) 入」
9	平瓦	36-4 SK128	側端部小 破片	厚さ 2.0	砂粒、赤色粒子 、少量の白 色、少量の 黒(10mm 以下)。	酸化焰気味にぶい 黄相(10YR7/4)	一枚作り。凹面布目。凸面タテナデ。	凸面に墨書き「□」

V 調査した遺構と遺物

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
10	遺瓦 隅木蓋瓦 か	36-4 SK128	小破片		細砂粒と少量の 小礫(φ 3mm 以下)を含むが 緻密	還元焰、内部一部 酸化焰気味。硬質/ 表面と断面中心部 灰(N5/0)・断面灰褐色 (7.5YR6/2)	粘土板を折り曲げ、接着で成形。内外面とも 丁寧なナデ。	
11	平瓦	36-4 SK129	広端左隅 付近 1/3	厚さ 2.7	砂粒多、やや粗 い胎土	還元焰 / 表面灰白 (7.5Y4/1) 断面灰白(5Y7/1)	凹面角切痕と布目、広端ヨコケズリ。 側端面取のタテケズリ。凸面タテナデ、 側端近くはヨコナデも。	凹面に押印「□ に露」、ヘラ書き「大」
12	角閃石安 山岩切石	36-4 SK129		現存長 10.0				
13	軒丸瓦 A101	36-4 抵 1 南 SK130	瓦当部 1/3		白色粒子多、粗 い胎土。薄い層 状になる	還元焰 / 表面灰 (10Y6/1 ~ 4/1) 断面中心部にぶい粒 (SYR6/4)	複型製。瓦当裏面無絞り布目。突帯上面円周 方向ケズリ。側面タテ・ヨコナデ。	
14	軒丸瓦 A302	36-4 抵 1 南 SK130	上部小破 片		砂粒多い粗い胎 土。白色粒子目 立つ	還元焰 / 灰(10Y6/1)	複型製。瓦当裏面無絞り布目。突帯上面ヨコ ケズリ。側面タテケズリ・ナデ。	
15	軒丸瓦 B103	36-4 抵 1 南 SK130	瓦当部一 部欠		砂粒多い粗い胎 土。薄い層状に なる	還元焰 / 灰(5Y6/1)	複型製。瓦当裏面無絞り布目。突帯上面ヨコ ケズリ。側面タテケズリ・ナデ。	瓦当の外形が いづれに内に ならない
16	軒平瓦 P003	36-4 抵 1 南 SK130	右端部小 破片	瓦当幅 3.9 観面長 2.9	白色粒子多、粗 い胎土	還元焰 / 灰(10Y4/1)	一枚作り。段顎。門面布目、瓦の側縁幅の狭 いヨコケズリ。凸面ヨコナデ。観面ヨコケズリ。 側端ヨコケズリ。凸凹面とも面取り状 のケズリ。	凸面に朱付着
17	丸瓦	36-4 抵 1 南 SK130	側端部小 破片	厚さ 2.4	径のやや大き な白色粒子(φ 3mm 以下)多	還元焰 / 灰(10Y4/1)	凹面角切痕と布目、側端面取のタテケズリ。 凸面タテナデ、側端面取のタテケズリ。	凸面にヘラ書 き「大」か
18	軒丸瓦 B103	36-4 抵 1 南 SK131	下部 1/4		砂粒。色の異なる 粘土が細かく 織状になる	酸化焰気味。内部は 還元焰 / 表面にぶい 黄褐(10YR7/3) 断面灰白(5Y7/1)	複型製。周縁上面・瓦当側面平行叩き。裏面 無絞り布目。	
19	軒平瓦 P001	36-4 抵 1 南 SK131	中央部 1/3	瓦当幅 4.3	砂粒。細かい白 色粒子目立つ	還元焰 / 灰(10Y5/1) ~ 灰 (7.5Y4/1) 中心部灰(10Y6/1)	途中に稜をもつ曲線製。凹面タテナデ後瓦当 近づきヨコナデ、凸面タテナデ後ナメ縁叩き、 瓦当側面ヨコナデ。	
20	平瓦	36-4 抵 1 南 SK131	側端部 1/4	扶端幅 25.3 厚さ 1.3 ~ 2.5	砂粒。小礫(φ 8mm 以下)少	還元焰 / 灰白 (5Y8/1)	一枚作り。四面布目、側端ヨコケズリ。狹細 ヨコケズリ。凸面ヨコ・ナメナデ後格子叩 き。側端面の扶端近くは削って幅を狭めてい る。	
21	平瓦	36-4 抵 1 南 SK131	側端部破 片	厚さ 1.9	砂粒。小 礫(φ 8mm 以下)少	還元焰 / 灰(5Y5/1)	一枚作り。門面布目、側端幅の狭いタテケズ リ。凸面タテナデ。	凹面にヘラ書 き「十」
22	軒丸瓦 A102	36-4 抵 1 南 SK132	中央から 左端 1/3		白色粒子、小礫 (長さ 18mm 以 下)	還元焰 / 暗灰(N3/0)	複型製。瓦当裏面無絞り布目。折り目あり。 瓦当側面ナデ。	
23	軒丸瓦 B207b	36-4 抵 1 南 SK132	瓦当部 完形	瓦当幅 15.7 17.0 中房径 2.6	粗砂粒、白色 ・黒色粒子	還元焰 / 灰(5Y5/1)	印捺付け。接合用溝はごく浅く、接着用粘土 も少ない。丸瓦先端は無加工か。瓦当裏面ナ デ、下端と周縁上面は円周方向叩き。瓦当 側面タテ・ヨコナデ。	接合用溝浅く、 接着法が近い。 丸瓦先端は無加工か。瓦当裏面ナ デ、下端と周縁上面は円周方向叩き。瓦当 側面タテ・ヨコナデ。
24	軒丸瓦 B209	36-4 抵 1 南 SK132	瓦当部 完形	瓦当幅 15.7 ~ 17.1 中房径 3.8	粗砂粒、白色粒子	還元焰 / 表面灰 (2.5Y5/1)・断面中心 部灰(10Y6/1)、外側 にぶい粒(5YR6/4)	複型製。瓦当裏面無絞り布目をヨコナデで消 す。丸瓦部との境は円周方向ナデ。丸瓦凸面 タテナデ、瓦当近くは一部ヨコケズリ。側面 タテナデ・ヨコナデ。	第1回調査で は完形品はな い。第2回調 査では完形 品はない。
25	軒丸瓦 C004	36-4 抵 1 南 SK132	下部 1/4		砂粒	還元焰、内部酸化焰 / 表面灰(5Y4/1)、瓦 当表面は白化、断 面にぶい粒(5YR6/4)	複型製。花は茎、株は竹苞状施文具によ る。花文・周縁間は別に掘っている。瓦当裏 面無絞り布目。側面ヨコナデ。	
26	軒平瓦 P001	36-4 抵 1 南 SK132	中央部小 破片	瓦当幅 4.2 観面長 4.4	粗砂粒や多	酸化焰 / ぶい粒 (7.5YR7/4)	わずかな稜をもつ曲線製。四面布目をタテナ デで消す。瓦当近くヨコナデ。凸面ヨコナデ 後ナメ縁叩き。	
27	平瓦	36-4 抵 1 南 SK132	中央部小 破片	厚さ 1.8	砂粒、黒色粒子、 小礫(φ 10mm 以下)	還元焰 / 灰白(N7/0)	一枚作りか。四面角切痕、布目、凸面タテナデ、 側端面取のタテケズリ。	凹面にヘラ書 き「□(人かり)」
28	平瓦	36-4 抵 1 南 SK132	広端左隅 破片	厚さ 2.0	砂粒、白色粒子	還元焰 / 表面灰白 (5Y8/1) 断面暗灰(N3/0)	極厚作りか。四面横骨側板筋らしい段差、系 切痕、布目、側端面取状タテケズリ、広端面 取の粗いヨコケズリ、凸面タテ面叩き後ヨ コナデ。側端面取のタテケズリ。	凹面にヘラ書 き「□」
29	須恵器小皿	36-4 抵 1 南 SK132	ほぼ完形	口径 9.1 底径 4.5 高さ 2.7	砂粒・輝	酸化焰 / 黄灰褐	ロクロ形塑(右回転)。底部回転系切り。	11世紀前半
30	軒丸瓦 B101	36-4 抵 1 南 SK130 ~ 132	上部か 1/3		砂粒。細かい白 色粒子がやや目 立つ	還元焰 / 暗灰(N3/0)	複型製。	

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
31	軒丸瓦 B102a	36-4 抵 I 南 SK130 ~132	下部小破 片		黒色・褐色粒子	還元焰 / 灰(7/7/0)	複型。瓦当裏面無鉢り布目。突帯との境は円周方向ナデ。側面ヨコナデ。	
32	軒丸瓦 C003A	36-4 抵 I 南 SK130 ~132	中央部小 破片		やや大きな白色 粒子(φ 4mm 以下)多。やや 粗い胎土	還元焰 / 灰(4/4/0)	複型。瓦当裏面無鉢り布目。	
33	丸瓦	36-4 抵 I 南 SK130 ~132	側端部 1/6	厚さ 1.6	砂粒、白色粒子、 小礫(φ 10mm 以下)。白色の 粘土が細かい繊 維に入る	還元焰。断面は酸 化焰気味。表面黒褐 (7.5YR3/1)断面にぶ い赤褐(5YR5/4)の部 分多。	凹面系切痕、布目。凸面タテナデ。側端凹凸 とも面取のタテケズリ。	凹面にヘラ書き 「糸」かのぎ へん。
34	平瓦	36-4 抵 I 南 SK130 ~132	中央部小 破片	厚さ 2.0	細砂粒	還元焰 / 灰(2.5Y6/2)凸面にぶ い黄橙(10YR7/3)	凹面布目をヨコナデで消す。凸面タテナデ後 格子印き。	凹面に明き 「雀」A類
35	平瓦	36-4 抵 I 南 SK130 ~132	中央部小 破片	厚さ 1.5	砂粒、白色粒子、 やや粗い胎土	還元焰。断面は酸化 焰気味。表面灰 (5Y4/1)断面にぶい 赤褐(5YR5/4)	凹面布目をヨコナデで消す。凸面格子印き。	凹面に明き 「人」か「人」
36	須恵器 小皿	36-4 抵 I 南 SK130 ~132	1/2	口径(7.9) 底径 4.4 高さ 1.9	砂粒多	酸化焰 / にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り。	表面磨滅
37	平瓦	36-4 抵 I 南 SK130 SK131	広端部 2/3	広端幅 27.3 厚さ 1.6~2.4 ら	砂粒。小礫(φ 8mm 以下)まば ら	酸化焰気味 / 表面浅 黄橙(7.5YR8/4) ~褐灰(7.5YR4/1) 中心部灰(5YR7/1)	一枚作り。凹面系切痕、布目、ごく一部タテ ナデ。側端タテケズリ。広端ヨコケズリ。 凹面ナメ端。側端近くと一部タテナデ後 格子印き。広端に布目付着。	格子印きは 5 カ所。凹面の 方所。側端に布 目が残る。
38	平瓦	36-4 抵 I 南 SK130 SK131	ほぼ完形	全長 40.0 狭端幅(21.0) 広端幅 27.4 厚さ 0.5~2.9	砂粒や多	還元焰。内部一部 酸化焰気味 / 褐灰 (10YR5/1) 断面は部分的に浅黄 橙(10YR8/3)	一枚作り。凹面やや粗い布目。各端面取狀の ケズリ・ナデ。凸面やや粗いタテナデ。	
39	平瓦	36-4 抵 I 南 SK130 SK131	ほぼ完形	全長 37.3 狭端幅(21.5) 広端幅 27.7 厚さ 1.1~2.5	砂粒。小礫(φ 13mm 以下)	還元焰 / 灰(10Y8/1)~灰 (10Y5/1)部分に炭 素吸着黒(10Y2/1)	桶巻作り。凹面系切痕、布目、不明瞭だが側 面粗い段差(幅 2.0~2.5cm)、布の縫じ 合わぬ粗面あり。側端・広端面取狀ケズリ。凸 面ヨコナデ。	
40	平瓦	36-4 抵 I 南 SK130 ~132	ほぼ完形	全長 37.9 狭端幅(20.0) 広端幅 26.3 厚さ 1.2~2.3	砂粒多。白色粒 子目立つ	還元焰 / 灰(7.5Y8/1)	桶巻作り。凹面系切痕、布目、板骨側板痕(幅 2.2~2.8cm)明瞭。各端面取狀ケズリ。粘 土板接合痕をタテ指ナデで消す。凸面タテ 継印き後粗いヨコナデ。	

瓦廄棗層(中門周辺)(第 79 ~ 82 図、PL57, 58)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 A302	38-1 S75E10	下部小破 片		粗砂粒多、粗い 胎土。白色粒子 目立つ	還元焰 / 暗青灰 (5BG3/1)	複型。周縁上面・瓦当側面円周方向ケズリ。 裏面無鉢り布目。	
2	軒丸瓦 B001a	38-1 S75E10	右下部 小破片		粗砂粒多。粗 い胎土。白色粒子 目立つ	還元焰。内部は酸化 焰気味。表面・中心 部灰(15Y7/1)、側端 断面橙(7.5YR7/6)	接合系。周縁表面粗いナデ。瓦当側面円周方 向ケズリ・ナデ。裏面ケズリ。	
3	軒丸瓦 B101	38-1 S75E10	上部小破 片		白色粒子多	還元焰 / 灰(10Y4/1)	複型。瓦当側面ヨコケズリ。裏面無鉢り布 目。	
4	軒丸瓦 B101	38-1 S75E10	上部小破 片		粗砂粒含む比較的 の細密	還元焰。破質・青黒 (5B2/1)及当面と丸 瓦	複型。丸瓦部凸面タテナデ、瓦当近くヨ コナデ。裏面無鉢り布目。丸瓦部裏面は一部ヨ コナデ。	
5	軒丸瓦 B201a	38-1 S75E10	真当部 ほぼ完形	瓦当幅 16.7 中房径 3.8	粗砂粒。織籠 白色粒子目立つ	還元焰 / 灰(5Y5/1)	横置型。瓦当側面丸瓦側タテナデ・ケズリ、 下側ヨコナデ。瓦当裏面ヨコナデ。	
6	軒平瓦 P002B	38-1 S75E10	中央部破 片	瓦当幅 5.1	粗砂粒。白色粒子目立つ	酸化焰気味 / 瓦当面 黒褐(10YR3/1)面内 にぶい橙(5YR6/4)	凹面ヨコナデ、布目見えない。凸面ヨコナデ。	
7	平瓦	38-1 S75E10	端部小破 片	厚さ 1.6	細砂粒。赤色粒 子	酸化焰気味 / 表面 灰白(5Y7/1)~灰 (5Y4/1)断面にぶい 橙(7.5YR7/4)	一枚作りか。凹面布目、端ヨコケズリ。凸面 タテナデ。	凸面にヘラ書き 「□」。毎面 に線の模様が異 なり、文字で はない可能性 もある
8	平瓦	38-1 S75E10	狭端左隅 小破片	厚さ 1.7	砂粒、赤色粒 子	還元焰 / 灰(5Y8/1)	一枚作り。凹面布目。凸面タテナデ。	凹面にヘラ書き 「キ」。先の 同じものと書 く。縫綫が長 く記号か
9	平瓦	38-1 S75E10	広端左隅 小破片	厚さ 1.7	砂粒	還元焰 / 表面黒色 處理。灰(7.5Y3/1) ~オリーブ(7.5Y3/1) 断面黄(2.5Y7/2)	一枚作り。凹面粗い布目、側端面取のタテケ ズリ。凸面タテナデ、側端・広端面取のケズリ。	凸面にヘラ書き 「山か」。書 き範囲が異 なり、「山」は ない可能性も 高い

V 調査した遺構と遺物

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
10	丸瓦	38-1 S75E10	広端 2/5	広端幅 21.3 厚さ 1.3~2.5	粗砂粒、径の大きな白色粒子。 (φ 3mm以下) 色の異なる粘土が細かい繊状になる	還元焰、凸面融解・ 降灰 / 灰(10Y4/1)	凹面布目。凸面タテナデ。側端・広端凹凸とも面取のケズリ。	円弧のカーブが綺い
11	丸瓦	38-1 S75E10	狭端 2/3	狭端幅 12.0 厚さ 0.8~2.0	粗砂粒、白色・ 黒色粒子	還元焰 / 青灰(5B5/1)	無段。凹面系切痕、布目。凸面ヨコ一部タテナデ。側端凹凸とも幅狭いタテケズリ。	
12	丸瓦	38-1 S75E10	ほぼ完形	全長 40.2 広端幅(18.3) 厚さ 1.4~2.4	粗砂粒、白色粒 多。(φ 7mm以下) 多、粗い胎土	還元焰、内部一 部酸化焰気味 / 灰 (5Y5/1)	無段。凹面布目。凸面密な平行叩き、狭端側 10.2cmのところに連結部の痕跡。	
13	平瓦	38-1 S70E10	狭端右側 1/4	厚さ 1.8	砂粒多、やや粗い 胎土、黑色 粒子、小窓(φ 5mm以下)	還元焰 / 灰(10Y6/1)	桶巻作り。凹面模倣側板痕(幅1.2~2.0cm)、 系切痕、布目、側端・広端面取状ケズリ。凸 面タテ・ヨコナデ。	
14	平瓦	38-1 S75E10	狭端 2/3	狭端幅(26.0) 厚さ 1.5~2.0	砂粒やや多 少	酸化焰、表面は還 元焰 / 表面に赤い 粒(7.5YR6/4)~灰黄 (2.5Y6/2)	門面丁寧なタテナデ、布目見えない。側端・ 狭端面取のケズリ。凸面タテ・ヨコナデ後ま ばらな格子叩き。	
15	平瓦	38-1 S75E10	広端 3/4	広端幅 25.5 厚さ 1.8~3.2	砂粒、小窓(φ 5mm以下)、色 の異なる粘土が細 かい繊状にな る	還元焰 / 灰(5Y5/1)	一枚作り。凹面系切痕、布目、側端タテケズリ、 凸面にヘラ書き□(口か)中央糸口ケズリ。	
16	須恵器 高台付盤	38-1 S75E15	口縁~底 部 1/4	口径(12.0) 高台径(6.0) 高さ 3.5	砂粒・黒色粒子	還元焰 / 灰白	クロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後高台 貼付。	10世紀前半
17	須恵器 高台付盤	38-1 S75-E10	口縁 1/4	口径 14.0 高台径 8.0 高さ 2.3	砂粒・白色粒子 多	還元焰 / 灰白	クロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後高台 貼付。	10世紀前半
18	須恵器 片	38-1 S75-E10	底部破片	底径 5.5	砂粒・赤色粒子、 難	酸化焰 / 浅黄橙	クロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り。	10世紀後半
19	須恵器 円筒瓶	38-1 S75-E10	脚部小破 片		砂粒・白色粒子	還元焰 / 灰	クロクロ整形(回転方向不明)。約 1.5cm 間隔 に透かし穴(方形か)とタテの刻線。	
20	角閃石岩 山岩切石	38-1 S75-E10	現存長	15.3				

瓦類集層(回廊南東部)(第 83 ~ 106 図、PL.59 ~ 72)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 A004	36-4 S66E65	上端部小 破片		粗砂粒。色の異 なる粘土が細かい 繊状になる	還元焰、内部は酸 化焰気味 / 表面灰 (10Y6/1)断面に赤い 粒(7.5YR6/4)断面中 心部灰(5Y5/1)	接合系の技法。丸瓦部凸面タテナデ。凹面布 目を部分的にタテナデし、その後瓦当表面と 丸瓦との境付近をヨコナデ。	丸瓦を接合す る。接合用の 溝は觀察でき ない
2	軒丸瓦 A101	36-4 拾 3	下部 2/5		砂粒、径のやや 大きな白色粒子 (φ 6mm以下) 多。やや粗い胎 土	還元焰 / 灰(N4/0)	縦置型。瓦当側面タテ・ヨコナデ。裏面無綴 り布目、一部指ナデ。突帯上面円周方向ケズ リ。	
3	軒丸瓦 B001a	36-4 扯 2 南 S70E55	下部小破 片		砂粒	還元焰 / 灰白 (5Y8/1)	接合系の技法。瓦当側面ヨコナデ。裏面ナデ。	
4	軒丸瓦 B003	36-4 拾 3	右下部 1/3		砂粒多	やや酸化焰気味 / 灰黄(2.5Y7/2)	縦置型。瓦当側面粗い不整方向ケズリ。裏面 無綴り布目。突帯上面円周方向ケズリ。	丸瓦内側の先 端に瓦当の粘 土円板を接合 して製作か
5	軒丸瓦 B004	38-8 S57E60	下部 1/4		粗砂粒。白色粒 子目立つ	還元焰 / オリーブ灰 (2.5Y5/1)	縦置型。瓦当側面円周方向ナデ。裏面無綴り 布目	裏面の左には特 殊な縫合の布 使用か
6	軒丸瓦 不明	36-4 S66E65	下部 1/5		砂粒	酸化焰気味 / 表面に 赤い黄緑(10Y7R4/4) 断面灰白(5Y7/2)	縦置型。瓦当側面円周方向ケズリ・ナデ。裏 面ナデ、中央部に無綴り布目残る。	文様がごく薄 い
7	軒丸瓦 B101	36-4 S66E65	右部小破 片		砂粒	還元焰、表面一部隣 灰 / 灰(N4/0)	縦置型。瓦当部凸面ヨコナデ。瓦当裏面~丸 瓦内側無綴り布目。	裏面の布は特 殊な縫合の布 使用か
8	軒丸瓦 B101	36-4 S66E65	右下部小 破片		砂粒。白色粒子 目立つ	還元焰、内部は酸 化焰気味 / 表面灰 (10Y5/1)断面に赤い 粒(5YR5/1)	縦置型。瓦当側面円周方向ナデ。突帯上面円 周方向ケズリ。裏面無綴り布目。	
9	軒丸瓦 B102a	36-4 拾 3	右部 1/4		砂粒含むが細 纖	やや酸化焰気味 / 表 面黒色斑点か、灰 黄(2.5Y6/2)~黑 (2.5Y7/1)断面に赤 い粒(5YR5/1)	縦置型。瓦当側面ヨコナデ。裏面無綴り布目、 丸瓦・突帶との境は円周方向ナデ。	
10	軒丸瓦 B104	38-8 S57E60	右半部 2/5		砂粒、赤色粒子 やや多。部分的 に色の異なる粘 土が細かい繊状に なる	酸化焰気味、やや軟 質 / 表面斑点吸着、 黒(N2/0)断面に赤い 粒(5YR7/4)	印付け。溝を掘って丸瓦を差し込む。瓦当 裏面ナデ。丸瓦凸面タテ・ヨコナデ。	

No	種類 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
11	軒丸瓦 B104	36-4 S66E60	中央部小 破片		砂粒。小窪(φ 12mm以下)少 量	還元焰/灰(10Y6/1)	瓦当裏面ナデ。	裏面に朱付着
12	軒丸瓦 B201a	36-4 S66E60	右下部小 破片		砂粒やや多。 白色粒子目立つ	還元焰/灰(10Y4/1)	横型置。瓦当側面ヨコナデ。裏面ナデ。	文様がつぶれ て当地面
13	軒丸瓦 B203	38-8 S57E60	上部 1/4		織砂粒	還元焰/灰(5Y6/1)	縦型置。瓦当裏面無紋り布目。丸瓦凸面ヨコ ナデ。	瓦当裏面～丸 瓦当面全体に 朱が付着
14	軒丸瓦 B206B	38-8 S57E60	下部小破 片		粗砂粒、白色粒 子、白色小窪(φ 5mm以下)	還元焰/灰白 (5Y7/1)	瓦当裏面ナデ。側面円周方向ケズリ。	瓦当部が厚い
15	軒丸瓦 B206B	36-4 S66E60	周縁上部 3/4欠	瓦当径(15.6) 中房径 3.1	粗砂粒多。やや 粗い胎土。白色 粒子目立つ	酸化焰気味/灰 黄(2.5Y6/2)	印彫付け。周縁上面円周方向ケズリ。瓦当側 面円周方向ナデ。裏面粗いナデ。	周縁が低い
16	軒丸瓦 B207a	38-8 S57E60	瓦当部 ほぼ完形 上端部欠		砂粒、白色粒 子。白色小窪(φ 12mm以下)	還元焰。内部一 部酸化焰気味/灰 (5Y6/1) 断面は灰褐色(5YR5/2) の部分がある	縦型置。瓦当裏面無紋り布目、布の折り目あり。 → 瓦当側面下半・突帯上面円周方向ケズリ・ ナデ。	
17	軒丸瓦 C002	38-8 S57E60	ほぼ完形 丸瓦部欠	瓦当径 16.4 ～ 17.0 中房径 2.9	織砂粒	還元焰、硬質/灰 (10Y6/1)	縦型置。花弁と周縁の間の沈線は范ではなく 手描き。瓦当裏面無紋り布目。周縁上面・瓦 当側面下半・突帯上面は円周方向ケズリ。瓦 当側面上半はタテケズリ。	裏面の布目が 非常に細かい。 手描きの合わ せがあり、 落としている らしい。第1 期調査では完 形品はない
18	軒丸瓦 C003A	36-4 抵 2 北 S61E60	下部 4/5		粗砂粒多、粗い 胎土	還元焰/灰(7.5Y4/1)	縦型置。瓦当側面円周方向ナデ。突帯上面円 周方向ケズリ。裏面無紋り布目。	
19	軒丸瓦 C003A	36-4 抵 2 北 S61E60	上部小破 片		粗砂粒、粗い胎 土。孫のやや大 きい白色粒子(φ 3mm以下) 目立つ	還元焰/灰(5Y5/2)	縦型置。丸瓦凸面タテナデ。凹面布目。瓦 当裏面無紋り布目。	
20	軒丸瓦 C004	36-4 抵 2 北 S61E60	下部 1/3		砂粒	酸化焰/にぶい橙 (5YR6/4)	縦型置。花文のみ范。周縁と花文の間の注線 は手描き。珠文は竹管状工具。周縁上面・瓦 当側面下半に平行叩き残る。突帯上面ケズリ。裏 面無紋り布目。	
21	軒丸瓦 E102	38-5 S50E60	上部小破 片		砂粒	還元焰 / 表面素吸 着。灰(N5/0) 断面灰白(2.5Y8/1)	印彫付け。丸瓦は薄く、凸面に圓叩き。瓦当 裏面・丸瓦正面円周方向ナデ。	
22	軒丸瓦 E109	36-4 S66E65	周縁上部 欠	瓦当径 15.7 中房径 3.7	粗砂粒。白色粒 子目立つ。小窪 (φ 10mm以下) 少量	還元焰/灰(5N6/0)	印彫付け。瓦当側面円周方向の粗いナデ。裏 面粗いナデ。	
23	軒丸瓦 E103	38-8 S57E60	瓦当部完 形	瓦当径 16.2 中房径 4.5	やや径の大き な白色粒子(φ 2mm以下)多	還元焰/灰(7.5Y5/1)	接合系。瓦当裏面～丸瓦正面指ナデ、裏面下 端部は円周方向ナデ。丸瓦凸面～瓦当側面下 半部タテケズリ・ナデ。	
24	軒丸瓦 M002	38-8 S57E60	花弁小破 片		砂粒、黒色粒子	還元焰/灰白 (5Y8/1)	接合系。瓦当裏面ナデ。	
25	軒丸瓦 不明	36-4 S66E65	左端部小 破片		織砂粒含むが破 密	還元焰で焼質、内部 は酸化焰気味 / 表面 粗(5M3/0) 断面にぶく赤褐色 (5YR5/3)	接着。瓦当裏面に丸瓦を接着。接合用粘土は ごく少額。丸瓦部凸面ヨコナデ。瓦当裏面 側面に丸瓦との境は円周方向ナデ。	A004に似るが 少しひがんで 同組は確定で きない
26	軒丸瓦 不明	38-8 S57E60	瓦当ほぼ 欠 丸瓦部 1/2		粗砂粒。砂っぽ い胎土	酸化焰気味。内部 は還元焰/表面浅黃 (2.5Y7/3) ～ にぶい 橙(7.5YR7/4) 断面中心部灰白 (5Y8/1)	縦型置。丸瓦凸面タテナデ。凹面系切痕、 布目。	
27	軒平瓦 P001	36-4 S66E65	左半部 1/2	瓦当幅 4.3	砂粒	還元焰/灰黄 (2.5Y7/2) 一部に表面黒色処理 の痕跡が残る	一枚作り。途中に枝をもつ曲線製。凹面布目 を粗いヨコ・ナメナデで消す。瓦当付近ヨコ ナデ。側面端面取のタテケズリ。凸面タテナ デ後端付近ヨコナデ、後ナナメ圓叩き。	剥離した瓦当 面
28	軒平瓦 P002B	36-4 S66E65	右端付近 小破片	瓦当幅 5.2	砂粒多	還元焰/灰(N4/0)	凹面ヨコナデ、凸面ヨコナデ。	
29	軒平瓦 P002B	36-4 抵 3	左端部小 破片	瓦当幅 5.4	砂粒多。細かい 白色粒子目立つ	還元焰/灰(5Y5/1)	ほぼ無質。凹面タテナデ、側面端面取のタテケ ズリ。	
30	軒平瓦 P203	38-5 S50E60	中央部小 破片	瓦当幅 6.0 張面長 1.7	砂粒	還元焰/灰白 (10Y7/1)	はっさきした顎面をもつ曲線製。顎は平瓦凸 面に刻みを入れて粘土で貼り付ける。凹面布 目をナナメナデで消す。瓦当近くヨコナデ。凸 面端面を含めてヨコナデ。	凸面に朱付着
31	軒平瓦 U001	38-8 S57E60	中央部小 破片	瓦当幅 4.6 張面長 3.8	織砂粒、黑色粒 子	段削。塑部は貼り付け。瓦当周縁部ヨコケズ リ。凹面系切痕、布目、瓦当近くヨコケズリ。凸 面ヨコナデ。		

V 調査した遺構と遺物

No	種類 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
32	軒平瓦 Z001	36-4 S66E65	ほぼ完形	全長34.5 上弦幅(25.5) 下弦幅(27.3) 瓦当中央幅 (5.0) 平瓦厚1.6～ 2.6	粗砂粒多。粗い 胎土上。小窪(φ 18mm以下)少 量	還元焰、内部は醸 化焰気味 / 表面灰 (7.5Y5/1～N4V/0) 中心部	一枚作り。凹面系切痕、布目、一部無いタテ 指ナデ、側端面取のタテケズリ。凸面タテナ デ、瓦当側の縁はヨコケズリ。	凹面に押印「□」。金属印 か
33	丸瓦	36-4 抵1南 S75E30	中央部小 破片	厚さ2.0	粗砂粒。白色粒 子目立つ	還元焰 / 灰(7.5Y5/1)	凹面布目。凸面ヨコ・ナナメナデ。	凸面に押印「二 重□」の方。金 属製の印らし い
34	丸瓦	36-4 抵1南 S75E30	中央部小 破片	厚さ2.3	粗砂粒。白色粒 子(φ 4mm以 下)、やや粗、 胎土	還元焰 / 灰(10Y5/1)	凹面糸切痕、布目。凸面タテナデ。	凹面に押印 「○」が2つ
35	丸瓦	38-8 S57E60	端部破片	厚さ1.5	砂粒。細かい割 れをなす	還元焰 / 凸面灰白 (7.5YR8/2) 門面灰(10Y6/1)	凹面糸切痕、布目。凸面タテナデ。	凹面に押印 「○」の外 径は1.7cm
36	丸瓦	36-4 抵2南	広端右隅 小破片	厚さ1.9	粗砂粒	やや醸化焰気味 / 暗 灰黄(2.5Y5/2)～に ぶい黄粒(10YR6/4)	凹面布目。側端面取のタテケズリ。側端面タ テケズリ。凸面タテ・ヨコナデ。	本來は表面黒 色鉄斑が凸 面へラ書き 「枚(万瓦)」
37	丸瓦	36-4 抵3	広端左側 1/3	厚さ2.1	粗砂粒多	還元焰、内部は醸 化焰気味 / 表面灰 (5Y6/1)断面ににぶい 粒(7.5YR7/3)	凹面布目、側端幅の広いタテケズリ。凸面ヨ コ・ナナメナデ、側端幅の広いタテケズリ。	凸面剥離ひど い。凹面にヘ ラ書き「生」
38	丸瓦	36-4 S66E65	狭端右隅 小破片	厚さ1.7	砂粒	醸化焰気味 / にぶい 黄(2.5Y6/3)	鋏作り。無段。凹面布目、組造りの接合痕が 残る。凸面ヨコナデ後タテナデ。側端面凹凸 両方にモザイクのタテケズリ。	凸面にヘラ書 き「十」
39	丸瓦	36-4 S66E65	広端右隅 欠	全長41.0 狭端幅(14.5) 厚さ1.6～3.0	粗砂粒多。小窪 (φ 20mm以下) 厚さ1.6～3.0	還元焰 / 灰白 (10Y7/1)～灰 (10Y4/1)	無段。凹面糸切痕、布目。側端・広端面取状 のケズリ。凸面タテナデ。後一部ヨコナデ、 側端面取状のタテケズリ。	凸面にヘラ書 き「二国二野 部」
40	丸瓦	36-4 S66E65	完形	全長41.8 広端幅19.5 狭端幅14.8 厚さ1.3～2.0	砂粒。小窪(φ 20mm)少量。 色の異なる粘土 が細かい構造に なる	還元焰 / 灰白 (7.5Y7/1)～灰 (7.5Y4/1)	無段。凹面糸切痕、布目、各端面取のケズリ、 凸面タテナデ、一部糸切痕残る。	凹面にヘラ書 き「大」
41	丸瓦	38-8 S57E60	広端左隅 1/4	厚さ1.8	砂粒、赤色粒 子多	醸化焰気味 / 表面灰 (5Y6/1) 断面粒(2.5YR6/6)	凹面布目。広端・側端面取のケズリ。凸面タ テケズリ後ヨコナデ、側端面取のタテケズリ。	
42	丸瓦	36-4 S66E65	広端右隅 付近1/2	厚さ1.9～2.6	砂粒。色の異 なる粘土が細か い構造になる	醸化焰気味 / 表面灰 (5Y8/1)断面粒 黄(7.5YR8/4)	凹面糸切痕、布目、布縫合せ痕あり、側 端面取状のタテケズリ。布目は広端面にまで 及ぶ。凸面羽状の平行叩き。	
43	丸瓦	36-4 S66E65	広端部欠	狭端幅12.0 厚さ1.2～2.0	砂粒多。小窪(φ 7mm以下)少量	還元焰 / 灰(10Y5/1)	無段。凹面糸切痕、布目、各端面取のケズリ、 凸面タテナデ。側端面取のタテケズリ。	凸面表面の狭 端から14～ 15cmのところ に色の変化が ある。連結部 を示すものと 思われる
44	丸瓦	36-4 S66E60	ほぼ完形	全長37.7 広端幅16.2 中央幅16.2 狭端幅12.6 厚さ0.9～2.3	粗砂粒多。片 岩等の小窪(φ 12mm以下)少 量	還元焰 / 灰(N5/0)	無段。凹面布目。割れ目等を指ナデで補修、 側端と広端面取のケズリ。凸面巣なタテ箆印 後タテナデ。側端面取のタテケズリ。	
45	丸瓦	36-4 S66E65	完形	全長36.3 広端幅20.1 狭端幅11.4 厚さ0.9～2.1	砂粒	還元焰 / 灰(10Y4/1 ～6/1)	無段。凹面布目。和積み痕がごくわずかに残 る。各端面取状のケズリ。凸面タテナデ。	
46	平瓦	38-8 S57E60	中央部小 破片	厚さ1.6	粗砂粒多	還元焰 / 灰黄 (2.5Y6/2)	凹面糸切痕、布目。凸面ナナメナデ後格子印 き。	凹面に「△」 「△」印。別に打たれる 格子印が從 来知られてい たものと異な り、「勢(多)」 と同一
47	平瓦	36-4 S66E70	中央部小 破片	厚さ1.8	砂粒	醸化焰 / 表面黒色 處理。黑斑(2.5Y3/1) 断面ににぶい粒 (5YR6/4)	一枚作り。凹面布目。凸面ヨコ・ナナメナ デ後叩き。	凹面に「△」 「△」印。別に打たれる 格子印が從 来知られてい たものと異な り、「勢(多)」 と同一
48	平瓦	36-4 S66E65	狭端右隅 小破片	厚さ1.9	細砂粒	やや醸化焰気味 / 浅 黄(2.5Y7/3)	一枚作り。凹面糸切痕、布目、側端幅の狭い 面取。凸面タテナデ後叩き。	凸面に叩き「廣 田」
49	平瓦	36-4 S66E70	中央部小 破片	厚さ2.3	砂粒、細かい白 色粒子、径のや や大きな黒色粒 子(φ 5mm以 下)	還元焰 / 灰(5Y6/1)	凹面糸切痕と布目。凸面ナデ後叩き。	凸面に叩き「山 田」
50	平瓦	36-4 S66E65	端部1/5	厚さ1.6	砂粒	還元焰 / 暗灰(N3/0)	一枚作り。凹面布目、シワ多い。凸面タテナデ。	全体に難な造 り。凸面に叩 き「山田」。文 字不明瞭

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
51	平瓦	36-4 S66E65	端部~中 央部 1/4	厚さ 1.9	砂粒や多、細 かい白色粒子目 立つ	還元焰 / 灰(5Y5/1)	一枚作り。凹面系切痕と布目、粗い指ナメ ナデ。凸面ナデ後叩き。	凸面に叩き「山 田夫」
52	平瓦	36-4 S66E65	端部~中 央部 1/5	厚さ 2.1	砂粒や多、細 かい白色粒子目 立つ	還元焰 / 灰(5Y6/1)	一枚作り。凹面布目を粗い指ナメナデ。ヨコナ デ消す。凸面ヨコナデ後叩き、端面取のヨ コケズリ。	凸面に叩き「山 田夫」
53	平瓦	36-4 S66E55	中央部小 破片	厚さ 1.9	織砂粒	還元焰 / 灰(N5/0)	凹面ヨコナデ。凸面タテ・ナナメナデ。	凸面に押印「 に幾」、「後」は 「茂」か
54	平瓦	36-4 扯 2 南 S70E60	中央部小 破片	厚さ 2.4	粗砂粒、白色粒 子(ø 4mm 以 下)	還元焰 / 灰(10Y6/1)	凹面布目。一部粗い指ナメ。凸面ヨコ・ナ メナデ後叩き。	凸面に叩き「 多」
55	平瓦	36-4 S66E65	挨端左隅 1/5	厚さ 1.2 ~ 2.0	砂粒多	還元焰 / 灰白 (5Y7/2)	一枚作り。凹面布目。凸面ナナメナデの叩き。 凹面端面凹凸と底面のヨコケズリ。	凸面に叩き「子 王」
56	平瓦	36-4 S66E65	端部小破 片	厚さ 1.5	砂粒多	やや酸化焰気味 / に ぶい黄(2.5Y6/3)	一枚作り。凹面布目。凸面ヨコナデ。	凸面に叩き「子 王」
57	平瓦	36-4 S66E65	側端部小 破片	厚さ 1.6	砂粒多	還元焰 / 灰(10Y8/1)	一枚作り。凹面布目。凸面タテナデ後叩き。	凸面に叩き「廣 山」
58	平瓦	36-4 S66E65	挨端左隅 2/5	厚さ 0.8 ~ 2.2	砂粒多、全体に 砂っぽい	還元焰 / 灰(5Y4/1)	一枚作り。凹面布目。側端面取のタテケズリ。 凸面タテナデ。側端面取のタテケズリ。	凸面に叩き「廣 山」、ヘラ書き 「× ×」
59	平瓦	36-4 S66E65	铁端部 4/5	厚さ 1.8	砂粒	還元焰 / 暗灰 (10Y4/1) ~ 灰 (7.5Y5/1)	一枚作り。凹面系切痕、布目、側端と扶端に 面取のケズリ。凸面タテナデ。側端は面取の タテケズリ。	凸面に叩き「廣 山」5カ所
60	平瓦	36-4 S66E65	挨端右隅 付近 1/3	厚さ 1.8	砂粒多	やや酸化焰気味 / に ぶい黄橙(10YR6/3)	一枚作り。凹面系切痕、布目。側端・扶端の 広いタテケズリ。扶端面取のヨコケズリ。凸面ナ ナメナデ後叩き。	凸面に叩き「 雀」A類
61	平瓦	36-4 S66E65	ほぼ完形	全長 39.5 広端幅 26.5 中央幅 24.3 扶端幅 21.7 厚さ 1.1 ~ 2.1	砂粒	酸化焰 / にぶい黄 橙(10YR6/4) ~ 橙 黄(5YR6/5) 黄斑状に黒 い部分も多い	一枚作り。凹面系切痕、布目、一部ごく粗い ヨコナデ。各端面取のケズリ。凸面系切痕、 面取のケズリ。側端叩き 6カ所。	凸面に押印 「佐」G類
62	平瓦	36-4 S66E65	完形	全長 38.6 広端幅 26.5 扶端幅 21.5 厚さ 1.2 ~ 2.1	砂粒	酸化焰 / にぶい黄 橙(10YR7/4) ~ 橙 黄(5YR6/6)	一枚作り。凹面布目を粗くヨコナデで消す。 側端面取のタテケズリ。凸面タテナデ後 格子叩き 6カ所。	凸面に押印 「佐」C類
63	平瓦	36-4 S66E65	広端右隅 1/4	厚さ 2.0	砂粒。細かい白 色粒子が目立つ	酸化焰氣味 / にぶい 黄橙(10YR6/3)	一枚作り。凹面布目を粗くヨコナデで消す。 側端面取のタテケズリ。凸面ナナメナデ後格 子叩き。	凸面に叩き「佐 子」C類
64	平瓦	36-4 S66E65	扶端右隅 1/4	厚さ 2.0	砂粒	酸化焰氣味、内部は 還元焰 / 表面上に ぶい黄橙(10YR7/3) 断面 中心部灰(10Y6/1)	一枚作り。凹面布目。一部粗いタテナデ。側 端面タテケズリ。凸面ヨコナデ後タテナデ。	凸面にヘラ書 き「田か」
65	平瓦	36-4 S66E65	扶端左隅 1/5	厚さ 1.8	砂粒多	酸化焰氣味、やや軟 質 / 灰(5YR5/2)	一枚作り。凹面布目。側端面取状タテケズリ。 扶端面取のタテケズリ。凸面タテ・ナナメナ デ。	凸面に叩き「井 か」
66	平瓦	36-4 S66E65	端部~中 央部 1/4	厚さ 2.1	砂粒。色の異なる 粘土が細かい、 扁状になる	酸化焰氣味 / 表面浅 黄(2.5Y7/3) 断面に ぶい橙(5YR7/2)	一枚作り。凹面布目。端面取のヨコケズリ。 凹面タテ一部ヨコナデ。	凸面に押印 「○」
67	平瓦	36-4 S66E65	中央部小 破片	厚さ 2.3	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焰 / 灰(5Y5/1)	凹面系切痕と布目をヨコナデで消す。凹面系 切痕。	凸面に叩き 「□」
68	平瓦	36-4 S66E65	扶端右隅 破片	厚さ 1.7	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焰 / 灰(5Y5/1)	一枚作り。凹面布目。側端面取のタテケズリ。 側端・扶端面取のケズリ。凸面タテ・ヨ コケズリ後叩き。	凸面に叩き 「□」
69	平瓦	36-4 扯 2 南 S70E50	側端部小 破片	厚さ 2.0	粗砂粒。赤色粒 子目立つ	酸化焰氣味 / 表面 にぶい黄(2.5Y6/3) 断面にぶい橙 (7.5YR6/4)	一枚作り。凹面系切痕、布目。側端面取の タテケズリ。凸面系切痕と粗くナデ消す。側端 面取のタテケズリ。側端タテケズリ。	凸面にヘラ書 き「辛□」
70	平瓦	36-4 扯 2 北 S61E60	広端左隅 小破片	厚さ 2.0	砂粒。色の異なる 粘土が細かい、 扁状になる	酸化焰氣味 / 表面 にぶい黄(2.5Y7/4) 断面にぶい橙 (5YR7/4)	一枚作り。凹面布目。側端面取り状タテナデ。 側端面タテナデ。凸面タテナデ・側端面取の タテケズリ。	凸面にヘラ書 き「□」。文字 の一歩か。
71	平瓦か	36-4 S66E55	中央部小 破片	厚さ 1.7	粗砂粒	還元焰 / 内部酸化焰 氣味 / 表面灰 (10Y5/1) 断面中心部 にぶい橙(5YR6/3)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書 き「大」
72	平瓦か	36-4 S66E65	中央部小 破片	厚さ 2.1	砂粒多	還元焰 / 内部酸 化焰氣味 / 表面灰 (5Y6/1) 断面にぶい橙 (5YR6/4)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書 き「井」
73	平瓦	36-4 S70E55	端部中央 小破片	厚さ 1.5	粗砂粒。やや粗 い胎土	還元焰 / 灰(10Y5/1)	一枚作り。凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書 き「山」
74	平瓦	38-8 S57E60	中央部小 破片	厚さ 2.2	粗砂粒多、やや 粗い胎土	還元焰 / 灰(N4/1)	凹面系切痕、布目。凸面ナナメナデ。	凸面にヘラ書 き「山」

V 調査した遺構と遺物

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
75	平瓦か S66E60	36-4	中央部小 破片	厚さ 1.8	砂粒多	還元焰/灰(N4/0)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書き「□(六か)下」
76	平瓦	36-4	側端部小 破片	厚さ 2.1	粗砂粒多	還元焰/灰(7.5YS/1)	一枚作りか。凹面布目。凸面タテナデ。	凸面に「□」
77	平瓦	36-4 S66E65	狭端右隅 小破片	厚さ 1.8	砂粒多	還元焰/灰黄 (2.5Y7/2)	一枚作り。凹面布目、側端・狭端面取のタケズリ。凸面タテナデ、側端面取のタケズリ。	No 78 に特徴が似ている。凸面にヘラ書き「×」
78	平瓦	36-4 S66E70	側端部小 破片	厚さ 2.0	砂粒多	還元焰/灰白 (5Y7/1)	一枚作りか。凹面布目、側端面取のタケズリ。凸面タテナデ、側端面取のタケズリ。	No 77 に特徴が似ている。凸面にヘラ書き「足」
79	平瓦	36-4 S66E65	広端右隅 1/4	厚さ 1.8	砂粒	酸化焰氣味/表面灰 白(7.5Y8/1)断面浅 黄(10Y8R/3)	一枚作り。凹面系切痕、布目、側端面取のタケズリ。凸面タテナデ、側端面取のタケズリ。	凹面にヘラ書き「足」
80	平瓦	36-4 拙 3	広端左隅 1/5	厚さ 1.8	粗砂粒多、やや 粗い胎土、小破 (φ 8mm)少量	還元焰/灰(10Y5/1)	一枚作り。凹面布目、側端面取のタケズリ。	凸面にヘラ書き「□□」
81	平瓦	38-8 S57E60	広端左隅 1/3	厚さ 1.7	粗砂粒	還元焰/灰(10Y5/1)	一枚作り。凹面布目、広端・側端面取の相抜 いタケズリ。凸面密な平行印記。	凸面にヘラ書き「長び(万 呂)」
82	平瓦	36-4 拙 3	右半部 1/2	長さ 37.5 厚さ 1.7 ~ 3.0	粗砂粒。白色粒 子目立つ	還元焰/灰(10Y4/1)	一枚作り。凹面布目。凸面タテナデ。側端面 は凹凸側面とも面取のタケズリ。	凸面にヘラ書き「□□□ (○藏子長麻呂 か)」
83	平瓦	36-4 S66E65	ほぼ完形	長さ 40.5 中央幅 2.6 厚さ 1.2 ~ 2.2	砂粒。小穢(φ 12mm 以下)少 量	還元焰/暗灰(N3/0)	一枚作り。凹面系切痕、布目、各端は面取の タケズリ。凸面タテナデ、側端は部分的に面取 のタケズリ。	凸面にヘラ書き「長」
84	平瓦	38-8 S57E60	狭端左隅 1/5	厚さ 1.8	砂粒。黑色粒子 子目立つ	砂粒。黒色粒子 子目立つ。小穢(φ 11mm 以下)ま だら部分的に色 の異なる粘土が糊 かい状態になる	補修作り。凹面模擬板痕(幅 2.3 ~ 28cm)、 布の縫合せ板、布目、側端・狭端面取の タケズリ。凸面タテ繩叩き後ヨコナデ。	
85	平瓦	36-4 S66E65	広端部 1/2	全長 39.3 広端幅(26.0) 中央幅 2.7 狭端幅 2.4 厚さ 1.7 ~ 2.4	砂粒	還元焰/灰白 (5Y7/2)	一枚作り。凹面系切痕、布目、一部タテナ デ、側端・広端面取状のタケズリ。凸面系切 痕、密なタテ繩叩き(叩きの単位は幅 2.5 ~ 4.5cm)、離れ砂。	
86	平瓦	36-4 S66E65	ほぼ完形	全長 39.3 広端幅(26.0) 中央幅 2.7 狭端幅 2.4 厚さ 1.2 ~ 2.2	砂粒	還元焰/灰(5Y6/1)	一枚作り。凹面布目、ごく一部ナデ。凸面タ テナデ。広端左隅は斜めに切り落としている らしい。	
87	平瓦	36-4 S66E65	ほぼ完形	全長 40.3 広端幅(26.5) 中央幅 2.5 狭端幅(21.0) 厚さ 0.9 ~ 2.1	砂粒やや多。小 穢(φ 6mm 以 下)ばらばら	還元焰/灰(5Y5/1)	一枚作り。凹面布目、各端面取状のタケズリ。 布の補修痕らしいものがある。凸面平行叩き 後タテ・ヨコナデ。側端面取状のタケズリ。	
88	平瓦	36-4 S66E65	広端両隅 大	全長 43.0 中央幅 27.1 狭端幅(24.0) 厚さ 1.4 ~ 2.7	砂粒多、全体に 砂っぽい。色の 異なる粘土が糊 かい状態になる	酸化焰氣味、やや軟 質/灰黄(2.5Y7/2)	一枚作り。凹面系切痕、布目、各端面取の タケズリ。凸面タテナデ、一部に布目が残る。	凹凸面に直線 と円弧の線 刻がある
89	平瓦	36-4 S66E65	3/4	全長 39.3 中央幅 2.3 側端幅 2.0 厚さ 1.3 ~ 2.3	砂粒多、全體に 砂っぽい。色の 異なる粘土が糊 かい状態になる	酸化焰氣味/灰白 (2.5Y8/1) ~ 淡黄 (2.5Y8/3)	補修作り。凹面模擬板痕(幅 3.6 ~ 4.0mm)、 糸切痕、布目、側端・両端面取のタケズリ。凸 面密なタテ繩叩き後ヨコナデ。	
90	製斗瓦か S66E65	36-4 S66E65	ほぼ完形	全長 39.3 中央幅 2.15 狭端幅(17.0) 厚さ 1.3 ~ 2.8	粗砂粒多。小穢 (φ 5mm 以下)	還元焰/灰(7.5Y5/1)	一枚作り。凹面系切痕、布目、側端面取のタ ケズリ。側端面取のタケズリ。凸面タテナデ、 左側端面取のタケズリ。	凸面にヘラ書 き「平か」。 軸が狭く、製 斗瓦か
91	製斗瓦	36-4 S66E70	狭端部 3/4	厚さ 2.4	砂粒やや多	酸化焰氣味/灰 灰(5Y5/1)	一枚作り。凹面系切痕、布目、側端面取のタ ケズリ。凸面タテナデ後叩き。側端の片方 のみ面取のタケズリ。	凸面に叩き 勢「B類」
92	鬼瓦 A 箇 S66E65	36-4 S66E65	左下部小 破片	口徑(15.2) 高台径(9.3) 高さ 5.9	粗砂粒。白色粒 子目立つ	還元焰/灰白 (5Y8/1)	裏面布目。周縁部は表裏とも面取状にケズリ。 端面はみなケズリ。	
93	須恵器 高台付塊 S66E60	36-4 S66E65	小破片	口徑(15.2) 高台径(9.3) 高さ 5.9	砂粒・礫	還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。	8世紀後半
94	灰釉陶器 瓶 S66E65	36-4 S66E65	底部破片		礫砂粒	還元焰/灰	ロクロ整形(回転方向不明)。	9世紀後半
95	須恵器 高台付塊 S50E60	38-5 S50E60	底部破片	高台径(5.4)	砂粒・黒色粒子	還元焰/灰白	ロクロ整形(回転方向不明)。底部回転糸切り 後高台付。	9世紀後半
96	須恵器 高台付塊 S57E60	38-8 S57E60	体～底部 1/5	高台径 6.5	砂粒・雲母粒	還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。底部糸切り後高台付。	10世紀前半
97	須恵器 高台付塊 S57E60	38-8 S57E60	底部破片	高台径 7.1	礫砂粒・赤色粘 土粒	酸化焰/橙	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は貼付。	10世紀後半
98	須恵器 小皿 S75E30	36-4 S75E30	口縁～底 部破片	口径(14.9) 底径(9.2) 高さ 3.3	粗砂粒多・礫	酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切りか。	外腹やや摩滅 10世紀後半

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
99	須恵器 小皿	36-4 瓶 2 南 S70-E60	1/4	口径(8.2) 底径(5.0) 高さ 1.9	砂粒・白色粒子・ 赤色粘土粒	酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転式切り。	10世紀後半
100	須恵器 小皿	38-8 S57-E60	小破片	底径(4.8)	砂粒・赤色粘土 粒	酸化焰氣味/淡黃	ロクロ整形(右回転)。底部回転式切り。	11世紀前半

瓦表面層(回國南西部)(第 107 ~ 113 図、PL.73 ~ 76)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 A101	38-2 S70W10	上部 1/3 と丸瓦 2/3		砂粒・白色粒子 多・粗い胎土 白色の粘土が細かい編状に入る	還元焰/灰(10Y5/1)	縦置型。瓦当裏面無絞り布目。折り目あり。 丸瓦凹面布目、左側端のみ面取のタテケズリ。 凸面タテナデ、左側端のみ面取のタテケズリ。	凸面にへラ書き「田」
2	軒丸瓦 A003	38-2 S70W10	花弁小破 片		白色粒子多・粗 い胎土	還元焰、内部酸化焰 /表面粗面(N3/0) 断面にふく赤緑 (5YR5/4)	縦置型。瓦当裏面無絞り布目。	
3	軒丸瓦 A101	38-2 S70W10	上端部小 破片		砂粒。色の異なる 粘土が細かい編状になる	還元焰/灰白 (10Y7/1)	縦置型。瓦当裏面無絞り布目。丸瓦との境は 円錐方向ナデ。丸瓦凸面ナデ。	
4	軒丸瓦 B1かB2	38-2 S70W10	花弁小破 片		細砂粒・細かい 白色粒子	還元焰/灰(7.5Y6/1)	縦置型。瓦当裏面無絞り布目。	花弁 1 重のみ 分類番号確 定できない
5	軒丸瓦 B201a	39-7 S55W10	左下部 1/5		砂粒	還元焰/灰(5Y6/1)	横置型か。瓦当裏面ケズリ・ナデ。	
6	軒平瓦 NT3	38-2 S70W10	右端部小 破片	瓦当幅(2.5)	砂粒、褐色土小 塊。色の粘土 が細かい編状に入 る	還元焰、内部酸化焰 /表面灰白(2.5Y7/1) 断面にふく赤緑 (5YR7/4)	一枚作り。曲線型。凹面系切痕、布目。凸面 ヨコケズリ後、側部分に粘土をタテに塗りつけ る。瓦当近くヨコナデ。	
7	軒平瓦 P0	38-2 S70W0	左端近く 小破片	瓦当幅 3.9 額面長 2.6	砂粒、黒色粒子	還元焰/灰白 (7.5YR7/1)	はっさきした額面をもつ曲線型。頭は貼り付 けか。凹面布目。瓦当近くと側端は幅の広い ケズリ。凹面側の段付近は竜方向の凱・ナデ。 その他ヨコナデ。	凸面に朱付着
8	軒平瓦 P001	38-2 S75W10	額中央部 小破片		砂粒	酸化焰 / 瓦当表面に ふく黄緑(10YR7/4) 断面にふく赤緑 (5YR7/4)	曲線型。頭が剥離したもの。剥離面に布目。 額面はヨコナデ。瓦当側の縁は船挟いヨコケ ズリ。	
9	軒平瓦 P001	38-2 S70W10	右半部小 破片		砂粒	還元焰/灰白 (10Y8/1)	途中に縫をもつ曲線額か。凸面ヨコナデ。	凸面に朱付着。 瓦ぬあり
10	軒平瓦 P002	38-2 S70W10	右端部小 破片	瓦当幅(6.0)	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焰 / 灰(5Y6/1)	曲線額か。凸面タテナデ。	
11	軒平瓦 P002B	38-2 S70W10	左端部 1/4	瓦当幅(5.1)	砂粒・細かい 白色粒子	還元焰、内部一部 酸化焰気味/青灰 (5B5/1)	頭は三角形に直線的に開く。頭は貼り付け。 凹面タテナデ、瓦当近くヨコナデ。凸面タテ ナデ、瓦当近くヨコケズリ。	
12	軒平瓦 P010	38-2 S70W10	頸右端部 1/2	額面長 3.6	白色粒子多・ 白色小破片(Φ 12mm 以下)	還元焰 / 灰(4N4/0)	段階。剥離面は糸切痕。凸面ヨコナデ。周縁 上面と額面瓦当近くはヨコケズリ。	
13	軒平瓦 P107	38-2 S70W10	左端部 2/5	瓦当幅 4.2 額面長 2.6	粗砂粒、白色粒子 多・白色小破片(Φ 5mm 以下)、粗 い胎土	還元焰 / 灰白 (5Y8/2)	段階。頭の貼り付けは見えない。凹面ヨコナ デ後タテナデ。凸面タテナデ、頸部ヨコナデ。	凸面に朱付着
14	軒平瓦 P202	38-2 S70W10	右端部小 破片	瓦当幅 6.3	砂粒、白色粒子	酸化焰気味 / 表面灰 黄(2.5Y7/2)断面に ふく赤緑(7.5YR6/4)	曲線額か。凹面ヨコナデ。頸部ヨコ・ナメ の粗いナデ、瓦当近くヨコケズリ。	
15	軒平瓦 不明	39-7 S55W10	左半部 1/3	瓦当幅 4.5 額面長 0.5	砂粒、小破片(Φ 6mm 以下)。色 の異なる粘土が細 かい編状になる	還元焰 / 灰(5Y5/1)	一枚作り。曲線額。段差が大きい。頸部は貼 り付け。凹面無絞り布目。広端と側端面取状のケ ズリ。凹面タテナデ、頭とその近くはヨコナデ。	
16	軒平瓦 T005	38-2 S70W0	左半部 1/2	瓦当幅 4.0 額面長 1.6 ~ 2.7	粗砂粒多・や や粗い胎土。色 の異なる粘土が細 かい編状になる	還元焰 / 灰白 (7.5Y7/1)	一枚作り。段階。頭は貼り付け。凹面無絞り布 目。瓦当近くヨコナデ、側端面取のタテケズ リ。凸面タテナデ、頭とその近くはヨコナデ。	新范様
17	丸瓦	38-2 S70W10	ほぼ完形 後端左側 欠	全長 38.6 広端幅(19.3) 厚さ 1.0 ~ 1.9	砂粒、径のやや 大きな白色粒子 (5mm 以下)	還元焰 / 灰(4N4/0)	無段。凹面布目、布の縦七合わせ痕、側端面 取の粗いタテケズリ。凸面タテ穂叩き後タ テ・ヨコナデ。	
18	丸瓦	38-2 S70W10	4/5 後端右側 欠	全長 38.4 広端幅 20.1 厚さ 1.2 ~ 2.1	砂粒、黑色粒子 (10Y7/1)	還元焰 / 灰白 (10Y7/1)	無段。凹面系切痕、布目、側端・広端面取状 ケズリ。凸面タテナデ、側端面取状のケズリ、 ナデ、広端粗いヨコケズリ。	
19	丸瓦	38-2 S70W10	側端部小 破片	厚さ 2.0	砂粒、白色粒子	還元焰 / 灰(5Y4/1)	凹面系切痕、布目、側端幅の狭い面取。凸面 ヨコナデ。	凸面に押印 「勢」C型
20	丸瓦	39-7 S55W10	中央部小 破片	厚さ 2.2	砂粒、白色小 球(Φ 6mm 以下) やや多	還元焰 / 灰(7.5Y4/1)	凹面布目。凸面ナメナデ。	凸面にへラ書き「十」
21	不明	38-2 S73W5	中央部小 破片	厚さ 2.2	砂粒、赤色粒子 (10YR6/3)	凹面布目。凸面タテナデ。	凹面にへラ書き「□」	
22	平瓦	38-2 S75W10	中央部小 破片	厚さ 1.3	砂粒や多	還元焰 / 灰(10Y6/1)	凹面布目をヨコナデで消す。凸面ヨコナデ後 叩き。	凸面に押印「佐 位」C型

V 調査した遺構と遺物

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
23	平瓦	38-2 S70W10	中央部小 破片	厚さ 1.7	砂粒多。白色・ 黒色粒子目立つ	還元焰 / 灰(N5/0)	一枚作り。門面布目。まばらなヨコナデで消す。 凸面タテナデ後格子印き。	凸面に寄せ 「人」か「入」
24	平瓦	39-7 S55W10	中央部小 破片	厚さ 1.3	砂粒、白色粒子 多	還元焰 / 灰(10Y5/1)	一枚作り。門面系切痕、布目。凸面タテナ デ後格子印き。	凸面に押印「勢 (多)」
25	平瓦	39-7 S55W10	後端右隅 小破片	厚さ 0.8	砂粒、白色・黒 色粒子	還元焰 / 灰(N5/0)	一枚作り。門面系切痕、布目。凸面タテナデ、 「へ」書き	門面にへラ書 き「□(記号)」
26	平瓦	38-2 S70W10	側端部小 破片	厚さ 2.0	径のやや大きな 白色粒子(φ ~2mm以下) 多。白色粘土が 薄く層状に入る	還元焰 / 灰(10Y5/1)	一枚作りか。門面系切痕、布目。側端面取の タテケズリ。凸面タテ・ナナメナデ。	凸面にへラ書 き「□(記号)」
27	平瓦	38-2 S75W10	端部小破 片	厚さ 1.6	砂粒	酸化焰 / 表面橙(5YR6/6) 断面灰黄(2.5Y6/2)	門面ヨコナデ。凸面タテナデ。	凸面にへラ書 き「□(記号)」
28	平瓦	38-2 S70W10	後端左隅 1/3	厚さ 1.8	砂粒、黒色粒子、 小砾(φ 18mm 以下)。色の異 なる粘土が織 り込まれる 板状になる	還元焰 / 灰白 (5Y8/1)	一枚作り。門面系切痕。非常に粗い布目。狭 端・側端面取のケズリ。凸面密な平行印き。	門面にへラ書 き「十」
29	平瓦	38-2 S70W10	2/3 中央幅 26.8 厚さ 2.0~2.4	全長 39.0 中央幅 26.8 厚さ 2.0~2.4	砂粒。黒色粒子 目立つ	還元焰、内部中心は 酸化焰気味 / 表面赤 (7.5Y6/1)断面中心 部に「へ」(5YR6/4)	一枚作り。門面系切痕、布目、狭端以外の各 面は面取のケズリ。狭端は粗いヨコナデ。 凸面密なタテ印き。狭端近くのみヨコ印 き。離れ砂使用。	
30	平瓦	38-2 S70W10	広端左隅 1/6	厚さ 2.2	砂粒多。白色粒子 目立つ	酸化焰気味 / 灰黄褐 (10Y4/2)か黒褐 (2.5Y3/1)	一枚作り。門面布目、広端・側端面取のケズ リ。凸面タテナデ後格子印き。	
31	平瓦	38-2 S75W10	後端左隅 1/4	厚さ 1.9	砂粒、白色・黒 色粒子多。粗い 胎土	還元焰 / 表面灰白 (5Y8/2) 断面灰(5Y4/1)	桶作り。門面横骨側板痕(幅1.8~2.3cm)、 系切痕、粗い布目、狭端・側端面取のケズリ。 凸面印き(平行印きかタテ印き)後ヨコナ デ。	
32	須恵器 円面鏡	38-2 S70-W10	脚部小破 片		砂粒	還元焰 / 灰白	ロクロ整形か。透かし穴と格子状の刻線。	
33	須恵器 片	38-2 S70W0	口沿~底 部 2/3	口径(14.2) 底径(8.3) 高さ 4.1	砂粒やや多	酸化焰 / 棱	ロクロ整形(右回転)。底部削除糸切り。	10世紀前半
34	須恵器 高台付塊	38-2 S70W10	底部破片	高台径 6.8	粗砂粒	酸化焰 / 棱	ロクロ整形(回転方向不明)。底部切り離し後 高台付块か。内黒處理。	10世紀前半
35	須恵器 环	38-2 S70W0	口沿~体 部破片	口径(13.8)	繊砂粒・赤色粘 土粒	酸化焰 / 棱	ロクロ整形(回転方向不明)。	10世紀後半
36	須恵器 环	38-2 S70W0	底部破片	底径(6.0)	砂粒やや多	酸化焰 / 浅黄相	ロクロ整形(右回転)。底部削除糸切り。	10世紀後半

瓦窯発層(回廊西北部) (第 114, 115 図, PL76, 77)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	軒平瓦 P202	38-3 S16W10	右半部 1/3	瓦当幅 6.0	砂粒	酸化焰気味 / 表面灰 白(2.5Y8/2)断面浅 黄褐(7.5Y8R4/4)	曲線型。門面布目をタテの指ナデで粗く消す。 側面面取のタテケズリ。凸面タテナデ、瓦当 近くヨコケズリ。	
2	丸瓦	38-3 S11W10	広端 4/5	胴部長 29.0 広端幅(17.3) 厚さ 1.3 ~ 3.0	砂粒。黒色粒子 目立つ	還元焰 / 灰(5Y5/1)	有段。広端附近は 2 枚の粘土板からなる。糸 は粘土を貼り付けて作り出す。門面系切痕、 布目、側端面取のタテケズリ。凸面タテ印 き後ヨコナデ。側端面取タテケズリ。	
3	平瓦	38-3 S11W10	後端左隅 小破片	厚さ 2.3	砂粒多。白色・ 赤色粒子目立つ	酸化焰氣味 / にぶ い黄褐(10Y8R7/3) (部分的に)黄 黄(2.5Y5/1)	門面タテナデ・側端幅広いタテケズリ、狭端 ヨコナデ。凸面密な格子印き。	印きが% 5 と 同じ
4	丸瓦	38-3 S11W10	玉縁部右 側 1/4		砂粒。白色粒子 目立つ	還元焰 / 表面黒色 處理、灰(5Y5/1) オリーブ黒(5Y3/1)	有段。玉縁部は粘土板貼り付け。門面系切痕、 糸切痕、側端面取のタテケズリ。凸面玉縁 部もタテナデ後ヨコナデ。側端面に分割痕、 切り込みは内側から。	
5	平瓦	38-3 S11W10	後端 1/3	狭端幅 23.8 厚さ 1.6 ~ 1.8	砂粒、白色・赤 色粒子	還元焰、内部は酸化 焰 / 表面灰(5Y5/1) 断面橙(5YR6/6)	一枚作り。門面系切痕、布目、各端面取糸 ケズリ。凸面ナナメナデ後格子印き。	印きが% 3 と 同じ
6	平瓦	38-3 S11W10	広端 1/2	広端幅 26.6 厚さ 1.0 ~ 1.5	砂粒。白色粒子 目立つ	やや酸化焰氣味 / 表面黒色處理、灰 (7.5Y5/1) ~ オリーブ黒(5Y3/1) 断面淡黄(5Y8/3)	桶作り。門面横骨側板痕(幅 1.8 ~ 2.5cm)、 右端に粘土板接合痕(タテナデで消す)。糸切 痕、布目、各端は面取糸ケズリ。凸面ヨコナ デ後タテ磨印き。一部布目、右側端・広端面 取糸ケズリ。	
7	平瓦	38-3 S11W10	3/4 広端右隅 欠	全長 37.0 狭端幅 20.7 厚さ 1.2 ~ 2.1	砂粒、黑色粒子			

37-5 レンチ瓦集中(第 116 ~ 125 図、PL77 ~ 82)

No.	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 B201a	37.5 SSW10	上部小破 片		砂粒、白色粒子 (10Y8/1)	還元焰/灰白 (5Y7/2)	横置型。積み上げ技法。側面に指ナデ痕。 丸瓦部凸面タテナデ。凹面ヨコナデ。	
2	軒丸瓦 B002	37.5 SSW10	瓦当部 ほぼ完形	瓦当幅(16.0) 中房径 2.8	砂粒	還元焰/灰白 (5Y7/2)	印刷付け。瓦当裏面に溝を握って丸瓦を差し 込み東側を円周方向に捺す。瓦当裏面 やや粗い。指ナデ。周縁上部・瓦当側面周辺方 向ナデ。側面に泡の跡の痕。	第 1 期調査で は完品品はな い
3	軒丸瓦 E103	37.5 SSW10	上部 1/3		砂粒、白色粒子 (ø 4mm 以下) 多	還元焰/灰(N5/0)	印刷付け。瓦当裏面に溝を握って丸瓦を差し 込み東側を円周方向に捺す。瓦当裏面 やや粗い。指ナデ。周縁上部・瓦当側面周辺方 向ナデ。側面に泡の跡の痕。	
4	軒平瓦 NH301	37.5 SSW5	右半部 1/2	瓦当幅 3.6	砂粒	還元焰/表面黒色遮 理か。 灰白(7.5Y8/1) ~ 暗灰(N3/0)	ほぼ無型。右端部のみ曲面彫刻に見える。之枚 の粘土被らなるらしい。凹面ヨコナデ後丸 瓦当を削いて強いタテ捺ナデ。凸面タテナ デ後直近くヨコナデ。	凸面に朱付着
5	丸瓦	37.5 SSW5	挿端右隅 1/6	玉縁長 6.6	砂粒、白色粒子 (ø 6mm 以下)	還元焰/暗灰(N3/0)	有段。糸は粘土貼り付け。門面や粗い布目、 一部タテナデ。側端・挿端面取状ケズリ。制 部凸面タテナデ。側端押き後ヨコナデ。玉縁凸面 ヨコナデ。	
6	丸瓦	37.5 SSW5	挿端部 2/3	玉縁長 7.0	砂粒、白色・赤 色粒子	酸化焰/にぶい相 (5YR7/3) ~ 黄灰 (2.5Y4/1)	有段。糸は粘土貼り付け。門面布目、側端・ 挿端面取状ケズリ・ナデ。胸溝凸面押き后 粗いヨコナデ。側端・側端タテケズリ・ナデ。玉縁 部凸面ヨコナデ。	被熱で脆く なっており。 部分的に崩れ ている
7	丸瓦	37.5 S11W10	挿端 2/5	玉縁長 7.6 ~ 8.6 秋端幅 7.2 ~ 8.0	砂粒、白色・黒 色粒子。白1系 上が細かい裂状 にあるところが ある	還元焰/灰白 (2.5Y7/1) ~ 灰 (10Y6/1)	有段。糸は粘土貼り付け。門面の縫合わせ せ跡、糸切れ、布目、側端・挿端面取のケズ リ、側端凸面ヨコナデ後タテ彫印き。玉縁凸 面ヨコナデ。	
8	丸瓦	37.5 SSW10	挿端 1/2	玉縁長 8.6 ~ 9.5	砂粒、白色粒子 多	還元焰、内部一部 酸化焰気味/灰白 (7.5Y7/1)	有段。糸は粘土貼り付け。門面布目、ごく 一部タテナデ。側端・挿端面取状ケズリ。凸 面タテナデ、連結面の取扱方向ナデ。	
9	丸瓦	37.5 SSW5	広端 4/5	胸端幅 28.5 広端幅(17.0) 厚さ 1.1 ~ 1.6		還元焰/灰白 (5Y8/1)	有段。糸は粘土貼り付け。門面切痕、布目、右輪 端・広端面取のケズリ、凸面タテ彫印き後ヨコナ デ・タテナデ、右輪端・広端面取状ケズリ。	
10	丸瓦	37.5 SSW5	ほぼ完形 広端内側 欠	全長 36.5 中央幅 15.0 秋端幅 15.3 ~ 玉縁長 7.2 ~ 8.0	砂粒、白色・黒 色粒子多 小窓(ø 23mm 以下)。色の異 なる粘土が糊か る病状になる	還元焰/灰(10Y5/1)	有段。門面粘土板合わせ目、布目に縫合わせ 痕、糸切れ、布目、側端面取のタテケズリ・ナデ。 広端近く輪端広くヨコナデ・ズズリ。胸端凸面タ テ彫印き後ヨコナデ、広端近くタテケズリ。玉 縁部凸面ヨコナデ。	
11	丸瓦	37.5 S1W10	挿端 2/5	挿端幅 14.8 厚さ 1.3 ~ 1.7	砂粒、白色・黒 色粒子。部分的 に色の異なる粘 土が糊か・病状 になる	還元焰。硬質。門面 に降灰/灰(10Y5/1)	無段。門面粘土板合わせ目、布目に縫合わせ 痕、糸切れ、側端面取の細いタテケズリ・凸 面ヨコナデ、左側端のみ面取のタテケズリ。	円弧のカーブ が穢い
12	丸瓦	37.5 SSW5	広端部 1/2	中央付近幅 17.9 厚さ 2.0 ~ 2.5	砂粒	やや酸化焰気味/ 浅黄(2.5Y7/3) ~ 灰 (5Y5/1)	門面広端はヨコ、その他はタテに強くナデで 布目をなす。側端は面取状のタテケズリ・凸 面タテ彫印き後粗いヨコナデ・一部布目付着。 側端面取のタテケズリ。	厚く重い。長 回面中央付近に 粘土板合せ目 の跡がある。
13	丸瓦	37.5 SSW10	ほぼ完形	全長 38.5 中央幅 15.0 厚さ 1.6 ~ 2.1	砂粒、白色粒子, 小窓(ø 6mm 以下)	還元焰。硬質 / 灰 (N5/0)	無段。門面糸切痕、布目。各端面取状ケズリ。 凸面引抜き後ヨコナデ。	
14	平瓦	37.5 SSW5	広端左隅 1/3	厚さ 1.8	砂粒、小窓(ø 8mm 以下)	還元焰、内部は一 部酸化焰気味 / 灰 (5Y6/1)断面一部 横幅(7.5YR6/6)	門面布目をタテナデで粗く消す。側端面取の 細いタテケズリ・凸面ヨコナデ後まばらな 跡が見られる。	叩きは No. 18, 19 と同一
15	平瓦	37.5 SSW5	挿端右隅 1/5	厚さ 1.0 ~ 1.5	砂粒、赤色粒子 やや目立つ	酸化焰 / 表面黒色遮 理、黒(N2/0) 断面横幅(7.5YR6/6)	門面布目をタテナデで粗く消す。側端面取の 細いタテケズリ・凸面ヨコナデ後まばらな 跡が見られる。	
16	平瓦	37.5 SSW5	挿端左隅 1/3	厚さ 1.6 ~ 2.5	砂粒多、粗い布目	還元焰。内部は一 部酸化焰気味 / 表面灰 白(10Y8/1)断面浅黄 (10YR8/3)	桶巻作り。門面模倣側板痕(幅 2.0 ~ 2.5cm)、 粘土板合せ目らしい痕跡、糸切れ、布目、 側端・挿端面取のケズリ。凸面糸切痕を 粗いナメナデ消す。	
17	平瓦	37.5 SSW5	広端 2/3	厚さ 1.3 ~ 1.5	粗砂粒、白色・ 黒色粒子は融 解	還元焰 / 灰(5Y6/1)	桶巻作り。門面模倣側板痕(幅 1.5 ~ 3.0cm)、 糸切れ、布目、側端面取のタテケズリ。凸 面ヨコナデ後タテ彫印。	
18	平瓦	37.5 SSW5	左半部 2/3	全長 42.4 厚さ 1.4 ~ 1.7	砂粒	酸化焰気味 / 表面 にぶい黄緑(10YR6/3) ~ 暗灰黄(2.5Y5/2) 断面横幅(7.5YR7/6)	一枚作り。門面糸切痕、布目、各端面取状ケ ズリ・ナデ。凸面糸切痕、格子叩き 6 力所。	叩きは No. 14, 19 と同一
19	平瓦	37.5 SSW5	左半部 2/3	全長 40.8 厚さ 1.1 ~ 2.0	砂粒、白色粒子 目立つ。少數の 小窓(ø 6mm 以下)	還元焰。内部は一部 酸化焰気味 / 表面黃 褐(2.5Y5/3)断面中 心青灰(5BG6/1)、外 側横(5YR6/6)	一枚作り。門面糸切痕、布目、各端面取状ケ ズリ・ナデ。凸面タテナデ後格子叩き 6 力所。	叩きは No. 14, 18 と同一
20	平瓦	37.5 SSW5	ほぼ完形 広端左隅 欠	全長 40.2 中央幅 19.2 厚さ 1.2 ~ 1.7	砂粒、少量の小 窓(ø 5mm 以 下)	還元焰 / 灰(2.5Y8/1)	桶巻作り。門面模倣側板痕(幅 1.8 ~ 2.3cm)、 糸切れ、布目。各端面取状ケズリ・ナデ。凸 面ヨコナデ後ヨコナデで粗く消す。	

V 調査した遺構と遺物

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
21	平瓦	37.5 SSW10	ほぼ完形 広端左隅 欠	全長 37.8 中央幅 25.4 狭端幅 18.3 厚さ 1.7 ~ 2.7	砂粒、少量の小 礫(φ 8mm 以 下)	還元焰 / 灰(10Y6/1)	桶巻作りか。門面タテ方向ナデで糸切痕と布 目を粗く消す。各端幅の広い面取状ケズリ。 凸面タテ縛叩き後粗いヨコ・タテナデ。	門面に横骨側板痕らしい段 差があるが、 タテナデで消 され印象。 門面表面タテ 方向 1/2付近 を線に色が進 う。進屈部か
22	平瓦	37.5 SSW10	ほぼ完形 狭端右隅 欠	全長 39.0 広端幅 28.8 中央幅 26.3 厚さ 1.3 ~ 2.0	砂粒、少量の小 礫(φ 6mm 以 下)	還元焰、凹凸面共降 灰 / 灰(7Y5/1)	桶巻作り。 門面模骨側板痕(幅不明瞭)、糸切 痕、布目、各端面取状ケズリ・ナデ、凸面タ テ縛叩き後粗いヨコナデ、左側端面取のタ テケズリ。	
23	平瓦	37.5 SSW10	ほぼ完形 狭端右隅 欠	全長 38.4 広端幅 26.7 中央幅 24.7 厚さ 1.6 ~ 2.2	砂粒、白色粒 子、白色粒 子(φ 5mm 以 下)	還元焰、門面右側に 降灰 / 灰(10Y4/1)	桶巻作り。 門面模骨側板痕(幅 1.6 ~ 2.2cm)、 糸切痕、布目、各端幅の広い面取状ケズリ。 凸面タテ縛叩き後粗いタテナデ、広端幅の抜 いヨコケズリ。	門面広端近く に布の筋の压 痕
24	平瓦	37.5 SSW10	広端 2/3	広端幅(27.3) 厚さ 1.0 ~ 1.8	砂粒、少量の小 礫(φ 5mm 以 下)	還元焰 / 表面黒色 化、黒(10Y2/1)	桶巻作り。 門面模骨側板痕(幅 1.6 ~ 2.6cm)、 布疋じわせ痕、糸切痕、布目。側端面取の タテケズリ。広端幅広く複数回のヨコケズリ。 凸面タテ縛叩き後ヨコナデで粗く消す。無端 面取状幅狭いタテケズリ・ナデ。	
25	平瓦	37.5 SSW5	ほぼ完形	全長 37.6 広端幅(28.0) 中央幅 25.5 狭端幅(21.0) 厚さ 1.1 ~ 1.7	砂粒、少量の小 礫(φ 6mm 以 下)、白色粒子 目立つ	還元焰 / 灰(7.5Y6/1)	門面布目、各端面取状のケズリ。凸面タテ縛 叩き後ヨコ(一部ナメ・タテ)ナデ、側端・ 広端面取の幅狭いケズリ。	門面に横骨側 板痕らしい段 差があるが、並 ばないので違う らしい
26	瓦器 塊か	37.5 SSW10	小破片	底径(7.2)	砂粒	還元焰 / 灰白	ロクロ整形(回転方向不明)。高台は貼付。	施釉の可能性 も。9世紀後半
27	角石安 山岩切石	37.5 S1W10	2/3	長さ 38.8 現存幅 23.5 厚さ 14.0			直方体の切石。	

37-5 トレンチ(第 126, 127 図、PL.82 ~ 84)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	平瓦	SK136	狭端右隅 1/8	厚さ 1.7	砂粒	還元焰 / 灰白 (2.5Y7/1)	一枚作り。門面糸切痕と布目を粗いタテナデ で消す。狭端・側端は面取状のケズリ・ナデ。 凸面タテ・ヨコナデ後タテ縛叩き。	
2	平瓦	SK136	狭端左隅 1/6	厚さ 2.0	砂粒、白色・黑 色粒子	還元焰 / 灰(N5/0)	桶巻作り。門面模骨側板痕、糸切痕、布目。 狭端・側端は面取状ケズリ・ナデ。凸面タテ 縛叩き後ヨコナデ。	
3	土師器 环	SK136	ほぼ完形	口径 12.8 高さ 4.1	砂粒	良好 / 粗	内面へ口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ち ハラケズリ。	口縁部へ油煙 付着。8世紀 中葉
4	土師器 环	SK136	完形	口径 12.2 高さ 3.3	砂粒	良好 / 粗	内面へ口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ち ハラケズリ。	口縁部へ油煙 付着。8世紀 中葉～後半
5	須恵器 环	SK136	1/4	口径(1.8) 底径(6.3) 高さ 4.6	砂粒・黒色粒子・ 白色粒子	還元焰 / 灰	ロクロ整形(右側柱)。底部回転切り。	8世紀後半
6	軒丸瓦 A102	SSE0 表土	右上部小 破片		砂粒、白色粒子、 小礫(φ 8mm 以下)多、粗い 崩上。色の異なる 粘土が細かい 繊状になる	還元焰 / 灰(10Y6/1)	複数型。瓦当裏面無継り布目。丸瓦凸面タテ ナデ。門面布目。	
7	軒丸瓦 A102	SSE0 表土	花弁小破 片		砂粒、白色粒子 (φ 4mm 以下) 多、粗い崩上	還元焰 / 灰(10Y5/1)	複数型。瓦当裏面無継り布目。	
8	軒丸瓦 B206	SSE0 表土	右部小破 片		砂粒、径のやや 大きな白色粒子 (φ 3mm 以下)	還元焰 / 灰白 (5Y7/1)	印捺付け。丸瓦先端はやや粗い。丸瓦凸面ナ メナデ・ケズリ。裏面は粗いナデ。	断面に丸瓦の 先端が観察で きる
9	軒丸瓦 C001	S5W10 表土	中央部 1/2		砂粒。白色粒子 (φ 5mm 以下) 少量。白色の粘 土が薄く層状に 入る	還元焰。内部は 発化焰 / 表面灰白 (5Y7/1) 断面灰(5YR7/6)	複数型。瓦当裏面無継り布目。	文様の出が薄 い
10	軒平瓦 P002	S1E0 表土	右端部 1/4	瓦当幅 4.8	砂粒、細かい白 色粒子	還元焰 / 灰(7.5Y4/1)	直線型。三角形に広がる。門面布目。一部ヨ コナデ。凸面ナメ・タテナデ。	
11	軒平瓦 P002B	S1W5 表土	右半部 1/2	瓦当幅 5.7	砂粒多	やや酸化臭気味 / 表 面黄灰(2.5Y7/2) 断面灰(10Y6/1)	直線型。三角形に広がる。門面布目をヨコ後 タテ・ナメナデで消す。凸面タテナデ。瓦 当近くはヨコナデ。	凸面に付着着 け
12	軒平瓦 P102	SSW10 表土	右半部 1/2	瓦当幅 4.1 側面長 5.0	砂粒、径の大き な白色粒子(φ 8mm 以下)を多 く含む粗い崩上	還元焰 / 灰(5Y6/1) ~暗灰(N3/0)	段階。側部は粘土板貼り付け。四面糸切痕、 側板痕に似た段差あり。凸面は側面を 含めてヨコナデ・側端近くはタテナデ。側部 は粘土板貼り付けで段の部分強いヨコ指ナ デ。	

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
13	平瓦か 表土	S1W5	中央部小 破片	厚さ 1.9	粗砂粒多いやや 粗い胎土	還元焰／暗灰(N3/0)	凹面布目。凸面ナナメナデ。	凹面にへら書き「家」
14	平瓦	S5E10	中央部小 破片	厚さ 1.6	粗砂粒を多く含 む粗い胎土	還元焰／灰(5Y5/1)	凹面系切痕、布目。凸面ナナメナデ後叩き。	凹面に叩き「多大」
15	平瓦	S1W5	側端部小 破片	厚さ 2.4	砂粒、白色粒子、 小礫(Φ 6mm 以下)を多く含 む粗い胎土	還元焰／灰(N4/0)	凹面布目。側端面取のタテケズリ。凸面ナナ メナデ。側端面取のタテケズリ。	凸面にへら書き「□」
16	平瓦	S5E10	猪?端右 側小破片	厚さ 1.3	砂粒、細かい白 色粒子多	還元焰／灰(N6/0)	凹面タテナデ。凸面タテ施叩き。	凹面にへら書き「大」。笠懸 壁/田畠窓産 か

経蔵・鐘樓東地区(第131図、PL.84, 85)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 B104	SOE55	中房へ花 弁小破片		砂粒、赤色粒子	酸化焰。表面わす かに還元火 / 浅黄橙 (10YR8/4)	瓦当裏面粗いナデ。	
2	軒丸瓦 B201a	SOE50	中房へ花 弁小破片		細砂粒	還元焰／灰黄 (2.5Y7/2)	瓦当裏面ナデ。	

僧坊地区(第135～137図、PL.84, 85)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	平瓦	SAO1P10	広端左隅 理上	厚さ 1.5	砂粒、白色粒子 やや多	還元焰／灰白 (10Y7/1)	凹面ナデ。側端面取のタテケズリ。凸面粗い ナデの種タテ施叩き。	凹面にへら書き「三」
2	軒丸瓦 不明	39-1 N58E25	左上部 1/5		粗砂粒含む。 部分的に色の異なる 粘土を含む	還元焰。内部酸化焰 臭味 / 表面灰(N5/0) 断面灰褐(5YR5/2)	接合系。凹端状態の丸瓦を接合し、不要部分を 切離す。瓦当裏面丸瓦を当てて、接合粘土を 付けてナデ付け後叩き。下半部に突帯。丸 瓦部凹面布目。凸面ヨコナナメナデ。	A004に似るが 範は異なる
3	軒平瓦 NT2	39-1 N58E25	右端部小 破片	瓦当幅 2.4	砂粒、小礫(Φ 8mm以下)やや 多	還元焰 / 表面黒色 理 / (5Y4/1)断面 灰黄(2.5Y7/2)	粗面作り。ごく小さな不整形の額。瓦当面 ヨコナズリ。凹面粗いヨコナデ。瓦当近くヨ コケズリ。側端面取のタテケズリ2回。凸面 粗いタテナデ。顎面ヨコケズリ。	
4	平瓦	39-1 N47E35	広端左隅 小破片	厚さ 1.6	砂粒、白色粒子、 小礫(Φ 3mm 以下)	還元焰 / 灰(10Y5/1)	凹面系切痕、布目、側端・広端面取状ケズリ。 凸面平行叩き。	凹面にへら書き「記号」
5	軒丸瓦 B101	37-1 中地区 表土	花弁小破 片		砂粒	還元焰 / 灰(7.5Y6/1)	複型。瓦当裏面無紋り布目。	
6	軒丸瓦 E1	37-1 中地区 表土	下部小破 片		砂粒。径のやや 大きな白色粒子 (Φ 1～3mm)	還元焰 / 灰(7.5Y5/1)	瓦当側面ヨコ・ナナメナデ。裏面円周方向ナ デ。	
7	軒丸瓦 NH301	37-1 中地区 表土	左端部小 破片	顎面長 1.7	砂粒、赤色粒子	酸化焰 / 表面黒色 理、黑褐(5YR3/1)断面 灰(2.5YR7/6)	曲線型。凹面布目。瓦当近くヨコナデ・ケズ リ、側端面取のタテケズリ。凸面ヨコナデ後 タテ施叩き。	
8	軒平瓦 NH301	37-1 中地区 表土	中央部小 破片		砂粒、白色粒子	還元焰 / 灰(10Y6/1)	凹面ヨコナデ後タテナデ。凸面ヨコナデ。	
9	軒平瓦 PO01	37-1 中地区 表土	右端部小 破片		砂粒	還元焰 / 表面黒色 理、暗灰(N3/0)断面 灰(5Y8/2)断面にぶ い穂(5YR7/4)	途中に明顯な棱をもつ曲線型。凹面ヨコナデ 後タテナデ。凸面タテナデ・ケズリ、側部ヨ コナズリ。	
10	軒平瓦 PO08	37-1 中地区 表土	中央部 1/4		砂粒。色の異なる 粘土を細かい 繖状になる	酸化焰発現 / 表面灰 理、灰(5Y8/2)断面にぶ い穂(5YR7/4)	曲線型で、ごく狭い平坦面がある。凸面ヨコ ナデ。	
11	軒平瓦 VO01	37-1 中地区 表土	中央部小 破片	瓦当幅 1.8	砂粒含むが比較的 の緻密	還元焰。硬質 / 灰 (N5/0)	無類。平瓦端面をヨコナデ後細い竹管状のもの で刺して施文。Φ 4mm。凹面タテ・ヨ コナデ。凸面ヨコナデ後ナメ細叩き。	
12	平瓦	37-1 中地区 表土	端部小破 片	厚さ 1.3～2.1	砂粒、白色・赤 色粒子	還元焰。内部は酸 化焰。やや軟質 / 表面灰(5Y5/1)断面 にぶい穂(5YR6/4)	凹面布目。凸面タテナデ。	凹面にへら書き「□」
13	平瓦	37-1 中地区 表土	挿端左隅 小破片	厚さ 1.6	砂粒	還元焰 / 灰(2.5Y7/1)	凹面タテナデ。狹端はヨコナデで布目を消す。 側端面取のタテケズリ。凸面タテナデ後タテ 施叩き。	凹面にへら書き「三」
14	平瓦	37-1 中地区 表土	中央部小 破片	厚さ 1.7	砂粒、白色粒子	還元焰 / 灰(10Y4/1)	一枚作り。凹面系切痕、布目。凸面ナナメナ デ後叩き。	凹面に叩き「佐 位」A類
15	上器 跡か	37-1 中地区 表土	口縁～体 部片				器體部薄く。口縁端部や厚い。後内部内 湾。輪縁形成。	
16	軒丸瓦 B203	40-3 N45E50	左下部 1/4		砂粒やや多	還元焰。内部一部 酸化焰発現 / 表面 にぶい穂(2.5Y6/2) 断面にぶい穂 (7.5YR6/3)	複型。瓦当裏面無紋り布目。	

V 調査した遺構と遺物

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
17	軒丸瓦 B206	40.3 N45E50 表土	上部 1/4		砂粒、白色・黒色粒子やや多	還元焰/灰白 (5Y7/1)	印彫付け。真当裏面に溝が彫って、先端凸面を斜めに削った丸瓦を差し込んで接合。裏面はナデ。	周縁部欠損のため・B判別できない
18	軒平瓦 NH303	40.3 N45E50 表土	左端部小 破片	瓦当幅 4.2	砂粒、白色粒子 多	還元焰/灰 (7.5Y6/1)	曲線頭か、凹面ヨコナデ・ケズリ。側端面取のタテケズリ。凸面タテ彫叩き、額部ヨコナデ・ケズリ。	
19	軒平瓦 P001	40.3 N45E55 表土	左端部 1/3	瓦当幅 4.0 額面長 2.8	砂粒、繊かい 色粒子	やや酸化焰気味 / 表面黒色斑理、暗 灰 (N3/0) 断面淡黄 (2.5Y7/3)	段のごく緩い曲線頭。凹面ヨコナデ・側端面取状タテケズリ。凸面タテナデ、額部ヨコナデ。	
20	軒平瓦 P001	40.3 N45E50 表土	右半部 2/5	瓦当幅 4.0 額面長 4.5	砂粒多	やや酸化焰気味 / 表面黒色斑理、灰 (5Y4/1) 断面淡黄 (2.5Y7/3)	段のごく緩い曲線頭。凹面ヨコナデ、布目見えない。凸面タテナデ、額面ヨコナデ。	
21	軒平瓦 P001	39.2 N75E62 表土	中央部小 破片		砂粒・粗砂粒や や多	還元焰/灰白 (5Y8/1)	額面ヨコナデ。	
22	軒平瓦 Q001	40.3 N45E55 表土	左端部小 破片		砂粒、白色粒子	還元焰。内部は酸化 焰 / 表面灰 (7.5Y6/1) 断面橙 (5YR6/6)	三角頭。凹面系切痕。ヨコナデ・側端面取のタテケズリ。凸面タテナデ、額部ヨコナデ。	
23	丸瓦	40.3 N45E55 表土	側端部小 破片	厚さ 1.8	砂粒、径のやや 大きな白色粒子 (φ 6mm 以下) を多く含む長い 胎土	還元焰/灰白 (10Y7/1)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書き「干」

南大門(第 141 ~ 145 圖、PL.85 ~ 87)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	丸瓦か 版築上	板塙上左端部 小破片	厚さ 1.7		砂粒。色の異なる 粘土が織かい 編状になる	還元焰/灰白 (10Y8/1)	凹面布目、狭端面取のタテケズリ。凸面ヨコナデ。	
2	平瓦	版築上中	側端部小 破片	厚さ 1.5	粗砂粒多、小穢 (φ 10mm 以下) も少量	還元焰/灰白 (5Y8/1) 凹面炭素吸着、黒 (N15/0)	凹面タテナデ。凸面ヨコナデ後タテナデ。	
3	丸瓦	石列間	中央部小 破片	厚さ 1.6	黒色粒子多、色 の異なる粘土が 織かい編状になる	還元焰/白 (5Y8/1) ~ 灰 (5Y5/1)	凹面系切痕、布目、ごく粗いタテナデ。凸面ヨコナデ後タテ彫叩き、一部布目付着。	
4	平瓦	石列間	広端右隅 1/6	厚さ 2.0 ~ 2.6	砂粒を多く含む やや粗い胎土。色 の異なる粘土上 が薄い焼付、小 塊状に入る	還元焰/灰 (5N/0)	桶巻作り。凹面明晰な桿骨側板痕、布目、広端・側端面取のケズリ。凸面密なタテ彫叩き。	
5	平瓦	石列間	狭端右隅 破片	厚さ 1.9	砂粒。黒色粒子 やや目立つ	還元焰 / 表面灰 (N6/0) 断面灰白 (7.5Y8/1)	一枚作り。凹面系切痕、布目、狭端・側端幅広いケズリ。凸面タテ彫叩き後タテナデ。狭端幅広いヨコケズリ。	
6	平瓦	石列間	狭端部破 片か	厚さ 1.7	砂粒	還元焰/灰 (7.5Y7/1) ~ 灰 (7.5Y5/1)	一枚作り。凹面布目、端はヨコケズリ。凸面タテナデ、一部不整方向ナデ。	
7	平瓦	石列間	狭端右隅 破片	厚さ 1.8	粗砂粒、小穢 (φ 7.5mm 以下) を含 む粗い胎土	還元焰/灰白 (10Y8/1) ~ 灰 (10Y6/1)	桶巻作りか。凹面系切痕、布目、釘の締合 わせ痕。模骨側板痕らしい段差がある。狭端・側端幅広いケズリ。凸面タテ彫叩き後ヨコナデ。側端幅広いタテケズリ。	
8	平瓦	石列間	狭端左隅 1/5	厚さ 1.8	粗砂粒、小穢 (φ 10mm 以下) を含 む粗い胎土	還元焰 / 表面灰 (5Y6/1)	門面系切痕、布目、等間隔にタテナデ、狭 端・側端面取状のケズリ。凸面ヨコナデ。凹 面のタテナデは模骨側板痕の段差を消したものか。	
9	須恵器 塊	石列間	口縁～底 部破片	口径 (11.5) 底径 (4.9) 高さ 3.5	砂粒・赤色粘土 粒多	酸化焰 / にぼい相	ロクロ整形(回転方向不明)。	10世紀前半
10	丸瓦	石列内	側端部 1/6	厚さ 1.3	砂粒を多く含む やや粗い胎土	還元焰 / 表面灰白 (2.5Y8/1) 断面中心 部暗灰 (N3/0)	凹面系切痕、布目、大部分はタテナデ、側 端タテケズリ。凸面タテ・ヨコナデ、側端タテ ケズリ。	
11	平瓦	石列内	狭端右隅 1/6	厚さ 1.3	砂粒。小穢 (φ 8mm 以下) も少 量	還元焰/灰白 (5Y8/1)	一枚作り。凹面系切痕、布目、狭端・側端面 取のケズリ。凸面タテ彫叩き後タテナデ。	
12	平瓦	石列内	側端部小 破片	厚さ 1.4	砂粒を多く含み 砂っぽい	やや酸化焰気味 / 灰 (2.5Y8/2)	凹面布目、側端面取のタテケズリ 2 回。凸面 タテ彫叩き、側端面取のタテケズリ。	表面摩滅
13	平瓦	石列内	狭端右隅 破片	厚さ 2.0	径の大きな白色 粒子 (φ 6mm 以下) が目立つ 粗い胎土。小穢 (φ 8mm 以下)	還元焰 / 灰 (10Y5/1)	一枚作り。凹面布目を粗いタテナデで消す。 狭端・側端面取のケズリ。凸面タテ彫叩き後 ヨコナデ。側端面取状タテケズリ。	
14	平瓦	石列内	狭端左隅 1/6	厚さ 1.6	砂粒やや多。 径のやや大きな白 色粒子 (φ 4mm 以下) 少量	還元焰/灰白 (7.5Y7/1)	一枚作り。凹面系切痕、布目、狭端・側端面 取のケズリ。凸面タテ彫叩き後タテナデ。狭 端・側面のヨコケズリ。	

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
15	平瓦	石列内	側端部 1/6	厚さ 1.4 ~ 2.2	砂粒や多。白 色粒子目立つ	還元焰 / 黒(10Y2/1) 断面表層灰白 (2/5Y8/2)	門面系切痕、布目。一部タテナデ。側端広く タテケズリ。凸面タテ脚叩き後ヨコナデ。	
16	平瓦	石列内	広端右隅 1/6	厚さ 1.3	砂粒。径の大き い白色粒子(Φ 1 ~ 5mm)目立 つ	酸化焰気味 / 門面に ぶる黃色(10YR5/4) 断面中心部灰 (5Y6/1)凸面・断面 外側橙(5YR6/6)	桶巻作り。門面模倣側板痕(幅 1.8 ~ 2.5cm)、 布目、粗いタテナデ。広端面取のヨコケズリ。 凸面タテ脚叩き後ヨコナデ。広端面 取のヨコケズリ。	
17	須恵器 壇	石列内	側部破片		砂粒	還元焰 / 灰	外表面叩き。内面同心円状当て具底。	8 ~ 9世紀
18	平瓦	石列外	狭端右隅 1/5	厚さ 1.3	砂粒、白色粒子、 小礫(Φ 10mm 以下)	還元焰 / 灰(N4/0)	一枚作り。門面系切痕、布目、側端・狭端面 取のヨコアリ。凸面密なタテ脚叩き後タテナデ。 狭端面取のヨコケズリ。	
19	平瓦	石列外	広端左隅 1/4	厚さ 1.6 ~ 2.7	砂粒、片岩、小 礫(Φ 7mm 以 下)	還元焰 / 白灰 (10Y8/1)門面のみ黒 (10Y2/1)	門面目をタテナデで消す。側端・広端面取 状アリ。凸面タテ脚叩き後ヨコナデ。側端、 厚く重い瓦 広端面取状の粗いケズリ。	
20	平瓦	石列外	狭端左隅 1/5	厚さ 0.8 ~ 1.6	粗砂粒、径の大き い白色粒子、小 礫(Φ 15mm 以下)を多く含 む粗い胎土	還元焰 / 白灰 (5Y8/1)	桶巻作り。門面模倣側板痕(幅 2cm 前後)、 布目、まばらにタテナデ。側端・広端面取状 ケズリ。凸面タテ脚叩き後ヨコナデ。	
21	平瓦	石列外	広端右隅 1/4	厚さ 1.2 ~ 2.3	粗砂粒、少數の 小礫(Φ 8mm 以下)	還元焰 / 灰(5Y5/1)	門面系切痕、布目。側端幅広くタテナデ。広 端ヨコナデ。凸面タテ脚叩き後タテナデ。広 端面ヨコケズリ。	
22	平瓦	石列外	狭端左隅 1/8	厚さ 1.5 ~ 2.2	粗砂粒、片岩、 小礫(Φ 8mm 以下)	還元焰 / 表面黑色 黒(11L5/0)断面 中心灰(10Y6/1)、外 側灰白(5Y8/2)	桶巻作り。右端は粘土板接合部。門面布目を ナメメテで消す。側端・狭端面取状ケズリ。 凸面タテ脚叩き後ヨコナデ。	
23	平瓦	石列外	広端左隅 小破片	厚さ 0.9	砂粒、小礫(Φ 6mm 以下)	還元焰 / 灰(7.5Y6/1)	一枚作り。門面布目。側端タテケズリ。広 端ヨコナデ。凸面タテ脚叩き後タテナデ。	
24	平瓦	石列外	狭端左隅 小破片	厚さ 0.7 ~ 1.7	砂粒	還元焰 / 白灰 (5Y8/1)門面のみ灰 (N6/0)	一枚作り。門面布目。狭端幅狭いヨコケズリ。 凸面密なタテ脚叩き後タテナデ。	
25	平瓦	石列外	広端左隅 1/8	厚さ 1.8 ~ 2.3	径の大きな白色 粒子、小礫(Φ 10mm 以下)を 多く含む粗い胎 土	還元焰 / 灰(7.5Y6/1)	桶巻作り。門面模倣側板痕(幅 2cm 前後)、 布目、まばらにタテナデ。側端・広端面取状 ケズリ。凸面タテ脚叩き後ヨコナデ。側端、 広端面取状ケズリ。	
26	平瓦	礎石 4 周縁	広端左隅 付近 1/4	厚さ 2.6 ~ 3.3	砂粒、小礫(Φ 7mm 以下)を含 むやや粗い胎土	還元焰 / 白灰 (7.5Y8/2)	桶巻作り。門面模倣側板痕(幅 3.0 ~ 4.0cm)、 系切痕、布目。側端面取のタテケズリ。凸面 密なナメ脚叩き。	
27	丸瓦	礎石 4 周縁	側端部小 破片	厚さ 1.9	砂粒。黒色粒子 目立つ。斜なる粘土を薄い 層状、小塊状 含む	還元焰。凸面に降灰 と重ね疊るの痕跡 灰(10Y6/1)	門面布目、織じ合わせ痕。凸面タテ脚叩き後 タテナデ。	
28	平瓦	礎石 4 周縁	端部小破 片	厚さ 2.2	砂粒多	還元焰 / 白灰 (2.5Y8/2)	門面ヨコナデ後タテナデ。端はヨコケズリ。 凸面密なタテ脚叩き。	
29	平瓦	礎石 5 周縁	端部小破 片	厚さ 1.8	砂粒。白色粒子 目立つ	やや酸化焰気味 / 表面黒色處理。黒 (7.5Y2/1)断面灰黃 (10YR6/2)	門面布目。凸面タテナデ。	
30	平瓦	礎石 5 周縁	側端部小 破片	厚さ 1.3 ~ 2.1	礎砂粒。白色の 粘土が薄く層状 に入る	還元焰 / 灰(10Y4/1)	桶巻作り。門面模倣側板痕(幅 2.5 ~ 2.8cm)、 布目。凸面密なナメ脚叩き。	
31	平瓦	礎石 5 周縁	中央部破 片	厚さ 2.0	砂粒多。黒色粒子 目立つ。小礫(Φ 11mm 以下) 少量	やや酸化焰気味 / 門面と断面の心部灰 白(5Y7/1)凸面と断 面表面にぶる黄枠 (10YR7/3)	桶巻作りか。門面系切痕、布目。模倣側板痕 らしい差違(幅 2.0cm)。凸面タテナデ。	
32	平瓦	土坑内	中央部小 破片	厚さ 1.8	砂粒	酸化焰 / 灰 (7.5YR7/6)	門面布目。凸面格子叩き。	
33	土師器 环	土坑内	口縁~底 部 1/3	口径(12.1) 底径(5.0) 高さ 3.4	砂粒・赤色粒子 良好 / にぶい粒	内面~口縁部外面ヨコナデ。底部外面中心付 近は無調整。	内面に広く油 煙付着。 10世紀前半	
34	丸瓦	石組内	広端左隅 破片	厚さ 1.9	粗砂粒を多く含 む粗い胎土	酸化焰気味 / 表面 灰黄(2.5Y6/2)断面 (5YR7/6)	門面系切痕、布目。凸面タテナデ。	
35	平瓦	石組内	中央部小 破片	厚さ 1.5	細砂粒・砂粒、 小礫(Φ 9mm 以下)	還元焰 / 白灰 (10Y8/1)	門面布目。凸面密なタテ脚叩き。	表面摩滅
36	平瓦	石組内	狭端左隅 小破片	厚さ 1.6	砂粒多。小礫(Φ 4mm 以下)	還元焰 / 灰(10Y6/1) ~灰白(10Y8/1)	門面系切痕、粗い布目。狭端面取のヨコケズ リ。凸面タテナデ。	表面摩滅
37	須恵器 壇	石組内	底部破片	底径(7.4)	砂粒多	酸化焰気味 / 黄	ロクロ整形(輪転方向不明)。	10世紀後半
38	軒丸瓦 E109	礎地上	右下部 1/5		砂粒、白色粒子 多	還元焰 / 灰(N4/0)	印籠付け。瓦当裏面に溝を握って丸瓦を差し 込み、裏面を四隅方向に強くナデして接着する。 丸瓦凸面タテケズリ。周縁上~瓦当側面凹圓 方向ケズリ・ナデ。	

V 調査した遺構と遺物

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
39	軒丸瓦 C002	廻理土	花形小破片		細砂粒	還元焰／灰(7.5YS/1)	縦型。瓦当裏面無絞り布目。	
40	軒平瓦 NH301	廻理土	左端部小 破片	瓦当幅 4.0	砂粒、白色・黒 色粒子	還元焰／灰(N4/0)	顎はわずかに厚くする程度。凹面ヨコナデ、 凸面タテ・ヨコナデ後タテ彫印き。	凸面に朱付着
41	軒平瓦 NRか	廻理土	中央部小 破片		砂粒含むが緻密 で重い。黒色粒 子目立つ	還元焰。内部は酸化 焰臭味／灰(NG/0) 断面中心部赤灰 (2.5YR6/1)	顎部斜面は強くヨコナデして断面を波状に する。凹面布目を粗くナデ。凸面ヨコナデ。	顎部斜面
42	軒平瓦 P001	廻理土	中央部 1/3	瓦当幅 4.3 顎面長 3.1	砂粒。細かい白 色粒子目立つ	やや酸化焰臭味／ 門面・断面灰白(5Y7/6) 凹面にぶつ黄橙 (10YR7/3)	途中に穂をもつ曲線顎。門面ヨコナデ。凸面 タテナデ後側面と周辺ヨコナデ。	
43	軒平瓦 P003	廻理土	左半部 1/2	瓦当幅 4.1 顎面長 1.8	砂粒多く含む粗 い胎土。白色粒 子目立つ	還元焰／灰(N5/0)	一枚作り。段差の大きな段鉢。顎部は粘土貼 り付け。凹面布目。凹面ヨコナデ。顎面はヨ コケズリ。	凸面に朱付着
44	軒丸瓦 B201a	西地区	上部 1/4		砂粒多	酸化焰／橙 (7.5YR7/6)～灰黃 (10YR5/2)	横型質。丸瓦頭凹面布目。瓦当近くタテナデ、 瓦当との境はヨコナデ。側端タテケズリ。凸 面タテケズリ。	
45	軒平瓦 P001	西地区	左端部 1/3	瓦当幅 4.2 顎面長 4.0	砂粒	酸化焰／橙(5YR7/6) ～灰(5Y4/1)	一枚作り。途中に穂をもつ曲線顎。凹面布目 を粗いタテ・ヨコナデで消す。瓦当近くヨコ ナデ、瓦当との境は面取状のヨコケズリ、側 面取のタテケズリ。凸面ナメ・タテナデ、 顎部と段差付近はヨコナデ。	

南大門前面(第 146, 147 図、PL.87, 88)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 A102	40-10 S110E32 表土	中央部 2/3		砂粒、白色粒子、 小穂(φ 7mm 以下)を多く含 む粗い胎土	還元焰／灰白 (5Y8/1)	縦型。瓦当裏面無絞り布目、布の折り目あり。	
2	軒丸瓦 B101	40-10 S110E32 表土	下半部 1/3		砂粒多	還元焰／褐灰 (10YR4/1)	縦型質。瓦当裏面無絞り布目。瓦当側面ヨ コナデ。	瓦当表面は降 灰
3	軒平瓦 P005 か P009	40-10 西壁トレ ンチ	中央部小 破片	瓦当幅 4.3 ~ 4.9 顎面長 1.2 ~ 2.2	砂粒、小穂(φ 8mm 以下)	還元焰／灰(N5/0)	曲線顎。凹面布目をタテナデで消す。瓦当近く ヨコナデ。凹面ヨコナデ・ケズリ、顎面ヨ コナデ。	
4	軒平瓦 P201	40-10 S110E32 表土	右半部小 破片	顎面長 2.2	砂粒、白色粒子、 小穂(φ 8mm 以下)	還元焰、内部酸化焰 臭味／灰(10Y6/1) 断面にぶつ黄橙 (5Y85/3)	段鉢。顎部貼付か。凹面布目、瓦当近くヨコ ナデ。凸面ヨコナデ、顎面ヨコケズリ。	
5	丸瓦	40-10 西壁トレ ンチ	広端部 1/2	広端幅 17.2 厚さ 1.3 ~ 2.2	粗砂粒をやや多 め	還元焰／表衣灰 (H5Y7/1)断面灰 (7.5Y5/1)	凹面系切痕、布目、各端面幅広いケズリ、 側端タテ彫印きをタテナデで消す。広端ヨコナ デ。	
6	平瓦	40-10 西壁トレ ンチ	狭端部 2/3	狭端幅 23.7 厚さ 1.4	砂粒、白色小穂(φ 3mm 以下)。 長さ 15mm 以 下の小穂	還元焰。内部一 部酸化焰臭味／灰 (5Y6/1)断面一部に ぶつ橙(7.5YR7/4)	一枚作り。凹面系切痕、布目、狭端ヨコケズ リ、側端タテケズリ。凸面タテ彫印きをタ テナデで消す。	
7	平瓦	40-10 西壁トレ ンチ	4/5	全長 40.5 広端幅 26.5 厚さ 1.4 ~ 1.8	砂粒、小穂(φ 6mm 以下)やや 多	還元焰／灰白 (5Y8/1)	一枚作り。凹面系切痕、布目各端部は面取状 のケズリ。凸面タテ彫印きをタテナデで消す。	

東大門地区瓦組造構(第 151 ~ 153 図、PL.88, 89)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	平瓦		完形	全長 39.8 広端幅 24.9 狭端幅 22.7 厚さ 1.7 ~ 2.7	砂粒、少數の白 色小穂(10mm 以下)、片岩片	還元焰／灰白 (7.5Y8/1) ~ 灰 (7.5Y4/1)	桶巻作り。凹面模背側板痕(幅 2.0 ~ 2.5cm)、 凸面に墨書き「大 前二牛乘昌廿 八」	
2	平瓦		ほぼ完形	全長 37.5 広端幅 28.4 狭端幅(25.0) 厚さ 1.3 ~ 2.3	砂粒、ごく少 数の小穂(φ 10mm 以下)	還元焰。狭端焼成や 不良 / 灰(5Y5/1)	桶巻作り。凹面模背側板痕(幅 1.8 ~ 2.0cm)、 布目、各端面取状ケズリ。凸面タテ彫印き後 筋にヨコナデ、側端幅広いタテケズリ、凹面 ヨコケズリ。	狭端部が一部 砕けている
3	平瓦		ほぼ完形 狭端左側 欠	全長 39.8 広端幅 28.8 中央幅 28.2 厚さ 1.2 ~ 2.6	砂粒、白色粒子、 少數の白色小穂 (φ 10mm 以下)	還元焰／灰(7.5Y4/1)	桶巻作り。凹面模背側板痕(幅 2.2 ~ 2.6cm)、 布目、各端面取状のケズリ・ナデ。凸面タ テ彫印き後粗いヨコナデ・タテナデ。	
4	平瓦		完形	全長 38.2 広端幅(31.0) 狭端幅 26.2 厚さ 1.9 ~ 2.8	砂粒	還元焰／灰白 (2.5Y8/1)	桶巻作り。凹面模背側板痕(幅 2.2 ~ 2.7cm)、 粘土板合せ目をタテナデで消す。系切痕、 布目、各端面取状ケズリ。凸面タテ彫印き後 筋にヨコナデ、側端幅広いタテケズリ、凹面 ヨコケズリ。	凸面はヨコナ デした後、も う一度彫印きを している可 能性も
5	丸瓦		狭端付近 1/3	玉緑長 6.6 狭端幅(10.5)	砂粒多	還元焰／灰白 (7.5Y8/1)	有段。糸に粘土を足して玉緑部を作る。凹面 粗い布目、無端、狭端面取状ケズリ。凸面胸 部はタテ彫印きをヨコナデで消す。玉緑はヨ コナデ。	
6	土師器 环	振り方	口縁部小 破片	口様(12.4)	砂粒	良好 / にぶい相	内面～口縁部外側ヨコナデ。	8世紀前半

東大門地区 SD 26, 20(第 154 ~ 162 回、PL.90 ~ 94)

No.	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	軒平瓦 NT301	40-7 SD26	左端部欠	瓦当幅 4.5 側面長 1.0 ~ 2.0	砂粒、赤色粒子	酸化焰 / にぶい橙 (7.5YR6/4)	桶巻作り。径差の大きな曲線複数。腹部は貼付か。凹面複数側面窓。系切痕、布目、凸面側面ヨコナナテ。側面部タテ窓押き、側面ナナメ窓押き。瓦当頭縛き。	凸面に朱着有
2	軒丸瓦 不明	40-7 SD26	上端部と 丸瓦部		砂粒、白色・黒 色粒子、色の異 なる粘土が織か る繊維になる	還元焰 / 灰 (7.5Y6/1)	瓦当頭は周縁部と界線。露弁先端の一筋が残る。丸瓦部凹面布目、側端面取のタテケズリ、瓦当との境は円周方向ナナテ。凸面タテ・ヨコナナテ。	
3	丸瓦	36-6 SK125	広端右隅 小破片	厚さ 1.9	様の大きな白色 粒子、小窓 (φ 8mm 以下)、部 分的に白色粘土 が織かれて構造に 入る	還元焰 / 灰 (N5/0)	凹面布目、側端面取状のタテケズリ。凸面系 切痕をタテナナテで消す。	凸面にヘラ書き「千」
4	丸瓦	40-7 SD26	狭端左隅 小破片	厚さ 1.9 ~ 2.7	砂粒、白色粒子、 片岩 (φ 7mm 以下)	酸化焰 / 表面灰 (7.5Y6/1) 断面に にぶい橙 (7.5YR6/4)	無段。凹面布目、側端タテケズリ。凸面タテ ナナテ、側端幅狭い面取。	凸面にヘラ書き「上」
5	丸瓦	40-7 SD26	広端左隅 1/4	厚さ 1.5 ~ 2.2	砂粒、白色粒子、 小窓 (φ 7mm 以下) や多	還元焰 / 灰 (10Y4/1)	凹面系切痕、布目、広端ヨコケズリ。側端タ テケズリ。凸面タテナナテ。	凸面にヘラ書き「山」
6	平瓦	36-6 SK125	広端 1/2 広端幅 (28.4) 厚さ 1.6 ~ 2.1		砂粒、白色粒子、 片岩 (φ 13mm 以 下、岩も)。色の異 なる粘土が織か る繊維になる部分 がある	還元焰。一部酸化焰 気味 / 灰 (7.5Y4/1) 白 (5YR5/2)	一枚作り。凹面系切痕、布目。凸面ナナメナ ナナテ。凸とも各端は面取の幅狭いケズリ。	凸面にヘラ書き「□(川か)」
7	丸瓦	40-7 SD26	左側端部 小破片	厚さ 1.3 ~ 2.2	砂粒、白色粒子、 白色 (φ 5mm 以 下)	還元焰 / 灰 (5Y6/1) 灰 (7.5Y4/1)	凹面布目、側端面取のタテケズリ。凸面タテ ナナテ、側端面取のタテケズリ。	
8	丸瓦	40-7 SD26	広端部 1/2	厚さ 2.0	粗粒砂、小窓 (φ 9mm 以下)	やや酸化焰気味 / 灰 白 (5Y7/1) にぶい 橙 (7.5YR6/4)	凹面布目、側端一部タテケズリ。凸面タテナ ナナテ。	
9	丸瓦	36-6 SK125	狭端 3/5	狭端幅 (15.5) 厚さ 1.0 ~ 2.3	砂粒・粗砂粒、 片岩、小窓 (φ 12mm 以下) ま ばら	還元焰。表面は酸 化焰気味 / 灰 (2.5Y7/3) 断面灰 (N5/0)	無段。凹面系切痕、布目。各端面取ケズリ。 凸面タテナナテ後ヨコナナテ。	
10	丸瓦	36-6 SK125	狭端 4/5	厚さ 1.3 ~ 2.3	砂粒、小窓 (φ 8mm 以下)	還元焰 / 灰 (5Y6/1)	無段。凹面布目、一部指ナナテ。側端・狭端面 取のケズリ。凸面タテナナテ。	
11	丸瓦	36-6 SK125	狭端 2/3	狭端幅 14.9 厚さ 1.1 ~ 1.6	砂粒	還元焰 / 表面黒褐色 理。暗灰 (N3/2) 断面 灰白 (5Y8/2)	無段。凹面布目、側端面取の幅狭いケズリ。 凸面タテ窓押後タテ (一部ヨコナナテ)。	
12	丸瓦	40-7 SD26	広端部欠	厚さ 1.8	砂粒・赤色粒子	酸化焰 / にぶい橙 (7.5Y7/3)	無段。凹面系切痕、布目。凸面タテ窓押を タテナナテで消す。	
13	丸瓦	36-6 SK125	ほぼ完形	全長 39.2 広端幅 (20.5) 狭端幅 (11.5) 厚さ 1.0 ~ 1.7	砂粒と少數の小 窓 (φ 12mm 以 下)	還元焰 / 浅黄 (2.5Y7/3)	無段。側端面に分割痕。切り込みは内側から。 凹面布目、側端面取の幅狭いケズリ、広端面 強いヨコナナテ。凸面タテナナテ。一部にヨコナ ナナテ、布目残る。	
14	丸瓦	36-6 SK125	左側端部 欠	全長 36.3 厚さ 1.3 ~ 2.1	細粒多く串 っぽい土。小窓 (φ 8mm 以下) まばら	酸化焰気味 / 浅黄 白 (10YR8/3)	側端面に分割痕。切り込みは内側から。 凹面布目、側端・広端面取状のケズリ。右端端 近くに布の縫合したような粗筋。凸面タテ 窓押後タテ・ヨコナナテ。	
15	丸瓦	36-6 SK125	広端 1/3	厚さ 1.2 ~ 2.0	砂粒	酸化焰気味 / にぶ い橙 (7.5YR6/4) ~ 灰 (5Y5/1)	側端面に分割痕。切り込みは内側から。 凹面布目、広端・側端面取のケズリ。凸面タテ ナナメナナナテ。	
16	平瓦	40-7 SD26	狭端右隅 か 1/3	厚さ 1.5 ~ 2.2	砂粒、白色・赤 色粒子や多	酸化焰 / 灰 (7.5YR6/6) ~ 灰 (7.5YR4/3)	一枚作り。凹面系切痕、布目、側端・狭端一 部面取ケズリ。凸面ヨコナナテ後、疊らな格子 押き。側端面取のタテケズリ。	広端左隅の可 能性も
17	平瓦	40-7 SD26	右側端部 1/4	厚さ 1.5	砂粒、白色粒子 や多	還元焰。内面酸 化焰気味 / 表面灰 (7.5Y4/1) 断面に にぶい赤橙 (5YR4/3)	凹面布目をタテナナテで消す。凹面系切痕、疊 らな格子押き。	
18	平瓦	36-6 SK125	ほぼ完形 左端部広 狭端部欠	全長 41.7 広端幅 (27.8) 中央幅 25.3 狭端幅 (22.5) 厚さ 0.9 ~ 1.8	砂粒。細かい白 色粒子目立つ	還元焰 / 灰 (5Y5/1)	一枚作り。凹面系切痕、布目、狭端を餘き面 取の狭いケズリ。凹面系切痕をヨコナナテで消 し格子押き 6 カ所。	
19	平瓦	36-6 SK125	狭端右隅 近小破 片	厚さ 2.5	砂粒。赤色粒子 目立つ	還元焰 / 灰 (5Y4/1)	一枚作り。2 枚の粘土板からなる。凹面系切 痕、布目、狭端・側端面取状の幅狭いケズリ。 凸面密なタテ窓押き、一部布目有り、側端面 取のタテケズリ。	
20	平瓦	40-7 SD26	広端右隅 1/5	厚さ 2.6	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焰。硬質 / 灰 (N6/0)	凹面系切痕、布目、側端タテケズリ、広端ヨ コケズリ。凸面密なタテ窓押き、側端大き く面取。	
21	平瓦	40-7 SD26	狭端右隅 小破片	厚さ 2.1	砂粒、白色粘 土上、小窓 (φ 16mm 以下) を 含むやや粗い 粘土上	還元焰 / 表面灰白 (5Y7/1) 断面淡黄 (2.5Y8/3)	一枚作り。凹面布目、狭端ヨコケズリ、側端 面取タテケズリ。凸面密なタテ窓押き、側端 タテナナテ。	

V 調査した遺構と遺物

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
22	平瓦	40.7 SD26	挑端右隅 1/4	厚さ 2.2 ~ 2.7 (φ 4mm 以下) 多	砂粒、径のやや 大きな白色粒子 (φ 4mm 以下) 多	還元焰 / 灰(10Y6/1)	一枚作り。門面系切痕、粗い布目、広端ヨコ ケズり、側端タテケズリ。凸面密なタテ縫卯 きを粗くナデ消す。	
23	平瓦	36-6 SK125	挑端右隅 1/2	厚さ 1.4 ~ 2.4 (20mm 以下)や や多	砂粒、小磚(φ 20mm 以下)や や多	還元焰 / 灰白 (5Y7/2)	一枚作り。門面布目、挑端・側端面取のケズ り。凸面タテ縫卯き後タテナデ。	
24	平瓦	40.7 SD26	端部小破 片	厚さ 2.1	砂粒、赤色粒子	やや酸化焰気味 / 灰 黄(2.5Y7/2) ~ 開 灰(7.5YR4/1)	一枚作り。門面布目、端部ヨコケズリ。凸面 タテ縫卯きをタテナデ消す。	
25	平瓦	40.7 SD26	側端部 1/5	厚さ 2.5	砂粒、赤色粒子 多く含む粗い胎 土	酸化焰気味 / 表面黒 色処理、灰(5Y4/1) 断面に灰・粗 (SYR7/4)	一枚作り。門面系切痕、布目。側端面取状の タテケズリ。凸面ヨコナデ。	
26	平瓦	40.7 SD26	側端部 1/6	厚さ 2.5	砂粒、粗砂粒を やや多	還元焰 / 灰白 (5Y8/1)	桶器作りか。門面横骨側倒らしの段差、糸 切痕、布目、側端幅広くタテケズリ、広端ヨ コケズリ。凸面タテ縫卯きをヨコナデ消す。	
27	平瓦	40.7 SD26	左半部 1/2	全長 39.3 厚さ 1.3 ~ 2.6	白色粒子、白色 小磚(φ 12mm 以下)多	還元焰 / 暗オリーブ 灰(2.5GY4/1)	一枚作り。門面布目、側端幅狭い面取のタ テケズリ。凸面タテナデ、側端の接端部近くの み面取のタテケズリ。	
28	平瓦	40.7 SD26	挑端左隅 1/4	厚さ 1.8	砂粒	還元焰 / 灰白 (2.5Y8/1)	一枚作り。門面布目。凸面粗いタテ・ナナメ ナデ。	
29	平瓦	40.7 SD26	右半部 1/2	厚さ 1.5 ~ 2.2	砂粒、小磚(φ 1.5mm)、色の 異なる粘土が細 かい縞模様になる	還元焰 / 灰黄 (2.5Y6/2)	一枚作り。門面系切痕、布目、側端幅狭い面 取のタテケズリ。凸面タテナデ。	
30	土器器 环	36-6 SK125	口縁部破 片	口径(12.6)	砂粒	良好 / にぶい橙	内面・口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ち ヘルアツリ。	7世紀後半
31	須恵器 小皿	40.7 SD26	口縁~底 部 1/3	口径(9.4) 底径 4.9 高さ 2.5	繊砂、白色粒	酸化焰 / にぶい橙	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り無調整。	10世紀後半
32	須恵器 小皿	40.7 SD26	口縁~底 部 2/3	口径 9.8 底径 4.4 高さ 2.8	繊砂	酸化焰 / 橙	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り無調整。	11世紀前半
33	須恵器 小皿	40.7 SD26	口縁~底 部 1/3	口径(8.3) 底径 4.6 高さ 2.1	繊砂、白色粒	酸化焰 / 浅黄橙	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り無調整。	11世紀前半
34	須恵器 小皿	40.7 SD26	口縁~底 部 1/2	口径 9.2 底径 6.7 高さ 1.5	繊砂	酸化焰 / 橙	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り無調整。	11世紀前半
35	在地系上器 火鉢跡	36-6 SD26	体部片				窓壁厚く、体部は内湾。外面上丁寧な磨き、 内面は粗い横撫で。外表面横方向に二重の凸 部、その中に菱形に十字の印刷と円形貼付 文様。	
36	在地系上器 内耳銅	36-6 SD20	内耳~体 部片				窓壁薄く、頬面部内面段差あり。内面横撫で、 外面粗い撫で。内耳貼り付け。	
37	陶器 塵	36-6 SD20	体部片				常滑。	

東大門地区表土(第163図、PL95)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 A302	40.7 SIE132	花弁~周 縁部 1/4		砂粒多。白色粒 子目立つ	酸化焰氣味 / 表面黒 色処理。オーリーブ混 (5Y3/1)断面にぶい 橙(5YR6/3)	縦型型。瓦当裏面無絞り布目。	
2	軒丸瓦 B003	36-6 規道下	上部 1/2		砂粒多く含むや や粗い胎土	還元焰 / 暗オリーブ (5Y6/2)	縦型型。瓦当裏面無絞り布目。	
3	軒平瓦 P002B	36-6 規道下	中央部 1/3	瓦当幅 4.7	砂粒	還元焰 / にぶい黄 (2.5Y6/3) ~ 灰 (5Y5/1)	一枚作り。顎は直線的に厚くなる。門面布目、 瓦当近くヨコナデ。凸面タテケズリ。	凸面に朱付着
4	軒平瓦 P009	36-6 N15E129	中央部 1/2	瓦当幅 4.1 製面長 6.5	砂粒やや多	還元焰 / 灰(5Y7/1)	一枚作り。曲線弧、門面布目、瓦当近くヨコ ケズリ。製面ヨコ縫卯きをヨコナデ消す。 平部瓦面タテナデ後削り、ヨコナデ。	
5	軒平瓦 P206	36-6 規道下	右端部小 破片	瓦当幅 5.7 製面長 1.7	砂粒・黒色粒子	顎面が極く段差の大きい凹型、顎面縫卯付 け付け。門面布目、凸面ヨコケズリ・ナデ、顎面はヨ コナデ。	凸面に朱付着	
6	軒平瓦 R001	36-6 NOE129	中央部小 破片		白色粒子目立つ 粗い胎土	還元焰 / 灰(5Y5/1) 断面は灰褐色 (7.5YRS5/2)のところ が多い。	門面タテナデ、後瓦当近くヨコナデ。凸面 顎部の縫卯付けが剥離	
7	平瓦	36-6 N10E129	中央部小 破片	厚さ 1.7	砂粒・白色粒子	還元焰 / 灰(5Y5/1)	一枚作りか。門面布目、凸面タテ・ナナメナデ、 口縁部に油煙付着	凸面にヘラ書き「山」(山)
8	在地系上器 皿	36-6 N10E129	口縁~底 部 1/3	口径(7.2) 底径(4.3) 高さ 2.0	繊砂粒	酸化焰 / 浅黄橙	小型皿。縫縫左回転成形。体部緩く内湾。	口縁部に油煙付着

東大門地区 S J 5 2 (第 164 図、PL.95)

No.	種類 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	土師器 環		口徑(13.1)	砂粒	良好/粗	内面～口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ちヘラケズリ。内面指押え。		7世紀後半
2	土師器 環		完形	口径 12.5 高さ 4.3	砂粒	良好/粗	内面～口縁部外面ヨコナデ。底部外面手持ちヘラケズリ。内面指押え。	7世紀後半
3	須恵器 環		完形	口径 10.8 底径 9.0 高さ 3.7	砂粒	還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部外面手持ちヘラケズリ。内面指押え。	7世紀後半
4	須恵器 高台付塊		4/5	口径(11.4) 高台径 7.3 高さ 5.8	白色粒子・雜	還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台貼付か。	8世紀中葉
5	土師器 環		口縁～脚 下平 底部欠	口径 22.0	砂粒・白色粒子	良好/粗	口縁部ヨコナデ。脚部横位ヘラケズリ。内面 口縁部ヨコナデ。脚部横位ヘラナデ。	7世紀末～8 世紀初頭

南辺塗垣地区 S A 0 4 (第 169 図、PL.96)

No.	種類 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	土師器 環	P4 採取り	口縁～脚 部破片	口径(21.6)	細砂粒	良好/粗	口縁部ヨコナデ。脚部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ。脚部横位ヘラナデ。	8世紀第3四 半期
2	土師器 環	P4 採取り	脚部破片	脚部径(19.4)	細砂粒	良好/にぶい粗	口縁部ヨコナデ。脚部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ。脚部横位ヘラナデ。	8世紀第3四 半期

S D 2 7, 2 8, 0 1, 1 2 (第 172, 173 図、PL.96, 97)

No.	種類 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	軒瓦 B201a	40-12 SD27 新	花弁部小 破片		砂粒・白色・黒 色粒子やや多	還元焰/灰(7.5Y6/1)	接合系。瓦当裏面円周方向ナデ。	
2	軒丸瓦 B201a	40-12 SD27 新	上部小破 片		砂粒をやや多 く。白色・黒色粒子 目立つ	還元焰/灰(5Y5/1)	横置型。周縁上面圓周方向ケズリ。丸瓦凹面 布目、瓦当近くはヨコナデ。凸面タテナデ。	
3	軒平瓦 NH301	40-9 SD27	左半部 1/2		砂粒・白色小 球(φ 6mm 以下) を多く含む粗い 胎土	還元焰/灰(N5/0)	桶巻作りか。曲線彫。凹面模骨側板状の段 差、布目、瓦当近くヨコケズリ。凸面ヨコナデ。	
4	軒平瓦 NT7	40-12 SD27	中央部小 破片	瓦当幅 4.0 軸面長 3.8	砂粒	還元焰/灰(5Y7/1)	一枚作りか。段階、凹面系切痕、布目、凸面 タテナデ、タテ磯印き、頸部ヨコナデ、頸面 ヨコ網印き。	凸面に朱付着
5	軒平瓦 PO01	40-12 SD27	左端部 1/5		砂粒やや多	還元焰、一部酸化焰 気味 / 表面黑色化處理 オリーブ里(10Y3/1) 断面一部滑 (2.5YR6/6)	接もつ曲線彫。凹面ヨコナデ、側端面取の タテケズリ。凸面タテナデ。	
6	軒平瓦 SO01	36-3 SK119	右半部 1/3	瓦当幅 5.2	細砂粒	やや酸化焰氣味 / 表面大部分炭素吸 着、灰(5Y6/1), その他にぶい黄 鉛(10YR7/3)	一枚作り。直線彫。凹面布目、瓦当近くヨコ ケズリ、側端面取の幅狭いタテケズリと幅広 いタテケズリ。凸面タテケズリ・ナデ。	
7	土師器 環	40-12 SD27 古	口縁～脚 部破片	口径(23.4)	細砂粒	良好/粗	口縁部ヨコナデ。脚部ヘラケズリ。内面口縁部 ヨコナデ。脚部ヘラナデ。	8世紀前半
8	須恵器 塊	40-9 SD27	体～底部 1/3	底径 5.8	細砂粒	還元焰/灰	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り無調整。	9世紀後半
9	須恵器 塊	40-9 SD27	体～底部 1/2	口径(14.0) 底径 6.4 高さ 5.2	細砂粒	還元焰/灰	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り後、高 台貼り付け、接合部ナデ。	9世紀後半
10	灰釉陶器 高台付 小塊	36-3 SK119	口縁～底 部破片	口径(14.0) 底径(8.4) 高さ 3.8	細砂粒	還元焰/灰白	ロクロ整形(回転方向不明)。底部切り離し後 高台貼り付け。	10世紀前半 大屋2号窯式
11	灰釉陶器 塊	40-9 SD27	口縁～底 部 1/4	口径(12.4) 底径(7.0) 高さ 2.8	細砂粒	還元焰/灰白	ロクロ整形、回転不明。底部回転糸切り後、 高台貼り付け、接合部ナデ。	11世紀前半 丸石2号窯式
12	円面硯 か	36-3 SK119	小破片		砂粒	還元焰/灰白	ロクロ形(回転方向不明)。透かし穴(方形 か)の上にヨコ、ナメ格子の割れ。	8世紀
13	須恵器 塊	40-9 SD28	体～底部 1/5	底径(6.4) 白色粒子	細砂粒・白色粒 子	酸化焰/粗	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り無調整。	10世紀
14	軒丸瓦 B101	36-3 SD01	左下部小 破片		砂粒	還元焰/灰(10Y5/1)	横置型。瓦当裏面無綴り布目。瓦当側面・突 起上面圓周方向ケズリ・ナデ。	
15	軒丸瓦 B105	36-3 SD01	中央部小 破片		白色粒子多。色 の異なる粘土が 織かい縮状になる	還元焰/灰(10Y5/1)	横置型。瓦当裏面無綴り布目。	
16	軒平瓦 NR304	36-3 SD01	中央部小 破片	瓦当幅 3.0	砂粒・白色・赤 色・黒色粒	還元焰。質硬・暗青 灰(5B3/1)	わずかに曲線彫。頸部は粘土貼り付け。凹面 ヨコナデ。凸面タテ磯印き、頸面タテナデ。	
17	軒丸瓦 PO04	40-12 SD12	中央部小 破片	軸面長 3.5	粗砂粒・白色・ 黒色粒子を多く 含む粗い胎土	還元焰/灰(5Y6/1)	一枚作りか。段階。頸部貼付。凹面系切痕、 布目、瓦当近くヨコケズリ。凸面ヨコナデ。	凸面に朱付着

V 調査した遺構と遺物

南辺塙垣地区表土(第 174, 175 図、PL97, 98)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 B201	40-12 S95E85	花弁～周 縁小破片		砂粒や多	還元焰／表面黒色匂 理黒(N2/O)断面(灰 白57/1)	丸瓦部凸面タテナデ。	
2	軒丸瓦 B209か	40-12 SD25	左下部 1/5		砂粒、白色粒子	還元焰、内部一部 酸化焰氣味／灰白 (5Y8/1)断面中心に ぶい(7.5YR6/4)	瓦当裏面ナデ。	
3	軒丸瓦 不明	40-12 S95E85	花弁～周 縁小破片		砂粒、白色粒子 多	酸化焰氣味／ぶい (7.5YR6/4)	複数型か。瓦当側面ヨコナデ。	
4	軒平瓦 NH302	40-12 S100E85	右端部 1/3	瓦当幅 2.7 側面長 3.7	砂粒、白色 色粒子や多	還元焰／灰(5Y5/1)	枝をもつ曲線型。凹面布目をヨコナデで消す。 側面は複数のタテケズリ2回。凸面タテナデの 後側面とその近くヨコナデ。	
5	軒平瓦 P001	40-12 S100E85	中央部 1/3		砂粒や多	酸化焰氣味／淡黄 (2.5Y7/3)	穢れ。曲線型。凹面布目を軽く消す。瓦当近く ヨコナデ。凸面タテナデ。	凸面に朱付着
6	軒平瓦 S001	40-12 S100E85	中央部小 破片		黑色粒子多	還元焰／灰(5Y8/1)	一枚作り。頸の断面は三角形。凹面系切り痕、 布目。凸面タテナデ。ケズリ。	
7	軒平瓦 Z001	40-12 S100E85	中央部 1/5		径のやや大 きな白色粒子(Φ 5mm以下)多	還元焰／灰(7.5Y4/1)	段のきつい曲線型。頸部貼付。凹面系切痕、 布目。凸面ヨコナデ。	凸面に朱付着
8	平瓦	40-12 SD25	狭端左隅 小破片	厚さ 2.8	砂粒、白色粒子 や多。小破(Φ 18mm以下)	還元焰／オーピープ (2.5Y5/1)	凹面系切痕、布目。狭端ヨコケズリ。凸面タ テナデ、側端タテケズリ。	凸面に押印「□ に當」
9	平瓦	40-12 S95E85	中央部小 破片	厚さ 1.3	細砂粒	やや酸化焰氣味 表面黒色處理灰 (5Y4/1) 断面にぶい(黄 色)(2.5Y6/3)	凹面布目をごく粗くヨコナデ。凸面平行叩き。	凸面に明記 「□」
10	平瓦	40-12 SD25	側端部小 破片	厚さ 1.7	白色粒子や多	還元焰／灰(10Y4/1) 断面表面近づく程 (7.5YR6/6)	凹面布目、側端面取。凸面平行叩きをタテナ デで消す。	凹面にヘラ書き「大」
11	平瓦	40-12 SD25	中央部小 破片	厚さ 1.7	砂粒、白色粒子 多	還元焰／灰(10Y6/1)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書き「大」
12	平瓦	40-12 SD25	端部中央 小破片	厚さ 2.6	砂粒、黒色粒子。 薄い層状になる	還元焰／灰(7.5Y7/1)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書き「□」
13	平瓦	40-12 S95E85	広端右隅 小破片	厚さ 1.3	砂粒、白色粒子 や多	やや酸化焰氣味 表面黒色處理灰 (5Y4/1) 断面にぶい(黄 色)(10YR6/3)	凹面系切痕と布目を粗いタテナデで消す。側 端面取タテケズリ。凹面系切り痕、タテ鍔 叩き。	凹面にヘラ書き「ヨコ 4 本 線」
14	平瓦	40-12 S95E85	側端部小 破片	厚さ 1.9	砂粒、白色粒子 や多	還元焰。内澤酸 化焰氣味。表面灰 (7.5Y4/1) 断面にぶい(黄 色)(7.5YR5/4)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書き「辛名」
15	平瓦	40-12 SD25	中央部小 破片	厚さ 1.9	砂粒、径のやや 大きな白色粒子 (Φ 5mm以下)	還元焰。内澤酸 化焰氣味。表面灰 (10Y4/1) 断面にぶい(黄 色)(7.5YR5/4)	一枚作りか。凹面布目。凸面タテナデ。	凸面にヘラ書き「馬甘」
16	平瓦	40-12 SD25	狭端右隅 小破片	厚さ 1.3	砂粒や多	還元焰／灰(7.5Y7/1)	凹面タテナデ。凹面系切り痕、タテ鍔叩き。	凹面にヘラ書き「ヨコ 4 本 線」
17	軒丸瓦 E109	40-8 南 S90E110	右上部 1/2		砂粒、径のやや 大きな白色粒子 (Φ 5mm以下)	還元焰／灰(N5/0)	印籠付け。丸瓦欠。瓦当裏面に溝を掘って丸 瓦を差し込む。瓦当裏面ナメナデ。	
18	軒丸瓦 新丸種	40-8 南 S90E110 II層	左下部 1/4		砂粒、径の大き い白色粒子(Φ 4mm以下)や多	酸化焰氣味／黄灰 (2.5Y4/1)～にぶい (7.5YR6/4)	複数型か。瓦当裏面ナデ、突帯とその内側印 籠方向ナデ。	瓦当面に大き な痕跡。弁間に にへら先を押 しきつた凹み
19	平瓦	40-8 南 S95E110 亂混	中央部小 破片	厚さ 1.6	砂粒	酸化焰／橙(5YR6/6)	凹面布目。凸面ナデか。	凸面に押印 「生」
20	平瓦	40-8 南 S90E110 II層	側端部小 破片	厚さ 2.3	砂粒、白色粒子 や多	還元焰／灰(N4/0)	一枚作りか。凹面布目、側端タテケズリ。凸 面ヨコナデ。	凸面にヘラ書き「□」

築垣南東角(第176図、PL.98, 99)

No.	種類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 B104	40.9 S95E130 南壁トレンチ	右上部 1/4		砂粒、黒色粒子	還元焰/灰白 (5YR/1)	印旋付け。瓦当裏面に溝を掘り先端凸面を削った丸瓦を差し込む。瓦当裏面～丸瓦凹面ナナ。丸瓦凸面タテケズリ。	
2	軒平瓦 NH301	40.9 西壁 トレンチ 南壁上	中央部小 破片	瓦当幅 4.9	砂粒、赤色粒子 や多	酸化焰氣味。表面と 内部中心部は還元焰 表面と中心部赤灰白 (5YR/2) 断面浅黄相 (7.5YR8/4)	直線顎。凹面ヨコ～ナメナナデ・ケズリ。凸 面タテナナデ・ケズリ。	
3	軒平瓦 P002	40.9 西壁 トレンチ 南壁上	左端部 1/4	瓦当幅 4.1	砂粒。白色粒子 目立つ	還元焰/灰(N5/0)	一枚作りか。直線顎。凹面布目。瓦当近く広 くヨコナナデ。側端幅狭い面取のタテケズリ。 凸面タテナナデ後格子明き。額との境をヨコナ デ。	凸面に朱付着
4	軒平瓦 R002	40.9 S95E130 南壁トレン チ	右半部小 破片	瓦当幅 4.0	砂粒、白色粒子 を多く含む微 ぼい胎土	還元焰/灰白 (7.5YR8/2)	額の断面は三角形。額は貼り付けか。凹面布 目。凸面ヨコナナデ。	
5	須恵器 小皿	40.9 S95E130 南壁トレン チ	口縁～底 部 4/5	口径 9.2 底径 5.6 高さ 2.2	細砂粒、白色粒子	酸化焰/ 極	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り。	11世紀前半
6	軒平瓦 NH301	40.9 S95E130 II層	右端部 1/3	瓦当幅 3.3	砂粒、白色粒子、 小繊(ø 15mm 以下)	還元焰/灰(N6/0)	桶巻作りか。無製。凹面横骨側板痕状の段差、 糸切痕、布目。瓦当近くヨコケズリ、側端近 くタテケズリ。側端面取のタテケズリ。凸面 タテ構造き目をタテナナ取で消す。広端ヨコケ ズリ。	
7	軒平瓦 P105か	40.9 S95E135 表上	左端部 1/3	瓦当幅 3.1	砂粒	還元焰。硬質で表面 に光沢がある／暗灰 (N3/0)	一枚作りか。額は断面三角形で、ヘラの先端 で小さな段差を作り出す。凹面布目、瓦当近く ヨコケズリ、側端タテケズリ。凸面ヨコナ デ。	
8	平瓦	40.9 S90E140 表上	接端左隅 小破片	厚さ 1.7	砂粒、白色粒子 や多	還元焰。内部酸化 焰氣味／表面黄灰 (2.5Y5/1) 断面灰灰(7.5YR5/2) ～褐灰(10YR5/1)	一枚作りか。凹面布目。凸面ヨコナナデ。	凸面に押き「山 田」
9	丸瓦	40.9 S90E140 表上	側端部小 破片	厚さ 2.0	砂粒、径のや 大きな白色粒子 (ø 4mm以下)	還元焰/灰(10Y6/1)	凹面布目。凸面タテナナデ。	凸面にヘラ書 き「千」
10	須恵器 台付	40.9 S95E130 表上	底部破片	底径(8.6)	細砂粒、白色粒子	良好／ 粗	ロクロ整形(回転方向不明)。底部穿孔。ナナ。	10世紀

36-3 トレンチ盤穴建物・土坑ほか(第177, 178図、PL.99, 100)

No.	種類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	灰釉陶器 高台付塊	SJ49	口縁～底 部 1/5	口径(15.6) 高台径(7.5) 高さ 4.7	白色粒子	還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台貼付。	10世紀前半 大屋2号窓式
2	灰釉陶器 高台付塊	SJ49	口縁～底 部 1/2	口径(17.2) 高台径 8.6 高さ 5.8	白色粒子	還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。底部切り離し後高台貼 付。内面に重ね焼きの痕跡。	10世紀前半 大屋2号窓式
3	須恵器 高台付塊	SJ49	口縁～底 部 1/4	口径(11.9) 高台径 8.0 高さ 5.2	砂粒・赤色粘土 粒	酸化焰/浅黄相	ロクロ整形(右回転)。底部切り離し後高台貼 付。	10世紀後半
4	須恵器 高台付塊	SJ49	底部破片	高台径(10.6)	粗砂粒・白色粒子 多	酸化焰/浅黄相	ロクロ整形(回転方向不明)。底部切り離し後 高台貼付。	10世紀後半
5	須恵器 小皿	SJ50	ほぼ完形	口径 9.0 底径 4.5 高さ 2.5	砂粒	酸化焰/浅黄相	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り。	口縁部に油煙 付着 11世紀前半
6	須恵器 小皿	SJ50	口縁～底 部 2/3	口径 9.3 底径 5.1 高さ 2.3	砂粒	酸化焰/にふい黄相	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り。	11世紀前半
7	須恵器 羽釜	SJ50	口縁部小 破片		砂粒	酸化焰氣味/淡黄	ロクロ整形(回転方向不明)。	10世紀
8	平瓦	SJ51	広端左隅 1/3	厚さ 1.6～1.9	砂粒、ごく少數 の小繊(ø 7mm 以下)	酸化焰氣味/灰白 (5Y6/1) ～黒褐 (2.5Y3/1)	桶巻作りか。凹面横骨側板痕らしいわずかな 段差。糸切痕。布目。まばらなタテナナデ。側 端・広端面取のタテケズリ。凸面ヨコナナデ後タテ 構造き。その後広く布目付着。	
9	平瓦	SJ51	中央部小 破片	厚さ 1.8	砂粒	還元焰。内部は部分 的に酸化焰氣味/灰 (5Y6/1) ～一部にふい黄 (5YR6/4)	凹面布目をタテ・ヨコナナデで消す。凸面ヨコ ナナデ後格子明き、後一部タテナナデ。	
10	平瓦	SJ51	広端部 2/5	広端幅 25.2 厚さ 0.9～1.7	砂粒	酸化焰氣味/灰 (5Y5/1)	一枚作り。凹面布目、側端面取のタテケズリ、 広端ごく狭いヨコケズリ。凸面ナナメナナデ。	凸面全体に燒 上が帶付着
11	須恵器 高台付鉢	SJ51	底部破片	高台径 10.0	粗砂粒・黑色	還元焰/灰白	ロクロ整形(回転方向不明)。底部回転糸切り 後高台貼付。	9世紀前半
12	須恵器 高台付塊	SJ51	口縁～底 部 1/3	口径(11.6) 高台径(5.3) 高さ 4.9	細砂粒	酸化焰/にふい黄相	ロクロ整形(回転方向不明)。底部回転糸切り 後高台貼付。	10世紀前半

V 調査した遺構と遺物

No	種類 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
13	須恵器 小皿か 片	SJ51	底部破片	底径 5.0	砂粒	酸化焰気味 / 灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り。	10世紀後半
14	須恵器 高台付碗	SJ51	体～底部 破片	粗砂粒・赤色粘 土粒多	酸化焰 / に赤い黄粒	ロクロ整形(右回転か)。底部回転糸切り後高 台貼付(剥離)。	10世紀後半	
15	土師器 环か	SK116	口縁～底 部破片	口径(11.8) 底径(10.6) 高さ(2.3)	砂粒	良好 / に赤い粒	口縁部ヨコナデ。底部外側手持ちヘラケズリ。 内面ナデ。	口縁部に油煙 付着 8世紀中葉
16	須恵器 碗	SK117	口縁～底 部 2/3	口径 10.3 底径 5.0 高さ 4.3	砂粒・赤色粘土 粒	酸化焰 / 浅黄相	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り。	10世紀後半
17	須恵器 碗	SK118	口縁～底 部 1/3	口径(11.2) 底径 5.1 高さ 3.7	砂粒	還元焰 / 灰黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り。	口縁部に油煙 付着 11世紀前半
18	須恵器 蓋	II層下	ほぼ完形	口径 14.1 縦み径 4.5 高さ 2.6	黒色粒子	還元焰 / 灰	ロクロ整形(右回転)。天井部外側回転ヘラケ ズリ。	8世紀第2～ 末

寺域南東部(第 180 ~ 182 図、PL100, 101)

No	種類 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成/色調	成・整形等	備考
1	有地系土器 皿	40-13 ST78	ほぼ完形	口径 12.8 底径 7.5 高さ 3.9	粗砂粒	酸化焰 / 浅黄相	底部左回転糸切り無調整。器高は高く、体部直線的に開きやや外反。	
2	丸瓦	36-2 SK111	1/3	全長(38.5) 厚さ 1.0～2.3	粗砂粒含み砂つ ぼい、粗砂粒、 小穂(φ 5mm 以下)も少	還元焰 / 灰白 (5Y8/1)	無段。凹面系切痕、布目、側端面取のタテケ ズリ 2 回。凸面タテハナデ、側端面取のタ ケズリ。	
3	平瓦	36-2 SK111	挾端右隅 1/4	厚さ 1.9～3.6	砂粒、少數の小 穂(φ 10mm 以 下)、様のやや 大きな白色粒子 (φ 3mm 以下) が目立つ。粘土 に隙間多く粗い 胎土	還元焰 / 明暈灰 (10GY4/1)	一枚作り。凹面布目、側端・挾端面取のケズ リ。凸面タテナデ、一部ヨコナデ。平行印きか。 厚い瓦	
4	平瓦	36-2 SK111	挾端左隅 か 1/6	厚さ 1.8	砂粒、小穂(φ 10mm 以下)、 白色粒子	還元焰 / 灰(5Y6/1)	凹面タテナデ、挾端近くはヨコナデ。側端面 取のタケズリ、凸面タテ・ナメ彫印き。	
5	變斗瓦か 瓦	36-2 SK111	広端部 1/2	広端幅(20.5) 厚さ 2.0～2.5	砂粒、白色粒子 が多い粗い胎土	還元焰 / 灰(N4/0)	桶巻作り。凹面模倣側板痕(幅 2.2cm 前後), 粘土板瓦せじ目、系切痕、布目。一部折ナデ で削り目などを消す。側端面取伏タケズリ。 凸面タテナデ、側端面取のタケズリ。	
6	平瓦	36-2 SK112	端部破片	厚さ 2.0	粗砂粒を多く含 む粗い胎土	やや酸化焰気味 / 表 面灰(5Y5/1) 断面灰青(5Y5/2) ～にぶく灰(5YR6/4)	一枚作り。凹面布目、側端面取のタケズリ。 凸面タテナデ。	
7	須恵器 甕	36-2 SK112	胴部小破 片		砂粒・黒色粒子	還元焰 / 灰	外面平行印き。内面同心円状當て具庭。	7～9世紀
8	軒丸瓦 B201a	40-8 北 S35E110 表上	下端部小 破片		砂粒、白色粒子	還元焰 / 表面黒色 灰(10Y6/1) 断面灰青(2.5Y6/1)	瓦当裏面ナデ、串状の工具による刺突痕。瓦 当側面円錐方向ナデ。	周縁が美しい(幅 2～3mm)
9	軒丸瓦 E001	40-13 S66E75 表上	中房～花 弁小破片		砂粒	やや酸化焰気味 / 浅 黄(10Y8/3)	複数型。瓦当裏面有絞り布目。	
10	軒平瓦 NH301	40-8 北 S35E110 表上	中央部小 破片	顎面長(2.0)	砂粒、径のやや 大きな白色粒子 (φ 4mm 以下)	やや酸化焰気味 / 表面黒色剥離、灰 (7.5Y4/1)断面暗 黄(2.5Y5/2)	種をもつ曲線顎。凹面ヨコナデ。凸面タテナ デ、顎面ヨコナデ。	
11	軒平瓦 NH301	40-8 北 S35E110 表上	中央部小 破片	顎面長 1.0	砂粒、径の大き な白色粒子(φ 7mm 以下)多 片岩片。	還元焰。瓦当面と凸 面降灰(7.5Y5/1)	顎の狭い曲線顎。凹面布目、瓦当近くコ 凸面タテナデ。凸面タテ彫印きをナデ消す。顎面ヨコ ナデ。	瓦当部は凹凸 面とも広がる
12	軒平瓦 P001	40-8 北 S35E110 表上	左下部小 破片	顎面長 3.4	砂粒、白色粒子	やや酸化焰気味 / 表面黒色剥離、灰 (N4/0)断面灰黄 褐(10YR6/2)	種をもつ曲線顎。腹部の破片。接合面に粗い ハケ目。顎面ヨコナデ。	
13	丸瓦	40-13 S66E120 表上	側端部小 破片	厚さ 1.6	砂粒、白色粒子 (φ 4mm 以下) 多	還元焰 / 黄灰 (2.5Y5/1)	凹面布目、側端面取のタケズリ。凸面ヨコ ナデ。	凸面にへラ書 き「二」
14	丸瓦	40-13 S66E120 表上	中央部小 破片	厚さ 0.9	砂粒、白色粒子	凹面布目。凸面タテナデ。	凹面にへラ書 き「□」	
15	丸瓦	40-8 北 S35E110 Ⅱ層	狭端部? 小破片?	厚さ 1.6	砂粒、白色粒子 (5YR6/8)	還元焰 / 灰(N5/0) 断面表面近くのみ相	凹面布目。一部タテナデ、端部ヨコケズリ。 凸面タテナデ、端部近くヨコナデ。	凸面にへラ書 き「得」
16	平瓦	40-8 北 S50E110 B層	端部小破 片	厚さ 2.0	砂粒、白色粒子	還元焰 / 灰(N5/0)	一枚作り。凹面布目、端部ヨコケズリ。凸面 ヨコナメナデ。	凸面に印き「篠田」

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
17	平瓦	40-13 S66E75 表上	中央部小 破片	厚さ 1.7	砂粒、白色粒子	還元焰 / 暗灰(N3/0)	一枚作り。門面布目。凸面タテナデ。	門面にへラ書き「□右人」
18	平瓦	40-8 北 S45E110 II層	中央部小 破片	厚さ 2.3	砂粒、白色粒子 やや多	還元焰 / 灰(5Y6/1) 断面表面近くのみに ぶい橙(5YR6/5)	門面布目。凸面タテ～ナナメナデ。	凸面にへラ書き「□」
19	須恵器 小皿	40-8 北 S30E110 表上	口径 7.4 底径 4.6 高さ 2.1		繊砂粒、白色粒子	酸化焰 / ぶい黄橙	ロクロ整形、左回転。底部回転糸切り無調整。	11世紀前半
20	青磁 碗	40-8 北 S30E110 表上	胸～高台 部底	底径(5.2)			見込み草花文の印刻か。高台内無軸。	龍泉窯系

寺域東部(第184図、PL.101)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	軒瓦 Q001	40-6 N45E90 表上	右下部小 破片		砂粒	還元焰 / 灰白 (5Y7/1)	無軸。凸面タテナデ。瓦当近くヨコナデ。	
2	平瓦	40-6 N45E95 表上	中央部小 破片	厚さ 1.7	砂粒	酸化焰気味 / 橙 (7.5YR6/6)	門面布目、一部ナデ。凸面摩滅。	凸面に叩き「□」
3	平瓦	40-6 N45E115 表上	側端部小 破片	厚さ 1.9	砂粒、白色粒子 やや多	還元焰。内部酸 化焰気味 / 表面灰 (10Y5/1)断面にぶい 橙(5YR6/3)	一枚作り。門面各切痕。布目、側端面取りの タテケズリ。凸面ナナメ・ヨコナデ。	凸面にへラ書き「井」

梵鐘鑄造土坑(第186図、PL.102)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	蹄型片	埋土		径(9.0) 中間径(4.5) 厚さ 1.7			撞座の部位。蓮華文。	
2	蹄型片	埋土					龍頭の部位。上部に渦口。	
3	蹄型片	埋土		乳頭径 2.0 厚さ 0.9			乳頭の部位。	
4	蹄型片	埋土					竪位の線刻。線幅 4 mm	
5	蹄型片	埋土					竪位の線刻。線幅 4 mm。	
6	蹄型片	埋土					横位の線刻。線幅 4 mm。下部が外に張り出 す。	
7	蹄型片	埋土					横位の線刻。線幅 12 mm。	

近代廐棄坑(第191～193図、PL.102, 103)

No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
1	軒丸瓦 A101		下部 2/3		白色粒子を多く 含むや粗い胎 上。薄い斜状	還元焰 / 灰(N5/0)	複型。瓦当裏面無綻り布目。突帯部円周方 向ケズリ。瓦当側面下半はタテ・ヨコナデ。	
2	軒丸瓦 A310		中層～界 線小破片		砂粒	還元焰。内部は酸 化焰気味 / 表面灰 (5Y6/1)断面にぶい 橙(7.5YR6/3)	複型。瓦当裏面無綻り布目。折り目あり。	新范種
3	軒丸瓦 B101		上部小破 片		砂粒多	還元焰 / 灰(10Y6/1)	複型。瓦当裏面無綻り布目。	
4	軒丸瓦 B101		上部小破 片		白色粒子と黒 色粒子が目立つ	還元焰。内部は酸 化焰気味 / 表面灰白 (5Y7/1)断面にぶい 黄橙(10YR5/3)	複型。瓦当裏面無綻り布目。段差がある。	
5	軒丸瓦 B101		下部小破 片		砂粒、白色粒子 多	わずかに酸化焰気味 / 灰(5Y4/1)	複型。瓦当側面下半円周方向ナデ。瓦当裏 面無綻り布目。	
6	軒丸瓦 B201a		上部 1/5		砂粒多。白色粒 子目立つ	やや酸化焰気味 / 灰 (5Y6/1)	横型。周縁上面圓周方向ケズリ・ナデ。丸 瓦当タテ(一部ヨコ)ナデ。門面と瓦当裏面 はヨコナデ。	丸瓦当が非常 に厚い
7	軒丸瓦 B207a		花弁小破 片		白色粒子多。色 の異なる粘土が 纏かい縮状になる	酸化焰気味 / 表面と断面 中心部灰(5Y5/1) 断面外側にぶい橙 (7.5YR6/4)	複型。瓦当裏面無綻り布目。中心から周縁 部に向かって薄くなる。	
8	軒丸瓦 C003B		上部小破 片		白色粒子を多く 含むや粗い胎 上。色の異なる 粘土が纏かい縮 状になる	還元焰 / 暗灰(N3/0)	複型。周縁上面ナデ。瓦当裏面無綻り布目。 丸瓦当タテナデ。	Aは弁闇の1 力所にV字型 の文様が界線 に付くが、こ の個体は全て の弁間に付く らしいでB とする
9	軒丸瓦 D001		下部小破 片		やや大きな白色 粒子(φ 4mm 以下)多。色の 異なる粘土が 纏かい縮状になる	還元焰 / 灰(5Y6/1)	複型。周縁上面ケズリか。瓦当側面下半円 周方向ナデ。裏面無綻り布目。突帶上面圓周 方向ナデ。	

V 調査した遺構と遺物

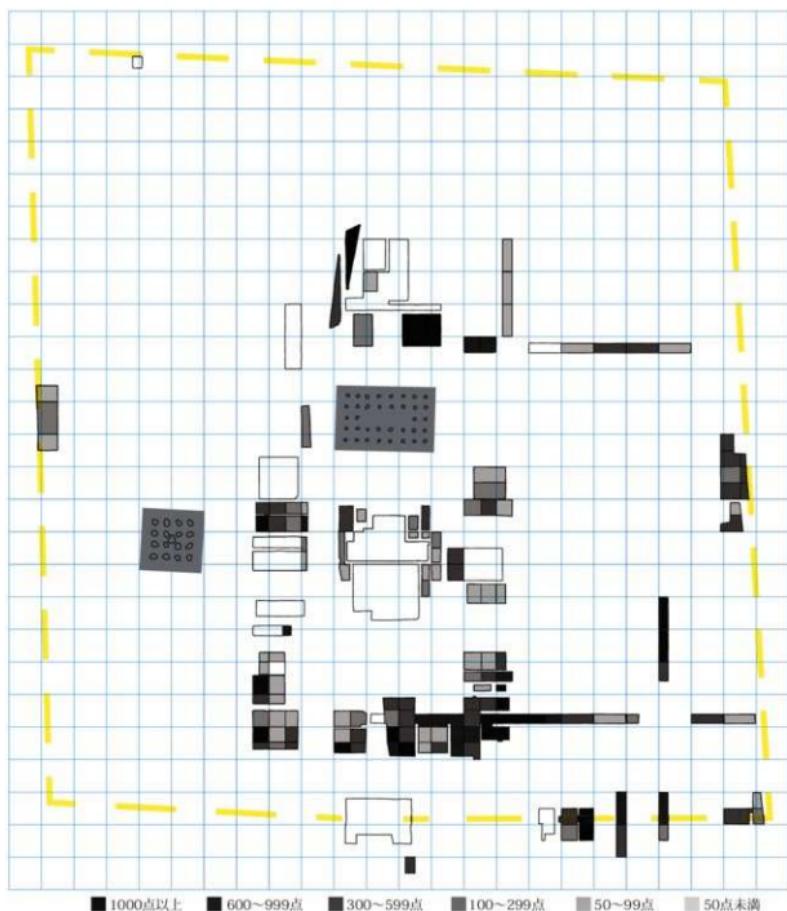
No	種別 分類番号	出土位置	残存状態	法量cm	胎土	焼成・色調	成・整形等	備考
10	軒丸瓦 FO01		上部1/4		砂粒、赤色粒子	表面還元焰。内部酸化焰氣味 / 表面灰(7.5Y6/1)断面にぶい粒(7.5YR7/3)	印籠付け。丸瓦凸面タテナデの後瓦當近くをヨコナデ。凹面と瓦當裏面円周方向ナデ。	断面に瓦亘の先端が難景で見る
11	軒丸瓦 MO01		上部小破片		細砂粒。黒色粒子目立つ	還元焰 / 灰白(5Y7/1)	印籠付け。瓦当部は2・3枚の粘土板からなる。瓦當裏面ヨコナデ。	印籠合部が堅密で見る
12	軒平瓦 NH301		中央部小破片	瓦当幅4.3		緑のやや大きな白色粒子(φ5mm以下)多	還元焰 / 灰(10Y5/1)	凹面ヨコナデ。凸面タテナデ。瓦當近くはヨコナデ。
13	軒平瓦 NH501		左端部小破片		砂粒	酸化焰氣味 / 表面灰黄(2.5Y7/2)断面にぶい粒(10YR7/3)	凹面ヨコナデ。凸面タテナデ。瓦當近くはヨコナデ。	門面の瓦當近くに沿う端の圧痕あり
14	軒平瓦 NH501		左端部小破片	瓦当幅3.4	細砂粒	還元焰 / 灰(7.5YR6/1)	一枚作りか。曲線型。凹凸とも側端の角が丸い。凹面布目。一部ナデ消し。凹面ヨコナデ	山王庵寺C類
15	軒平瓦 NR3		中央部小破片	瓦当幅3.9	砂粒、φ5mm以下の白色粒子、赤色粒子	還元焰。内部(平瓦部)酸化焰氣味 / 表面灰(10Y5/1)丸瓦部にぶい黄褐(10YR6/3)～灰黄褐(10YR4/2)	凹面タテナデ。凸面タテヨコナデ。	
16	軒平瓦 W001		額部中央小破片	額面長3.8	細砂粒。黒色粒子目立つ	還元焰 / 灰(10Y6/1)	段階。瓦当面ヨコナデ後施文。額部ヨコナデ。	凸面に朱付着。
17	丸瓦		側端部小破片	厚さ2.0	砂粒	還元焰 / 灰(10Y7/1)	凹面布目。側端面取のタテケズリ2回。凸面タテナデか。	凸面に「△」
18	丸瓦か		中央部小破片	厚さ1.4	砂粒、小礫(φ10mm)、色の異なる粘土が細かい編状になる部分がある	酸化焰氣味 / 灰黄褐(10YR6/2)	凹面布目。凸面タテナデ。	凸面に「△」
19	丸瓦		側端部小破片	厚さ2.3	砂粒多い粗い面土上。白色粒子目立つ	酸化焰 / にぶい赤褐(5YR5/3)～黄灰(2.5Y4/1)	凹面布目。側端面取のタテケズリ。凸面ヨコナデタテナデ。	凸面に「△」
20	平瓦		挟端右隅小破片	厚さ1.8	細砂粒多。薄い層状をなす部分がある	還元焰 / 黄灰(2.5Y7/2)	一枚作り。凹面布目、側端面取のタテケズリ。	凸面に叩き「蒲田」
21	平瓦		中央部小破片	厚さ2.0	砂粒、小礫(φ6mm)	還元焰。一部酸化焰氣味 / 灰(5Y5/1)	凹面布目。凸面ナメナデ。	凸面に「真」
22	平瓦		側端部小破片	厚さ1.8	砂粒多。色の異なる粘土が細かい編状になる	還元焰。内部酸化焰氣味 / 表面灰白(5Y7/2)断面にぶい粒(7.5YR6/4)	凹面布目。側端面取のタテケズリ。凸面タテナデ。	凸面に「千」
23	平瓦		側端部小破片	厚さ2.0	砂粒、緑のやや大きな白色粒子(φ5mm以下)多。色の異なる粘土が細かい編状になる	還元焰 / 灰(10Y6/1)	一枚作り。凹面布目、側端面取のタテケズリ2回。凸面タテナデ、側端面取のタテケズリ。	凸面に「石か」
24	平瓦		中央部1/8	厚さ1.7	砂粒、白色・黒色粒子含む粗い胎土	還元焰 / 灰(10Y6/1)	一枚作り。凹面糸切り痕と布目、割れ目をナデ。凸面タテヨコナデ。	凸面に「□」
25	鬼瓦		小破片	厚さ3.8	砂粒、白色粒子	還元焰 / 灰白(10Y8/1)	裏面布目。側端面取のタテケズリ。	

15 出土瓦の分布

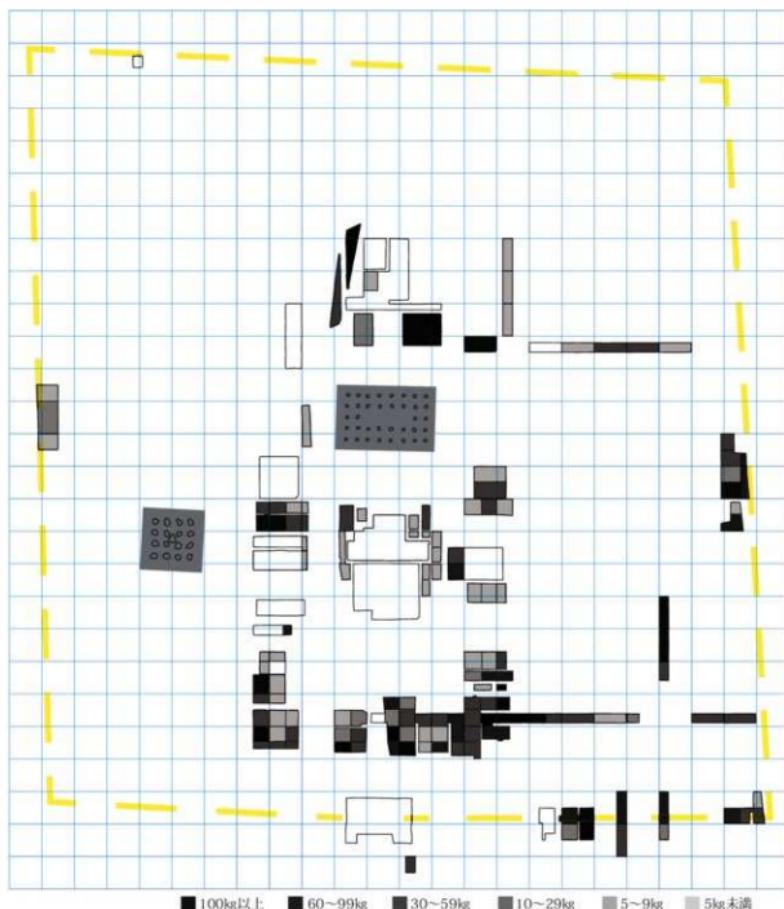
今回の調査で出土した瓦について、グリッドごとに数量と重量の計量を行った。結果、数量が約38,000片、重量にして約4,500kgの出土があった。ただし、計量対象は国分寺の塔堂が建立された後としたため、版築層や整地土層から出土したものは除外した。また、第1期調査の再調査区や近現代廃棄坑からの出土、3cm程度以下の小破片についても除外している。

全量の点数・重量と軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦の点

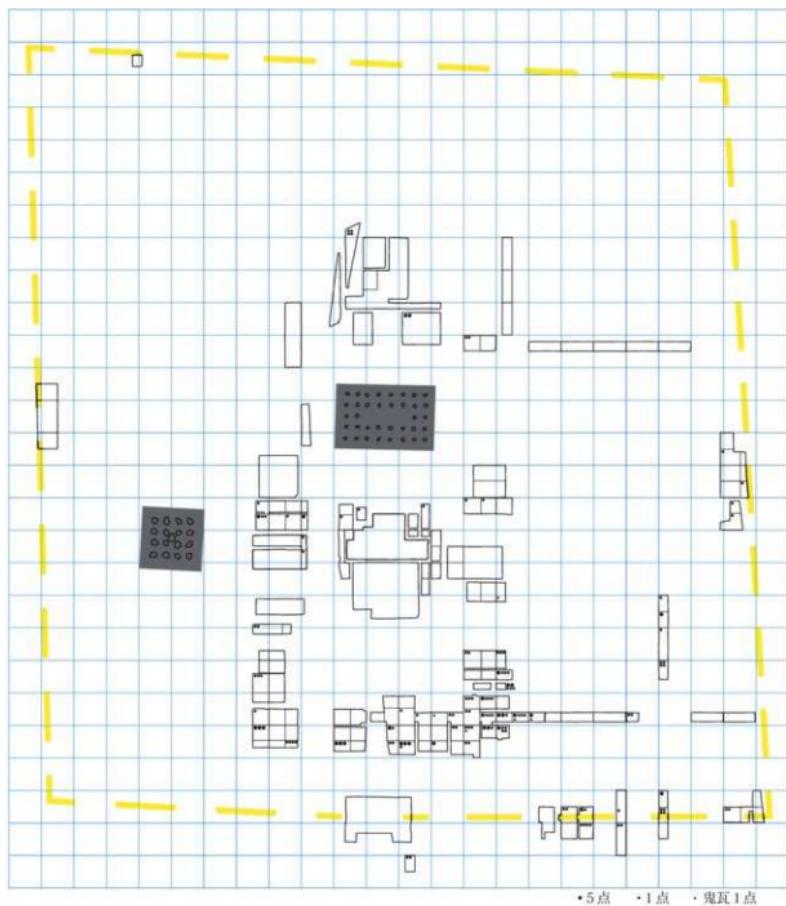
数を分布図としてまとめ、掲載した(第194～197図)。全量では瓦廃棄層を一部調査した回廊や、表土の上層に瓦を含む客土が堆積していた講堂北側などに偏ってしまい、同一レベルでの比較には難しい結果となってしまった。軒丸瓦・軒平瓦は、やはり瓦廃棄層を調査した回廊から多く出土する傾向が見られるが、南辺梁垣地区でも比較的多く出土し、東大門地区でも少量ながら出土している。鬼瓦は4点のみだが、回廊南東部に集中する。西大門地区は表土が薄かったこともあり、全体的に瓦の出土は少なかった。



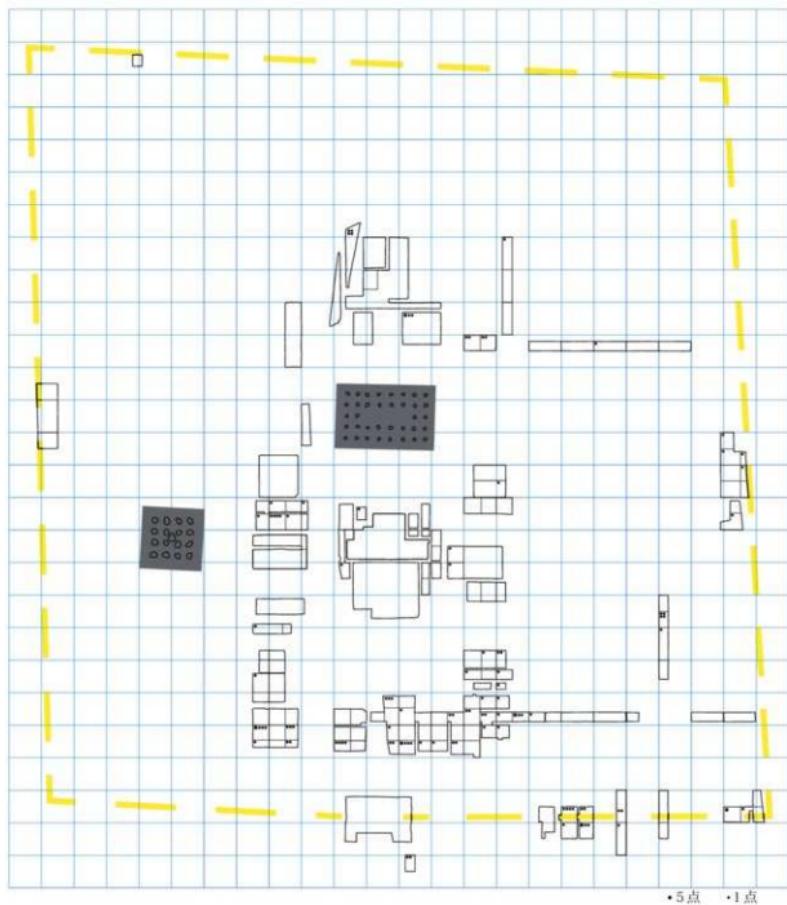
第194図 瓦出土分布図(全量:点数)



第195図 瓦出土分布図(全量:重量)



第196図 瓦出土分布図(軒丸瓦・鬼瓦:点数)



第197図 瓦出土分布図(軒平瓦:点数)

VI 自然科学分析

1 炭化材樹種同定

黒沼保子(パレオ・ラボ)

(1)はじめに

高崎市に所在する史跡上野国分寺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料では放射性炭素年代測定も行われている(2節参照)。

(2)試料と方法

試料は炭化材 13 点である。南大門の整地土から 1 点、柱列 SA01 の P7 埋土から 2 点、梵鐘鑄造土坑の溝中から 1 点と底面から 2 点、埋土から 7 点である。遺構の時期は、南大門が AD750 年より少し後、柱列 SA01 が 9 世紀前半と推測されており、放射性炭素年代測定でも整合的な年代が得られた。また、梵鐘鑄造土坑は調査所見では時期不明だったが、年代測定で 13 世紀後半～14 世紀末の年代が得られており、国分寺廃絶後に造られた遺構であることが判明した。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で 3 断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、直径 1cm の真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE 社製 VE-9800)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。残りの試料は、群馬県教育委員会文化財保護課の国分寺事務所に保管されている。

(3)結果

樹種同定の結果、広葉樹のハンノキ属ハンノキ亜属(以下、ハンノキ亜属)、クリ、ブナ属、コナラ属コナラ節(以下、コナラ節)、ムクノキ、カエデ属、アワブキ、クマノミズキ類の 8 分類群と、單子葉植物のタケ亜科、計 9 分類群が確認された。遺構別の樹種同定結果を表 1、結果の一覧を付表 1 に示す。

全体ではクリとブナ属、コナラ節、カエデ属が各 2 点、ハンノキ亜属とムクノキ、アワブキ、クマノミズキ類、タケ亜科が各 1 点であった。また、試料はいずれも破片となっており、元の形状は不明である。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

①ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus subgen. Alnus* カバノキ科 国版 I 1a-1c (No.11)

小型の道管が放射方向に數個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状もしくは散在状となる。道管の穿孔は 10 ~ 20 段程度の階段状である。放射組織は單列同性で、集合放射組織が存在する。

ハンノキ亜属は主に温帯に分布する落葉高木または低木で、ハンノキやヤマハンノキなど 7 種がある。材は全

第 4 表 遺構別の樹種同定結果

樹種	南大門	SA01-P7	梵鐘鑄造土坑	計
ハンノキ属ハンノキ亜属		1	1	
クリ	1		1	2
ブナ属		2	2	
コナラ属コナラ節	2		2	
ムクノキ		1	1	
カエデ属		2	2	
アワブキ		1	1	
クマノミズキ類		1	1	
タケ亜科		1	1	
計	1	2	10	13

般に硬さおよび重さが中庸で、加工は容易である。

②クリ *Castanea crenata Siebold et Zucc.* ブナ科 図版1 2a-2c (No.1)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で主に單列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

③ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版1 3a-3c (No.12)

小型で単独の道管が密に分布し、晩材部ではやや径を減する散孔材である。道管の穿孔は単一のものと階段状の2種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、2~数列のもの、広放射組織の3種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は、堅硬および緻密で、韌性があるが保存性は低い。

④コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Pinus* ブナ科 図版1 4a-4c (No.2)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

⑤ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 図版1 5a-5c (No.9)

径が中型で厚壁の道管が、単独ないし2~3個複合して均等に分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状~5列幅程度の帯状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は1~6列幅で、方形細胞もしくは直立細胞が上下端に2細胞程度連なる異性である。

ムクノキは関東以西の暖帯から亜熱帯に生育する落葉高木である。材は堅く、密で強韌である。

⑥カエデ属 *Acer* カエデ科 図版1・2 6a-6c (No.5)

径が中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。横断面において木部組織との壁厚の違いによる雲紋状の模様がみられる。道管の穿孔は単一で、道管壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織はほぼ同性で、1~5列幅である。

カエデ属は主に温帯に分布する落葉高木で、オオモミジやハウチワカエデ、イタヤカエデなど26種ある。材は全体的に緻密で韌性がある。

⑦アワブキ属 *Meliosma* アワブキ科 図版2 7a-7c (No.4)

やや小型の道管が、単独で分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状に配列する。道管の穿孔は単一である。放射組織は4~10列幅で、方形・直立・平伏細胞が混在する異性である。放射組織の高さが1mm以上のものもある。

アワブキ属は主に温帯~暖帯に生育する常緑もしくは落葉の高木で、フシノハアワブキやヤマビワ、アワブキなど5種がある。アワブキの材は强度および硬さ等は中庸であるが、狂いや割れが出やすい。

⑧クマノミズキ類 *Cornus cf. macrophylla* Wall. ミズキ科 図版2 8a-8c (No.13)

やや小型で丸い道管が、単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は20段程度の階段状である。放射組織は3~4列幅で、縁辺部に方形もしくは直立細胞が2~4細胞ある異性である。以上の特徴からクマノミズキかヤマボウシと思われるが、これ以上の同定は困難であるため、クマノミズキ類とした。

クマノミズキおよびヤマボウシは温帯から暖帯に分布する落葉中高木である。材はやや硬いが一般に加工は

容易である。

⑨タケ亜科 Subfam. Bambusoideae イネ科 図版2 9a (No.7)

柔細胞と維管束で構成される單子葉類で、維管束は柔細胞中に散在する。維管束は一对の道管とそれと直行する原生木部間隙と師部で形成され、その周囲を厚膜組織からなる維管束鞘が取り囲む。

タケ・ササの仲間で日本では12属が含まれるが、程の組織のみから属や種を識別するのは難しい。割裂性が非常に大きい。

(4) 考察

南大門の整地土から出土した炭化材は、クリであった。また、SA01-P7の埋土から出土した炭化材は、2点ともコナラ節であった。いずれも破片で、元の形状や不明である。用途は不明であるが、クリとコナラ節は重硬な材であり、建築材や器具材、燃料材など幅広い用途で利用される(伊東・山田編, 2012)。

梵鐘铸造遺構から出土した炭化材は、溝中ではアワブキ、底面ではクリとカエデ属、埋土ではハンノキ亜属とクリ、ブナ属、ムクノキ、カエデ属、クマノミズキ類、タケ亜科が確認され、広葉樹を主とした多様な樹種の利用がみられた。遺構の性格から、これらの試料は燃料材の残渣であると考えられる。いずれも温帯に落葉広葉樹で遺跡周辺を分布域に持ち(平井, 1996)、いずれも薪炭材として普通に用いられる。したがって、遺跡周辺に生育していた樹木を、樹種に関係なく伐採して利用していたと推測される。

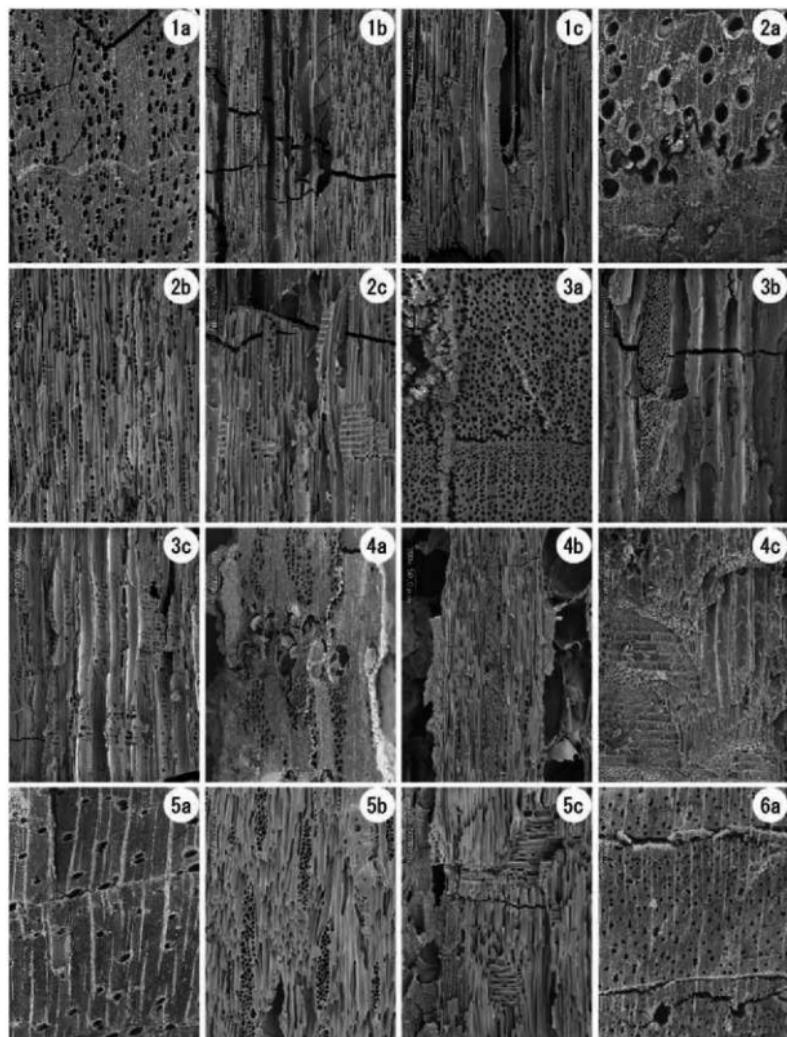
引用文献

平井信二(1996)木の大百科, 394p, 朝倉書店。

伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学—出土木製品用材データベースー, 449p, 海青社。

第5表 樹種同定結果一覧

No.	出土遺構	位置	樹種	形状、部位	サイズ	年輪数	年代測定番号
1	南大門	整地土	クリ	破片	1 × 0.5 × 1.8cm	2	PLD-30932
2	SA01-P7	埋土	コナラ属コナラ節	破片	< 2cm角	< 4	-
3	SA01-P7	埋土	コナラ属コナラ節	破片	< 1.5cm角	< 4	PLD-30933
4	梵鐘铸造土坑	溝中	アワブキ	破片	< 1cm角	< 3	PLD-30934
5	梵鐘铸造土坑	底面	カエデ属	破片	< 2cm角	< 22	-
6	梵鐘铸造土坑	底面	クリ	破片	< 5cm角	< 3	-
7	梵鐘铸造土坑	埋土	タケ亜科	稈	1.2 × 0.7 × 2cm	-	PLD-30935
8	梵鐘铸造土坑	埋土	ブナ属	破片	< 1.5cm角	< 3	-
9	梵鐘铸造土坑	埋土	ムクノキ	破片	2 × 1.5 × 1.5cm	6	-
10	梵鐘铸造土坑	埋土	カエデ属	破片	< 2cm角	< 20	-
11	梵鐘铸造土坑	埋土	ハンノキ属ハンノキ亜属	破片	1.5 × 1.5 × 2cm	4	PLD-30936
12	梵鐘铸造土坑	埋土	ブナ属	破片	< 1.5cm角	< 5	-
13	梵鐘铸造土坑	埋土	クマノミズキ類	破片	1.2 × 1.2 × 1.2cm	4	-

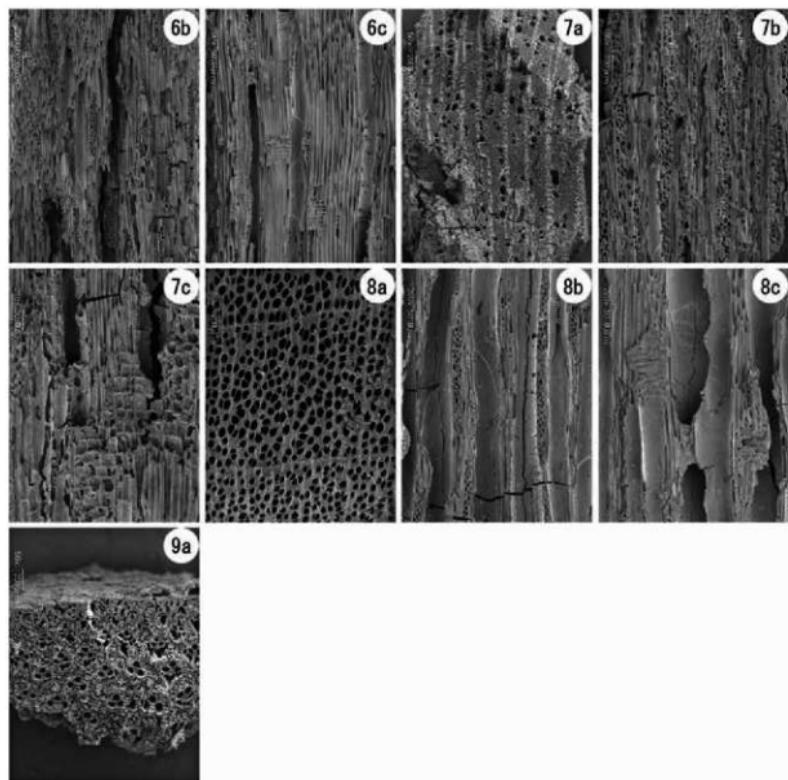


図版1 史跡上野国分寺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)

1a-1c. ハンノキ属ハンノキ亜属(No.11)、2a-2c. クリ(No.1)、3a-3c. ブナ属(No.12)、4a-4c.

コナラ属コナラ節(No.2)、5a-5c. ムクノキ(No.9)、6a. カエデ属(No.5)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



図版2 史跡上野国分寺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（2）

6b-6c. カエデ属 (No. 5)、7a-7c. アワブキ (No. 4)、8a-8c. クマノミズキ属 (No. 13)、9a. タケ
亜科 (No. 7)

a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面

2 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林鶴一

Zaur Lomtadidze・黒沼保子

(1)はじめに

史跡上野国分寺跡から出土した炭化材について、加速器質量分析法(AMS 法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、同じ試料を用いて樹種同定も行われている(1 節参照)。

(2)試料と方法

試料は、AD750 年より少し後の時期と推測されている南大門の整地土から出土した炭化材 1 点(試料 No.1: PLD-30932)と、9 世紀前半と推測されている一本柱列の SA01-P7 から出土した炭化材 1 点(試料 No.3: PLD-30933)、時期不明の梵鐘鋳造土坑の溝中から出土した炭化材 1 点(試料 No.4: PLD-30934)、同じく梵鐘鋳造土坑の埋土から出土した炭化材が 2 点(試料 No.7: PLD-30935、試料 No.11: PLD-30936)の、計 5 点である。炭化材はすべて最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第6表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30932	遺構: 南大門 位置: 整地土 試料 No.1	種類: 炭化材(クリ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30933	遺構: SA01-P7 位置: 埋土 試料 No.3	種類: 炭化材(コナラ属コナラ節) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30934	遺構: 梵鐘鋳造土坑 位置: 溝中 試料 No.4	種類: 炭化材(アワブキ) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30935	遺構: 梵鐘鋳造土坑 位置: 埋土 試料 No.7	種類: 炭化材(タケ垂科) 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30936	遺構: 梵鐘鋳造土坑 位置: 埋土 試料 No.11	種類: 炭化材(ハンノキ属ハンノキ垂属) 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

(3)結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期

として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の曆年較正には OxCal4.2 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 曆年範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の曆年範囲であり、同様に 2σ 曆年範囲は 95.4% 信頼限界の曆年範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

第7表 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1σ 曆年範囲	2σ 曆年範囲
PLD-30932 南大門(整地土)	-26.05 \pm 0.30	1300 \pm 21	1300 \pm 20	669-710 cal AD (46.6%) 746-764 cal AD (21.6%)	663-722 cal AD (64.3%) 740-768 cal AD (31.1%)
PLD-30933 SA01-P7(埋土)	-26.53 \pm 0.29	1203 \pm 20	1205 \pm 20	774-778 cal AD (3.3%) 789-830 cal AD (37.6%) 838-867 cal AD (27.4%)	769-887 cal AD (95.4%)
PLD-30934 梵鐘鋳造土坑(溝中)	-25.47 \pm 0.29	630 \pm 20	630 \pm 20	1298-1316 cal AD (26.5%) 1355-1389 cal AD (41.7%)	1290-1327 cal AD (38.0%) 1343-1395 cal AD (57.4%)
PLD-30935 梵鐘鋳造土坑(埋土)	-28.94 \pm 0.30	658 \pm 19	660 \pm 20	1287-1304 cal AD (31.7%) 1365-1384 cal AD (36.5%)	1281-1315 cal AD (45.7%) 1355-1390 cal AD (49.7%)
PLD-30936 梵鐘鋳造土坑(埋土)	-25.61 \pm 0.30	618 \pm 21	620 \pm 20	1300-1323 cal AD (27.8%) 1346-1369 cal AD (26.6%) 1381-1393 cal AD (13.8%)	1295-1331 cal AD (36.9%) 1338-1398 cal AD (58.5%)

(4) 考察

以下、各試料の曆年較正結果のうち 2σ 曆年範囲(確率 95.4%)に着目して結果を整理する。

南大門の整地土の試料 No.1 (PLD-30932) は、663-722 cal AD (64.3%) および 740-768 cal AD (31.1%) であった。これは 7 世紀後半～8 世紀後半で、飛鳥時代～奈良時代の曆年代に相当する。調査所見による推定時期(750 年より少し後)に対して整合的である。

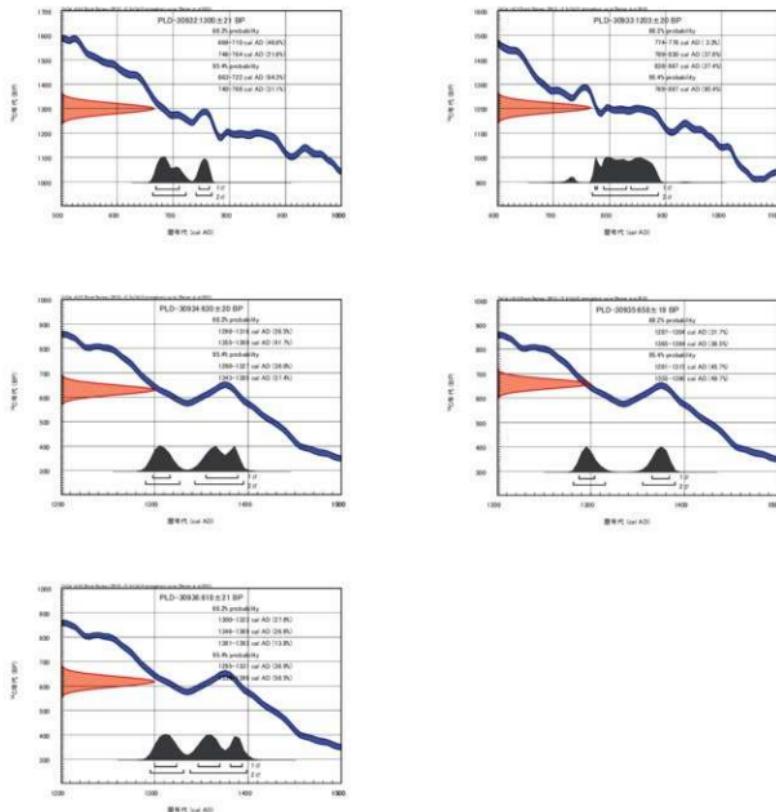
SA01-P7 の試料 No.3 (PLD-30933) は、769-887 cal AD (95.4%) であった。これは 8 世紀後半～9 世紀後半で、奈良時代～平安時代前期の曆年代に相当する。調査所見による推定時期(9 世紀前半)に対して整合的である。

梵鐘鋳造土坑の溝中出土の試料 No.4 (PLD-30934) は 1290-1327 cal AD (38.0%) および 1343-1395 cal AD (57.4%)、埋土出土の試料 No.7 (PLD-30935) は 1281-1315 cal AD (45.7%) および 1355-1390 cal AD (49.7%)、同じく埋土出土の試料 No.11 (PLD-30936) は 1295-1331 cal AD (36.9%) および 1338-1398 cal AD (58.5%) であった。いずれも 13 世紀後半～14 世紀末で、鎌倉時代～室町時代の曆年代に相当する。調査所見による時期は不明であったが、今回の測定では国分寺廃絶後の遺構である可能性が高いと考えられる。

木材は最終形成年輪部分を測定すると伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料はいずれも最終形成年輪が残存していないかった。したがって、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずであり、木材が実際に伐採されたのは測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.



第198図 歴年較正結果

VII 総括

1 上野国分寺の旧地形

寺域は、全体的に北西から南東に向かって緩やかに下がる地形であることは既に述べた。しかし、国分寺廢絶後の土地変更によって、寺域内は廢絶以前の状態を留めていない場所も少なくない。例えば、寺域中央を南北に貫流する水路や、中世以降の土採りや流水によって一段低くなった北東部などである。そのため、現況から旧地形を推定することは難しいが、今回の調査によって手がかりとなるいくつかの所見が得られたので述べてみたい。

まず寺域北東部凹地の前面、39-2、40-6 トレンチを設定した平坦面であるが、表土直下 20cm 程で基盤層の黄褐色土(Ⅶ層)が検出された。これにより、39-2 トレンチ周辺から東部は、さほど削平を受けていないことが明らかになるとともに、39-2 トレンチの位置でⅦ層上面のレベルが 128.7 m と比較的高いことも判明した。旧地表面は基盤層より高いはずであるから、128.7 m よりも高くなればならない。一方、南西部に位置する塔では、第1期調査時に基壇東辺の地覆石が確認されており、そのレベルは 129.0 m である。この高さが塔周辺の旧地表面レベルと考えられるであろう。このように見えてくると、北東部平坦面と塔との間にある講堂基壇の地表面とのつながりに、齟齬が生じることとなつた。

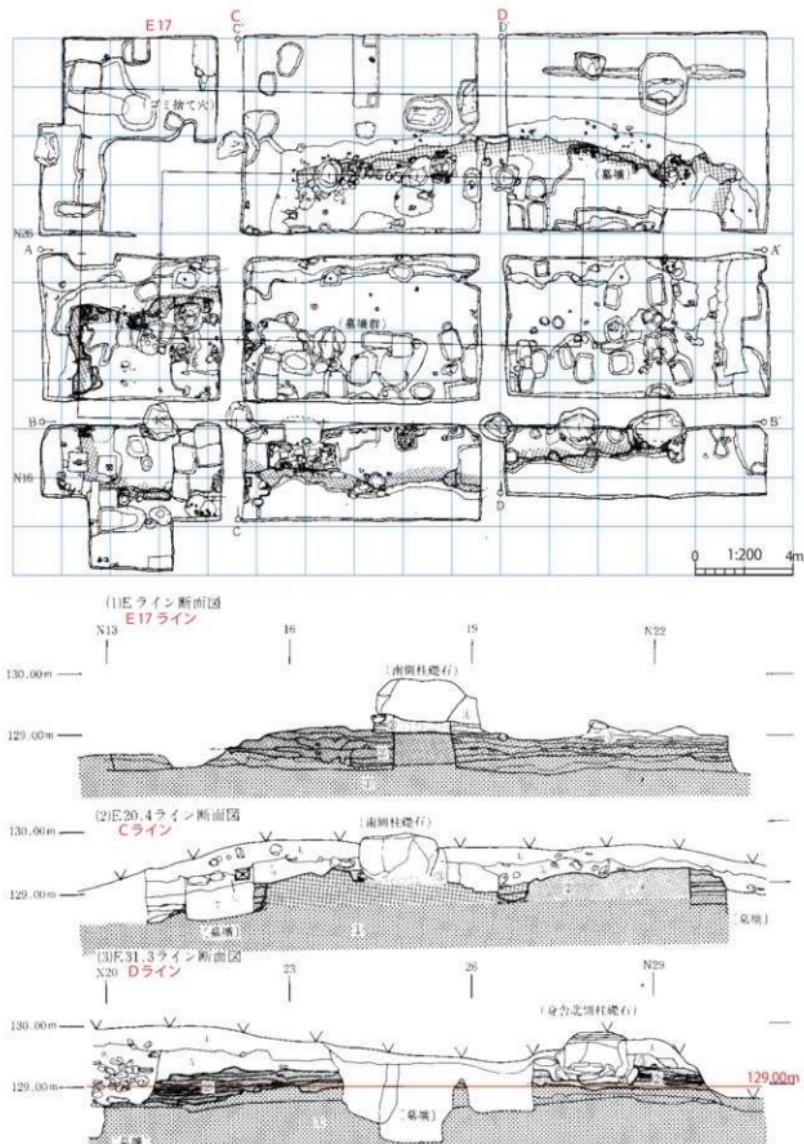
現在、講堂基壇は旧地表面レベルを 128.7 m と想定して復元されている。しかし、改めて第1期調査時の講堂基壇の調査断面を確認してみると(第 199 図)、版築層下の黄褐色土(Ⅶ層)で最も高いレベルは 129.0 m 程あることが分かる。低いところでは 128.5 m の部分もあるので、掘り込み地業を行っていることは確かであろう。そう考えると、講堂周囲の旧地表面レベルは 129.0 m よりも高くなることは明らかである。基壇上面レベルは、原位置

の礎石が存在することから現在の 129.75 m で間違いない。現状では基壇高 105 cm (3.5 尺) で復元されているが、本来の基壇高が 60cm (2 尺) であったと考えれば、講堂周囲の旧地表面レベルは 129.15 m となり、齟齬が解消される。講堂の前面にある金堂周辺は削平が著しいが、講堂と塔とのバランスを考えて 129.1 m 程と考えておきたい。

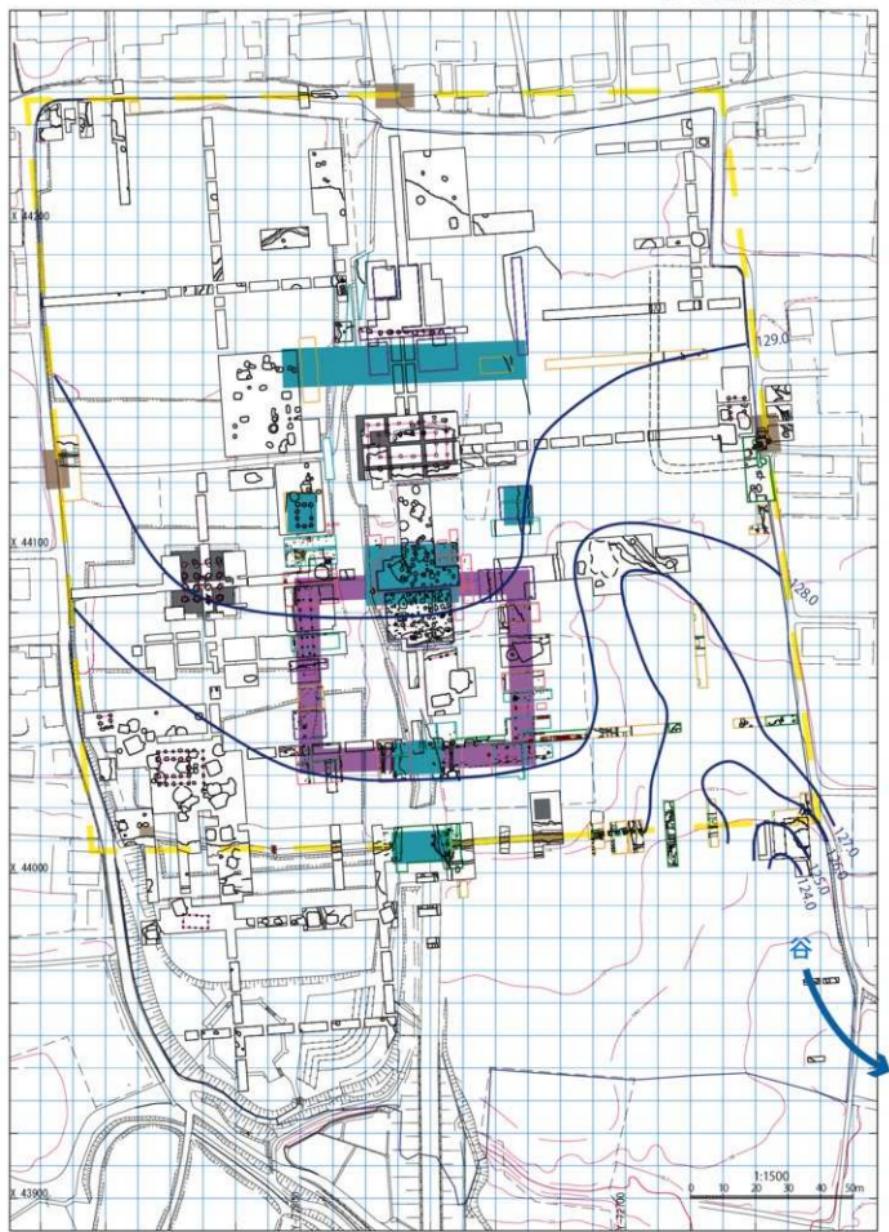
次に寺域南東部であるが、谷地形となっていたことが明らかとなった。40-8 北トレンチ南端では、As-B 混土層上面が表土下約 1 m、126.8 m の高さで検出された。また深掘りでは、124.8 m で As-C 混黒褐色土(IV 層)が検出され、その間の 2 m 程の厚さの土層は人為的に埋められていることが確認された。土層中からは瓦が出土することから、国分寺造営に近い時期に埋められたものと考えられる。40-9 トレンチ西壁でも同じように谷地を埋めた状況が見られ、築垣想定位置では版築状に丁寧に埋めている様子が観察されている。

また、寺域南西隅の南西側は染谷川によって開削された谷地となっている。この谷地に面した寺域南西端において、第1期 24 次調査時に 9 世紀後期頃の SJ14 が調査されているが、豊穴の西側半分以上が崖によって崩落し、無くなっている(第 203 図)。このことは住居構築時、寺域の平坦面がさらに西に広がっていたことを示しており、国分寺当時は崖線がもっと西であったことが分かる。

これらをもとに、旧地形を復元したのが第 200 図である。全体を見てみると、寺域南東部に金堂東側を谷頭とする緩やかな谷地があり、寺域を越えて南東方向に落ち込んでいく。この谷地があるため、谷地の西側は舌状に伸びる緩やかな尾根状を呈し、この部分に主要伽藍を配置している。特に、基盤層が高く最も地盤の安定している場所に、金堂・講堂を建てている。標高は、寺域北西隅が最も高く 129.5 m 程、金堂付近で 129.0 m 程、中門付近で



第199図 講堂平面・断面図(平面1/200・断面1/80)



第200図 創建時の旧地形復元図

128.0 m程、南大門北側で 127.4 m程と考えられる。北辺から金堂付近にかけてはほぼ平坦に近く、かなり緩やかに下がるが、それに比べて金堂から南は若干、勾配がきつくなる。また東西方向については、東大門の礎石上面レベルが 128.6 mであることから、金堂のある中心部からは緩やかに下がっていることが分かる。西大門については遺構が全く確認されなかつたため判然としないが、おそらく東大門と同様に西に向けても緩やかに下がっていたのではないだろうか。

〈参考とした高さ〉

南大門礎石上面レベル	127.7 m
南大門基壇北縁石下面レベル	127.4 m
(旧地表面レベルと判断)	
回廊南東部根石上面レベル	128.0 m
塔東辺地覆石下面レベル	129.0 m
(旧地表面レベルと判断)	
講堂基壇内の基盤層上面レベル	129.0 m
東大門礎石上面レベル	128.6 m
As-B 及び混土層堆積レベル	

2 各堂宇について

本節では今回の調査成果に基づいて、各堂宇の検出状況と考察についてまとめてみたい。

(1) 金堂

〈検出状況〉

- ・掘り込み地業の北東角部分に当たる東西 12 m、南北 13 m程の範囲を確認。東縁から 25 m程西側でも北縁を確認。西縁、南縁は攪乱により確認できなかつた。
- ・確認面からの掘り込みの深さは 15 cm程だが、なく明瞭な版築層を確認。底面レベルは 128.1 m程。
- ・礎石、根石は削平により残っていないが、南西部で落とし込まれた径 130 cm の礎石 1 個を検出。
- ・断割を行ったサブトレーナー(約 4 m)の版築土中からの瓦の出土は皆無。
- ・掘り込み地業南東角推定位置から南へ 2.5 m の位

置で、13世紀後半～14世紀末と考えられる梵鐘鑄造土坑を検出。

〈考察〉

①掘り込み地業の深さ

前節のとおり、旧地表面レベルが 129.1 m程と考えられるため、本来は 1 m 程の深さの掘り込み地業であったと考えられる。

②規模

掘り込み地業の規模は、東西は伽藍中軸線で折り返すと約 28.5 m、南北は塔と心々を合わせていると想定し心々ラインで折り返すと約 19 m の規模となる。仮に、掘り込み地業と基壇がほぼ同規模と想定した場合、例えば、7間×4間の建物で身舎の桁行 10-12-12-12-10(尺)、梁行 11-11(尺)に 10 尺の庇がめぐる規模が考えられ、講堂よりやや小さい規模であったと推定できる。この場合、基壇の出は 10 尺となる。

③基壇の高さ

発掘調査による基壇高の手がかりは全くないが、塔と金堂が並立する上野と同様の伽藍配置をもつ陸奥国分寺では、塔…4 尺、金堂…3 尺、講堂…2 尺と建物によって差をつけていることが参考になる。また後述のとおり、明治 20 年に宗教団体が金堂基壇を切り崩してその築土を塔基壇南側に移動し、道場を造成した可能性があり、その土量は 28 m × 18 m × 0.8 m の土壙の規模であることから、基壇高は 3 尺であった可能性が高い。

④基壇外装

塔基壇が角閃石安山岩による切石積基壇、また、後述する中門も同様の可能性が高いことから、建物の格式から言って金堂の基壇外装も同じだったと考えられる。③に記した、金堂基壇が築土を移動して造成したと考えられる塔南側の土壙の中から大量の瓦、礎石状の石とともに角閃石安山岩切石が出土している。これらは、金堂基壇の外装材だった可能性も考えられる。

⑤塔との先後関係

今回の調査以前は、金堂よりも塔の造営が先行す

ると考えられてきた。その根拠は、塔基壇の築土中には瓦は混入しないが、金堂(現講堂)基壇の築土中には瓦が混入するというものであった。しかし、今回の調査で本来の金堂が発見されたため、旧金堂が講堂に修正されることになった。そして、新たに発見された金堂の版築土中からは、限られた範囲ではあるが瓦の出土は皆無であった。そのため、塔と金堂がともに築土中に瓦の混入が認められないことになり、どちらの造営が先行したのか判断ができなくなってしまった。あるいは、塔と金堂の造営が並行して進められた可能性も考えられる。

⑥倒壊の時期

掘り込み地業南東角推定位置からわずか2.5mしか離れていない位置で、13世紀後半～14世紀末と考えられる梵鐘鋳造土坑が検出された。金堂の直近で梵鐘を鋳造したとは考えられないことから、金堂はこの頃までに倒壊していたと判断できる。

〈金堂基壇が残っていないことの仮説〉

今回、新たに見つかった金堂の場所は、土壇の高まりや礎石など建物があった痕跡は全く失われ、平坦な畑になっていた。先学諸氏による現地踏査時も同様な状況であり、特に注意は払われなかつたようである。しかし、福島武雄氏の論考(福島 1921)によると、

「中門趾と思われる所は金堂趾の南30間餘道の北側にある。村の古老に聞くに明治初年迄は此處迄捨場(旧金堂)の土壇が延びて礎石も沢山在ったとの事である。今金堂趾の南20間の道の東側にある礎石(38-7トレンチで確認したもの)は土壇を崩して桑畑にする時端の方へ運んだのであろう。」

※注：下線、()は橋本筆

という記述がある。このことから、旧金堂の前面には、明治初年までは土壇と礎石が残っていたことが確認できる。この伝聞を根拠として福島氏は中門を想定したが、村の古老の言葉は状況から今回の発見となった金堂であった可能性が高まってきた。では、それらがいつ消滅したのか。

明治20年、宗教団体が塔基壇跡を利用して道場

を造成した(第19図上)。その際、心礎や礎石上に石碑を建てるとともに、基壇上部を削った土を用いて西及び南側に土壇を広げたとされている。しかし、図面から計測してざっと土量を計算してみると、基壇上部を削ったくらいでは到底足りる土量ではない。塔基壇を含めた土壇全体の土量(約830立米)から塔基壇の土量(約430立米)を差し引くと、およそ400立米もの土が余分であり、その量はほぼ28m×18m×0.8mの土壇に相当する。これは金堂の規模に近いものがあり、金堂基壇を切り崩して塔基壇へと運び、道場を造成した可能性が高い。土壇南部にも礎石状の石が多くあったとのことであり塔院回廊の礎石と推定されたこともあったが、この石は金堂礎石を打ち欠いて運んだものであろう。この土壇南部の調査を行った第1期調査の所見においても、土壇中に多量の瓦片と礎、また石を碎いた際に生じる鋭い稜を持った小破片と粉末状になった石片が多量に混じっていることが確認されている。そして、土壇縁辺の土留め用に使われている大きい石は、その形状と石質から国分寺の礎石と見られること、また多量に使われている玉石、礎も国分寺の用材であったと考えられると報告されている。

金堂地区の旧土地所有者に聞き取りを行ったが事実確認はできず、あくまで推測の域を出ないが、年代的・土量的にも合致するものであり、あえて史跡地外から土を運び込むより金堂基壇の築土を移動するほうがはるかに効率的である。事実、造成した土壇の中からは大量の国分寺瓦が出土しており、このことから史跡地外から土を運び入れたのではなく、寺域内の土を移動したことは明らかである。この仮説が正しいとすれば、本来あった基壇と礎石を一気に削っているため、土壇がすっかり消滅したこと、落とし込まれた礎石がほとんどないこと、の理由も説明がつく。

(2) 講堂(旧金堂)

〈検出状況〉

- ・今回は未調査

〈考察〉

第8表 塔・金堂・講堂の比較

(単位:m)

	塔	金堂	講堂
旧地表面レベル	129.0	(129.1)	(129.15)
基壇上面レベル	130.2	(130.0)	129.75
基壇高	1.2	(0.9)	(0.6)
掘り込み地業底面レベル	(128.2)	128.1	128.5
基壇外装材	角閃石安山岩	(角閃石安山岩)	(凝灰岩)

（ ）付きは、推定ないし不確実なもの

①基壇の高さ

現在、身舎の桁行 11 - 12 - 12 - 12 - 11(尺)、梁行 11.5 - 11.5(尺)に 11 尺の庇がめぐる規模の建物に、基壇の出 11 尺、基壇高 3.5 尺の凝灰岩切石の切石積基壇で復元されている。旧地表面レベルを 128.7 m として基壇高 3.5 尺を保っているが、前節で述べたとおり、基壇内の基盤層(Ⅶ層)上面レベルが 129.0 m あることから旧地表面レベルは 129.0 m より高いことは確実である。原位置の礎石の存在により基壇上面レベルの変更はできないことから、周囲の旧地表面レベルを 129.15 m と想定し、基壇高 60cm(2 尺)と考えたい。

②基壇の規模

基壇縁辺について第 1 期調査時、礎石から 330 cm の位置に段差があり、これを基壇の立ち上がりととらえた。『概要 5』によれば、「南縁は、E15 ~ 19 の範囲で N15 の位置に 2 段からなる比高差約 40 cm の築土の立ち上がりのあるのが確認された。この方位は礎石列の方位と一致しており、南側礎石の中心より 330cm にあることから、基壇南縁の原位置を示すものと判断された。E17 ラインでこの標高をみると N13.5 で旧表土面は 128.65 m、N15 で基壇立ち上がり下段面が 128.8 m、N15.5 で上段が 128.95 m、N16.5 で基壇残部上面が 129.1 m、N18 の礎石上面が 129.85 m、下面が 129.3 m を測る。」と報告されている(第 199 図断面図(1) E17 ライン)。しかし断面図を見る限り、この緩やかな段差をもって基壇の立ち上がりと判断するのは難しいように思われる。さらに、この段差は旧地表面(前節で 129.15 m と判断)よりも低いレベルで検出されていることから、掘り込み地業の下部が後世の

擾乱によって削られてできた段差と見なせるであろう。これにより、基壇の出を 11 尺とする根拠としては弱くなってきた。他の例を見ても、講堂の基壇の出 11 尺は大きいことから、もう少し小さく考えたほうがよいと思われる。

(3) 経蔵・鐘楼

<検出状況>

- ・金堂と講堂の中間、西側で、掘り込み地業の北半部を検出。南半部は残っていないので南北規模は定かではないが、東西規模は約 9 m(30 尺)。

- ・確認面からの掘り込みの深さは 5cm 程で、底面レベルは 128.4 m 程。

- ・掘り込み地業を壊して構築する SB08 を再確認。3 間 × 2 間の南北棟の側柱建物で、東側柱の北から 2 個めに当たる柱穴はない。1 期のみの存続で、建て替えは認められない。柱間は 7 尺等間。柱穴は径 100 ~ 130cm 程の円形で、径 40cm 程の柱痕を確認。確認面からの深さは 30cm 程で、底面レベルは概ね 128.0 ~ 128.2 m 程。

- ・伽藍中軸線を挟んで対称となる東側では、建物の痕跡は全く確認できなかった。確認面レベルは 128.1 m 程。

<考察>

①掘り込み地業・柱穴の深さ

旧地表面レベルが 129.1 m 程と考えられるため、本来の掘り込み地業の深さは 70cm 程、SB08 の柱穴の深さは 90 ~ 110cm 程と考えられる。

②基壇建物から掘立柱建物へ建て替え

創建当初は基壇建物であり、掘り込み地業の規模から 10 尺等間程の建物規模が推定できる。その後、規模を縮小して掘立柱建物 SB08 に建て替えたと考

えるのが妥当であろう。

③東側建物の推定

東側については、確認面レベルが 128.1 m 程度低いことから、基壇建物があったが後世の削平により無くなってしまったと考えられる。また、西側同様の柱穴が確認できないことから東側は、ア 国分寺廃絶まで基壇建物が維持された、イ 基壇建物倒壊後、建て替えをせずに放置された、ウ 西側程は堅固ではない、掘り込みも浅い簡易な掘立柱に建て替えられた、の 3 案が考えられよう。

④西側建物の推定

③の状況から、西側が鐘楼だったと考えたい。寺院に必要不可欠な梵鐘を吊るすため建て替えを行った、掘立柱建物にしたが重量物に耐えられるよう、柱間を狭めて建て替えたと考えられる。そう考えれば、柱のない東面北側が出入口と考えられ、柱のみで壁が無く、屋根を架けただけの単層の建物が考えられよう。掘立柱建物ではあるが、柱穴は基盤層の黄褐色土(Ⅶ層)を30cm近く掘り込んでいる。Ⅷ層は河川の洪水堆積による固く締まった砂層であり、梵鐘の重さにも耐えられたのではないだろうか。

⑤両建物間の距離

創建当初は、重層楼造りの基壇建物が東西対称にあったと考えたい。10尺等間、基壇の出5尺の基壇建物が東西対に建てられていたと仮定すると、両者の西端と東端の距離は75m(250尺)となる。

(4) 僧坊

〈検出状況〉

- ・関連する遺構は全く検出されなかった。

〈考察〉

①北僧坊の可能性

他の様相を考慮すれば、やはり北僧坊を考えるのが妥当であろう。講堂の掘り込み地業底面レベルが128.5 mであり、僧坊は講堂ほど深く掘らないであろうことを考慮すると、少なくとも僧坊掘り込み地業の底面レベルは128.5 mより高いと考えられる。僧坊の旧地表面レベルを129.2 mと想定し、

ルは 128.7 m より高くなる。であれば、講堂より北側の確認面レベルはすべて 128.7 m 以下であることから、本来はあった遺構が削られて無くなってしまったという解釈が成り立つ。

位置については、SA01と併存する時期があったと考えるとSA01の北に置かれたとは考えられないため、講堂とSA01の間に置かれたと考えるのが妥当であろう。

(5) S A 0 1

〈検出状況〉

- ・講堂基壇北縁から 24 m(80 尺)程、北の位置で検出。
 - ・9 間の一本柱列であり、全長は 24.7 m。
 - ・2 時期確認でき、新期の柱間は西から概ね 8 - 12.5 - 8.5 - 10 - 8 - 8 - 9 - 10.5 - 8 (尺)となり、バラツキがある。方位軸は W-0° 30' - N であり、伽藍中軸線とは 2.5° 程振れる。
 - ・柱穴は古期が方形状ないし不整円形、新期が円形ないし不整円形で、径 100 ~ 120 cm 程、底面レベルは 127.15 ~ 127.7 m。東端の柱穴が講堂の東側柱列の位置にほぼ一致し、西端の柱穴は西側柱列の 1 m 程、西の位置になる。

《考察》

①柱穴の深さ

旧地表面レベルを 129.2 m 程と考えると、柱穴はそれぞれ 1.5 ~ 2 m 程の深さとなる。柱穴の掘り込みが深いことからも、一本柱塀と考えて矛盾はないであろう。

② 听力

前回調査では、P9の新期柱穴埋土から出土した土器により、新期を9世紀前前期としている。したがって、古期は9世紀初頭あるいは8世紀代にさかのぼる可能性も出てくる。しかし、柱間のバラツキが大きく整然とした柱穴列ではないことや、方位軸が伽藍中軸線と2.5°振れることの2点から、創建期に近い年代を考えることは難しい。ただ、古期の柱穴は方形状を呈るものもあり、古相を示していることを考え合わせて9世紀初頭と考え、何らかの商賈

があって僧坊中央部に沿うように建てられた辦と位置づけておきたい。

(6) 中門

〈検出状況〉

- ・中央部は後世の堀によって壊されているが、東端部及び西端部の掘り込み地業を確認。掘り込み地業の規模は東西約 15 m(50 尺)、南北約 12 m(40 尺)。
- ・掘り込みの深さは確認面から 50cm 程、底面レベルは東側で 127.2 m、西側で 127.0 m 程。
- ・上面が削られているため、原位置の礎石・根石は皆無であったが、堀東斜面にすり落ちた礎石 2 個を検出。
- ・周辺から角閃石安山岩切石が複数出土。

〈考察〉

①中門の構造

中門は、掘り込み地業の規模から八脚門と考えられる。やや大きめの規模と考えられ、例えば、桁行中央間 14 尺・脇間 12 尺で、梁行 11 尺等間でも十分に建てられる規模である。この場合、回廊との取付きである布掘り地業の柱列との間隔は 10.5 尺となる。

②基壇外装

周辺から角閃石安山岩切石が複数出土していることから、基壇外装は角閃石安山岩による切石積基壇であった可能性が高い。

(7) 回廊

〈検出状況〉

- ・南面東西、西面、東面南部、北面西部で掘り込み地業を検出。
- ・南東角で逆 L 字状に並ぶ内側柱列の根石・抜取り痕 7 基、西面南部で外側柱列の根石・抜取り痕 3 基を検出。いずれも柱間は 10 尺。
- ・南東角で外側柱列の可能性のある石組 2 を検出。内列との間隔は 15 尺。
- ・西面中央部でやや大きめの石を用いた根石 1 基を検出。外側柱列より 2 尺、さらに外側に位置する。この箇所は、掘り込み地業も広く行っている。
- ・西面南部、外側柱根石列の外側 1.5 ~ 2.4 m の位置、

瓦廐棄層中から凝灰岩切石 2 点が出土。

- ・中門との取付き位置に、柱 1 列分の布掘り地業を東西にそれぞれ検出。
- ・版築土中から B207b 型式の軒丸瓦が出土。
- ・版築層を壊す瓦廐棄層を検出。その上層に As-B 混土層(Ⅱ層)が堆積。

〈考察〉

①桁行

南東部及び西面南部で検出された根石や抜取り痕から 10 尺等間と判断される。

②梁間

南東部で検出された石組 2 が、唯一の可能性である。図上復元においても大きな齟齬は見られないことから、梁間 15 尺と考えたい。

③基壇外装

西面南部、基壇外縁付近の瓦廐棄層から凝灰岩切石 2 点が出土していることから、回廊の基壇外装は凝灰岩切石の一段積みであった可能性が高い。他地点でも、回廊に近い位置で凝灰岩切石の集積が検出されており、回廊基壇縁石をまとめて廐棄したものと考えられる。

④東西面に門

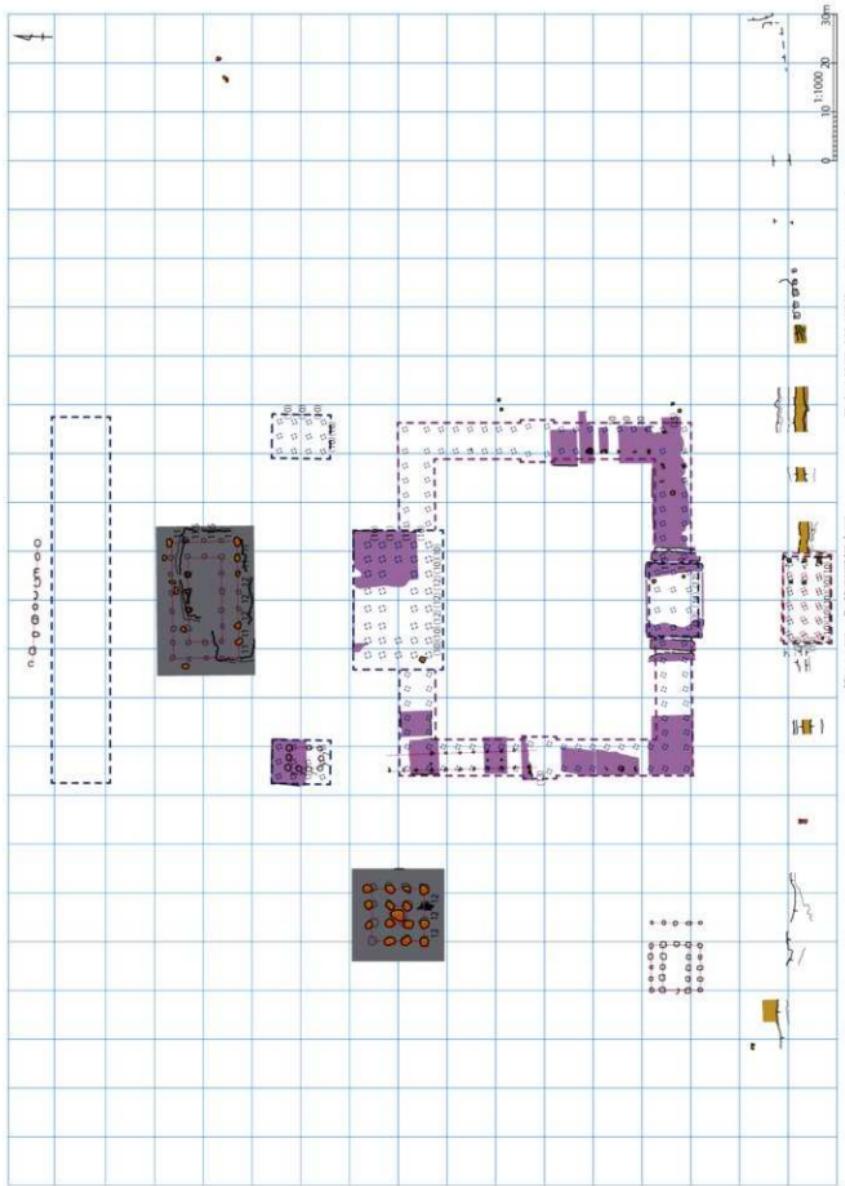
桁行 10 尺等間で図上復元すると東西面は 18 間となり、3 尺余分となる。その 13 尺となる 1 間が出入口と考えられ、西面の南から 10 間目北側、外筋から 2 尺外の位置で根石が検出されたことから門と考えられる。

⑤造営の時期

版築土中から B207b 型式の軒丸瓦が出土していることから、回廊の造営は B207b 型式の出現以降ということになる。

⑥中門・回廊の倒壊時期

回廊版築層を壊す瓦廐棄層の上層に As-B 混土層が堆積することから、回廊は As-B 降下以前に倒壊していたことが分かる。また、1030 年に作成された「実録帳」に中門・回廊無実の記載が見られないことから、この時点で存在していたと考えれば、中門・回廊は 1030 ~ 1108 年の間に倒壊したこと



第201図 僧院配置図

数字は柱間寸法(単位:1尺=0.297m)
()付きは井戸、南門の示線は可逆的

ができる。

(8) 南大門

〈検出状況〉

- ・東辺の原位置の礎石3個を再検出、堀東斜面に下り落ちた礎石2個を新たに検出。
- ・基壇東縁南の石列を2条再検出。内側石列は礎石中央から3尺、外側石列は6尺の位置。
- ・内側石列の南端は、礎石中央から7.5尺南の位置。
- ・基壇北縁の石列を検出。石は一段積み。門の梁間を10尺とすれば、基壇の出は5尺。
- ・北部で掘り込み地業の掘り直しを確認。
- ・基壇版築土を掘り込む土坑状の落ち込みを確認。埋土中から10世紀前半期の土師器壺が出土。また、As-B降下以前の古い攪乱から10世紀後半期の須恵器壺片が出土。

〈考察〉

① 南大門の造営

南大門の建つ位置は、もともと浅い低地であったと考えられる。126.6m程の高さであった地山の粘質黒褐色土(V層)の上に盛土をし、掘り込み地業・版築を行っている。低地に面する基壇南端部は地山面から版築を施し、基壇縁の玉石を積み上げ、基壇を整えたと考えられる。この造成により、南大門前面との比高が1m程生じることになり、南大門基壇が南に張り出したような形であったと推定される。

② 南大門の建て替え

基壇縁と考えられる石列が2条検出され、内側は礎石中央から3尺、外側が6尺であることから、外側石列が礎石列に伴う基壇縁と判断できる。そうであれば内側石列は、建て替えに伴って埋め殺された創建期の基壇縁と考えられよう。創建期は伽藍中軸線から北に対し0.5°程西に振れて建てられたが、建て替え後は創建期から2°程東に振れる位置となった。

建て替えの時期については、残念ながらとらえることができなかつた。

③ 基壇外装

基壇縁と考えられる石列が検出されたことから、

乱石積基壇と判断できる。

④ 南大門の規模

伽藍中軸線で折り返すと、創建期の基壇(内側石列)の規模は東西60尺となる。調査した東辺礎石列は再建期のもので、再建期も創建期と同様の規模で建て替えられたと仮定すると、礎石の位置が東へ行きすぎ、八脚門とは考えられない。そのため、10尺等間程の五間三戸と考えられる。この場合、基壇の出は5尺となる。

⑤ SD27との関係

建物を再建するのであれば、創建期の基壇をそのまま使用すればよいと思われるが、わざわざ基壇縁を東側に延ばしたうえ、方位軸も2°程ずらして造り替えている。基壇西縁は後世の堀によって壊されているため確認できないが、第23次調査で築垣とされた部分の東端が切られている状況が見られることから、西縁も東へとずらし、間に溝を掘って排水路とした可能性がある。SD27の掘削と南大門の建て替えは、同時期に行われた可能性が高い。

⑥ 倒壊の時期

基壇版築土を掘り込む土坑状落ち込みの埋土中から10世紀前半期の土師器壺が、またAs-B降下以前の古い攪乱から10世紀後半期の須恵器壺片が出土していることから、10世紀代には倒壊していたと考えられる。

(9) 東大門

〈検出状況〉

- ・原位置の礎石1個、落とし込まれた礎石1個を再検出。
- ・それ以外の情報はつかめなかった。

〈考察〉

① 現道との関係

旧群馬町教委によって、落とし込まれた礎石の抜取り穴が確認されている。この抜取り穴と原位置の礎石を結んだ軸は、伽藍中軸線とも調査グリッド軸とも一致せず、北に向けて西に振れており、現道の軸とほぼ一致する。

② 東大門の位置づけ

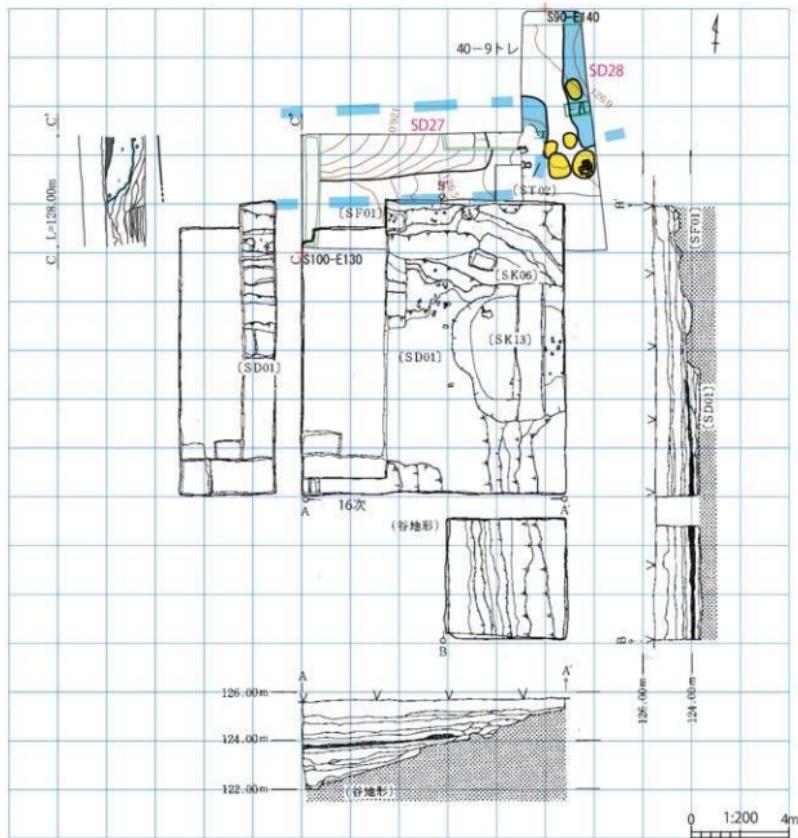
正面となる南大門の南側は80m程で比高5m程の断崖となり、染谷川となる。また、寺域南東部にある谷地形も築垣を越えて南東方向へと伸び、染谷川まで続いているため、東から回って南大門へ向かうことは困難である。築垣南東角に当たる今回の40-9トレーンチと第1期調査の第16次調査区の図を合成してみたが(第202図)、第16次の平面図で段差の下端が確認できるのがS103までであることから、築垣を造成するため谷地を横断するよう

に埋立した幅は最大でも6m程であったと考えられる。この上に築垣を造るわけであるから、築垣外側の通路としては犬走り程度のものであったろう。こうした地形的な制約と東に所在する国分尼寺、南東方面に所在する国府との位置関係を考えれば、東大門が実質的な出入口であったと考えられる。

(10) 西大門

〈検出状況〉

- ・関連する遺構は全く検出されなかった。確認面レ



第202図 築垣南東角の状況

ベルは 128.3 m 程。

〈考察〉

調査では何の痕跡も確認できなかったが、「実録帳」に西大門の記載があることから、存在したが後世の削平により無くなってしまったと考えざるを得ない。

(11) 築垣

〈検出状況〉

- ・築垣の下層から柱穴列 SA04 を検出。
- ・築垣下部を検出。黄褐色土・黒褐色土・暗褐色土を用いた丁寧な版築層を確認。
- ・築垣北縁を壊して掘られた大溝 SD27 を検出。掘り直しが行われており、最も新しい溝の上位に As-B が堆積。さらに、SD27 の埋没土を掘り込んで構築した 10 世紀後半期の SJ51 を検出。
- ・南東部の谷地を埋める版築状の土層を確認。上部は単位が厚くなる。
- ・東辺築垣の痕跡は確認されなかったが、東大門南で SD26、南東角で SD28 を検出。それぞれ方位軸が現道とほぼ一致する。

〈考察〉

① 第 1 期：掘立柱塀

築垣版築土の下層から SA04 が検出されたことから、創建当初は掘立柱塀が廻っていたことが分かる。南辺東側で 6 基が確認されたのみだが、下野や上総等の例を参考にすれば、寺域を一周廻っていたものと考えたい。

② 第 2 期：築垣

掘立柱塀の後、築垣が構築される。SA04 の柱抜取り穴から 8 世紀第 3 四半期の土器器表が出土したことから、築垣の構築はそれ以降、時期のあまり離たらない時期と判断される。築垣が確認されたのも南辺だけだが、「実録帳」に「築垣壱廻」とあることから一周廻っていたものと考えたい。SD01 の南側にところどころに大きな穴が掘られており、築垣造成のための土探し穴の可能性がある(第 203 図)。そうだとすると、SD01 は第 1 期に掘られていたものと判断できる。

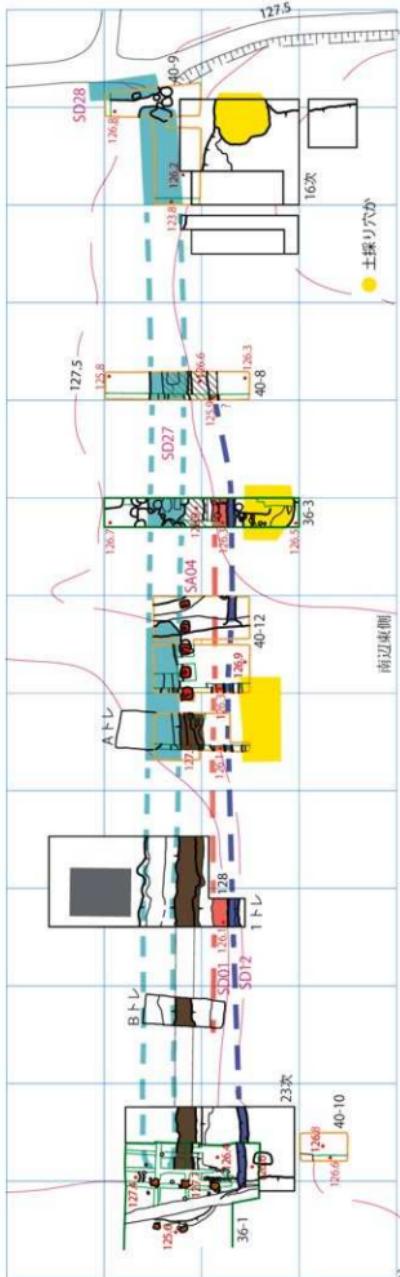
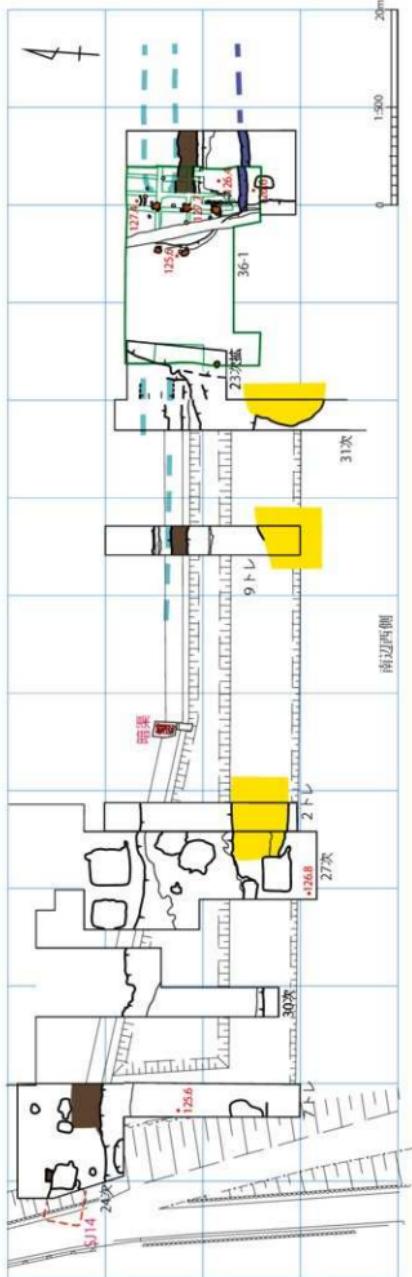
③ 第 3 期：大溝+土塁

第 2 期築垣が劣化あるいは崩壊し、南辺の改築が行われた。築垣北縁を壊すように南辺内側に大溝 SD27 が掘られ、その排土を築垣部に盛って土塁状にしていたと考えられる。築垣下部が残存しているところもあって、それを再利用したため部分的に版築層が認められるのだろう。第 1 期調査の 1 トレンドで築垣と認定された高まりは盛土の単位も厚いうえ、「版築等によりつき固めることはせず、築土のしまりはそれほど強くない」と報告されている。これが第 3 期土塁と考えられよう。SD27 は、その埋土上に構築された SJ51 の存在から、10 世紀後半には完全に埋没していたことが分かる。

今回の調査において、SD27 は南大門東脇から寺域南東角まで、南辺東側全体にわたって掘られていた可能性が高いことが確認されている。一方、西側については第 1 期調査の『報告書』を確認してみると、南大門に近い東部で SD27 に似た溝状の落ち込みが確認できる(第 207 図 E10 ライン断面図)。さらに同図の平面図では、築垣とした西部 SF01 の東端が掘り込まれて途絶えている。これは築垣北側に沿って東西方向に掘られた SD27 が南大門との取付き部で南へと屈曲し、寺域の外側へとつながっていたのではないだろうか。そうであるとすれば、SD27 は区画溝としての面だけでなく排水の機能も兼ねていたと考えられる。築垣下に造られた暗渠では処理しきれなかったのだろう。この改築に伴って暗渠も存在価値を失い、埋められたと考えられる。

SD27 が排水機能も兼ねていたと考えられる状況が、もう 1 か所確認できるので触れておきたい。第 1 期第 23 次東調査区の東壁際では、SD27 へとつながる南北方向の溝状の落ち込みが検出されている(第 204 図)。調査区東西両面の断面が掲載されており、西の E60 ラインでは SD27 と考えられる部分にのみ As-B の堆積が認められるのに対し、東壁の E65 ラインでは調査区の北壁まで緩やかに傾斜して堆積する As-B が認められ、さらに北へと伸びている。S91 ラインの断面図を見ると、E61 付近

2 各堂宇について



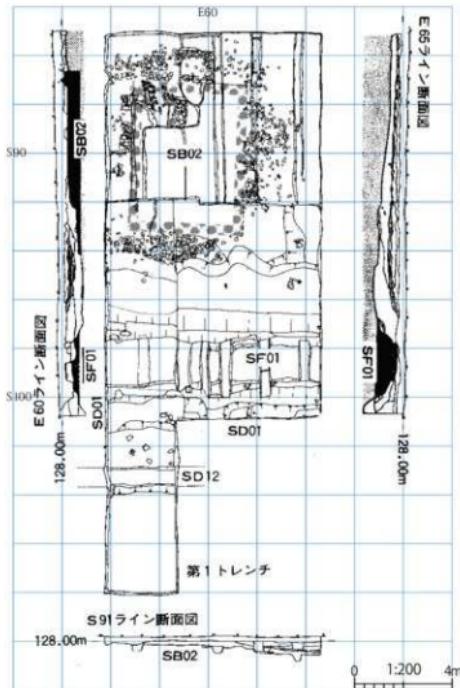
第203圖 南邊部全体圖

から東に向けて落ち込んでいる状況が明瞭に確認でき、さらにこの部分にのみ As-B の堆積が認められる。この落ち込みは回廊南東角の南東外側に位置することから、回廊外側の排水のため SD27 向けて掘られた溝の可能性が高いと考えられる。1 節の地形復元で見たとおり寺域南部は勾配がややきついため、雨水が南辺築垣に向て溜まることとなり、SD27 の掘削はそれに対応したものではないだろうか。

第 3 期の改築と南大門の再建が同時に行われているとすると、創建南大門や第 2 期築垣が改築しなければならないほど劣化した原因は、水による影響も一つの可能性として考えてもよいと思われる。

④ 東辺築垣の位置

SD26・SD28 が検出され、ともに現道と平行する方位軸を持つことから、現道の位置に東辺築垣があった可能性が高い。SD27 が E140 まで伸びること、SD28 が現道に沿って確認されたことにより、E135 ラインに東辺築垣があったとする第 1 期調査での推定は成立が難しくなった。



第 204 図 第 23 次東調査区平面・断面図

3 築垣南西部の屈曲について

(1) 現状と問題の所在

現在、南辺築垣西側は南大門跡から調査グリッドラインと方位軸を合わせて西に伸び、W24 の位置で北に向けて屈曲した形状で復元されている。また、南大門を挟んで東側とは一直線にはなっていない。東西ともに方位軸はグリッドラインと一致するが、東側は S98 の位置、西側が S97 の位置となり、食い違いを見せていている(第 205 図)。この状態は、南大門の建て替えによって建物の軸が振れたこと、つまり南大門の西側が北に振れたことに呼応した

ものである。南大門については、第 1 期整備時に建物復元には至らなかったが『基本設計書』では八脚門とされ、桁行 12-14-12 (尺)・梁間 10.5-10.5 (尺)・基壇の出 4 尺の規模が推定されている。しかし、この南辺築垣西側の復元についてⅢ章 5 で触れたとおり、飯島義雄氏から疑問が投げかけられている(飯島 2014)。飯島氏は、SD01 の西側は人工的に掘られたものではなく、弘仁 9 年(818)の地震によって陥没した結果だとし、「創建期の南辺築垣は、(中略)南大門を挟んで東部から西部まで直線状であったが、地震による陥没により西部の築垣基部の南半部もしくはそのほとんどが沈み込んだ」との見解を示している。そこで、改めて南辺築垣西側

の屈曲について検証してみたい。

(2) 第1期調査状況の検証

南辺西側については、既に築垣が復元されているため再調査することはできなかったが、『概要1～8』、『報告書』及び第1期調査時の図面原図・写真を再確認し、検討を試みた。

第1期調査では、昭和55年度2・7・9トレンチ、昭和59年度第23次西拡張区・第24次、昭和60年度第27次、昭和61年度第30・31次の、計8か所の調査が行われている。まず、トレンチごとに検出状況を再確認してみたい。

なお、遺構の呼称は前節により、版築によって土を積み上げ、寄せ柱を立てて屋根を組み瓦葺きとした、いわゆる築地塀を第2期築垣、第2期築垣が崩壊した後、築垣位置に簡便に盛土したものを第3期土塁と呼ぶ。

①2, 7トレンチ

『概要』での本文の記述、実測図の掲載が無いが、III 調査の経過の章に「第2～4・6～8トレンチは完了。(中略)西辺及び北辺に設定したトレンチでは予想された築地、溝等が認められず」との記載がある。原図を確認したが、記載のとおり築垣の痕跡は確認されていない。2トレンチでは、S94～104にAs-B混土層を掘り込む大溝があり、中世以降と考えられる。その南にはS108まで、埋土上位にAs-B混土層が堆積する溝状遺構があり、これが国分寺期のものと判断される。7トレンチは北端部からS106あたりまで溝状の落ち込みになっている。

②9トレンチ(第206図)

S95～101の位置で築垣を検出。基部幅6m、

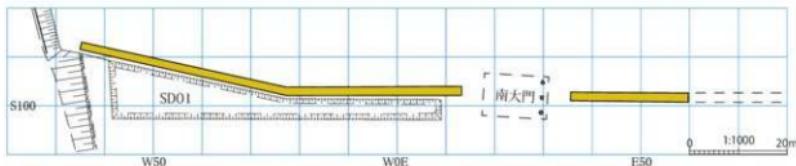
上端幅は現状で1.5mを測る。本文中で、「築土がやや粘性をもつ黒褐色土で、しまりが良い」と報告されているが、断面図中の①はローム混褐色土との記載であり、疑問が残る。なお、原図での土層注記は「橙褐色土ブロックと暗褐色土の混土」であり、橙褐色土ブロックはⅦ層に該当する。

また、溝状と思われる遺構がS105.5以南で確認され、東西に伸びると推定されている。底部近くで瓦が廃棄されたような状況で出土しているほか、軒丸瓦を含む多量の瓦破片、完形の須恵器壺、三彩片が出土している。この溝状遺構の部分は『概要』には掲載されていないが、築垣基部南端から5m程離れていることからSD01とは別の遺構と考えられる。

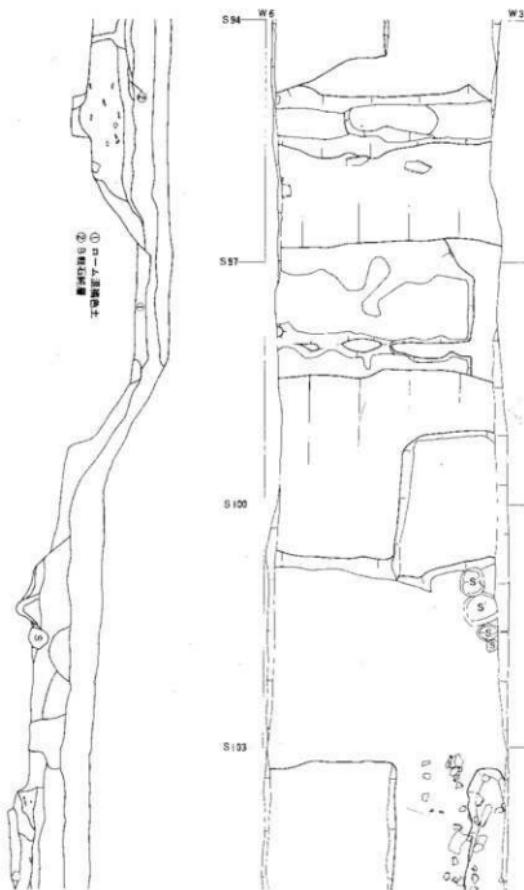
③第23次西拡張区(第207図)

S96.1～98.4、E10～12.1の位置で築垣が検出された。残存状況で基部幅3.3m、上端幅1.5m、高さ55～60cmを測る。断面が台形を呈する帯状の盛土であり、「白色小礫を含む赤褐色土の地山面の上に、強い粘性をもつ輕石混黒褐色粘質土を固く締めて造られている」との報告があり、その形状及び位置から南辺築垣の基部盛土であると判断された。

しかし、基部盛土とされた台形状高まりの上端レベルが127.2mであり旧地表面より低いこと、原図の土層注記では、北に接する溝状落ち込みの北の土層(『概要5』で整地盛土と記載)も輕石混黒褐色粘質土とあり近似する土層であるため、合わせて寺域南部を造成した整地土の可能性が生じる。したがって、もともとは整地された平坦面であったが溝状落ち込みが両側を掘り込んだ結果、帯状に掘り残されたものと見なすことができよう。



第205図 復元された南辺築垣の位置

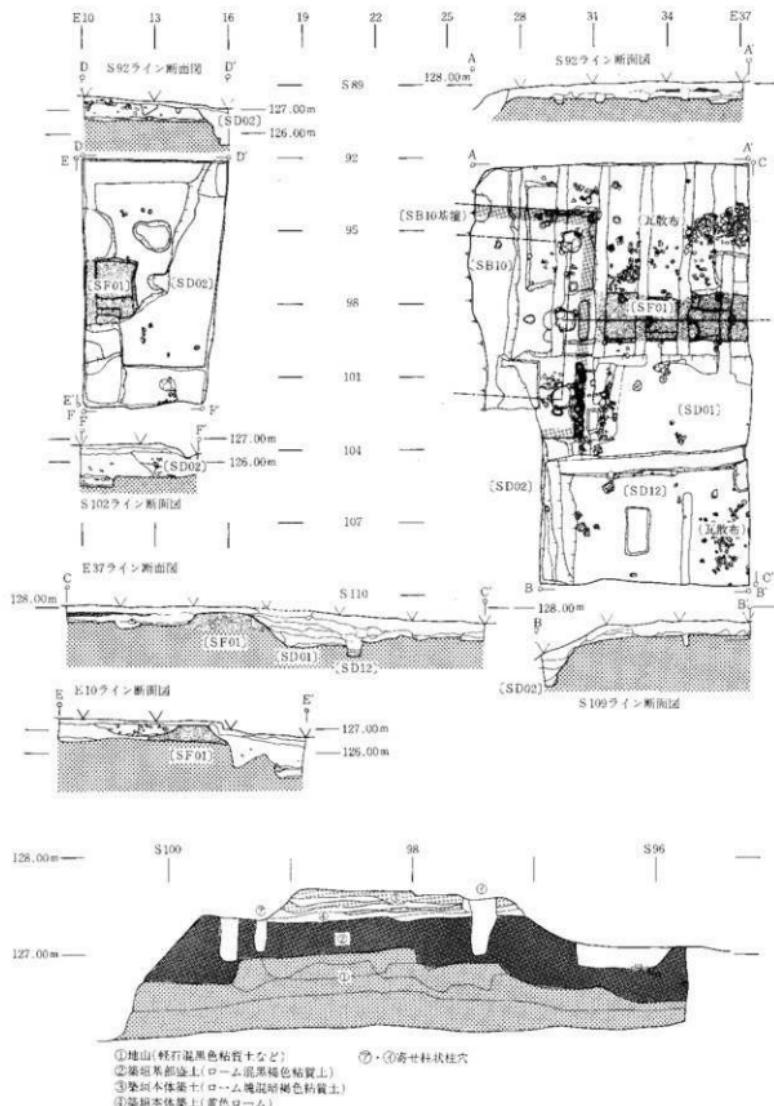


第206図 9トレンチ平面・断面図(s=1/80)

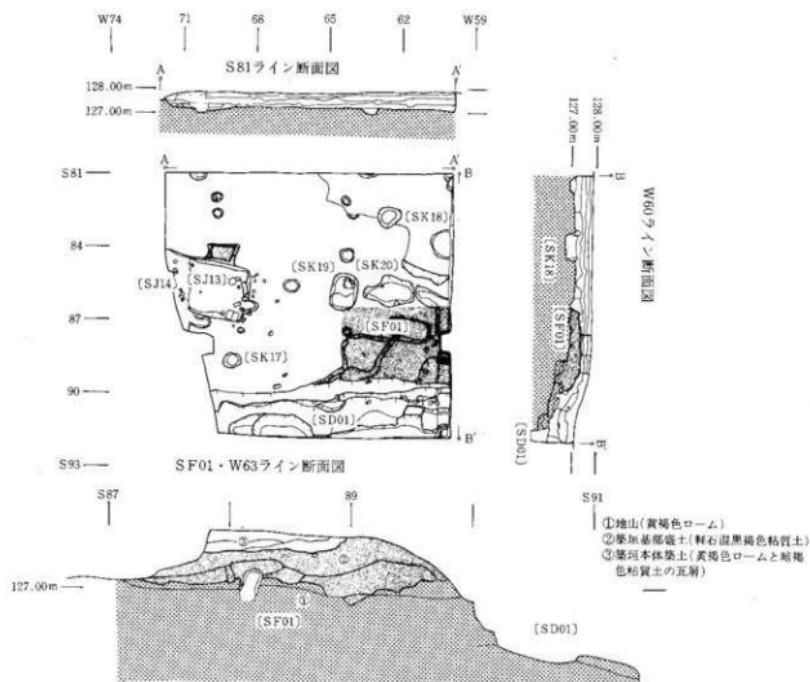
④第24次(第208図)

S87.6～90、W60～64.4の位置で東西方向の帯状の高まりが検出された。現状で基部幅2.75m、上端幅1.4mの台形状で、黄褐色土を少量含む輕石混黒褐色土が固く締まった状態であり、W62.5～64.4ではこの上に黄褐色土と暗褐色土が1単元の厚さ約8cmで3層分残存しているのが認められた。

この様子から、盛土は南辺築垣の基部であり、その上の築土は築垣本体の残部であると判断された。また、基部盛土中からは国分期(9世紀)の須恵器塊が出土しており、改修がなされたとされた。すぐ北側で検出されたSJ13がその工事に伴うものであったとして、その出土土器から改修時期は10世紀前期頃と推定されている。



第207図 第23次・第23次西拡張区平面・断面図(上1/200・下断面1/40)



第208図 第24次平面・断面図(上1/200・下断面1/40)

また、S83～85、W69～70の位置で、黄褐色粘質土上に軽石混黒褐色土が盛土された状況が検出され、西辺堀垣の基部残痕の可能性が指摘された。

⑤第27次(第209図)

S92～95の位置で、基部の造成の状況が確認されている。127.15m付近にある旧地表面とみられる黒褐色粘質土を、断面逆台形状に約70cm掘り下げて固く締めた黄褐色土中に底面を造り、その内部に軽石混黒褐色土を主体とする粘性の強い土を積み上げている。また、図を掲載していないが基部の外側に10m近い幅のSD01が調査されており、その埋土底面附近から獸骨片が出土している。

⑥第30次(第209図)

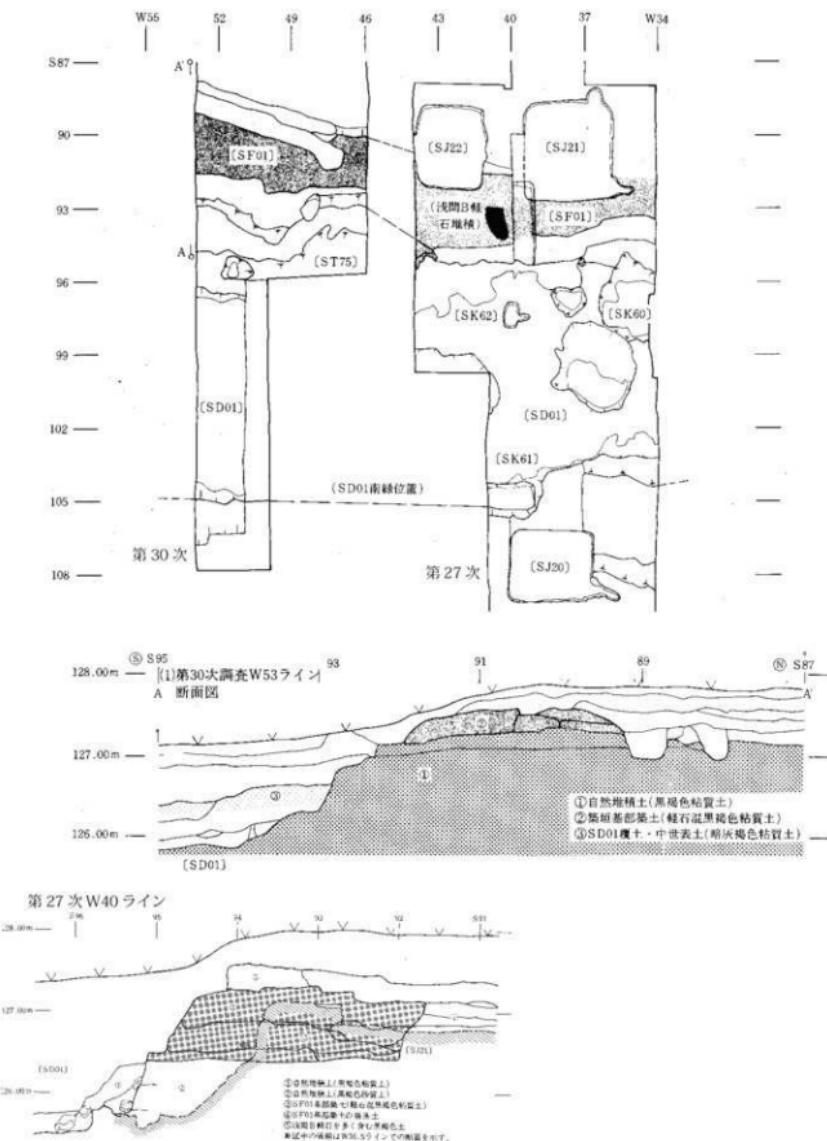
S90～95の位置で痕跡が検出されている。黒

褐色粘質土上に基部幅2.8m、上端幅1.8m、高さ30cmの台形状に軽石混黒褐色粘質土を主体とする粘性の強い土を積み上げている。底面レベルが127.3m程、上面レベルが127.6mとなる。SD01はW53ラインで幅14m程である。

第27次はE40ライン、第30次はE53ラインの状況について述べられたものであるが、両調査区の間は2m程しか離れていない。第27次では70cmも掘り下げて造成を行い、一方の第30次では掘り下げは行わず地山の上に盛土を行うとして、工法が異なっている。この造成工法の違いをどう理解するかが課題となる。

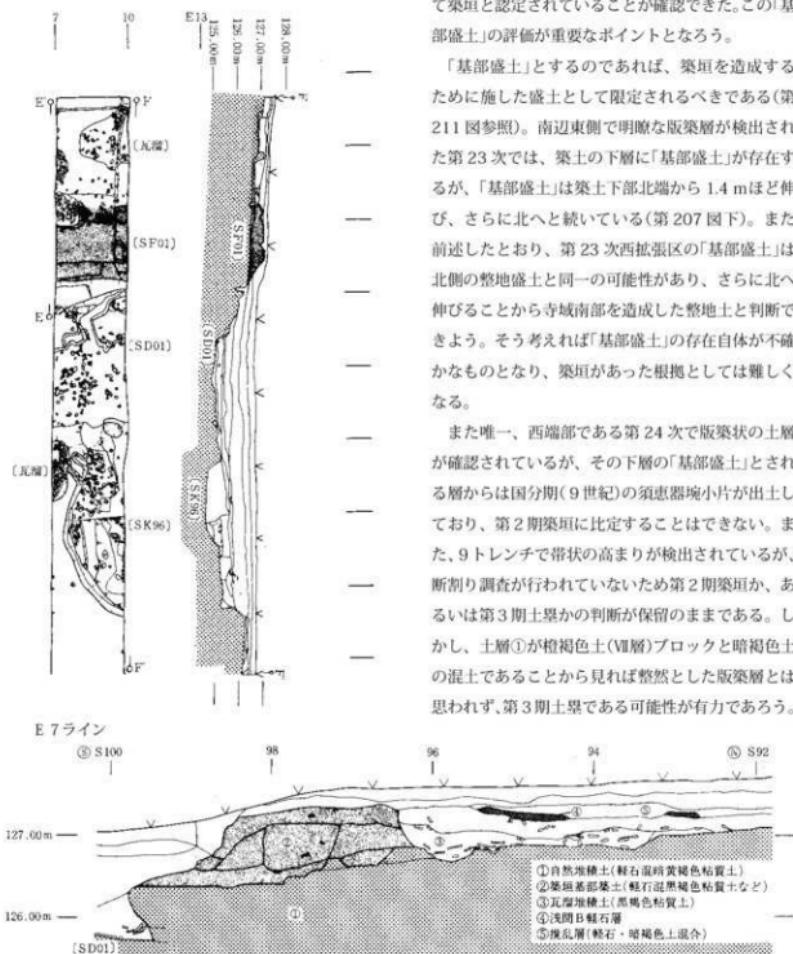
⑦第31次(第210図)

前述した第23次西拡張区の西側に隣接する調査



第209図 第27次平面・第30次平面・断面図(平面1/200・断面1/60)

区である。S95～99、E7～10の位置で基部盛土が確認されており、第23次西拡張区とはほぼ同様の様相を示す。基部盛土の外側には14mほどの幅をもつSD01が調査されており、底面に近い埋土中から人骨片や銅錢が出土している。



(3) 考察

それぞれのトレンチについて検出状況を概観したが、8か所のトレンチのうち築垣本体の築土が確認されたのが9トレンチと第24次のみであるということ、それ以外はみな「基部盛土」の存在を根拠として築垣と認定されていることが確認できた。この「基部盛土」の評価が重要なポイントとなろう。

「基部盛土」とするのであれば、築垣を造成するために施した盛土として限定されるべきである(第211図参照)。南東辺側で明瞭な版築層が検出された第23次では、築土の下層に「基部盛土」が存在するが、「基部盛土」は築土下部北端から1.4mほど伸び、さらに北へと続いている(第207図下)。また前述したとおり、第23次西拡張区の「基部盛土」は北側の整地盛土と同一の可能性があり、さらに北へ伸びることから寺域南部を造成した整地土と判断できよう。そう考えれば「基部盛土」の存在自体が不確かなものとなり、築垣があった根拠としては難しくなる。

また唯一、西端部である第24次で版築状の土層が確認されているが、その下層の「基部盛土」とされる層からは国分期(9世紀)の須恵器塊小片が出土しており、第2期築垣に比定することはできない。また、9トレンチで帯状の高まりが検出されているが、断面調査が行われていないため第2期築垣か、あるいは第3期土塁かの判断が保留のままである。しかし、土層①が橙褐色土(VII層)ブロックと暗褐色土の混土であることから見れば整然とした版築層とは思われず、第3期土塁である可能性が有力であろう。

第210図 第31次平面・断面図(平面1/200・断面1/60)

もう一つの重要なポイントは、SD01 の評価であろう。飯島義雄氏も指摘しているが(飯島 2014)、南辺東側と西側では、その形状に大きな違いがある。東側は東端部が不明だが、築垣の方位に沿ってほぼ真っ直ぐに伸びている。南縁が SD12 などによって壊されているため、明確に幅を確認できる箇所はないが最大でも 3 m が限界であろう。一方、西側は広い箇所では 14 m の幅がある。また、埋土中に骨片や古銭が含まれている。さらに、埋土中には As-B の堆積層が認められないばかりか、2 トレンチでは SD01 が As-B 混土層を掘り込んでいることが確認できる。したがって、西側の SD01 は中世以降に大きく掘られたものとなる。第 1 期調査の『報告書』には、「造成工事により築垣を一直線状に造ろうとした痕跡は認められず」との記載があるが、これは西側の SD01 を国分寺創建以前からの自然の凹地と理解されたためである。報告者である前澤氏によれば、当初は築垣の走向を直線状に考えたが、周辺で築垣の存在を示す瓦の集中的な出土が認められなかつたこと、また、SD01 の埋没を 2 時期と考え、上層を中世以降、下層を国分寺並行期と判断したとのことで、その結果、自然地形の凹地縁辺に沿うように築垣をあえて屈曲させたと判断したことであつた。しかし、前述したとおり西側の SD01 は中世以降の所産の可能性が高いため、築垣は SD01 によって破壊されたと考えるほうが無理がないと考える。弘仁 9 年の地震による陥没とする見解も成立しないであろう。

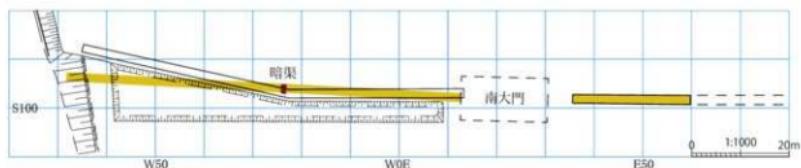
では、本来の築垣はどの位置にあったと考えられるのか。平成 2 年度に検出された暗渠が重要な意味を持つ。この暗渠は角閃石安山岩切石を用いた精巧



第 211 図 築垣構造図
(文化庁文化財部記念物課「発掘調査のひき各種道路調査編」より)

な造りから、第 1 期掘立柱跡ないし第 2 期築垣造営時に設けられたものと考えられる。したがって、これを根拠に南辺西側は創建南大門の本柱からこの暗渠の上を通り、一直線に伸びていたと考えたい(第 212 図)。この推定による方位軸は、E-1°-N となる。築垣東側は E-3° 50'-N であるので、伽藍中軸線(N-2°-W)以東は東に向けて 2° 内側、以西は西に向けて 1° 内側に振れて伸びていたことになる。

なお、第 3 期土塁の時期に屈曲させた可能性は残る。しかし、前述した第 24 次の版築状の土層を第 3 期と考えた場合、この西延長上 5 m 程の位置に 9 世紀後期頃の SJ14 が構築されていることから、9 世紀後期頃までは第 3 期土塁も無くなつたこととなる。しかし、この頃に寺域を画す構造物が全く無くなつてしまつたとは考えられないため、この位置に築垣や土塁を想定することは難しく、第 3 期についても第 2 期築垣の位置を踏襲したと考えたい。再建によって南大門の方位軸が振れ、本柱の位置が北へずれたことで取付くべき位置が変わったが、間に溝があることで取り付ける必要がないため、第 3



第 212 図 南辺築垣の推定位置

期土塁は第2期築垣の位置に造られ、南大門のみ方位軸を変えて再建されたと考えておきたい。

次に、西辺南端の屈曲について考えてみたい。

寺域南西部外側は染谷川によって開削された谷地となっている。この自然地形に制約されたとして、西辺南端も内側へと屈曲した形状になっている。しかし、寺域南西端で調査されたSJ14(9世紀後期頃)は、西側半分以上が崖によって崩落し、無くなっている(第203図)。このことは住居構築時、寺域の平坦面がさらに西に広がっていたことを示すとともに、現況の崖線が平安期以降に形成されたことを示している。のことから、西辺築垣の位置をこの崖線に想定することはできず、さらに西側になることは間違いない。そう考えれば、西辺築垣も屈曲することなく一直線に伸びていたと考えたい。

なお、今回の調査では地割れや陥没等、弘仁9年(818)の地震痕跡は全く確認できなかったことを付記しておく。

4 寺域と伽藍配置

(1) 寺域

寺域を考えるうえで、外周を廻る築垣の位置の確定が前提となる。

発掘調査で確認されているのは南辺築垣のみであり、南辺築垣の位置については前節において述べたとおりである。東辺については築垣本体は確認されなかったが、南端部で現道に沿ってSD28が検出されたことから、現道の位置に東辺築垣があった可能性が有力である。また、東大門で検出された原位置の礎石と礎石抜取り穴を結んだ方位軸が現道にほぼ直交することからも、東大門は現道の方位軸に合わせて建てられていた可能性が高い。東大門南側の現道下の調査では掘立柱壠の柱穴列は検出されなかつたため、もう少し東に寄った位置と考えれば、原位置の礎石が本柱に当たると考えられる。西辺については西大門の痕跡が全く確認できず、また築垣の痕跡も確認できなかった。そのため、現道を築垣の痕

跡として認定するほかない。北辺についても確たる痕跡は認められないが、やはり西半の直線状に伸びる現道が痕跡である可能性が高い。昭和55年度8トレンチの調査においても、後世のものではあるがN135~136の位置に人頭大の玉石が東西方向に並べられているのが確認されており、境界の痕跡を示すものと考えられる。また、寺域西方から北西隅へと向かう道路が北西隅で若干北へ迂回して東方へと伸びていることも、迂回させる制約があったものと看取される。北辺中央部と東辺北部では現道がクランクし、寺域北東部が内側に入り込むが、この部分は中世以降の土採りが行われて一段低くなったところである。土採り以前は北辺・東辺ともに直線状に伸びていた道が、この時に今の位置に変更されたのであろう。

こうして見てくると、国分寺廃絶後も寺域境界が道路や地境となって、今日まで続いていることが看取される。北東部と南西部のみ、中世以降の改変によって変わっただけのようである。各辺の方位は、東辺がN-7°36'W、西辺がN-4°35'W、北辺がE-0°49'N、南辺東部が、南辺西部がとなる。寺域の区画は北に対して西に振れており、歪んだ長方形を呈している。特に、東辺南部は東に広がっているが、これは寺域南東部に広がる谷地を寺域内に取り込んだことによるものであろう。

寺域を設定するにあたっては講堂の中心を基準点としているようで、北辺は講堂の中心から108.0m(360尺:1町)、南辺は南大門の中心が講堂の中心から123.0m(410尺:1町+50尺)、合わせると南北長は231.0m(770尺:2町+50尺)となる。東辺については、東大門の原位置の礎石を本柱と考えると講堂中心から111.0m(370尺:1町+10尺)、西辺は108.0m(360尺:1町)となり、合わせて東西長219.0m(730尺:2町+10尺)となる。単純に2倍してみると、四周は3000尺(300丈)となる。「実録帳」には、「築垣壹壝 四面貳町長參伍貳丈壹尺」との記載があり、この値と大きな隔たりはない。講堂を基準点としていることは、東

大門の位置からもうかがえる。講堂からまっすぐ東に向かった先に東大門があり、おそらく反対側に西大門があつたのであろう。

(2) 伽藍中軸線と基準尺

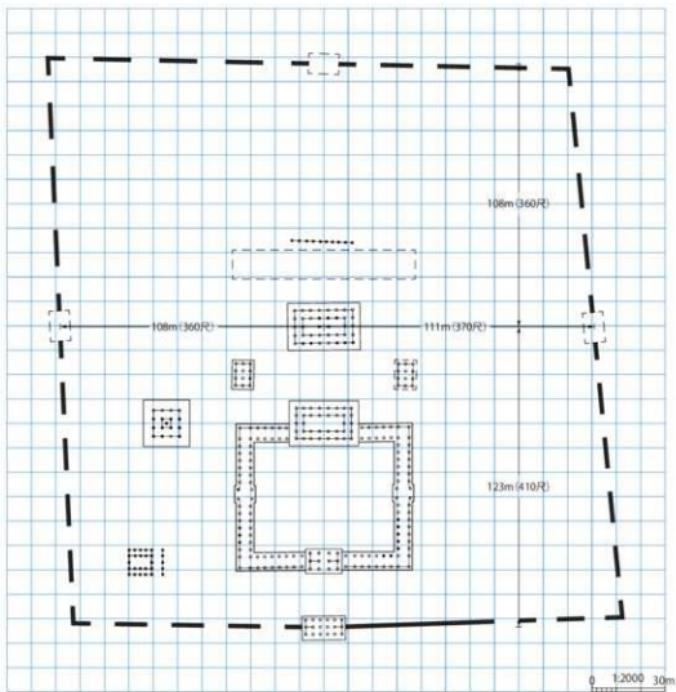
伽藍中軸線は、講堂の中心と中門掘り込み地業の中心を結んだ線で、方位軸は概ね N-2°-W である。東西回廊南部で確認された根石列の方位軸と一致することから、この中軸線を導き出した。

基準尺については、第1期調査で確認されていた塔と講堂の礎石間から計測し、1尺 : 0.297 m の値が導き出された。堂塔の造営に際しては、この基準尺を使用していたと考えられる。

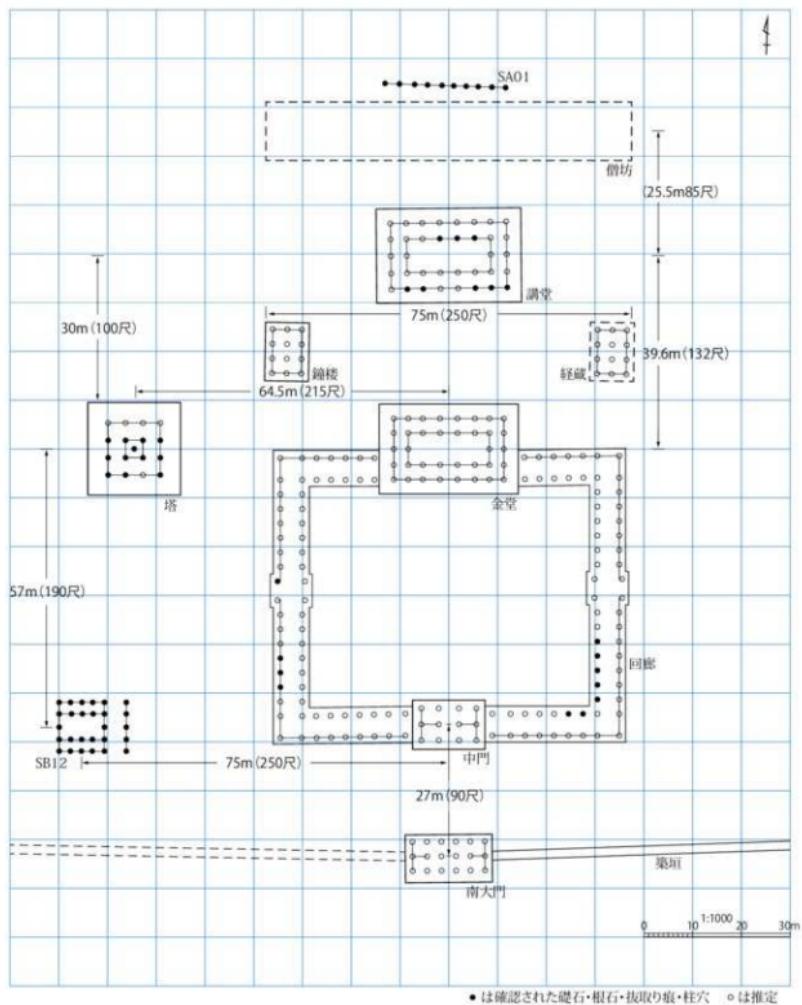
(3) 伽藍配置

上野国分寺の伽藍は、寺域東西軸の中央に伽藍中軸線を設定し、南から南大門・中門・金堂・講堂・僧坊を、建物の中心を揃えて一直線に配置している。塔は回廊の外に置かれる興福寺式伽藍配置であるが、塔が金堂の西側に中心を揃えて並び建つ配置に特色がある。各堂塔間の距離は第228図のとおりである。

伽藍中軸線に方位軸が合う建物は、金堂院(金堂・中門・回廊)・塔・SB12 であり、少し触れる建物は、大まかに講堂・創建南大門が北に対し 0.5°西、SB08 が北に対し 1°東、再建南大門が北に対し 1.5°東、SA01 が北に対し 2.5°東となる。



第213図 上野国分寺の寺域と伽藍配置



第214図 伽藍復元図

5 出土瓦について

今回の調査で出土した軒先瓦は軒丸瓦 308 点、軒平瓦 180 点の合計 488 点であり、文字瓦は 343 点である。このうち本文で報告したのは軒丸瓦 141 点、軒平瓦 98 点、文字瓦 177 点であり、小破片をはじめとした状態の悪いものについては掲載しなかった。ただし、小破片であるために掲載をしなかつたものであっても分類番号が判明した軒先瓦があるので、それらの出土数は後掲の第 10 表に加えてある。

(1) 軒先瓦

① 分類番号

上野国分寺の軒先瓦は、第 1 期調査の『報告書』と同じく、分類番号を使用して報告している。その設定要領の詳細は前報告書に述べたので繰り返さないが、基本的にはアルファベット 1 文字(一部 2 文字)、数字 3 文字で表している。アルファベットが大分類、数字 3 文字の最初の 1 文字が小分類を表し、これを見ればある程度の文様の特徴が分かるようになっている。続く 2 文字の数字は大分類・小分類ごとの統一番号であり、これで範を特定できるようになっている。さらに、同一の範のなかのバリエーションは、その後にアルファベットを付して明示している。これについては、範の彫り直しといった範自体の大きな改変は大文字のアルファベット A B C を用い、技法上の違いなどは小文字のアルファベット a b c を用いて区別している。

分類番号の大分類・小分類の詳細とそれぞれの数などは第 9 表に示した通りである。分類番号の数は、第 1 期調査の『報告書』作成時には軒丸瓦 77 種、軒平瓦 85 種であったが、今回新たに軒丸瓦 1 種、軒平瓦 2 種を追加することができ、分類番号の数は軒丸瓦 78 種、軒平瓦 87 種となった。しかし、『報告書』にも触れた通り、特に軒丸瓦において、ある程度の文様が分かるにもかかわらず分類番号を受けられない破片がかなり多くなってしまっている。これは、

少なくとも蓮弁の枚数や蓮子の数など、文様の全体がほぼ分からなければ分類番号を決められないことによる。しかも、上野国分寺の軒丸瓦の文様には無文部分がかなり広いものが多く、そのため分類番号未定の破片数がさらに増えてしまう結果となっている。以上の理由により、『報告書』作成の際は、全破片数のうち軒丸瓦 30%、軒平瓦 13% が分類番号不明となってしまった。第 2 期調査では、出土瓦を全点見直して軒先瓦を選び出し、それらを整理分類して分類番号を付したが、軒先瓦の選び出しを慎重に行つたために小破片の比率が第 1 期調査の際よりも増加したらしく、分類番号不明の破片がさらに増えることになった。結局、今回の分類番号不明の破片の数・割合は、軒丸瓦 308 点のうち新范種も含めて 146 点(47%)、軒平瓦 180 点のうち 68 点(38%) を占めている。これは上野国分寺の軒先瓦の文様の特性上仕方のないことである。

② 新范種の軒先瓦

新范種と思われるものは 6 種を確認しているが、分類番号を付けることができたのは 3 范種のみで、残りの 3 范種は小破片であるために分類番号を確定できなかった。これらについて以下に解説を加える。

A310 (第 215 図 1、本文では第 191 図 2 に掲載)

単弁 4 葉蓮華文軒丸瓦である。金堂北西側に位置する 38-7 トレンチの近現代廐棄坑から 1 点のみ出土した。小さな破片なので全形は知り得ないが、中房の半分と 2 葉の蓮弁が残っていたため、分類番号を付すことができた。蓮弁は子葉をもつ二重蓮弁であるが、残っていた 2 葉の蓮弁は幅が大きく異なり、子葉も片方は太く、もう片方は線状であるなど、整った文様とは言いたいものである。蓮弁と蓮弁の間には珠文の剥離した跡がある。中房は圓線で表され、その内部は圓線から内側に向く凸線と珠文とが不規則に配置されているらしい。蓮華文のまわりには太高い 2 本の圓線がめぐり、その外側の周縁は欠損しているが、上植木廐寺の出土品では無文の周縁が

第9表 軒先瓦の分類番号

軒丸瓦

	大分類	小分類	小計	合計
単弁	A 4葉	0 蓮子1	5	23
		1 蓮子1+4	7	
		2 蓮子1+5	1	
		3 その他	10	
	B 5葉	0 蓮子1	4	22
		1 蓮子1+4	7	
		2 蓮子1+5	10	
		3 その他	1	
	C 6葉		5	
	D 7葉		2	
	E 8葉	0 間野谷・上植木系	1	12
		1 弁が()の形	9	
		2 その他	2	
複弁	F 9葉		1	
	G 10葉		0	
	H 11葉~		2	
	I 4葉		1	
	J 6・7葉		2	
その他	K 8葉		2	
	L その他		0	
	M		6	
合計			78	

軒平瓦

	大分類	小分類	小計	合計
N 重弧・重廓文				19
NH 範	3 三重	7	7	7
	4 四重	1		
	5 五重	10		
NT 手描き	3 三重	4	4	4
	4 四重	7		
	NR ロクロ	3 三重	10	8
P 唐草文	0 右偏行	12		
	1 左偏行	7		
	2 均整	6		
	3 その他・方向不明	8		
Q 飛雲文				1
R 流水文				3
S 縞杉文				2
T 格子文	0 範	5	8	8
	1 手描き	3		
	2 命き	0		
U 銀歛・波状文	0 範	1	7	7
	1 手描き	6		
V 連珠文				4
W 植物文				1
Y (欠番)				
Z その他				9
合計				87

巡っている。裏面は無絞りの布目が残るため、縦置き型一本作りによって製作されていると思われる。布目には折り目がある。

同範と思われるものは上植木庵寺から出土しているが、ここでも出土しているのは小破片であり、文様の全形は分からぬ(G03、須田022)。なお、ここで括弧内に表記した番号は、上植木庵寺における型式番号で、前は出浦崇「新屋敷遺跡・上植木庵寺周辺遺跡Ⅱ・上植木庵寺」(伊勢崎市教育委員会2009)により、後は須田茂「上植木庵寺跡の軒瓦の型式分類」(『伊勢崎市史研究』3、1985)によるものである。分かりやすいように、須田氏の番号は須田○○と記した。以下上植木庵寺の出土瓦に言及する場合は同様に表記する。上植木庵寺における出土数は、出浦氏の集計では軒丸瓦446点中8点であり数は少ない。その他同範と思われるものは向平遺跡(高崎市吉井町多比良)、縁野寺跡(浄法寺遺跡・高崎市浄法寺)でも表採されているが、現物の照合はしていない。

生産窯は不明であるが、文様の系統から須田氏は多野窯跡群系(吉井支群系)ととらえている。これは本書で言う吉井・藤岡窯跡群の吉井側にあたる。

T005 (第215図2、本文では第109図16に掲載)

格子文様の軒平瓦である。回廊南西隅に位置する38-2トレンチの瓦廃棄層から出土している。格子は細かく不鮮明で、方向が不規則になっている部分がある。あるいは範を2度押ししているのかもしれない。周縁はやや広く無文で、表面はヨコケズリで平坦にされている。はっきりとした段顎があり、粘土を貼り付けて作っている。凹面には粗い布目が残り、模骨痕は見られないので一枚作りと思われる。他遺跡での同範品の存在は確認できていない。

Z009 (第215図3、本文では第38図13に掲載)

中門北側に位置する36-4トレンチ拡張区1北から1点出土したものである。軒平瓦であり、右端部の小破片であるが、同範品と思われるものが表採

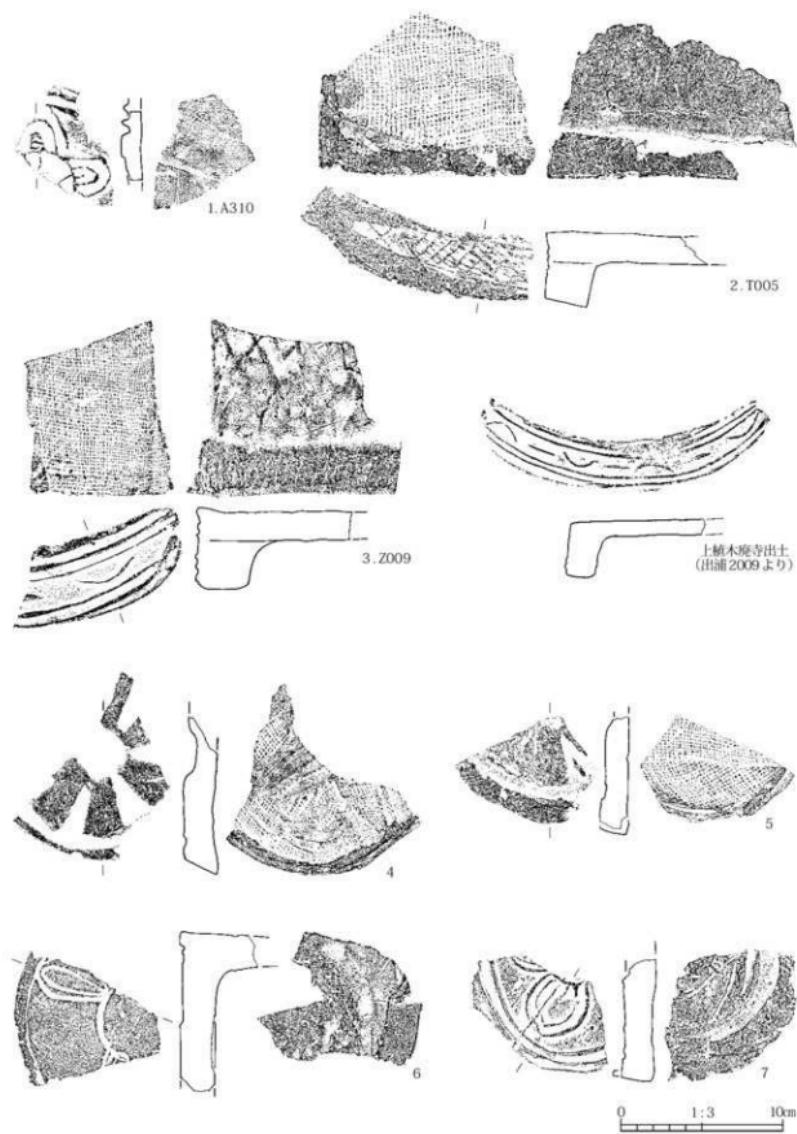
されているほか、上植木庵寺から出土している(U01、須田511)ので文様の全形が分かる。内区の文様は、4本の括弧形と3本の直線とが交互に配されるもので、括弧形は交互に上下逆転している。その周囲の界線は、上下は2本、左右は1本であるらしい。その外側には幅の狭い無文の周縁が巡る部分もあるが、文様と瓦の曲率が一致していないので、文様が切れているようになっているものが多い。顎は段顎で粘土を貼り付けて作り出している。平瓦凹面には粗い布目が残り、模骨痕は見られないで一枚作りと思われる。凸面は格子叩き目が残る。

特徴的な文様をもつ瓦であるが、ここで用いられている括弧形のモチーフは、軒丸瓦ではA001、A004、B004の弁間文として現れる。このうちA001とB004とは上植木庵寺でも出土し、それぞれF07(須田017)、G01(須田020)とされているものであり、これらがZ009とセットになる可能性が高いと思われる。

生産窯は不明であるが、須田氏は、やはり上植木庵寺から出土するB003(F08、須田019)がB004の退化型式と考えられ、それが笠懸窯跡群山際窯跡から表採されていることから、山際窯跡系とされている。

単弁7~8葉蓮華文軒丸瓦(第215図4・5、本文では第52図16と第55図39に掲載)

蓮華文の軒丸瓦であるが、同範と思われる破片が2点出土しているものの弁の数も確定できないため分類番号を決定できないものである。4は回廊南東隅に位置する36-4号トレンチS66-E55から、5は東面回廊南部に位置する37-2トレンチS53-E50のいずれも表土から出土している。非常に退化した蓮華文で、角張った7~8葉の蓮弁がやや不規則に配され、中房部分は四角く凹んでいるだけである。5の個体には、下向きの蓮弁の右側に弁間文の可能性のあるくさび形の凸線があるが、これが文様の一部かどうかは不明である。周縁は低く無文である。断面図に見るように、瓦当下半部の側面は瓦当



第215図 新范種の軒先瓦

面と直角をなしておらず、裏面に向かってやや広がる形態になっている。瓦当裏面には無絞りの布目が残り、縱置き型一本作りであると思われるが、裏面周縁の突帯はごく低い。4の個体は瓦当裏面の布目を粗くナデ消している。

他遺跡での同范品の出土は確認されていない。

單弁 4 葉蓮華文軒丸瓦(第 215 図 6、本文では第 30 図 6 に掲載)

蓮華文の軒丸瓦である。39-4 トレンチ SD10 から 1 点のみ出土している。文様はすべて細い沈線で表されているので極めて平坦な印象を与えるものである。小さな破片なので確実ではないが、單弁 4 葉蓮華文であると思われる。中房を表す圓線と蓮華文の外側の界線は手書きのようにもみえるので、蓮弁のみをスタンプして施文している可能性もある。弁間にうっすらと蓮弁らしい痕跡がみえるが、これが何なのかは不明である。丸瓦凹面から瓦当裏面はナデによって技法の痕跡が消されているため製作技法は確定しにくいが、瓦当裏面周縁部には突帯が巡り、断面でも丸瓦の接合痕などは観察できないため、縱置き型一本作りの可能性が高い。

他遺跡での同范品の出土は確認されていない。

單弁 4・5 葉蓮華文軒丸瓦(第 215 図 7、本文では第 175 図 18 に掲載)

蓮華文の軒丸瓦である。單弁 4 葉か 5 葉であると思われるが、中房も残っていないため分類番号を確定できないものである。40-8 トレンチ S90-E110 から 1 点のみ出土している。蓮弁の形は上野国分寺に通有の子葉をもつ二重蓮弁であり、花文のまわりの圓線は 1 本で、その外側は一段高くなり外側がさらに直立して細く無文の周縁となる。弁間にへラ先を押しつけたような跡が付くが、これが文様の一部として意識的に付けたものなのかどうかは分からぬ。瓦当の中央には大きな範傷が横断している。瓦当裏面は全面円周方向のナデであるが、周縁部は突帯状に高まっており、縱置き型一本作りによって

いる可能性が高い。

他遺跡での同范品の出土は確認されていない。

③注意すべき軒先瓦

その他、第 1 期調査では小破片しか出土しなかつた范種のなかで、今回良好な残存状況のものが出土した范種がいくつかある。それらは、拓本・実測図は再掲載しないが、軒丸瓦には B002(第 116 図 2)、B209(第 75 図 24)、C002(第 85 図 17)、軒平瓦には NT301(第 154 図 1)、Z001(第 89 図 32)があり、これによって文様の全形が分かり、技法などについてもより詳しいことを把握することができた。以下、特に新見が得られたものについてのみ記述する。

B002(第 116 図 2)は單弁 5 葉蓮華文軒丸瓦であり、立体的な蓮弁をもち上野国内でも異色の文様の瓦である。第 1 期調査の際は小破片 7 点のみの出土であったが今回文様の全体が分かる破片が出土した。丸瓦とその先の周縁部が欠損している。丸瓦の接合は、瓦当裏面に深く溝を掘り丸瓦を差し込んでいる。丸瓦先端凹面には何ら加工を加えていないようだが、凸面の加工の有無は不明である。丸瓦凹面側の接合粘土は少なく、円周方向に撫でつけて接合している。瓦当部の側面には範の端の圧痕が残っているので、範は周縁の外側にまでかかる形態であったらしい。

C002(第 85 図 17)は單弁 6 葉蓮華文軒丸瓦である。第 1 期調査の際はごく小さな破片 3 点のみの出土であった。花文は一段低くなったところに二重蓮弁が表されている。蓮華文と周縁との間は幅のやや広い沈線が巡るが、これは範ではなく手描きによっている。製作技法は瓦当裏面に無絞りの布目が残り、突帯もあることから縱置き型一本作りであるが、この個体の布目は非常に細かいので注目される。あるいは麻布ではなく綿布を用いているのであろうか。しかも、この布目には直線状の縫い目があるのと、使用している布は、筒状にした布の先端を縫い合わせて袋状にしていることが分かる。上野国に見

られる縦置き型一本作り軒丸瓦の中で、模骨にかぶせる布を、このように縫い合わせて袋状にしている例は非常に珍しい。このような工夫が一過性のものなのか、他にも見られる継続的なものなのかは、他の遺跡を含めてさらに検討が必要である。

Z001(第89図32)は平瓦部も含めてほぼ完形品が出土した。第1期調査の際は小破片のみが出土したため、参考資料として表採品の拓本を『報告書』本文に掲載したが、今回の完形品をみるとその拓本とは文様が異なっている。この表採品の拓本は複数の破片から復元したものらしいが、その復元が間違っていたことが今回の出土品で明らかになったことになる。基本的なモチーフは括弧形を横にしたもので、中央には両方に縦線を入れた上向きの括弧形を置き、その右側には二つの括弧形を上向きに置いている。左側は括弧形に見える部分もあるが、その他は不明瞭な凸線を不規則に入れている。周囲の界線は2本であり、周縁は無文で幅は一定しない。頸は曲線頸である。平瓦部の凹面は一部に粗いタテ指ナデが見られるが、糸切り痕、布目が残り、模骨痕は確認できないので一枚作りだと思われる。この完形品の個体には、凹面の瓦当近くの中央に四角い小さな印が捺されているが、文字は判読できない。

④軒先瓦の出土傾向

軒先瓦は冒頭に述べた通り、軒丸瓦308点、軒平瓦180点が出土した。それらを範種別に分けた内訳は第10表の通りである。これを見ると明らかなように、今回出土した軒先瓦には非常に多くの範種があり、しかもそれぞれの出土数はみな少なく、特に集中する範種が見られないという特徴がある。

軒丸瓦は全出土数308点のうち、範種が特定できて分類番号を付けることができたものは162点であり、新範種であることは明らかだが分類番号が付けられなかったものが4点(3範種)、範種不明のものが142点であった。そのうち、不明を除いたものをみると、わずか166点のうちに、45範種(1範種の中の細分は行わず、新範種3は含む)も含ま

れていて、しかもそれぞれの出土数は見事にばらけている。もっとも多い範種でも、B101の17点しか出土しておらず、それは10.2%を占めるに過ぎない。第1期調査の際はB201とE103が多く、それぞれ22%、16%であったので、今回の集中度がいかに低いか明らかである。しかも、第1期調査の際は、塔跡での両者を合わせると63%を占めるというほどの集中度を見せたが、今回はどの調査区でも瓦の出土数自体が多くないので、どの地区にどの範種が多いという傾向もほとんど把握できなかつた。

軒平瓦では、分類番号を付けることができた112点のうちで41範種も含まれているという状態は軒丸瓦と同様であるが、やや集中度の高いものが2範種だけ存在するという点が異なっている。それはP001、NH301という、第1期調査の際に最も多く出土した範種(第1期調査ではそれぞれ22%、19%)であり、それぞれ18.8%、13.4%を占めている。しかし、やはり第1期の時に比べれば数は少なく、しかも特定の調査区に集中するというわけではないので、全体にばらけているという状況は軒丸瓦と同様と言える。

以上のように、今回の調査では、各地区から出土する軒先瓦がさほど多いわけではなく、しかも集中する範種が見られず、多くの範種が少量ずつ出土している。そのため、今回調査で見つかっている回廊や中門などの建物について、どれが創建期の軒先瓦なのかすら分からぬという状況である。このような状況となった要因としては、今回の調査区が中門・回廊や外郭線を中心としていて、それらは塔・金堂・講堂という中心建物よりも建立が遅れるということに関係しているのであろう(後述)。上野国分寺創建期の瓦生産は、少数の郡が参画した少品種大量生産の体制から、多くの郡が生産に関わった多品種少量生産の体制へと性格が大きく変化すると考えられる(高井佳弘『上野国分寺の創建』『日本律令制の展開』吉川弘文館、2003など)が、それが今回の出土傾向に現れていると考えられるのである。もちろん金

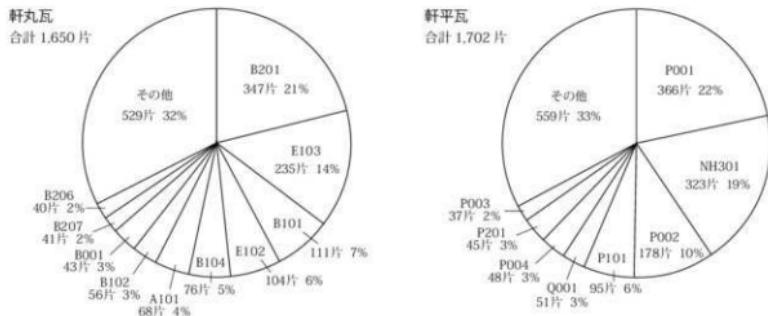
第10表 出土軒先瓦分類番号別集計

軒丸瓦

分類番号	点数	割合 (全体)	割合 (不明除く)	備考
A003	6	1.9%	3.6%	
A004	1	0.3%	0.6%	
A101	12	3.9%	7.2%	
A102	8	2.6%	4.8%	
A103	1	0.3%	0.6%	
A302	3	1.0%	1.8%	
A304	1	0.3%	0.6%	
A310	1	0.3%	0.6%	新范種
B001a	7	2.3%	4.2%	
B002	1	0.3%	0.6%	
B003	4	1.3%	2.4%	
B004	1	0.3%	0.6%	
B101	17	5.5%	10.2%	
B102a	5	1.6%	3.0%	
B103	4	1.3%	2.4%	
B104	12	3.9%	7.2%	
B105	5	1.6%	3.0%	
B201	1	0.3%	0.6%	
B201a	12	3.9%	7.2%	
B202a	1	0.3%	0.6%	
B203	6	1.9%	3.6%	
B204	1	0.3%	0.6%	
B205	1	0.3%	0.6%	
B206	2	0.6%	1.2%	
B206A	1	0.3%	0.6%	
B206B	5	1.6%	3.0%	
B207a	6	1.9%	3.6%	
B207b	3	1.0%	1.8%	
B209	2	0.6%	1.2%	
B301	1	0.3%	0.6%	
C001	2	0.6%	1.2%	
C002	5	1.6%	3.0%	
C003A	4	1.3%	2.4%	
C003B	1	0.3%	0.6%	
C004	3	1.0%	1.8%	
D001	1	0.3%	0.6%	
E001	1	0.3%	0.6%	
E102	2	0.6%	1.2%	
E103	3	1.0%	1.8%	
E109	3	1.0%	1.8%	
E201	1	0.3%	0.6%	
E202	1	0.3%	0.6%	
F001	1	0.3%	0.6%	
J002	1	0.3%	0.6%	
M001	1	0.3%	0.6%	
M002	1	0.3%	0.6%	
新范種	4	1.3%	2.4%	
不明	142	46.1%		
合計	308	100%	100%	

軒平瓦

分類番号	点数	割合 (全体)	割合 (不明除く)	備考
NH301	15	8.3%	13.4%	
NH302	2	1.1%	1.8%	
NH303	1	0.6%	0.9%	
NH304	1	0.6%	0.9%	
NH501	4	2.2%	3.6%	
NR304	1	0.6%	0.9%	
NR306	1	0.6%	0.9%	
NT301	1	0.6%	0.9%	
P001	21	11.7%	18.8%	
P002	3	1.7%	2.7%	
P002B	7	3.9%	6.3%	
P003	3	1.7%	2.7%	
P004	3	1.7%	2.7%	
P005か	4	2.2%	3.6%	
P009	1	0.6%	0.9%	
P008	1	0.6%	0.9%	
P009	1	0.6%	0.9%	
P010	2	1.1%	1.8%	
P102	1	0.6%	0.9%	
P103	1	0.6%	0.9%	
P105	1	0.6%	0.9%	
P107	1	0.6%	0.9%	
P201	4	2.2%	3.6%	
P202	2	1.1%	1.8%	
P203	1	0.6%	0.9%	
P206	1	0.6%	0.9%	
P301	1	0.6%	0.9%	
Q001	4	2.2%	3.6%	
R001	2	1.1%	1.8%	
R002	2	1.1%	1.8%	
R003	1	0.6%	0.9%	
S001	4	2.2%	3.6%	
T005	1	0.6%	0.9%	新范種
T103	1	0.6%	0.9%	
U001	1	0.6%	0.9%	
U101	2	1.1%	1.8%	
V001	2	1.1%	1.8%	
W001	1	0.6%	0.9%	
Z001	4	2.2%	3.6%	
Z006	1	0.6%	0.9%	
Z009	1	0.6%	0.9%	新范種
不明	68	37.8%		
合計	180	100%	100%	



第 216 図 軒先瓦分類番号別の出土比率

堂・南大門も今回の調査区には含まれていたが、金堂はほぼ削平されていたし、南大門は再発掘なので、いずれからも軒先瓦の出土はごくわずかだった。上野国分寺では修造期に多くの範種が修理用に供給され続ける。そのような瓦も今回出土しているので、各時期を通じた多くの範種の瓦が各調査区で出土して、それが多くの範種が少量ずつ出土するという結果になったものと考えられる。

上野国分寺出土軒先瓦の全体の比率は、第 216 図のグラフの通りである。このグラフは第 1 期調査の際の出土数に、今回の出土数を加えたものである。今回の出土数は前述のように全体に少なく、集中するものないので、全体の比率も大きく変わることはなかった。これが上野国分寺の軒先瓦の出土比率として、今後の基準になるものである。

(2) 文字瓦

① 文字瓦の概要

文字瓦は 343 点出土している。文字の入れ方に押印(叩き板に刻まれているものも含む)、ヘラ書き、墨書きが見られ、その内訳は、押印が 118、ヘラ書きが 220、押印+ヘラ書きが 3、墨書きが 2 である。本文では 177 点を掲載した。

② 新出の文字瓦と注意すべき文字瓦

「佐」G 類・H 類(第 217 図 1~3)

「佐」I 文字のみのスタンプは第 1 期調査では 6 種類出土しており、A ~ F 類と呼んでいるが(高井佳弘『上野国分寺跡出土の郡郷名押印文字瓦について』『古代』107、1999)、その後住谷コレクション中からもう 1 種類見つかり、それは G 類と名付けた(杉山秀宏・高井佳弘『住谷コレクション瓦類の基礎調査について』『群馬県立歴史博物館紀要』29、2008)。今回の調査ではその G 類が 2 点出土したほか、さらに新しいものが 2 点見つかったので、それを H 類と名付けて報告する。G 類(文字の部分のみ第 217 図 1・2、瓦の全体は本文第 97 図 61・62 参照)は 2 点とも 36-4 トレンチの瓦廐棄層から、H 類(第 217 図 3)は 36-4 トレンチ拡張区 I 北表土から 1 点出土したほか、小破片で未掲載のものが 36-1 トレンチの堀埋土から出土している。スタンプはいずれも平瓦凸面に捺され、別に格子叩きが打たれるが、H 類の未掲載品のみは小破片のため叩きが不明である。G 類の 2 点はほぼ完形に復元できるため全体が分かり、それによると格子叩きは凸面の中央寄りに 6 力所打たれ、スタンプは狭端側から少し離れた場所に捺されている。この平瓦は凹面に横骨痕がないので一枚作りだと思われるが、2 枚とも全体の大きさ・形、横断面のカーブがよく似ていること、叩きが同一ではなく同じ場所を同じ角度で叩いていることなどから、この 2 枚は同一の凸型台で同一の工人が作った可能性が高いものと考えられる。

ただし、2が凸面の糸切り痕をほぼ完全にナデ消し、凹面も布目をほとんどナデ消すのに対して、1は凹面とも粗く撫でる程度で、凸面には糸切り痕を明瞭に残し、凹面も布目・糸切り痕が残るという点が異なる。そのため、間違いなく同一人物の作と断定するのには躊躇せざるを得ない。スタンプを捺した場所は多少異なるが、同じように斜めに傾いて捺しているのが共通するため、これも同一人物が捺した可能性を指摘することができる。

「佐位」C類(第217図4・5)

「佐位」2文字のものは格子叩きの横に文字を彫っているもので、第1期調査では1種類が出土していたのでこれをA類とし、この他、十三宝塚遺跡などで出土する別種類のものをB類とした(前掲高井1999)。その後住谷コレクションから新種が見いだされたのでこれをC類と呼んだ(前掲杉山・高井2008)が、今回の調査ではこのC類が3点確認された。第217図4は36-4トレンチのS66-E65瓦廃棄層から出土し、5は38-2トレンチW10トレンチ瓦廃棄層から出土している。もう1点は小破片のため未掲載のもので、38-8トレンチS57-E60から出土している。住谷コレクションの中にはこのC類が17点もあったので、なぜ第1期調査で出土しないのか疑問であったが、今回出土したことからこれも国分寺に供給されていたことが改めて確認できた。このC類は文字が左文字である上にかなり乱れた字体であるので格子と紛れやすく、一見文字とは思えない。そのため第1期調査の時には文字瓦と認識できなかつたのであろう。

「多大」(第217図6)

表採品や上野国分僧寺・尼寺中間地域の出土品には知られていた文字瓦である。37-5トレンチS5-E10で小破片1点が出土したほか、さらに残りが悪く未掲載にしたもののが39-4トレンチから出土している。叩き板に文字のみを刻んだものであり、文字は「多」の右横にやや小さく「大」が入る形であるが、

掲載したものは「多」だけで、「大」の部分は欠けている。出土している2点はいずれも平瓦である。意味は不明であるが、地名だとすれば多胡郡に大家郷があるので、そこを表している可能性も考えられる。

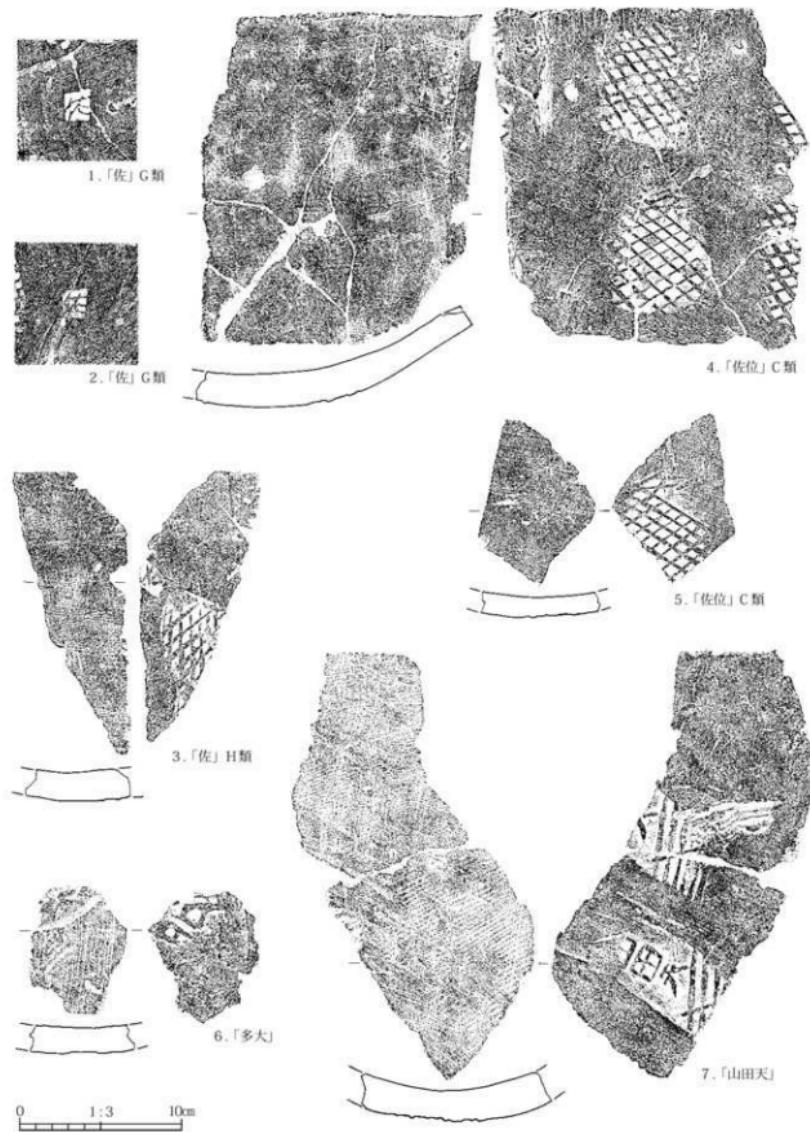
「山田天」(第217図7・第218図1)

これも表採品では知られていた文字瓦である。今回の調査では36-4トレンチのS66-E65の瓦廃棄層から2点出土した。特徴が似ているのであるいは同一個体かもしれない。長細い叩き板の上半分に文字、下半分に斜線を入れたもので、平瓦凸面を複数箇所叩いている。凹面には布目が残るが模骨痕は見られないで一枚作りであろう。山田は山田郡ないし山田郡山田郷を表す可能性があるが、天の意味は不明である。

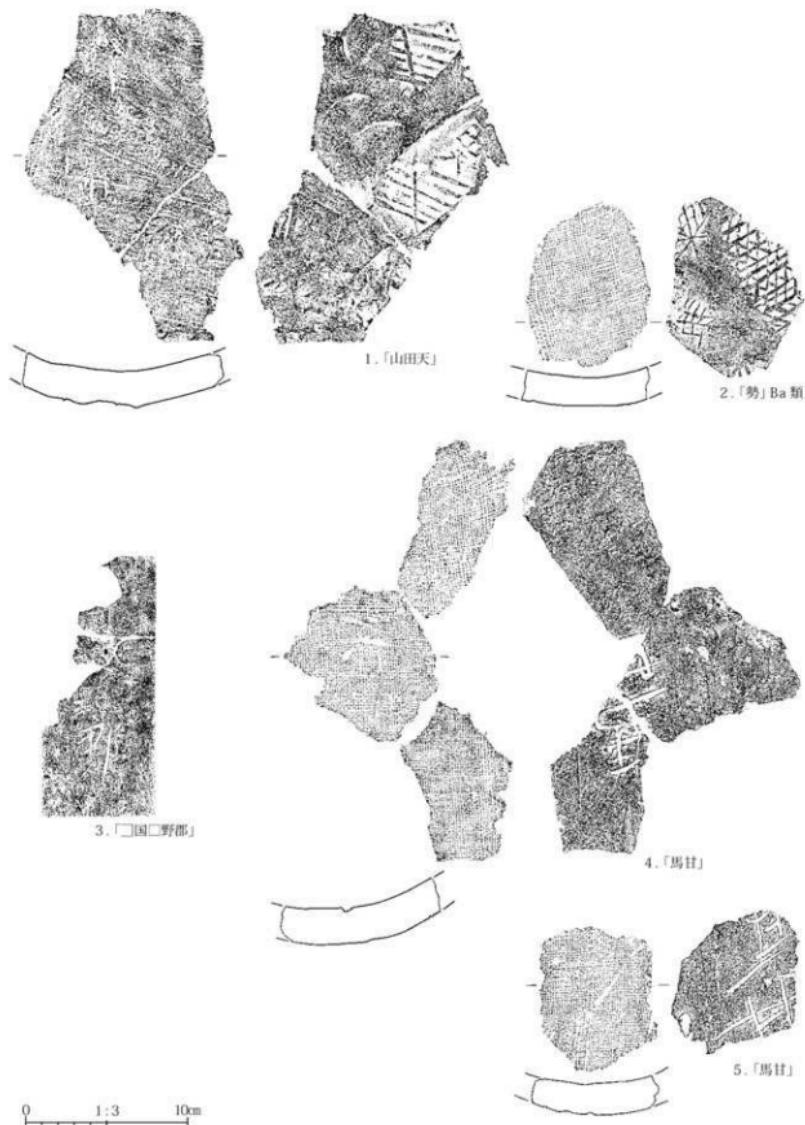
「勢」B a類

「勢」B a類は第1期調査でも出土しているものである(類別については前掲高井1999参照)。「勢」B類と名付けたものは叩き板に文字を刻んだものであるが、文字のみの段階(B a)、文字の上に格子を追刻する段階(B b)があり、B b類は長く使用されて文字がほとんど消えてしまうものもある。文字は陽刻で左文字である。今回の調査ではB a類・B b類とも36-4トレンチで1点ずつ出土しているが、今回出土したB a類(第218図2)は別に叩かれていた格子叩きが今まで知られていたものとは違う種類なので注目される。この叩きはかなり複雑な変形の格子叩きであるが、第1期調査ではこの叩きが「勢(多)」という文字と共に打たれていたのが見つかっている。「勢(多)」にも他に別の叩きが打たれるものがあるので、必ず同じ叩き板を用いているというわけではないが、「勢」B a類と「勢(多)」には同じ叩き板が使用される場合があり、このことから、この两者はかなり近い時期に近い場所で製作されていたということが判明する。

ヘラ書きの文字瓦は、一つの瓦の中に押印とヘラ



第 217 図 新出の文字瓦(1)



第 218 図 新出の文字瓦(2)

書きの両方の文字があるものを含めて 223 点が出土しているが、ほとんどは小破片であり、少しでも判読できるものは半分程度しかない。さらに、判読できた文字のうちの大部分は第 1 期調査で出土例があり、明らかに新出のものは少ない。

「**□国□野郡**」は 36-4 トレンチの瓦廐層から出土した(文字部分のみ第 218 図 3、全体は本文第 91 図 39 参照)。國の上が欠損しているが、残った文字から見て「**上野国綿野郡**」と書かれているのではないかと考えられるものである。丸瓦凸面の最も高い部分の広端近くに、広端側を頭にして縱方向に書いていている。「**上野国綿野郡**」という復元が正しいとすると、上野國の文字瓦では國名+郡名が表記された唯一の文字瓦ということになる。丸瓦は無段式で、凸面の側縁を面取り状にタテケズリするなどの特徴があるが、詳細な時期は不明である。

「馬甘」は表採品で知られているが、第 1 期調査では報告されていない文字である。今回 2 点出土した。

1 点は 36-4 トレンチから(第 218 図 4)、もう 1 点は 40-12 号トレンチの SD25 から出土した(第 218 図 5)。一枚作りの平瓦の凸面中央に大きく文字を書くのを特徴とする。凸面は全面ナデで、叩き目は見えない。同様な文字瓦は前橋市山王庵寺、太田市東矢島庵寺などで出土例がある。

(3) 道具瓦

第 1 期調査の際は軒先瓦と鬼瓦、文字瓦以外の瓦についてはほとんど整理の手が及んでおらず、鬼瓦以外の道具瓦は不明のままであった。今回の調査では数点の鬼瓦以外に、熨斗瓦 3 点(やや疑問のあるものも含む)と隅木蓋瓦と推定される破片 2 点とが出土している。

熨斗瓦はいずれも平成 24 年度調査で出土したもので、出土地点は東辺築垣南付近の 36-2 トレンチ SK111(第 181 図 5)、回廊南東隅外側の 36-4 トレンチ S66-E70 の瓦廐層(第 106 図 91)、同じく回廊南東隅外側の 36-4 トレンチ S66-E65 の瓦廐層(第 105 図 90)である。出土位置から見て

36-2 トレンチのものは築垣用、36-4 トレンチのものは回廊用であろう。3 点とも特徴が異なり、产地・時期が違うものと思われる。第 179 図 5 は凹面に模骨痕があることから桶巻作りによるものと思われ、創建期前半(II-2 期)のものであろう。平瓦の円筒を 5 分割程度にしたものと思われる。第 104 図 91 の個体は整った形をしていること、凸面の叩きが幅の中央に打たれていることの 2 点から、平瓦を分割して製作したのではなく、初めから熨斗瓦として製作したものであると思われる。凹面には糸切り痕、布目が残り、模骨痕が見られないことから一枚作りの成形台で作られたと考えられる。凸面の 2 力所の叩きは「勢」B b 類である。第 103 図 90 の個体は中途半端な形態であるが、平瓦としては幅が狭いので熨斗瓦の可能性が高いと判断した。凹面には模骨痕はなく、一枚作りであると思われる。形はかなり歪んでいる。凸面の側縁近くには「平」のへら書きがある。

隅木蓋瓦はいずれも小破片で詳細は明らかにしがたい。

(4) 第 2 期調査における出土瓦の問題

今回の調査で出土した瓦の概要・特徴は以上である。次にそれらの成果から考えられる問題点 2 点について述べる。

①創建期の瓦

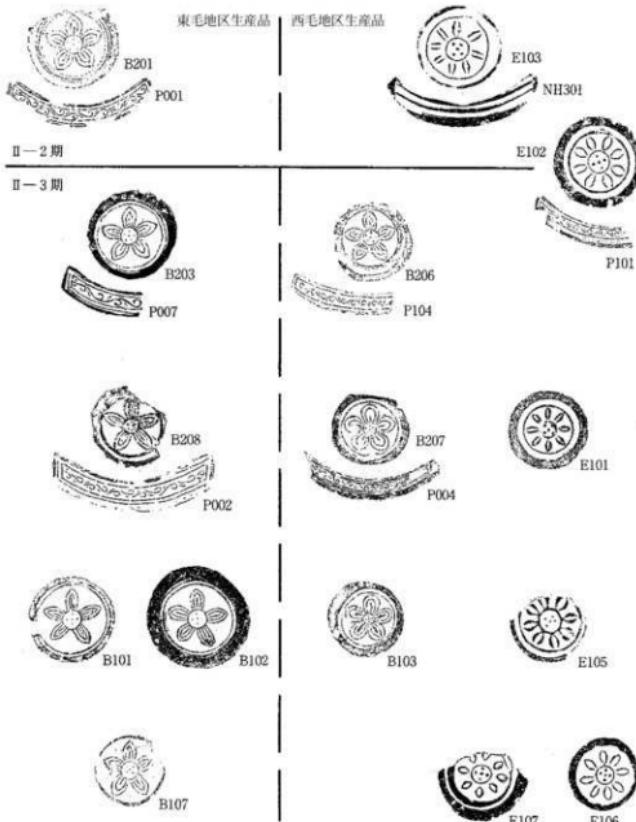
今回の調査の最も大きな成果のひとつは、金堂・回廊・中門の発見であり、それにより從来金堂と思われていた建物跡が講堂であると判明したことである。これにより、創建期の瓦の理解は大きく変更せざるを得なくなった。

創建期(II 期)は 3 つに分けられる。II-1 期は国分寺創建時に在地で操業中だった瓦窯の製品が運び込まれた時期、II-2 期は国分寺向けの大量生産が開始された時期、II-3 期は多くの郡が関わって瓦生産が広がりを見せた時期である(前掲高井 2003)。このうち、II-2・3 期の瓦の変遷は第

219図のように考えている。この相対的な順番は、今回の調査の結果を受けても大きく変える必要はないと考えているが、II-2期からII-3期初めにかけての瓦の評価は、今回の調査成果を受けて改めなければならない点が多く存在する。

まず問題となるのは堂塔の創建順である。第1期調査の際は、まず金堂(現講堂)基壇の築上中から瓦が出土したことから、創建の順序は塔→金堂であると想定した。そして次に金堂・塔の創建瓦は、II-

2期に含めた2種類の組み合わせの出土量が最も多いので、それらが創建期の初期に大量供給された瓦だと考え、塔ではB201-P001、E103-NH301、金堂ではB201-P001の組み合わせが多いことから、それらの瓦が塔・金堂の創建瓦と考えた。ただし、金堂では圧倒的に多いわけではないので、その後に生産された瓦も含めて創建期の屋根を飾ったのだろうとした。上野国分寺の創建期については以上の理解を基礎として多方面から議論が行



第219図 II-2,3期の軒先瓦(高井 2003より、一部修正)

われてきた。ところが、今回の調査では以下の点で大きな変更が生じた。

- ア 金堂と思われていた建物が講堂と判明した。
- イ 金堂基壇築土中から瓦が出土することを根拠に金堂建設以前に既に塔の建設が開始されていたと考えられていたが、金堂が講堂になったことにより、この考えは成り立たなくなってしまった。
- ウ 新たに見つかった金堂跡は完全に削平されていて瓦がほとんど出土しないため、金堂創建瓦が不明となってしまった。

このうちウについては、塔の創建瓦と絡んでかなり複雑な問題がある。というのも、285 ページで述べているように、金堂基壇とその周辺の土は、明治年間に塔基壇南側に運ばれ、それに塔の基壇上部を削った土を合わせて宗教施設の盛土が築かれた可能性が指摘されているのである。この盛土の中には大量の瓦が含まれていたということなので、国分寺の外部から運び込まれた土とは考えにくく、金堂基壇の土であった可能性は極めて高いものと考えられる。しかしそれが正しいとすれば、第 1 期調査時に塔跡とその周辺で出土したとされる瓦は、塔所用の瓦だけではなく金堂所用の瓦も大量に含んでいるということになってしまふのであり、問題は大きい。

とすると、創建期の状況を知るために塔跡出土とされてきた瓦の中から金堂所用瓦を分離しなければならないことになる。これについてまず目を引くのは塔跡の調査、すなわち第 1 期調査の 19・35 次調査の出土軒先瓦の比率である。この 2 回にわたる塔跡の調査では、軒丸瓦 728 点、軒平瓦 821 点が出土し、そのうち軒丸瓦は B201 が 244 点 (34%)、E103 が 210 点 (29%) であり、この 2 種類で 63% を占める。軒平瓦は NH301 が 235 点 (29%)、P001 が 189 点 (23%) で 51% である。つまり第 233 図の II-2 期にあげた 2 つの組み合わせの瓦が大部分なのである。これが塔・金堂の創建瓦と考えて間違いないであろう。とすれば、そのうち金堂の瓦はどれなのであろうか。

その両者の瓦を分ける方法としてまず考え方の

は、瓦の出土分布から分けることはできないかということである。第 1 期調査前の塔基壇と周辺の状況は、上面を削平された塔基壇の南西側に、ほぼ同じ高さの広い土壇が接しているという状態であった。その土壇盛土が、推定の通り、塔基壇上面を削平した土と金堂跡の土とからなっているのだとすると、塔所用の瓦は塔基壇周辺と盛土の内部に多く、金堂所用の瓦は、盛土の内部に多いという傾向を示すであろう。

そこでこの 2 つの組み合わせの出土数を比べてみると、塔基壇を中心とした 19 次調査と土壇盛土を中心とした 35 次調査では以下のようになる。右端の数字は 19 次調査の出土点数を 35 次調査の出土点数で割った数である。これを見ると、どちらが多いとも言えない比率である。

B201	第 19 次 197 点	第 35 次 65 点	3.0
P001	第 19 次 118 点	第 35 次 71 点	1.7
E103	第 19 次 159 点	第 35 次 51 点	3.1
NH301	第 19 次 168 点	第 35 次 67 点	2.5
軒丸瓦全体	第 19 次 520 点	第 35 次 208 点	2.5
軒平瓦全体	第 19 次 548 点	第 35 次 273 点	2.0

そのため、本来は次の段階としてさらに細かく出土地点の分析を試みたいのであるが、それはかなり難しい。というのも、第 1 期調査では遺物を取り上げる際の出土地点の記録方法に一貫した基準がなかったらしく、形や大きさが様々な範囲が無秩序に設定され、それによって瓦の出土地点が記録されている状態であるため、各遺物の出土地点を同一レベルで比較することはほとんど不可能なのである。残念ながら塔地区の出土分布からのこれ以上の追究は、現状では難しいと言わざるを得ない。

ただし、国分寺全域や周辺地域を含めた出土地点の分布傾向からみると、B201-P001 は金堂所用瓦である可能性が高いように思える。

まず E103-NH301 の組み合わせは、塔以外ではほとんど出土しない。第 1 期調査では、E

E103は全232点中210点が塔に集中し、同様にNH301は308点中235点が塔に集中するのであり、ほとんど塔専用の瓦といえるような集中度である。それに対してB201-P001の組み合わせは、塔以外の地区からも数多く出土している。先述のように金堂跡からは瓦そのものがほとんど出土しないが、講堂や、金堂東にある瓦溜まりからはB201-P001が数多く出土しているのである。また、今回の調査も、そのすべての調査区は塔から一定程度離れた場所に設定されたが、B201が13点、P001が21点出土しているのに、E103は3点しか出土していない。NH301は15点出土しているが、これには同范ではないものが含まれている可能性もある。さらに、国分僧寺と尼寺の中間にある、国分僧寺・尼寺中間地域遺跡では、国分寺から運び出された瓦が9世紀以降の堅穴建物から数多く出土するが、それでもB201-P001は数多く出土するのに対して、E103-NH301は数が少ない。中間地域遺跡は国分寺の東に位置するので塔からは遠く、金堂・講堂からは近い。その距離がこの出土数の違いに反映しているのであろう。以上の事実からE103-NH301、特にE103は塔専用の瓦だと考えられるのであり、それを踏まえた上で、塔から出土した瓦の中に金堂用瓦が多く混じっているのが正しいとすれば、それはB201-P001だと考えざるをえない。

このように塔にはE103-NH301の組み合せが葺かれ、金堂にはB201-P001が葺かれていた可能性を考えられる。これまでには創建期の塔に、なぜ文様・技法の異なるこの2つの組み合わせが同時に葺かれていたのかと疑問であったが、上記のことが正しければ、この疑問は氷解することになる。この二つの組み合わせの産地は、E103-NH301が西毛地区の吉井・藤岡窯跡群、B201-P001が東毛地区の笠懸窯跡群と異なっている。このように、建物によって瓦の生産地が異なっていることは、国分寺の造営体制の編成を考える上で非常に興味深い問題を提供すると思われる。ただし、

塔・金堂用瓦については、その出土分布からかなり強引に考えたことであり、あくまでも推定の範囲にとどまるものである。実際19次調査ではかなり下層からもB201とP001が出土しているので、古代からこれらの瓦も塔地区に「あった」ことは確實であり、すべてが明治の時に運び込まれたわけではない。この問題については他にも様々な可能性が考えられるので、今後さらに検討を加え、説の補強を図る必要があると思われる。

②回廊・中門の瓦

今回の調査で発見された回廊の基壇築土中からは、講堂と同様、瓦が出土することが確認された。それは第45図にあげた瓦群であり、そのうち時期などを考える上で注目されるのは軒丸瓦B207であり、それは第219図にあげたように、II-3期に属するものである。このB207はP104と共に吉井・藤岡窯跡群の金山瓦窯で生産されていることが確認されている(坂詰秀一『上野・金山瓦窯跡』藤岡市教育委員会 1966)。この組み合わせは先述のB201-P001の系譜を引くもので、それらの変遷は第219図のようであるが、この瓦の出土によって回廊の創建は少なくともこの瓦よりは新しい時期であることが明らかとなった。つまり回廊の建設は、II-3期の中でも後半に始まったことになる。中門もそれとあまり隔たらない時期に建設されたであろう。この時期は瓦生産が上野各地の瓦窯で行われ、多くの范種の瓦が生産・搬入されていた時期であり、そのため、中門・回廊周辺の瓦には先述のように集中する范種が見られないのだと考えられる。丸・平瓦については、版築土中からも出土が見られ、さらに回廊・中門周辺から数多く出土しているが、詳細な検討は行えていない状態であり、今後の課題とせざるをえない。

6 他国との比較

本節では、関東甲信に所在する国分寺を取り上げ、若干の比較を試みたい。

関東甲信で、上野と同じ興福寺式の伽藍配置を持つ國は下野・常陸・武藏・信濃(第220, 221図)である。この4か國はみな、塔が金堂の前面である南東側に置かれている。下野國分寺は、金堂が桁行86尺・梁行46尺に対し、講堂が桁行70尺・梁行42尺という規模で金堂より講堂が小さく、上野とは明らかに様相が異なっている。武藏國分寺は3町半~4町四方の広大な寺域(伽藍地)を有す。金堂・講堂・鐘樓・經藏・僧坊が、掘立柱(のち築垣)で囲まれており、回廊は存在しない。金堂は桁行122尺・梁行56尺で、全国最大の規模である。信濃國分寺は、中門と講堂が回廊で結ばれ、その中に金堂が配置される。

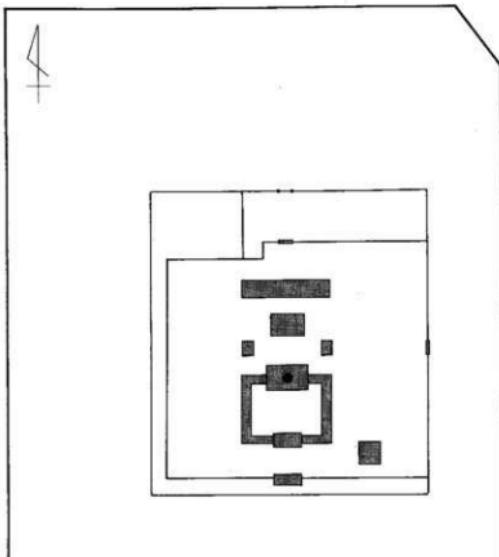
上総・甲斐は大官大寺式である(第222図)。上総國分寺ではA期とB期で画期があり、造営の方位軸が変更されている。甲斐國分寺は、金堂が基壇規模で東西140尺前後・南北75尺と武藏に匹敵する規模である。

相模・下総は、法隆寺式の伽藍配置を持つ(第222図)。相模國分寺は300m四方以上の寺域を有す。金堂は桁行116尺・梁行56尺と大規模だが瓦葺きではなく、塔のみが瓦葺きのようである。下総國分寺は上総と同様、造営に際して方位軸が変更されており、塔と金堂・講堂とで軸が振れている。

伽藍配置を中心見てきたが、国ごとに多様であることが再確認できるとともに、関東甲信には上野と同じ伽藍配置を持つ國分寺が存在しないことが分かる。全国規模で見ると、上野と同様の伽藍配置を持つ國分寺が陸奥・近江・但馬にあり(第223図)、ほかに肥後もそのよう

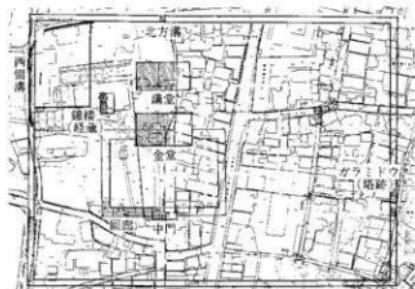
である。特に、同じ東山道に属す陸奥國分寺は塔院を持ち、回廊も複廊となるなどより荘厳であるが、建物の配置計画は上野と酷似している。また、金堂より講堂の規模が大きいことも共通する。上野と陸奥國分寺の造営に関して、何らかの影響関係があつたようにうかがえる。

上野國分寺は、興福寺式伽藍配置であるが塔と金堂が東西に並立すること、金堂より講堂の規模が大きいことから、諸國の國分寺のなかでも古相を示しているように見える。天平勝宝元年(749)の『続日本紀』に、國分寺への知識物献納により上野国内の豪族2氏が叙位された記事があり、これを根拠に上野國分寺は全国でも早い段階で整ったとする見解があるが、それと矛盾しないと考えられる。しかし、より明確に言及するためにはさまざまな面からのアプローチが必要であり、今後、さらに詳細な検討を加えていきたい。



1 下野

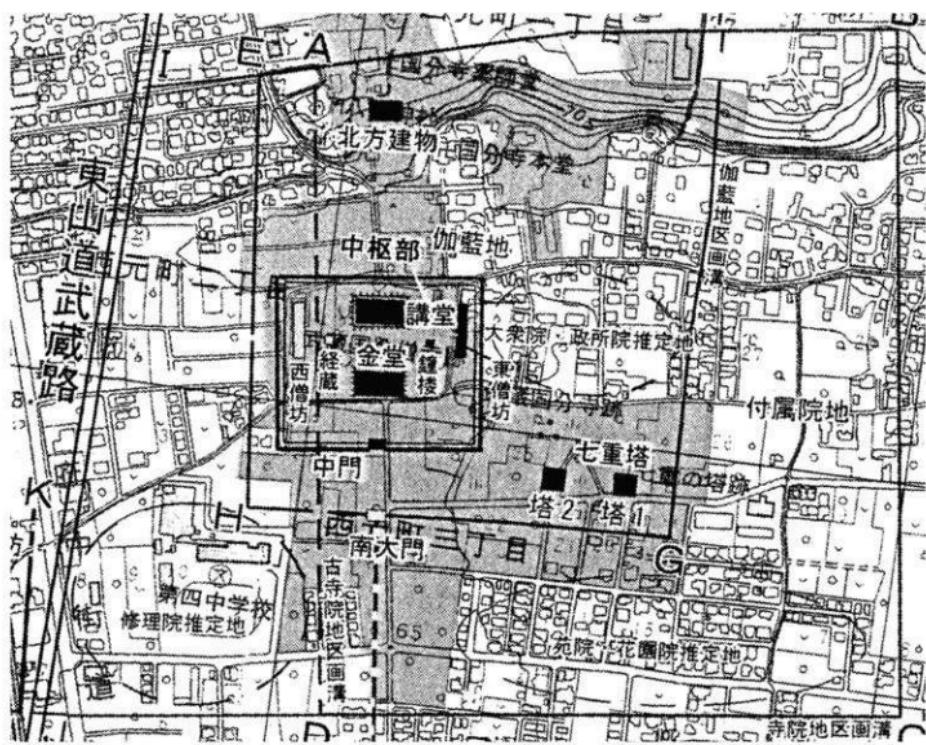
第220図 関東甲信の国分寺(1) (s=1/4000)



2 常陸

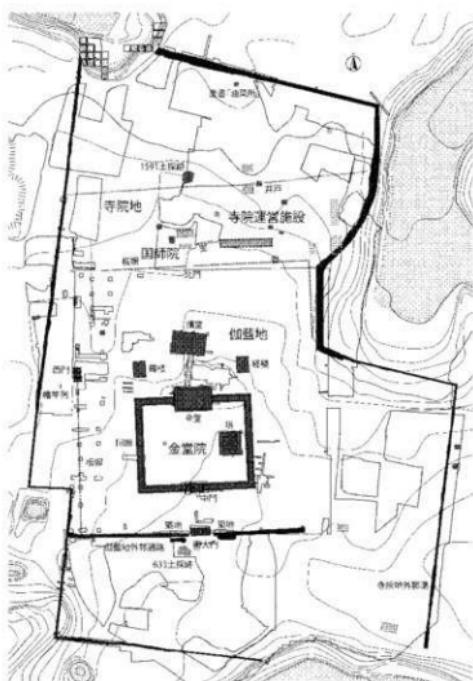


3 信濃



4 武藏

第221図 関東甲信の国分寺(2) (S=1/4000)



5 上総



6 甲斐

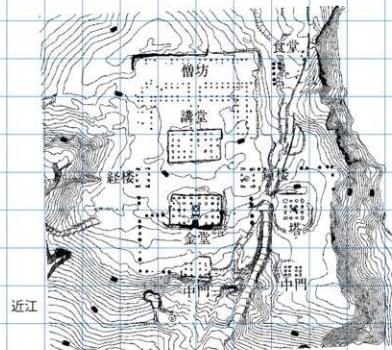
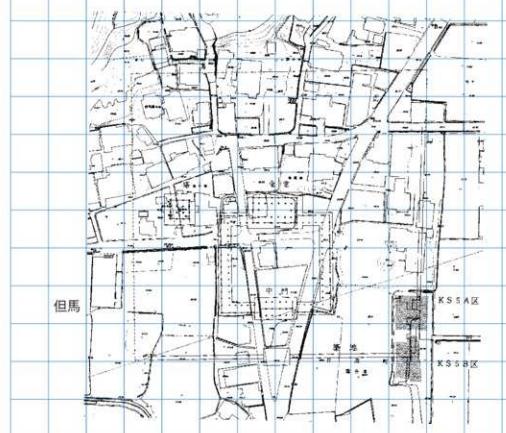
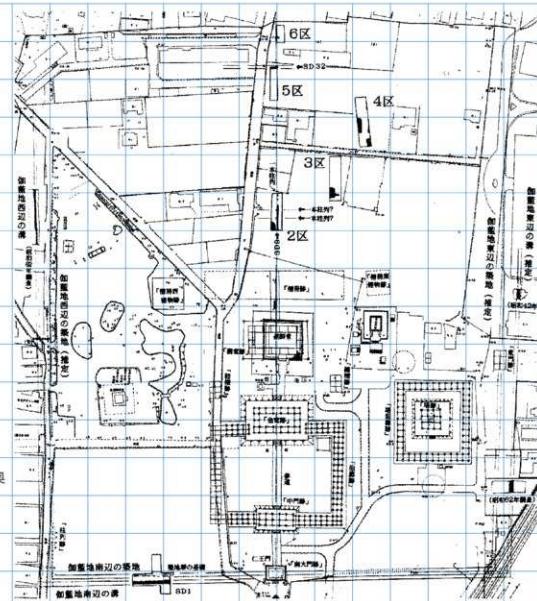
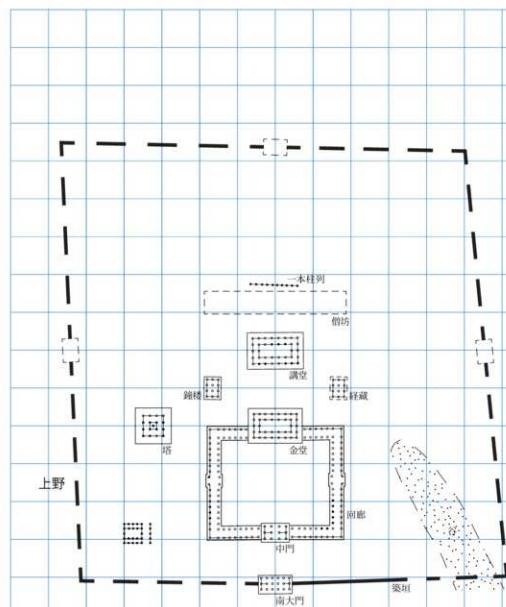


7 下総



8 相模

第222図 関東甲信の国分寺(3) (s=1/4000)



第223図 塔と金堂が並立する伽藍配置となる国分寺の例

0 12000 40m

7 今後の課題

(1) 調査と研究

①全体像の把握

5か年にわたって実施した今回の第2期調査では、これまで不明であった中門・回廊をはじめて確認したほか、本来の金堂を発見するなど、伽藍配置を大きく塗り替える成果を上げることができた。また、鐘楼と考えられる掘立柱建物(SB08)の再確認と前身施設である掘り込み地業の発見や、講堂北側の一本柱列(SA01)の再評価により、創建時の上野国分寺の建物配置が第2期調査以前と比べ、かなり鮮明になったといえるであろう。さらに、寺域南東部には谷地が存在することも分かってきた。外周を廻る築垣の位置も、これまでの検討により新たな案を提示することができた。

しかし、今回の調査では後世の擾乱や深耕が大きな障害となり、確認が不十分となってしまった堂宇もある。例えば、回廊が確認できたとはいえ、構造の基本となる梁間の確実な証拠をとらえることはできなかった。継続的に調査を行い、掘れる箇所はほぼ掘り尽くしてしまった感もあるが、今後に託したい。また、僧坊についても建物の痕跡を確認することはできなかった。講堂の北側は相応のスペースがあり、どのような空間の使われ方をしたのか重要な問題ではあるが、現状では検討の余地がない。寺域南東部には谷地が存在することが確認できたが、調査最終盤で分かったため中途半端に終わってしまった感は否めない。谷地に施した埋土の状況、特に築垣部での状況は一部確認できたものの、全体像を明確にとらえるまでは至っていない。将来的に調査できる機会があれば、解明しておきたい課題である。今回の調査で主要伽藍は概ね解明できたと考えるが、付属施設等さらなる建物配置の解明は課題として残された。

②時期区分の構築

金堂版築土中から瓦の出土が認められなかつたため、塔と金堂のどちらの造営が先行したのかが不明

となった。あるいは瓦の分析(5節)から、西毛地区が塔、東毛地区が金堂というように分担して同時に造営を進めた可能性も考えられる。講堂や回廊は版築土中に瓦が含まれるため、塔・金堂より後の造営である。また、南大門は10世紀代、中門・回廊は11世紀半ば～12世紀初頭には倒壊したと考えられること、築垣を壊して掘られたSD27は10世紀後半までには埋没していることなどが確認できた。しかし、年代的な手がかりはいくつか得られたものの、堂塔の造営順序や建物の変遷といった明確な時期区分はできていない。今後は、瓦や土器の編年を基準とした、より具体的な時期区分を構築する必要がある。

③寺院地の解明

今回は史跡整備を目的とした調査であったため、調査範囲は寺域内に限定されたが、寺院地の解明もまだ手つかずの状態である。Ⅲ章で触れたとおり、寺域の東方では「東院」と墨書きされた土器が出土しており、さらには僧寺尼寺中間地域では方形区画が検出されている。「実録帳」には「大衆院」の記載もあり、そうした管理・運営のための施設がどこにどのような状態で存在したのか、寺院地全体の解明も今後の重要な課題であろう。

④国分尼寺との関係

国分二寺制度として、尼寺の存在を忘れてはならない。国分二寺の造営がどのように進められたのか。現在、高崎市教育委員会による尼寺の確認調査が進められており、いずれ僧寺と尼寺の関係が具体的に見えてくることになるだろう。

⑤全国レベルでの位置づけ

全国に所在する国分寺との比較・検討により、全国レベルから見た上野国分寺の位置づけを行う必要がある。

(2) 保存と活用

①『保存活用計画』の策定

現在、史跡地の100%が公有地化されており、適切に史跡の保存・管理が行われている。しかし、

第1期整備時に『保存管理計画』(現在は『保存活用計画』)が策定されていなかったため、まずは『保存活用計画』の策定が喫緊の課題であり、保存活用の基本方針や現状変更等の取扱い基準等を明文化する必要がある。

②『整備基本計画』の策定・魅力ある史跡整備

『保存活用計画』策定後、再整備のための『整備基本計画』の策定となる。今回の第2期整備着手時は、昭和62年度に策定された『基本設計書』に基づき、中断していた整備事業の完成を目指す計画であったが、伽藍配置や堂塔の構造等が大きく変わったため『基本設計書』をベースにしつつも、新たな整備計画を考えていく必要がある。これまで17回にわたって開催した整備検討委員会は発掘調査の検討が主であったが、今後は整備の方針・方法に向けて舵を切っていくこととなる。委員会のなかで議論を重ね、地元住民と意見交換しながら、誰もが訪れたくなるような上野国分寺の特色を生かした魅力ある史跡整備を目指すことが今後の大きな課題である。



③地元との連携強化

イベントとして、地元NPO法人を中心に運営される4月の「上野国分寺元気になる集い」、地元区長会・上野国分寺遺跡愛好会を中心に運営される10月の「上野国分寺まつり」が定着してきている。特に、「上野国分寺まつり」は200人もの天平衣装行列がまつりの華となっており、多くの来場者を迎える。こうしたイベントは、来場者に「史跡を知ってもらう」「史跡に訪れてもらう」ために非常に有効な手段であり、今後も主催者と連携しながら継続していくことで、史跡を活用できればと考える。

④前橋市・高崎市との連携強化

本史跡の位置する地域は古代上野国を中心地であり、山王庵跡や総社古墳群・上野国府推定地・保渡田古墳群など、周辺には多くの史跡・遺跡が存在する。地元である前橋市・高崎市との連携を強化し、古代上野国を中心とした地域の特色を生かした史跡の魅力を県民のみならず、全国に発信していくいかなければならない。



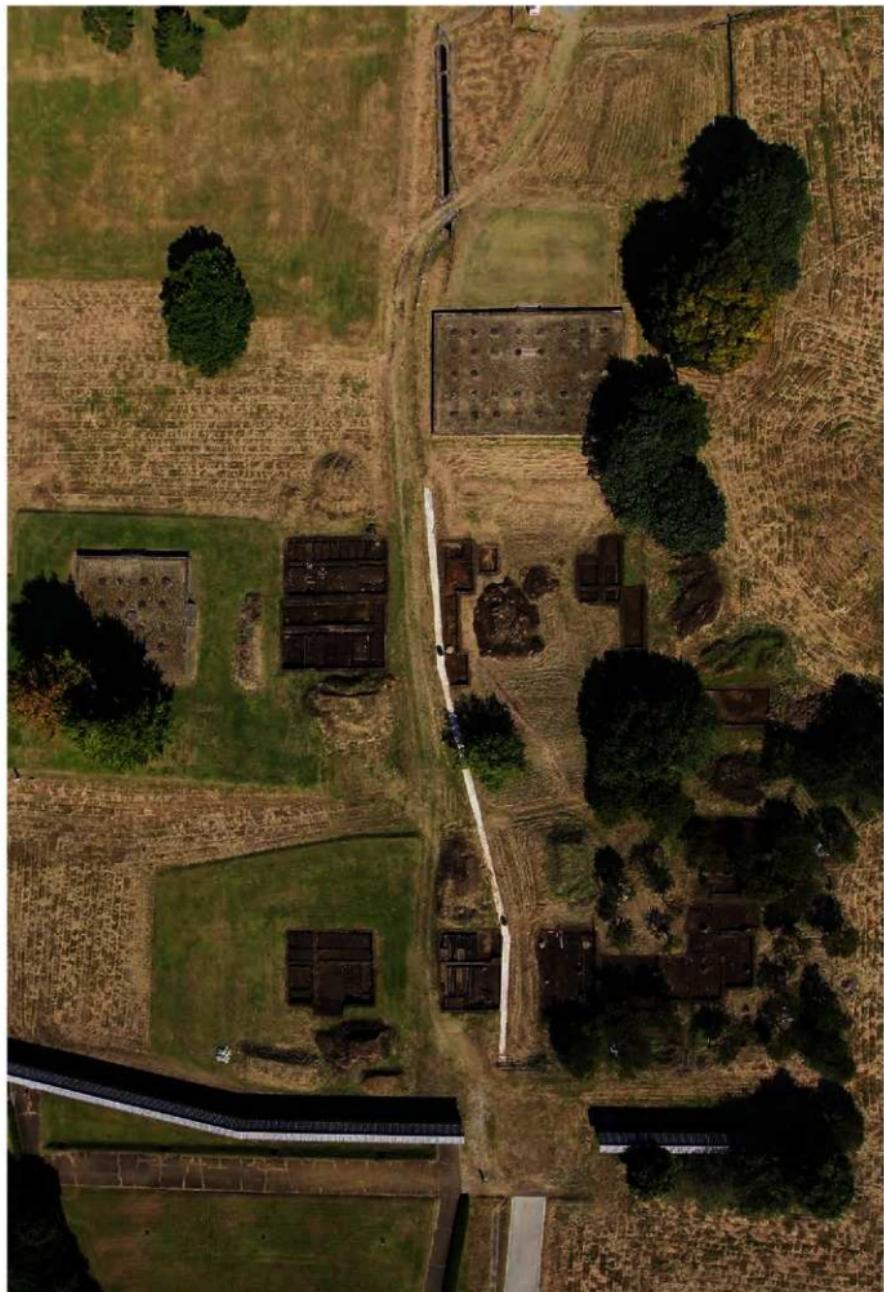
第224図 上野国分寺元気になる集い・上野国分寺まつりのチラシ

参考文献

- 福島武雄 「上野国国分寺址考」『上毛及上毛人』第53号 1921
- 宮地直一 「上野の国分寺に就いて(上)」『史蹟名勝天然紀念物』第1集第2号 1926a
- 宮地直一 「上野の国分寺に就いて(下)」『史蹟名勝天然紀念物』第1集第3号 1926b
- 内務省 「埼玉茨城群馬三県下に於ける指定史蹟」 1927
- 群馬県 「群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告」第1集 1929
- 相川龍雄 「上野国分寺」『国分寺の研究』 1938
- 太田静六他 「上野国分寺伽藍の研究」『建築学会論文集』第27号 1942
- 太田静六 「上野国分寺伽藍の諸性質(上)」『史蹟名勝天然紀念物』第18集第8号 1943a
- 太田静六 「上野国分寺伽藍の諸性質(下)」『史蹟名勝天然紀念物』第18集第9号 1943b
- 尾崎喜左雄 「上野国上代寺院に関する一考察」『史学会会報』3号 1949
- 堀井三友 「上野国分寺址」「国分寺址之研究」 1956
- 石田茂作 「東大寺と国分寺」至文堂 1959
- (財)河北文化事業団 「陸奥国分寺跡」 1961
- 群馬県教育委員会 「上野国分寺跡発掘調査報告書」 1970
- 群馬県教育委員会 「上野国分寺周辺地域発掘調査報告—僧寺尼寺中間地域の考古学検討—」 1971
- 尾崎喜左雄 「上野国分寺」「前橋市史」第1巻 1971
- 群馬町教育委員会 「群馬町埋蔵文化財調査報告」第1集 1975
- 群馬県教育委員会 「史跡上野国分寺跡—寺域確認発掘調査概要—」 1981
- 日高町教育委員会 「但馬国分寺木簡」 1981
- 群馬県教育委員会 「史跡上野国分寺跡発掘調査概要2」 1982
- 群馬県教育委員会 「史跡上野国分寺跡整備基本計画」 1983
- 群馬県教育委員会 「史跡上野国分寺跡発掘調査概要3」 1983
- 群馬県教育委員会 「史跡上野国分寺跡発掘調査概要4」 1984
- 群馬県教育委員会 「史跡上野国分寺跡発掘調査概要5」 1985
- 群馬県 「群馬県史」資料編4 原始古代4 1985
- 須田 茂 「上植木庵寺跡の軒瓦の型式分類」『伊勢崎市史研究』3 1985
- 群馬県教育委員会 「史跡上野国分寺跡発掘調査概要6」 1986
- 関口功一 「上野国分寺金堂基壇中出土瓦について」『東国史論』第1号 1986
- 群馬県教育委員会 「史跡上野国分寺跡発掘調査概要7」 1987
- 群馬県教育委員会 「史跡上野国分寺跡整備基本設計書」 1988
- 群馬県教育委員会 「史跡上野国分寺跡発掘調査概要8」 1988
- 群馬県教育委員会 「史跡上野国分寺跡発掘調査報告書」 1989
- 群馬県 「群馬県史」通史編1 原始古代1 1990
- 群馬県 「群馬県史」通史編2 原始古代2 1991
- 群馬県教育委員会 「上野国分尼寺跡・上野国分二寺中間地域」 1993
- 群馬県教育委員会 「史跡上野国分寺跡保存整備事業報告書—史跡等活用特別事業—」 1994
- 上田市立信濃国分寺資料館 「東国の国分寺」 1995
- 市立市川考古博物館 「下総国分寺」 1995
- 飯島義雄 「上野国分寺における地蔵被害跡の認識とその歴史的意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第17号 1996
- 木津博明 「上野国分寺」「聖武天皇と国分寺」関東古瓦研究会 1998
- 関東古瓦研究会 「聖武天皇と国分寺」 1998
- 上田市立信濃国分寺資料館 「解説 信濃国分寺跡」 1998

- 狩野久編『古代を考える 古代寺院』 1999
高井佳弘「上野国分寺跡出土の郡郷名押印文字瓦について」『古代』107 1999
杉山秀宏・高井佳弘「住谷コレクション瓦類の基礎調査について」『群馬県立歴史博物館紀要』第29号 2008
桜岡正信・関口功一「古代寺院の付属施設に関する一考察」『群馬考古学手帳』11 2001
高井佳弘「上野国分寺の創建」『日本律令制の展開』吉川弘文館 2003
栃木県教育委員会『下野国分寺—発掘二十五年の成果—』 2007
福田信夫『鎮護国家の大伽藍・武藏国分寺』シリーズ「遺跡を学ぶ」052 新泉社 2008
市原市教育委員会『発掘いちはらの遺跡』 2010
前澤和之「国分寺と「上野国交替実録帳」」『国分寺の創建』思想・制度編 2011
須田勉・佐藤信編『国分寺の創建』思想・制度編 吉川弘文館 2011
高井佳弘「上野・下野・信濃国分寺の創建期の瓦生産」「国分寺の創建」組織・技術編 2013
須田勉・佐藤信編『国分寺の創建』組織・技術編 吉川弘文館 2013
文化庁文化財部記念物課「発掘調査のてびき」各種遺跡調査編 同成社 2013
飯島義雄「上野国分寺南辺築垣の走向の検討」『群馬文化』第320号 2014
須田勉編「特集 王權擁護の寺・国分寺」『季刊考古学』第129号 雄山閣 2014
須田 勉『国分寺の誕生』 吉川弘文館 2016
群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡第2期発掘調査概報』 2016
出浦 崇「上野国佐位郡正倉跡の調査成果」「発掘された古代の役所」合同遺跡報告会資料集 2017

写 真 図 版



1. 平成26年度調査区全景(上空から、上が北)

PL.2



1. 平成27年度調査区全景(上空から、上が北)



1. 寺域俯瞰(南上空から)



2. 寺域俯瞰(南西上空から)



1. 金堂全景(上空から、上が北)



2. 金堂北東角の掘り込み地業(南から)



1. 金堂・金堂前庭部全景(上空から、上が北)



2. 38-7トレンチ金堂振り込み地業の北縁(南から)



3. 金堂の版築層(東から)



1. 金堂北東角の掘り込み地業（北から）



2. 落とし込まれた金堂の礎石（西から）



3. 同左検出状況(南から)



4. 金堂前底部全景(南から)



5. 金堂前底部第1期調査の根石状遺構(西から)



1. 金堂前庭部 S B 1 3-P 2 全景(南から)



2. 金堂前庭部 S B 1 3-P 3 全景(南から)



3. 金堂前庭部 S B 1 3-P 4 全景(東から)



4. 金堂前庭部 S B 1 3-P 5 全景(東から)



5. 中門東半から回廊南東部、南大門全景(上空から、上が北)



1. 中門全景(上空から、上が北)



2. 中門全景(南上空から)



1. 墓斜面に落ち込む中門の礎石(西から)



2. 中門と回廊の取付き部全景(南から)



1. 回廊南東部全景(上空から、上が北)



2. 回廊南東部の根石列(北から)



1. 回廊南東部根石 1 全景(北東から)



2. 回廊南東部根石 2 全景(北東から)



3. 回廊南東部根石 3 全景(南から)



4. 回廊南東部根石 4 全景(北西から)



5. 回廊南東部根石 5 全景(西から)



6. 37-2トレンチ抜取り痕 1 全景(北から)



7. 回廊南東部石組 1 全景(東から)



8. 回廊南東部石組 2 全景(東から)



1. 南面回廊東版築層(北から)



2. 36-4トレンチ拡張区2南東隅の礎石(北西から)



3. 南面回廊東版築土中から出土した軒丸瓦(北から)



4. 36-4トレンチ拡張区2北 東面回廊西縁立ち上がり(南から)



5. 37-2トレンチ(東面回廊南部)版築層(南東から)



6. 38-5トレンチ全景(東面回廊南部)全景(西から)



7. 38-4トレンチ(東面回廊北部)全景(西から)



8. 39-6トレンチ(回廊北東角部)全景(上空から、上が北)



1. 39-7トレンチ(西面回廊南部)全景(上空から、上が南)



2. 39-7トレンチ(西面回廊南部)根石列全景(南から)



1. 西面回廊根石 1 全景(北から)



2. 西面回廊根石 2 全景(南から)



3. 西面回廊抜取り痕全景



4. 同左北西側断面(南から)



5. 39-8トレーナ(西面回廊)全景(東から)



6. 西面回廊門の根石全景(南から)



7. 6の北西側断面(北西から)



8. 38-2トレーナ(回廊南西角)全景(南から)



1. 37-6トレンチ(西面回廊)全景(西から)



2. 同左北壁版築層(南西から)



3. 40-5トレンチ(西面回廊)全景(北から)



4. 37-4トレンチ全景(北から)



5. 伽藍中心部俯瞰(西上空から)



1. 回廊北西角全景(南上空から)



2. 塔跡から回廊北西角を望む(西上空から)



1. 38-3トレンチ西面回廊版築層(南西から)



2. 38-3トレンチ西面～北面回廊版築層(南西から)



3. 37-5トレンチ第1期調査の根石状遺構(南から)



4. 37-5トレンチ南西部の瓦出土状況(南東から)



5. 36-4トレンチ東面回廊東方の瓦廃棄層(西から)



6. 中門南西部の瓦廃棄層(南から)



7. 36-4トレンチ拡張区1南、版築を壊す瓦廃棄坑(南から)



8. 南面回廊Cライン瓦廃棄層断面(北西から)



1. 稲載・鐘楼西地区全景(南上空から)



2. S B O 8 全景(南から)



1. 経蔵・鐘楼西地区全景(西上空から)



2. 挖り込み地盤北端断面層(西から)



3. SB08-P1全景



4. SB08-P1断面



5. SB08-P2全景



6. SB08-P2断面



7. SB08-P3全景



8. SB08-P3断面



1. S B O 8-P 4 全景



2. S B O 8-P 5 全景



3. S B O 8-P 6 全景



4. S B O 8-P 6 断面



5. S B O 8-P 7 全景



6. S B O 8-P 8 全景



7. S B O 8-P 8 断面



8. S B O 8-P 9 全景



1. 39-5トレンチ(経蔵・鐘楼東地区)全景(西から)



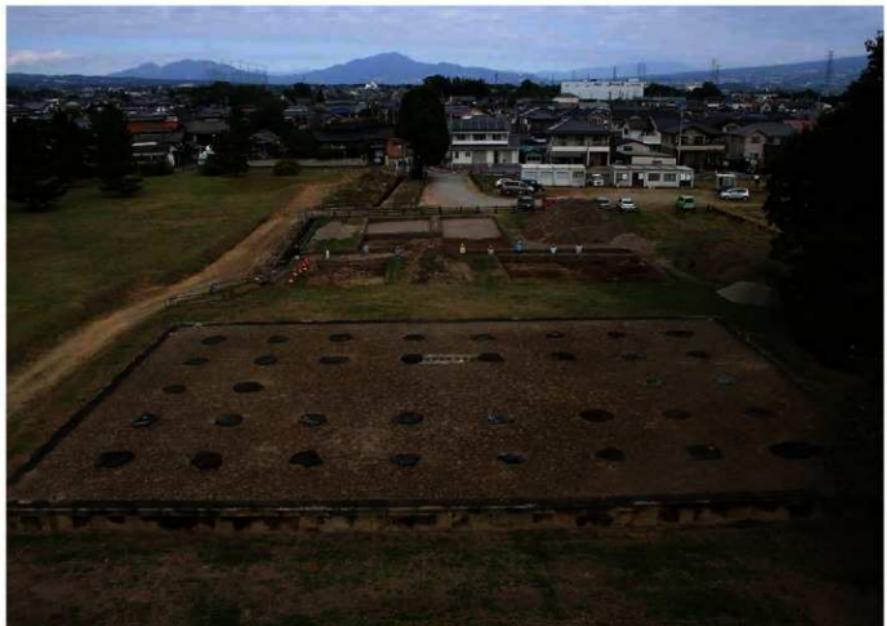
2. 37-3トレンチ(経蔵・鐘楼東地区)全景(東から)



3. 旧講堂・僧坊地区全景(上空から、上が北)



1. SA01 全景(南上空から)



2. SA01 の柱穴位置(人の立つ位置) (南上空から)



1. SA 01 全景(西から)



2. SA 01 全景(東から)



3. SA 01-P 1 全景(北から)



4. SA 01-P 2 全景(北から)



5. SA 01-P 3 全景(南から)



6. SA 01-P 4 全景(南から)



1. SAO1-P5 全景(南から)



2. SAO1-P6 全景(南から)



3. SAO1-P7 全景(南から)



4. SAO1-P8 全景(南から)



5. SAO1-P9 全景(南から)



6. SAO1-P10 全景(南から)



7. 旧講堂据付穴P1 全景(南から)



8. 旧講堂据付穴P2 全景(南から)



1. 旧講堂据付穴 P 3 全景(西から)



2. 40-2トレンチ(僧坊地区)全景(南から)



3. 40-3トレンチ(僧坊地区)全景(西から)



4. 39-2トレンチ(僧坊地区)全景(南東から)



5. 南大門全景(上空から、上が北)



1. 南大門全景(南から)



2. 南大門全景(南西から)



1. 南大門礎石3と石列(南東から)



2. 同上(東から)



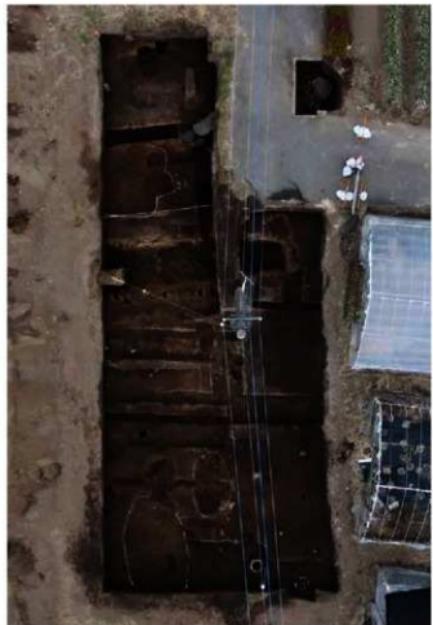
3. 南大門断面(北西から)



4. 40-10トレンチ(南大門前面)全景(南から)



5. 同左断面(北東から)



1. 東大門地区全景(上空から、上が北)



2. 東大門礎石1全景(南東から)



3. 東大門礎石2全景(南から)



4. 瓦組遺構検出状況(北から)



5. 瓦組遺構断面(西から)



6. 40-7トレチ(東大門南地区)全景(南から)



7. 40-1トレチ(西大門地区)全景(南から)



1. 40-12トレンチ(南辺築垣地区)全景(東から)



2. 40-12トレンチ拡張区築垣検出状況(西から)



1. SA04 全景(上空から、上が南)



2. SA04 全景(東から)



1. S A 0 4-P 1 全景(南から)



2. 築垣版築層下から検出された P 1(東から)



3. S A 0 4-P 2 全景(南から)



4. S A 0 4-P 2 断面(東から)



5. S A 0 4-P 3 全景(南から)



6. S A 0 4-P 4 全景(南から)



7. S A 0 4-P 5 全景(南から)



8. S A 0 4-P 6 全景(南から)



1. 40-12トレ拭張区築垣版築層とSD27断面(南東から)



2. 同左(北東から)



3. 40-12トレ拭張区築垣版築層(東から)



4. 40-12トレンチSD27断面(北東から)



5. 40-12トレンチSA04-P2とSD27断面(東から)



6. 36-3トレンチ(南辺築垣地区)全景(北から)



7. 6の南辺築垣想定位置(東から)



8. 40-8南トレンチ(南辺築垣地区)全景(南から)



1. 40-9トレンチ(築垣南東角地区)全景(南上空から)



2. 同上SD 27 II層除去状況(南西から)



3. 同上西壁断面(南東から)



4. 3の版薬状土層(南東から)



5. SD 28断面(南から)



1. 36-2トレンチ(東辺塁垣地区)全景(西から)



2. 40-11トレンチ(北辺塁垣地区)全景(南から)



3. 40-8北トレンチ(寺域南東部)全景(北から)



4. 同左・硬化面検出状況(北西から)



5. 同上・II層下造成土断面(東から)



6. 40-13西トレンチ(寺域南東部)全景(西から)



7. 40-13東トレンチ(寺域南東部)全景(東から)



8. 同左・S T 7 8 検出状況(北から)



1. 40-6トレンチ(寺城北東部)全景(西から)



2. 40-6トレンチ(寺城北東部)全景(東から)



3. 梵鐘鑄造土坑全景(東から)



4. 梵鐘鑄造土坑全景(南東から)



5. 小鍛治遺構全景(西から)



6. 36-4トレンチ堀(S D O 2)全景(北西から)



7. 36-6トレンチS D 2 0 全景(西から)



8. 39-5トレンチS D 2 1 断面(南から)



1. 39-6トレンチSD11全景(南から)



2. 39-4トレンチSD10断面(西から)



3. 39-8トレンチSD10断面(西から)



4. 40-1トレンチSD22・SD23全景(西から)



5. 40-8北トレンチSD24全景(東から)



6. 40-13西トレンチSD25全景(北から)



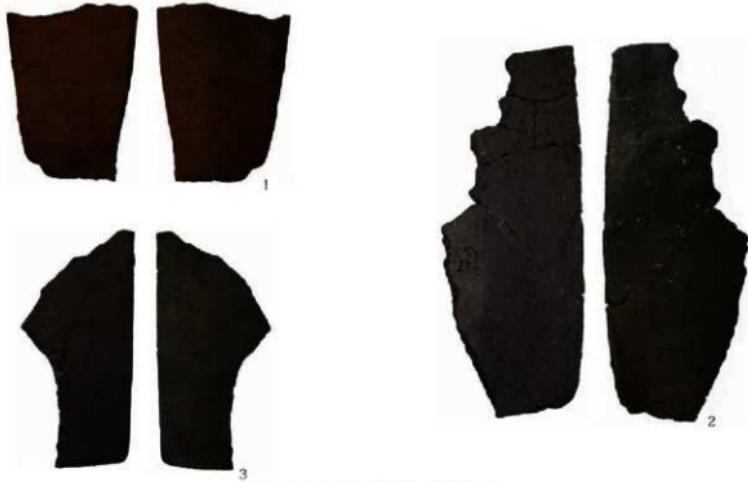
7. 40-12トレンチSD25全景(北から)



8. 作業風景



金堂地区出土遺物



中門及び布掘り地業版築土出土遺物(1)



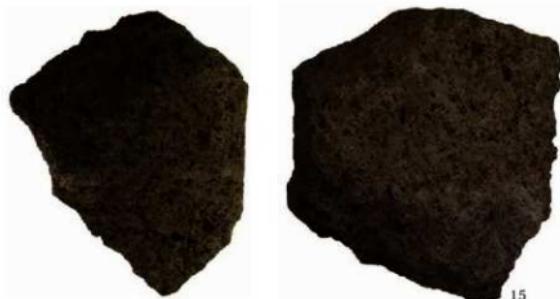
中門及び布堀り地業版築土出土遺物(2)



中門及び周辺2層出土遺物(1)



中門及び周辺2層出土物(2)



15



16

中門及び周辺2層出土遺物(3)



1



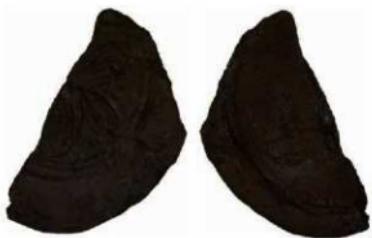
2



3



4



5



6

中門及び周辺表土出土遺物(1)



中門及び周辺表土出土物(2)



中門及び周辺表土出土遺物(3)



回廊南東部版塗土出土遺物(1)



回廊南東部版築土(2)、2層出土遺物

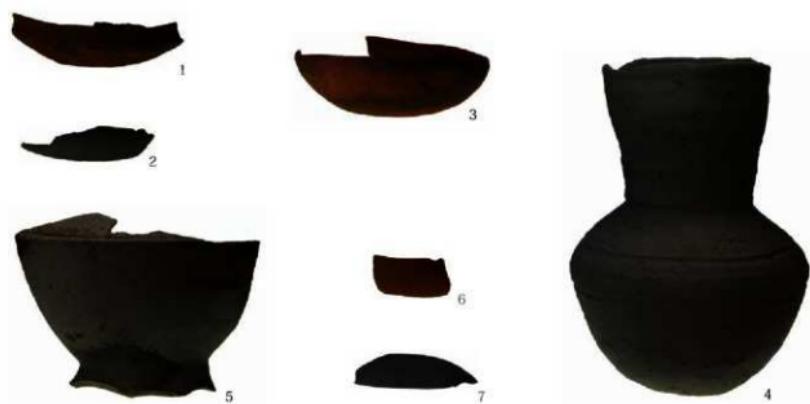


根石・抜取り痕出土遺物(1)





根石・抜取り痕出土遺物(3)



36-4トレンチ竪穴建物出土遺物(1)



8



9

36-4トレンチ壁穴建物出土遺物(2)



1



2



3



4



5



6

7



8



9



10



11

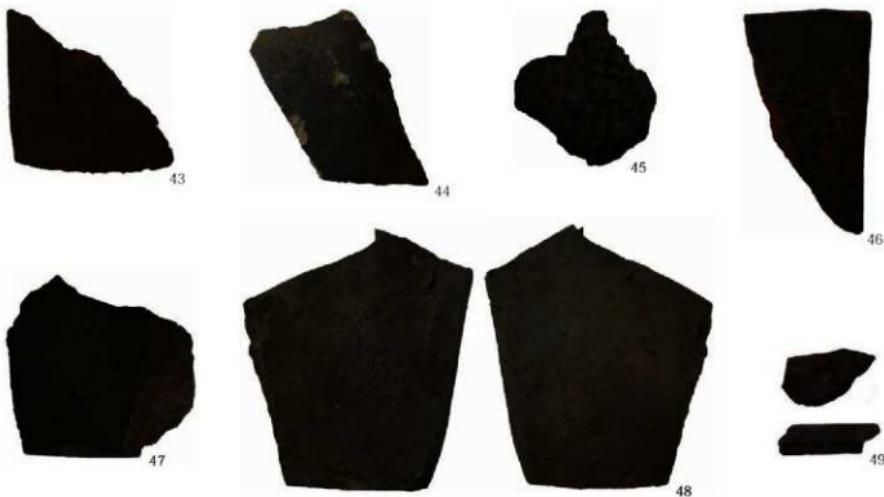
回廊南東部表土出土遺物(1)



回廊南東部表土出土遺物(2)



回廊南東部表土出土遺物(3)



回廊南東部表土出土遺物(4)



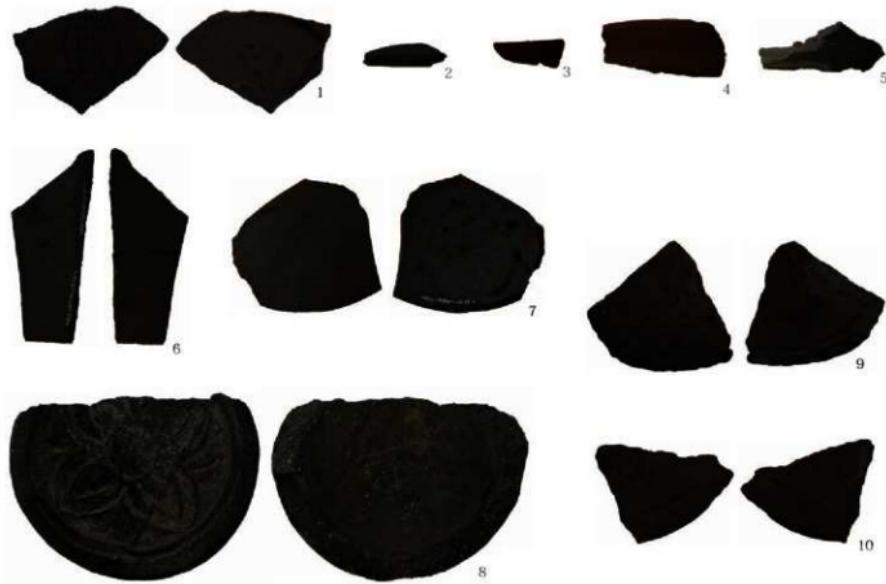
38-5トレンチ出土遺物



回廊北東部出土遺物(1)



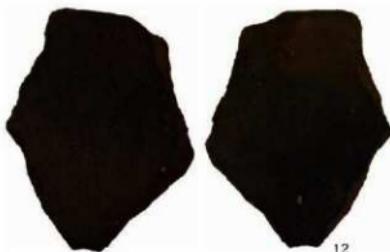
回廊北東部出土遺物(2)



回廊南西部出土遺物(1)



11



12



13



14



15

16

回廊南西部出土遺物(2)



1



2



3



4



5



6



7



8



9

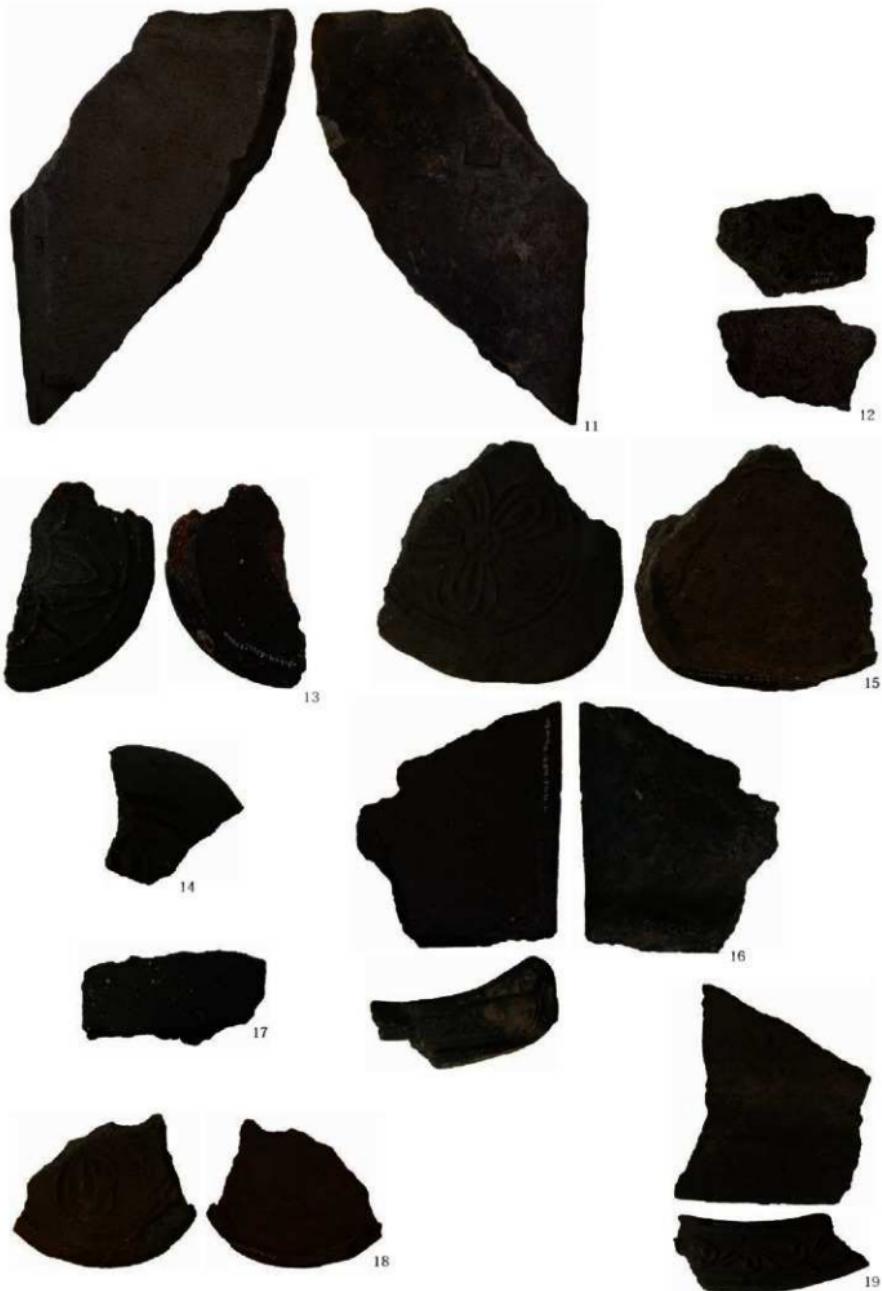


10

回廊北西部出土遺物



回廊南東部瓦窯窯坑出土遺物(1)



回廊南東部瓦窯窯坑出土遺物(2)



20



21



22



23



24



25



回廊南東部瓦窯窯坑出土遺物(4)



38



39



40



瓦廢棄屑出土遺物(1) (中門周辺1)



瓦廐棄屑出土遺物(2)(中門周辺2)



瓦甕棄層出土遺物(3)(回廊南東部1)



16



17



18



19



20



21



22



23



24



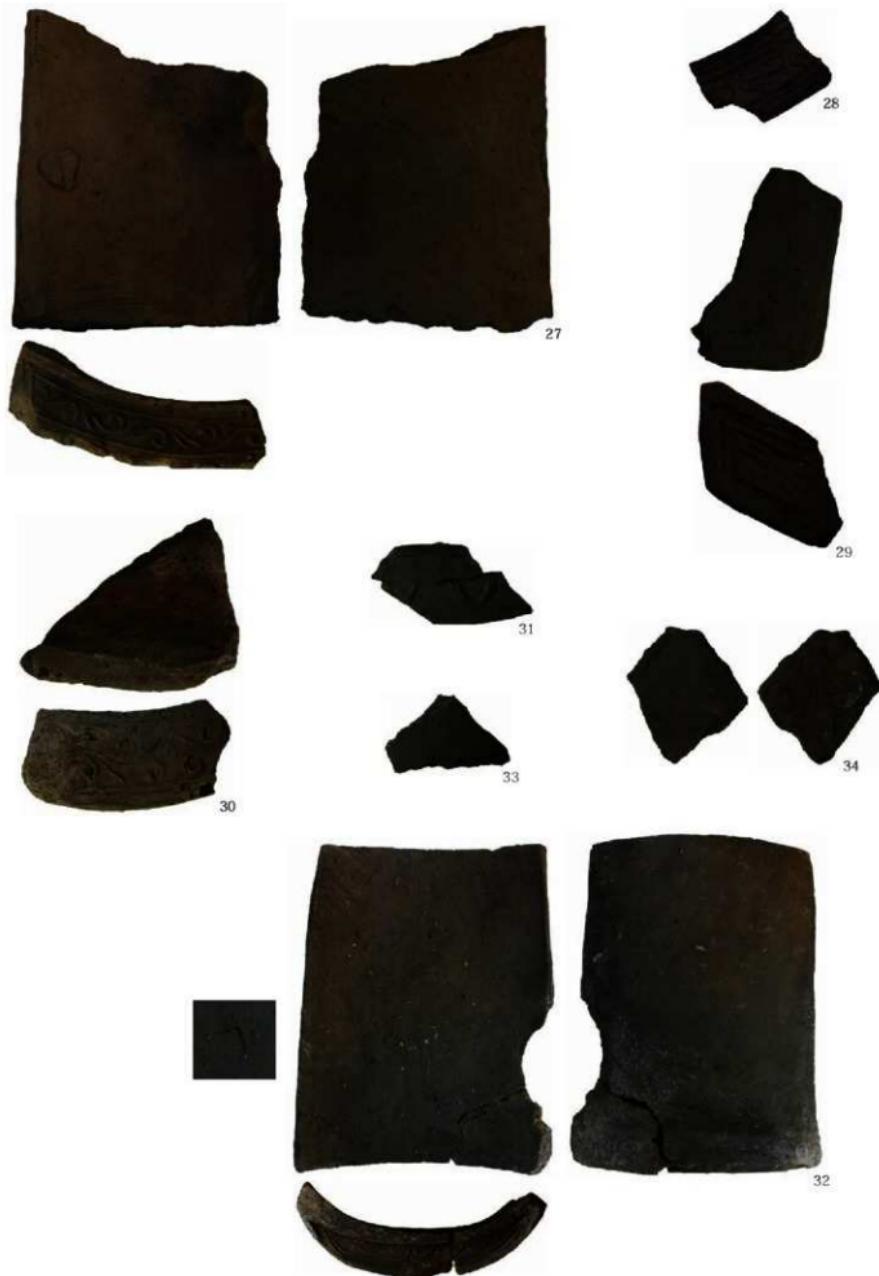
25



26



瓦甕棄層出土遺物(5)(回廊南東部3)



瓦甕棄層出土遺物(6)(回廊南東部4)



37



38



39

瓦甕棄層出土遺物(7)(回廊南東部5)



41



42

43



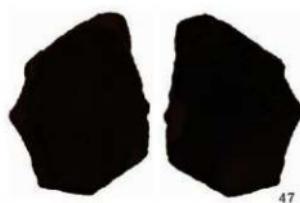
44



45



46



47



50



48



49



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60







瓦甕甌層出土遺物(12) (回廊南東部10)



77



79



78



80



81



82



83



84



85

瓦甕甌屑出土遺物(14) (回廊南東部12)



86



87



88

瓦窯棗層出土遺物(15) (回廊南東部13)



89



90



91



92



94



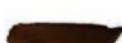
95



96



98



99



97



100

瓦甕甌屑出土遺物(16) (回廊南東部14)



瓦甕棄層出土遺物(17) (回廊南西部 1)



15



16



17

瓦甕棄層出土遺物(18) (回廊南西部 2)



18



瓦甕棄層出土遺物(19) (回廊南西部 3)



瓦廢棄層出土遺物(20) (回廊南西部 4、北西部 1)



瓦廐棄層出土遺物(21) (回廊北西部 2)



37-5トレンチ瓦集中出土遺物(1)



5



4



7



8



6



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21

37-5トレンチ瓦集中出土遺物(4)



22



23



24



25



26



27

37-5トレンチ瓦集中出土遺物(6)



1



2



3



4



5

37-5トレンチ出土遺物(1)



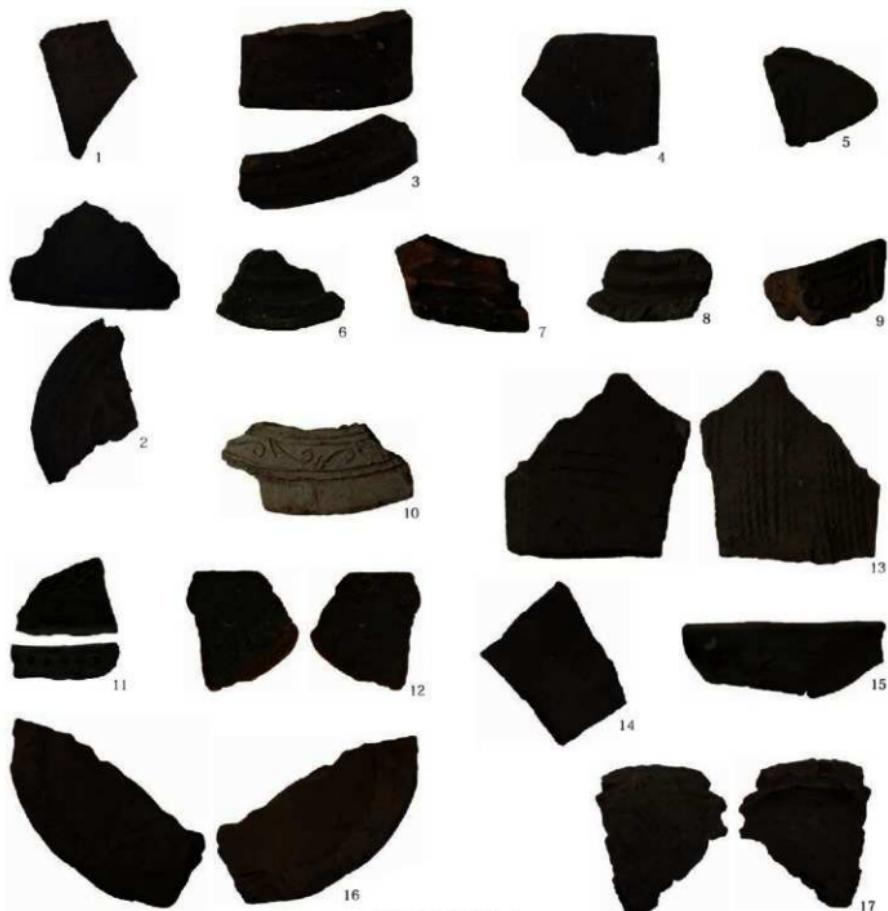
37-5トレンチ出土遺物(2)



37-5トレンチ出土遺物(3)



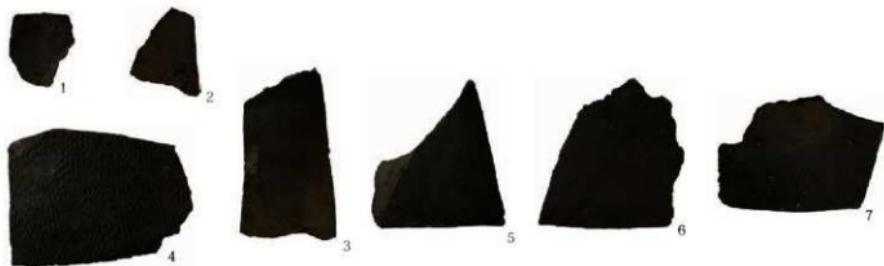
経藏・鐘楼東地区出土遺物



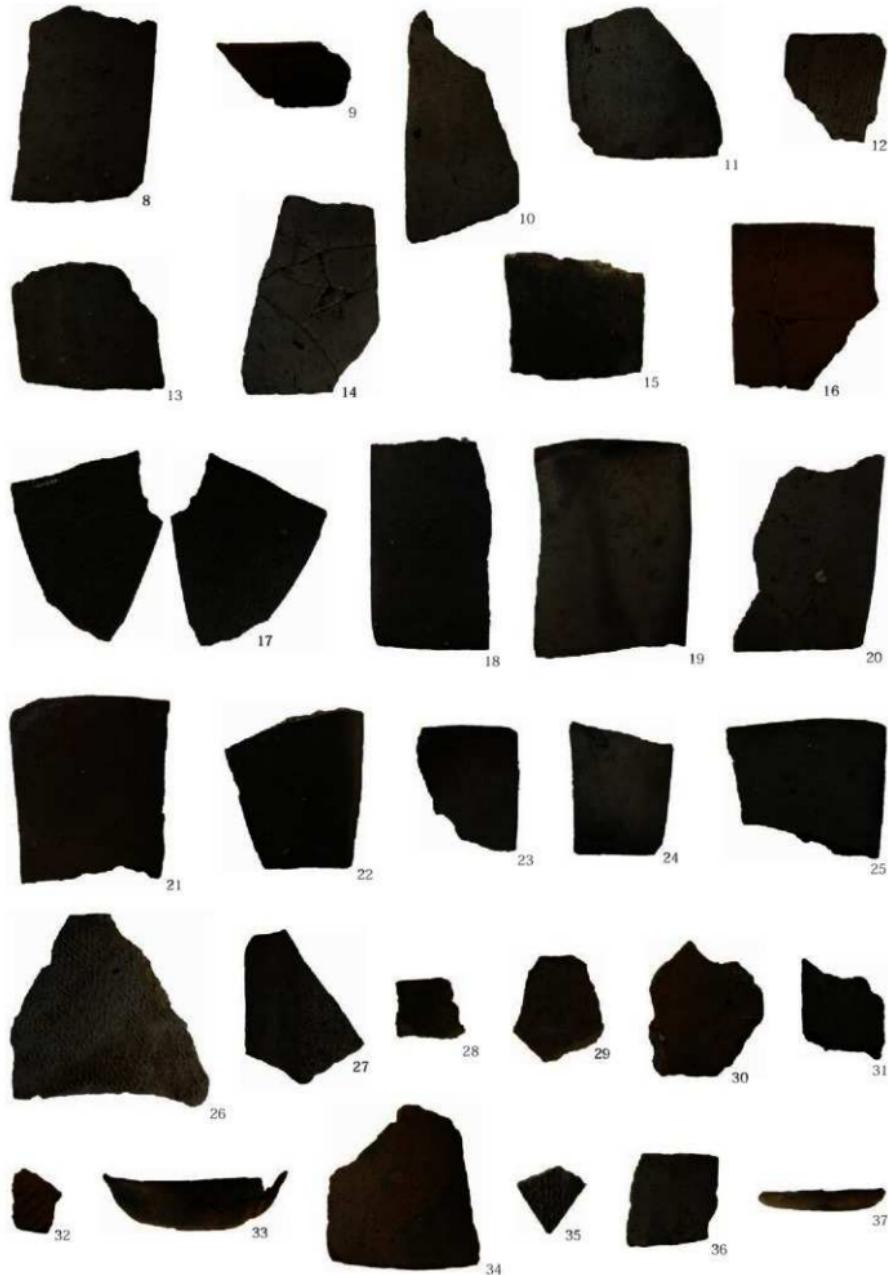
僧坊地区出土遺物(1)



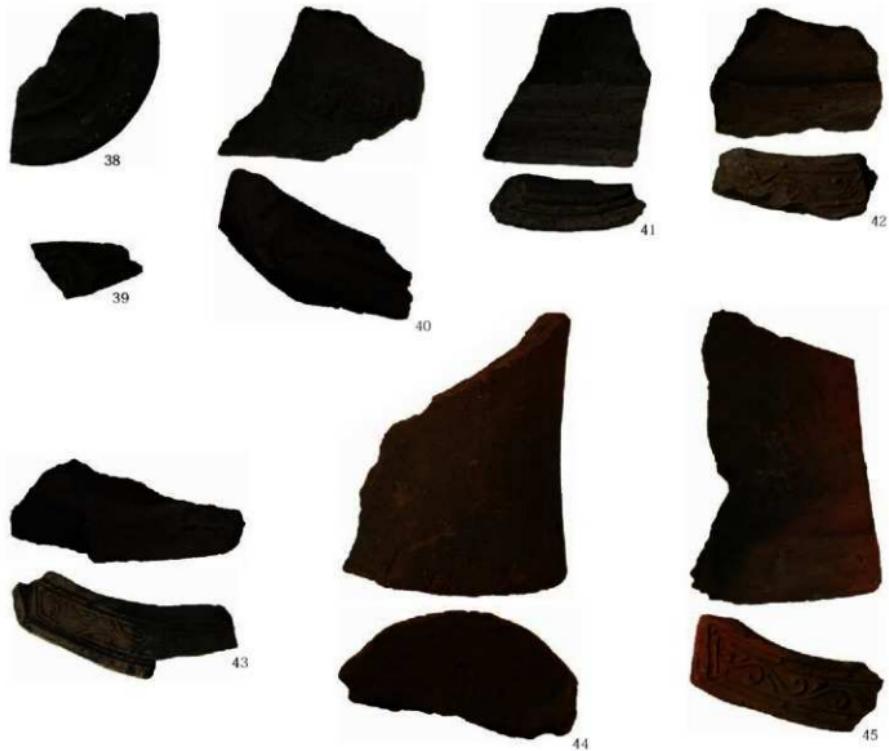
僧坊地区出土遗物(2)



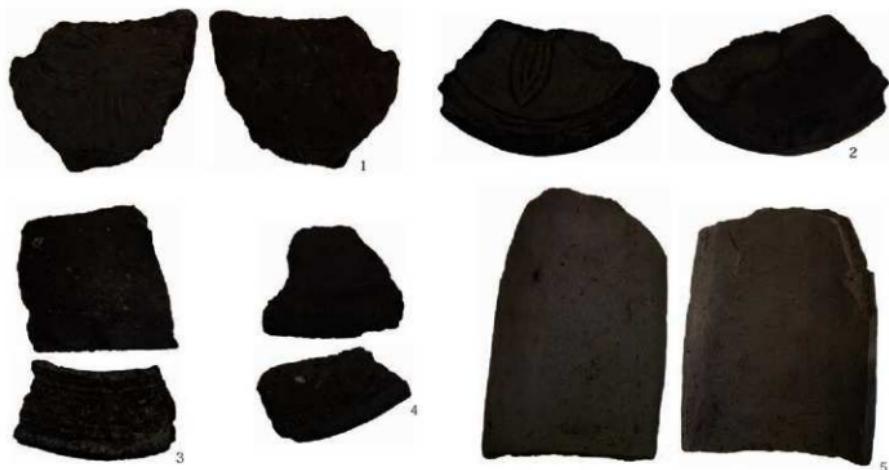
南大門地区出土遗物(1)



南大門地区出土遺物(2)



南大門地区出土遺物(3)



南大門前面出土遺物(1)



6



7

南大門前面出土遺物(2)



赤外線写真(加工済)

1

東大門地区瓦組遺構の瓦(1)



2



3



4



5



6

東大門地区瓦組遺構の瓦(2)と出土遺物



東大門地区 S D 2 6 出土遺物(1)



東大門地区 S D 2 6 出土遺物(2)



8



9



10



11



12



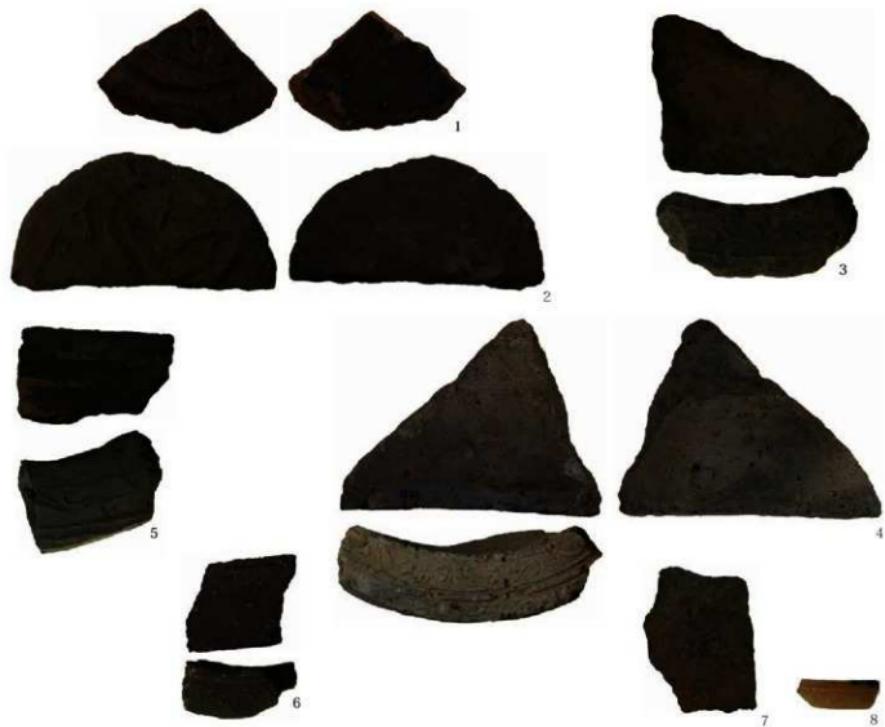
13



東大門地区 S D 2 6 出土遺物(4)



東大門地区 SD 26(5)、SD 20出土異物



東大門地区表土出土遺物



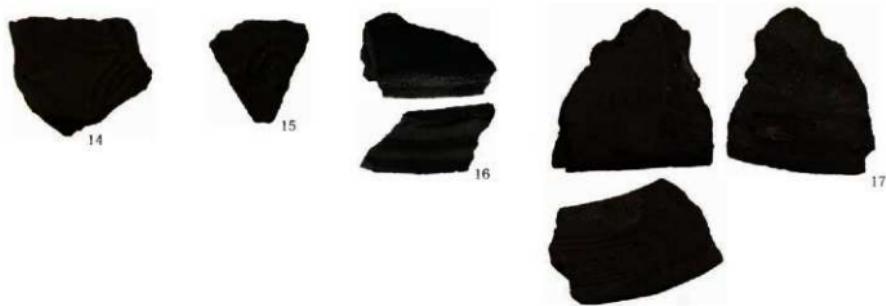
東大門地区 S J 5 2 出土遺物



南边寨垣地区 S A 0 4 出土遗物



南边寨垣地区 S D 2 7 出土遗物



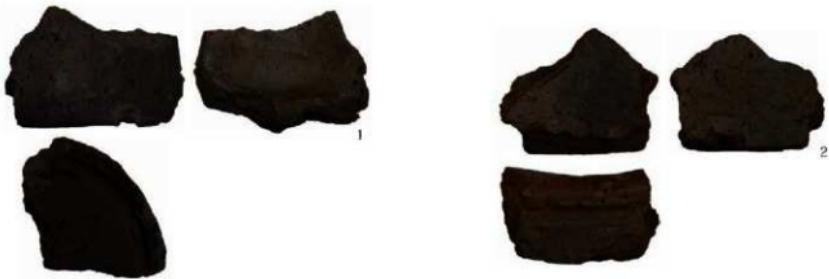
南边寨垣地区 S D 2 8 • 0 1 • 1 2 出土遗物



南边寨垣地区表土出土遗物(1)



南辺塗垣地区表土出土遺物(2)



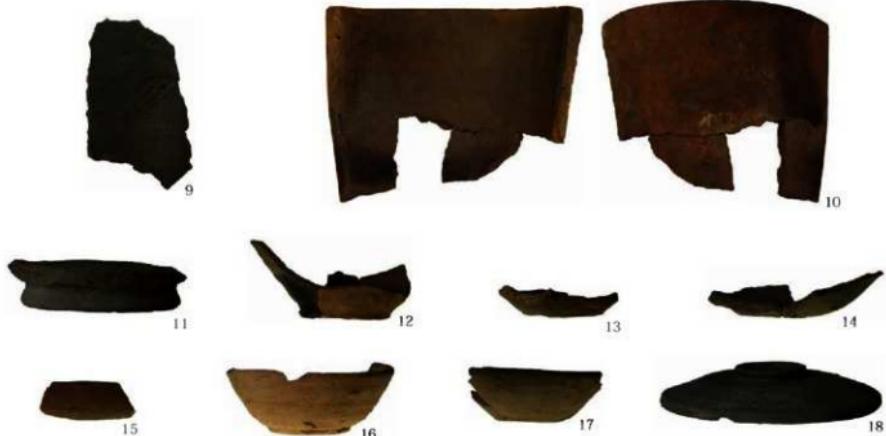
塗垣南東角出土遺物(1)



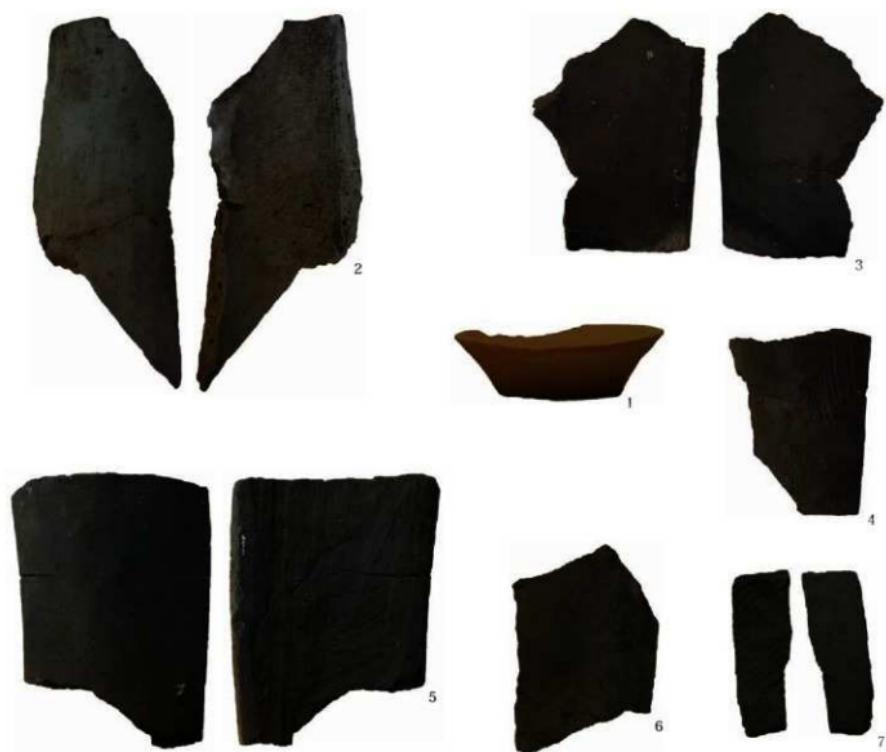
塙南東角出土遺物(2)



36-3トレンチ窓穴建物出土遺物(1)



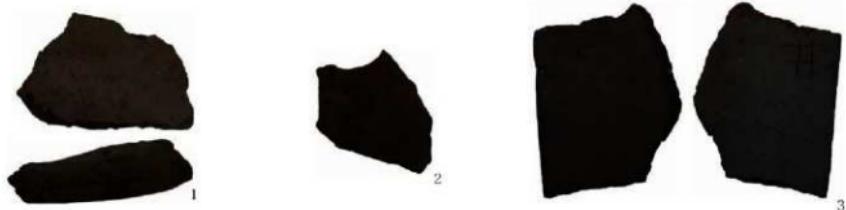
36-3トレンチ竖穴建物(2)、土坑ほか出土遺物



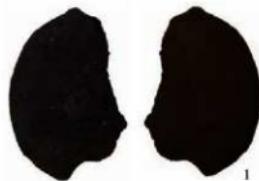
寺域南東部出土遺物(1)



寺域南東部出土遺物(2)



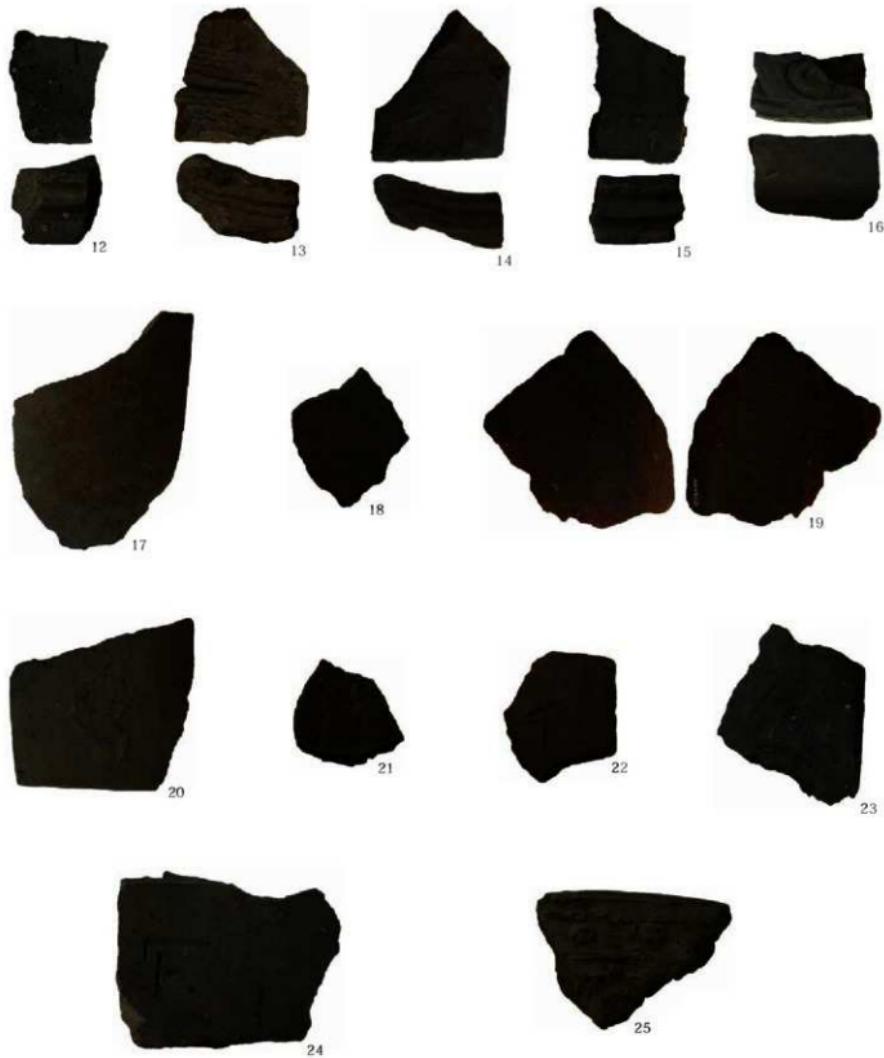
寺域北東部出土遺物



梵鐘鑄造土坑出土遺物



近現代廢棄坑出土遺物(1)



報告書抄録

書名ふりがな	しせきこうづけこくぶんじあとだい2きはっくつちょうさほうこくしょ そうかつへん
書名	史跡上野国分寺跡第2期発掘調査報告書－総括編－
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	橋本淳、前澤和之、高井佳弘
編集機関	群馬県教育委員会事務局文化財保護課
所在地	〒 371-0026 群馬県前橋市大手町一丁目1番1号 TEL 027-223-1111
発行年月日	2018年3月20日
遺跡名ふりがな	こうづけこくぶんじあと
遺跡名	上野国分寺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしひがしこくぶまち・ひきままち・まえばししもとそうじやまち
遺跡所在地	群馬県高崎市東国分町・引間町、前橋市元総社町
市町村コード	10202/10201
遺跡番号	01788
北緯	36° 39' 45"
東経	139° 2' 22"
発掘期間	20120924-20130109/20130501-20131128/20140507-20141105/20150507-20151110/20160516-20161118
発掘面積	590/992/1002/1598/1090
発掘原因	保存目的調査
種別	社寺
主な時代	奈良・平安時代
主な遺構	金堂、中門、回廊、鐘楼、南大門、東大門、南辺築垣
特記事項	中門と回廊をはじめて検出。また、本来の金堂を発見。
要約	史跡上野国分寺跡は、史跡整備事業に伴い、昭和55～63年度の9か年にわたる発掘調査が実施され、塔や金堂、南大門、東大門、南辺築垣が確認された。中門・回廊は確認されなかったが、他国の例を参考にして想像図が描かれた。一時、史跡整備事業は中断していたが、平成24年度から再開され、群馬県では整備に向けた基礎情報を取得するため、24年ぶりに発掘調査を実施した。この調査により、これまで不明であった中門と回廊を想定位置より約30m南ではじめて検出。さらには、100年近くにわたって金堂とされてきた建物跡の前面で、本来の金堂を発見した。そのため、これまで金堂とされてきた建物は講堂に修正された。今回の調査によって、上野国分寺は塔が回廊の外に置かれるものの、塔と金堂を東西に並べて配置する伽藍配置であることが明らかとなった。

史跡上野国分寺跡第2期発掘調査報告書－総括編－

平成30(2018)年3月1日 印刷
平成30(2018)年3月20日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会事務局文化財保護課

〒371-0026 群馬県前橋市大手町一丁目1番1号
電話(027)223-1111(代表)
ホームページアドレス <http://www.pref.gunma.jp/>
印刷／第一印刷株式会社

